

---

# その、幽かな声を

良崎 歡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

その、幽かな声を

### 【Nコード】

N5973U

### 【作者名】

良崎 歓

### 【あらすじ】

田舎の中学校に通う少年・聖は、妖怪たちの声や、人間の心の中まで聞き取ってしまう力「聞き耳」の持ち主。ある日、人々に忘れられ消えかけていた山の神・澪と出会った聖は、彼女を救いたいと考えるのだが……。

異能に悩みながらも前向きに進んでいく少年と、周囲の人々（と、人外のモノ）とのふれあいを描いた現代恋愛ファンタジー、短編連作です。

自サイト「SIREN」からの転載です。

## 至上の声 前編

この上に、何かいる。

学校帰り、聖は<sup>ひじり</sup>久々に、耳に突き刺さるような声に思わず頭を抱えた。息が詰まるほどに強烈な耳鳴りとひどい頭痛。音の出どころを求めてあたりを見回すと、道路脇の藪の中に小山の頂上へと続く獣道が目にとまった。

道の向こうから、すすり泣くような、悲鳴のような嘆きが尾を引くように続いている。この泣き声は体と心に悪い。

思い返してみると、耳栓をしていてなお聞こえてくる声の持ち主はヒトでないものがほとんどだ。例えば桜の精だとか淵のヌシ、山の天狗さま、そんな彼らとの交流も聖にとってはすでに日常になっていた。それらの声はたいがい耳栓をすり抜けて響き、場合によっては頭痛や吐き気まで招くどよめきとなる。

転校を繰り返してこの山あいの中学校に巡り合い、やっと静かに暮らせる、そう思った矢先にこれだ。登下校のたびにこの声を聞かされるのではたまったものではない。聖は大きなため息をつくくと、頭痛を堪えながら山の方へと歩み出した。

ウグイスやヒバリの囀りを聞きながら、山というよりは丘と表現した方がふさわしいならだと続く傾斜を登る。熊でも出てきそうになうっそうとした藪をかき分けながら道を辿っていくと、十分くらいでやや開けた場所に出た。その辺りだけは若干土が踏み固められていて、足下は相変わらず草むらながら見通しはいい。

聖はひととおり見回したが、声の主の姿はなかった。広場の真ん中には朽ちかけた小さな祠がひとつ、その隣にすっかり薄汚れた四手が寂しげな締め縄が巻かれた太いスギの木と、白い肌を晒す大岩しかし、木の方は幹こそ立派だが見上げた梢はすでに枯れ、寒々しい格好を晒していた。

「誰かいるんですか」

『……儂の声が聞こえるのか？』

古めかしい言葉づかいとはミスマッチな、若い女の鈴を転がすように美しい声。先ほどまでよりは絞ったポリウムで、鼓膜を震わせない『音ではない声』が聖の耳に届いた。かつて聞いたことがないほどの佳音にうつとりしながらも、聖は頷くと「僕はちょっと特殊なんです」と返す。

「あなたが誰なのかはわからないんですが、僕はあなたに危害を加えるつもりはありません。ただ、もう少しだけ小さい声で話してもらえばと思つて、お願いに來ました。あなたの声は僕には大きすぎるみたいなんです」

「これでよいのか」

気を遣つてくれたらしく、今度は耳栓が役に立つ音、生の声ごく近くで聞こえた。直接語りかけるのを止めてくれたおかげで頭痛は嘘のように去っている。いきなり喧嘩を売られたらどうしようかとビクビクしていたけれど、話の通じる相手に良かった。

聖が辺りを見回すと、いつの間に現れたのか、聖と同じくらいの歳の女の子が祠の横に座っていた。雪のように白い着物に、木漏れ日を受けて輝く栗色の髪の毛がよく映えている。長い睫毛も栗色で、黒目がちの大きな目を花々しく縁取っていた。

しかし、見た目は完全に人間に化けていても どれだけ美しくても、恐らく人外の何かのはずだ。

「ああ、楽になりました。ありがとうございます。僕、耳が良すぎるみたいで、ちょっとした音もものすごい衝撃なんです。……僕は<sup>おおとひじり</sup>大音聖、中学二年……十四歳です。ええと、あなたのお名前は」

「儂か。……そうじゃな、必要なら濁とも呼んでくれ」

「みお、さん。濁さま、の方がいいですか？」

「どちらでも構わぬ、どうせもとも名もなき身。……して、お主はいつたい何者じゃ？ 耳が良すぎると言つておつたが、もしや『聞き耳』か？」

漣は静かに立ち上がり、腰のあたりを何度かはたいて聖の方へと歩み寄る。背はそう大きくなく、この姿の漣と同じ程度。まん丸い目にまつすぐな黒い髪が素直そうな印象を与える少年は、なぜか耳に詰め物をしていた。

漣が数十年ぶり、もしかしたらそれよりも久しく見る人間の姿は、彼女の古い記憶とは少々違っていた。カラスのように黒い窮屈そうな服を着込み、紐がじゃらじゃらと付いた丈夫そうな履き物を身につけている。その膝から下が泥まみれになっているのを認めて、漣の胸は痛んだ。ここにたどり着くまでの道程がそこまで荒れてしまふくらい時が流れているのでは、どうりで山の外の人間の様子がすっかり変わってしまったはずだ。そんなに長い間ここには誰も訪れていないのかと、改めて肩を落とした。

「僕はただの子供ですよ」

「ただのヒトであるわけがなかるう？ 聞き耳とは神の声を聞く巫女。男わらしの聞き耳とは珍しいのう」

人間の姿をとるにも、今の漣には子供の外見をなんとか保つ程度の力しか残されていないかった。この姿にさえかなりの労力を注ぎ込んでいる。この頃では現世に形を成すこそすらおぼつかず、体が透けるように感じることもさえあった。そんな今の自分に気付くほどの力の持ち主ならば、そんな淡い期待をそっと排して、声なき声を聞き取ったという目の前の少年を見澄ます。

「しかし、しばらく村に下りぬうちに人間の格好もずいぶん変わったものじゃな」

物分かりのいい化け物かと思っただら、人の話なんて全然聞いていない。漣の大きな瞳から穴が開くほどに視線を注がれて、正体が異形のものとの頭の中では分かっているながらも聖はむずがゆくなって俯いた。

聖はこれまでも何度か聞き耳と呼ばれたことはあったけれど、いずれも異界の住人からの言だった。漣が聖に関心を持つのは当た

り前のことで、聖のような能力者は人間社会にとつては異分子でも、  
溲たちにしてみれば大切なメッセンジャーになり得る。特に『聞き  
耳』は自分たちの思いを人間に直接告げるための数少ない手段の一  
つだ。

しかし、耳がいいとは言っても、聖にはそのほかの力は何もない。  
例えば、妖怪退治やお払いができるとか、結界を張れるとか、靈感  
が強いか、そういう実用的な能力は何一つ備わっていない。だか  
ら、溲のように人間でない者と触れ合うときには、身を守るために  
細心の注意を払う必要がある。

バスケットシューズを物珍しそうに眺めている溲に、聖は言葉を  
掛けた。

「必要以上に干渉するのはご迷惑だとは思いますが、僕を聞き耳と  
呼ぶ方ならお分かりですね。できればもう少しだけ静かにしてい  
ただけるとありがたいんですが」

一方、溲はようやく聖の観察をやめると肩をすくめた。

「まさか、聞き耳が通りかかるとは思わなかったものでな。……ど  
うせ、儂がここにいられるのもあとわずかじゃ。お主の憂いはいず  
れ近いうちに除かれよう」

狩りの神様じゃ現代ではあやかりたい人は少なそうだと、聖は先  
ほどの下草に埋まった獣道を思い出していた。自分のお節介さを恨  
めしく思いながら、聖はあきらめの境地とも言える心境で聞いてみ  
た。

「溲さま。……失礼ですが、泣いていらっしやいましたよね。あと  
わずかって、どうしてですか？」

この前、他人に名を呼ばれたのはいつのことだったろうと考えて  
みたが、溲には思い出せなかった。溲、と誰かが呼ぶための名前、  
それは呼ぶ者がいなければならないに等しい。

祀ってくれる者がいないと存在する意味がない、神としての自分  
の命と同じ。自分を現世に繋ぎ止めるためには詣でってくれる人間の  
思いが必要なのだ。このままでは、いずれは存在することさえでき

なくなる　と、漣はすでに悟っていた。自分が神となったのも運命なら、忘れられるのもまた運命なのだろう。

「儂はこの山の又シ、本性は銀の鹿じゃ。昔は風の化身だ、狩りの守り神だと篤く信じられておったのじゃが、今ではこの体たらくよ……よく見ておれ」

漣は聖の目の前に自分の手をかざした。着物と同様に真っ白い漣の指は聖が見られるほど綺麗で細かった。言われたとおり見つめてみると、その手のひらは何の前触れもなくすつと透けて向こう側、漣の顔が見えた。聖がぎよつとして漣を見ると、彼女はぼろぼろの祠を振り返って自嘲の笑みを浮かべた。

「分かつたらう。儂はもう消えかけておるのじゃ。お主がここに来たおかげで幾ばくかは長らえそうじゃが、それでもあとわずかしか持たぬ。今日か、明日か。……やかましいのは、もう少しだけ我慢してくれぬか」

きつと、目の前の少年が、言葉を交わす最後の人間になるだろうと漣は覚悟していた。しかし、いくら聞き耳とはいえ、こんな雛鳥に打ち明け話をする姿を想像したことがあつただろうか。

「儂は、時を経るごとに存在自体が弱くなつてきておる。みなが、儂のことを忘れてしまつているからじゃ。……消えてしまふ前にせめて一度で良いからこの山を下りて村を目に焼き付けておきたかつたんじゃが、儂の今の力では村へ行くなどとうてい無理。それが心残りだな」

「もう、諦めてしまつているんですね」  
「不躰な小僧だのう。……まあよい。そうじゃな、たとえ明日逝つてもお主に儂のことを聞き覚えてもらえれば満足じゃ」

あまりに優等生的な返答に、聖は眉をひそめた。

聖に隠し事ができる者は、おそらくこの世には存在しない。この力にお人好しな性格とは、何て損をする星のもとに生まれてしまったのだらう。気味悪がられたりうざつたいと思われたりしても、困つてる人、いや人でないものの嘆きでさえ見捨てることなんてでき

やしないということは自分がいちばんよく知っている。

落ちぶれたとはいえさすがは神と言うべきなのか、姿を現してからの漣は漏れ出す声を見事に抑えこんでいて、聖が聞き取れたのはごくかすかな囁き程度に過ぎなかった。しかしその想いや山の外で聞いた憂いの声は今の彼女の話とは大きく食い違っている。

もつともつと大きな声を聞かなくては。

「漣さま。……僕は物心付いたときから音の洪水の中で暮らしてきました。最近では耳栓さえしていればどうにか人並みの聴力で生きていけるって分かって、おかげで同級生が自分のことをどう思っているかとか、家族が僕の力のせいでどんなに苦労しているかとか、いろいろ知らずにすんでいます。でも、それじゃいけないって思うときもあるんですよ」

漣がきよとんとして見守る中、聖は軽く伸びをして心を落ち着けると、多少ためらいながらも耳栓を外した。途端に音の嵐が聖に襲いかかってくる。鳥の声はもちろん、木々のざわめき、蝶の羽ばたき、村の外を走る車の音、遠くから駆けてくる子供の足音、そしてひとときわ大きい、絹を裂くような漣の心の悲鳴。ともすれば騒音に自らを攫われそうになりながら、聖は必死で耳を澄まして彼女の声を拾った。

「僕の耳には、場合によっては他人の心の中の叫びとか、人ではないモノたちの呻きまで、周りのありとあらゆる音が勝手に入ってきます。相手が自分ですら気づいていない本音まで嫌でも聞き取ってしまう、異常な耳なんです。だから、分かっているつもりです。……漣さまのお話は建て前だ。心残りなのは村を見られないことじゃない。僕には聞こえて」

「黙れ。……儂に意見するとは何様のつもりじゃ、小僧。化け物や神などというものは誰にも祀られず忘れられてしまえば消えゆく運命。ヒトに見向きもされなくなった今、儂など要らぬ。それが世の習いじゃ」

瞳が赤く輝いたかと思うと、瞬く間に漣の姿は消え、ごうごうと



いう山鳴りとともに強い風が吹き出した。とつぜんの轟音に聖は一瞬気が遠くなりかけたが、倒れながら、飛ばされないように足下の蔓を掴んだ。すでに消えかけている神とは思えないほどの力が辺りの木々を揺らし、まるで滝に打たれているような風圧に息をするのも辛い中、聖は声を張り上げた。

「こんなことに力を使っちゃダメだ！ 消えるのが早くなっちゃう！」

しかし澗の操る烈風は止まず、聖の叫びを端からかき消していく。姿を隠したままの澗の、抑揚のない声が聖の頭へと響いてきた。

『去るがいい、聞き耳』

「澗さま！」

『久々に話し相手が来てくれて、楽しかったぞ。……さらばじゃ』

「み」  
ひととき激しい風に握っていた蔓が鈍い音を立てて切れ、宙を浮く感覚を最後に聖の意識は途切れた。

澗に吹き飛ばされた聖が目を覚ましたのは、先ほどの参道の入り口だった。日は大きく傾き、辺りが黄昏の色に染まりつつある頃。広場にいた時間はそう長くはないはずだから、割とのんびりと気を失っていたことになる。

余裕はなかっただろうに、変なところで気を使ってくれる神様だ。ご丁寧にも木にもたれかかるような格好で座らされていたのに気づき、聖は思わず苦笑いした。学生服には泥や枯れ葉がまとわりついていて、まるで遭難して一晩山を歩き回ったかのようなひどい格好だった。ちゃんとクリーニングに出しておかないと、と考えたところで、聖は現実を噛み締めた。

あれだけの無理をして澗は果たして無事でいるのか、それだけが気がかりだった。澗の本当の願いは自分にしか分からないものだったのに、ちゃんと聞いてあげられなかった。聖は、それをひたす

らに悔やんだ。

澗の声はもう聞こえなかったので、聖は仕方なく耳栓を身に着けた。向こうの世界にあまり関わらない方がいいとは思うものの、このままではあまりにもやるせない。こんなに後味の悪い別れ方があるものか。

あの美しい声をもう一度聞きたい。

まだ間に合うのならどうかして澗を救いたい、けれど果たして何かいい方法があるのか。澗の話に、何かヒントはなかったか。

幸い明日は休日だから、少し夜更かしと早起きをすれば、考えを練り、山に入る時間は充分に取れる。聞き耳には、聞き耳にしかできないことがきつとあるはずだ。

## 至上の声 後編

聖は、腫れぼったい目をこすりながら昨日と同じ獣道を登っていた。今日は藪のひどいところにいちいち道を切り開いているので歩みは遅い。借りものの草刈り鎌は切れ味が悪く、手は豆ができて痛むし、腰から下は朝露のせいで雨に当たったようにびしょ濡れ。それでも、聖は全身汗まみれになりながら少しづつ確実に進んでいく。ようやくたどり着いた山頂の広場には、落ち葉や枯れ枝が昨日と同じように積もっていた。どうやら昨日の竜巻は幻だったようで、大風の傷跡はこれっぽっちも残っていない。あれが錯覚だとは思えないけれど、まさか澗が後片付けをしたわけでもないだろう。そんな不思議な力を使うモノたちにはこれまでもたくさん出会ってきたから納得はできる。

「澗さま！ いるなら返事をしてください」

ここまで派手に近寄っても澗に追い返されないということは、彼女にそこまでの力が残っていないのか、それとももう消えてしまったのか。聖はしばらくその場で待ってみたが、澗の姿はおるか声すらも感じることはなかった。昨日、ヒトに化けているだけでもかなり辛そうな表情を垣間見せていた澗。もしかしたら、本当に消え去ってしまったのだろうか。

「いえ。無理に返事をしなくても大丈夫。……今、見つけます」

あの声を、どうしてももう一度聞きたい。

聖は広場の真ん中に立ち、今日はためらいなく耳栓を取った。同時に襲ってくる音の氾濫は何度体験しても慣れなくて、思わず両手で耳を塞いでしまう。

自ら力を使おうとしたことなどほとんど無かったが、一度聞いた声なら間違いないと選り分けられる自信はあった。澗の声は、涼やかな小川の流れのような耳に心地よい音。圧倒的なノイズの中からそれだけを探し出すために、聖はそろそろと耳を押さえつける手を緩

め始めた。感覚を研ぎ澄ますと、その分だけ情報量も増してくる。周囲のすべての声が聖の耳を刺激し、気をしつかり持たなければ頭痛と耳鳴り、音圧でおかしくなってしまうそうだ。

それでも、しばらく轟音と闘っているうちに音を拾うコツが掴めてきた。余計なノイズを意識せずに、求める声のみをひたすらに頭に思い描いていけば、少しだけ耳が楽になる。昨日聖の耳をくすぐった佳音、天上の音楽のようなあの声をもう一度聞きたい。そう願いながら、ひたすらに聞き澄ます。

そして、集中力も限界まで来たころ、ついに求めて止まなかった音が耳をかすめた。

『……………』

聞こえた。今、確かに何か聞こえた。

「澪さま？」

『……………ヒジリ』

「澪さま！ よかった、まだいらしたんですね！」

幽かに捉えた声は、例の古ぼけた祠からだった。一步、また一步と祠に近づくとつれてその音は大きく、濃くなっていく。聖は慌てて駆け寄ると、わずかな息づかいも聞き落とすまいと祠に顔をすり寄せるように近づけた。

一方の澪は、昨日の無理がたたって実体を取ることままならず、意識を保つのがやっとの状態で漂っていたが、聖の声は辛うじて聞こえていた。

自分の名を覚えている人間がまだいたのか、ああ昨日の小僧かと、澪はぼんやり考える。

聖が来てくれた。ためらうことなく消え果てたかったからこそひどい追い返し方をしたのに、このうっけは懲りなかった。何をしにこんなところまで登ってきたのか。そんなに懸命に呼ばれたら、留まりたくなくてしまっではないか。もしかしたら、消えゆく自分を救いにも来てくれたつもりなのか。できるならその力で引き留め

て欲しいと思うのはわがままだろうか。

抑えきれない心が、堰を切ったように声なき声となって止めどなく溢れ出る。自分にこれだけ豊かな思いがあつたなんて、今の今まで忘れていた。長く続いた一人きりの時間は、暖かな思い出と感情の起伏を漣から奪つていった。遠い昔、山がもつと賑やかだったころ、漣は訪れる人々を見守りながらその一挙手一投足に泣き笑いしていたものだった。それが今では。

『帰れ』

『助けて』

『うるさい』

漣が聖の声を認めた途端、聖には聞き取りきれないほどたくさん言葉が流れ込み始めていた。漣の思考のすべてが、次々と折り重なるように訴えかけてくる。相反するような数々の感情も、強い毅然とした態度に混じる姿通りのか弱い少女のような悲鳴もすべて漣の声なのだ。

聖は祠を抱きしめるように両手を広げた。両腕にすっぽりと入ってしまう小さな社、姿は見えないがこの中に確かに漣がいる。昨日は心を勝手に覗いて怒らせて、風前の灯火にまで追い込んでしまった。今日もまた自分は余計なことをしようとしているのかもしれない。でも、目の前で消えてゆく彼女を見殺しにはできない。

「漣さま、聖です。昨日の聞き耳です。今日も来ました」

『何をしに来た』

『助けて、まだここにいたい』

『さつさと帰れ。なぜ静かに逝かせてくれんのじゃ』

「そんなこと言わずに聞いてください。……僕には昨日、この山のすべてがあなたを惜んでいる声が聞こえて来ました。僕もみんなと同じ気持ちで朝を待ちました。もう漣さまにお会いできないんじゃないかと心配で全然眠れなかった。……僕、漣さまに消えて欲しくないんです」

『これ以上引き留められたら未練が残ってしまう』

『例え今、長らえたとしてもいずれは忘れられるのならば、いつ消えても同じこと』

たくさんの声がそれぞれ聖に届いてくるが、その重さには違いがある。どれもが澪の心だけれど、彼女の中に占める想いの大きさの差だろうか。それらの中で、いちばん大きな声は。

『もう、こんなに寂しい思いはごめんじゃ』

「寂しいって、それがほんとの気持ちなんでしょう!」

思わず立ち上がる。つい語気を荒らげてしまい、聖は自分自身の声に頭を抱えたが、すぐに立ち直って澪がいるはずの祠を正視する。昨日からかすかに耳に届いていた澪の本音は、改めて聞くとひどく子供じみたものだった。山の上から聞こえたすすり泣きの正体。何百年生きているのかは知らないが、なんて年を食ったただだっ子だ。

「寂しいから消えたいとお思いなんですか? 聞こえてきますよ、本当は『助けて』って言うてる声が。僕には嘘はつけません。意地を張らないで下さい」

でも、そんな素朴な望みだからこそ、聖は応えたいと思った。澪の心からの小さな願いを、この耳は確かに聞き届けたから。

「僕は今日、あなたを繋ぎ止めるために来ました。僕はこの耳以外はほんとうに何にもないけど、あなたの役に立つのならいくらでも使いたいと思う。そして、その時は今だって思うんです。……姿が見えなくても、澪さまは今確かにここにいます。僕には分かる。あなたの声を聞かせてください」

『……儂だつて消えたくはない』

聖に名を呼ばれたその時から、澪の身体はすさまじい早さで回復を始めていた。

諦めていたのが嘘のように全身に血が通い始め、温かい言葉が耳に届くたび、実体を保つことができなかつたはずの澪に新しい力がどんどんみなぎってくる。その変化に誰よりも驚いていたのは澪自

身だった。

失われかけていた感覚が次々と戻ってきて、澪は次第に自分の身に起こったことを把握し始めた。まず聞こえたのは耳元で優しく、あやすようにゆっくり語りかける少年の声。次いで人間の匂い、見覚えあるお人好しそうな顔。今日は、耳に詰め物は見当たらない。

「聖」

聖が自分を呼び戻してくれているんだと気づいたときには、すでに澪は祠の外へと飛び出していた。

やがて聖の目の前、祠の脇になにかが姿を現した。うずくまる銀色の毛皮の牝鹿。聖がその首に飛びつくと、思いのほか柔らかいふわりとした感触が腕を包む。そうしている間にも、鹿はみるみるうちに白い着物に栗色の髪の毛の少女へと姿を変えていった。それは、昨日と同じ澪の姿だった。

「良かった！」

聖は無事戻ってきた澪をしつかりと両腕に収めた。

「……聖」

澪がまだ必要とされていると示すことが彼女をこの世に留める方法だと、聖がその可能性に賭けたのは間違いではなかった。彼女の声にならない声はやがて声を伴った慟哭へと変わり、とてつもないポリウムで耳に突き刺さってきたが、聖にはそれが不快ではなかった。嗚咽でさえも美しく感じるなんて、自分の耳は使いすぎておかしくなってしまうんじゃないだろうか。そんな聖の疑問をよそに、澪は思いを吐き出していた。

「消えるのは嫌じゃ。もつともつと、この世を見ていたい。……聖とだって、たくさん話したい」

「いっぱいお話ししましょう、ね？ ……僕はこの村に越してきたばかりなんです。耳のせいばかりとは言いませんけど、どこに行ってもなじめなくて結局ここまで来てしまいました。でも、今なら来て良かったって思えます。……よろしければ、僕の最初の友達になつてくださいますか」

「お主が聞き耳で、本当によかった」

「僕も、僕が聞き耳で嬉しいです」

抱かれたまま小さく頷く澪の顔は見えなかったが、照れくさそうにありがとうと呟く可憐な声に聖の身体は震えた。自分の鼓動がうるさくて周りの音が聞こえない。はつきりと耳に届くのは、澪の言葉だけだった。

「……そろそろ、離さぬか」

「あ、ごめんなさい」

しばらくして遅まきながら自分の置かれている状況に気づいた澪は、慌てて聖の腕から抜け出した。そして、自分の両足でしっかりと立てることに改めて驚く。今まで、人間一人の心がこれほど力になるものだと感じたことはなかった。昔、たくさんの人々がここに集ってくれたころには、自分がこのように山にいられることが当然だと思っていた。しかし聖は、本人は意識していないだろうが、人間の中にいないと生きてはいけないことを澪にはつきりと教えてくれた。

すべては、彼が自分の声を聞き届けてくれたおかげ。澪は聖を正面から見ようとしたり。目の前がぼやけてよく見えないが、それでも聖がいる方向をしっかりと見据えて「この、うつけ者」と、やっこのことで声を絞り出す。こんなことを言いたいわけではないのに、それでも、今更ながらぎりぎり『神』としての自覚を思い出し、精一杯の虚勢を張ってみせる。

「何が良かった、じゃ。お主のせいで簡単には逝けなくなったではないか。……どうしてくれる」

聖は澪の潤んだ瞳にどきまぎして、彼女から思わず目を背けた。嬉し泣きには違いないだろうけれど、女の子に泣かれるとどうしていいか分からなくなる。まして澪さまではなおさらだ。

とりあえず非礼を詫びようと、聖は深々と頭を下げた。

「ずいぶん失礼で偉そうなことを言ってしまったよね。澪さま



の心を盗み聞きするようなまねをしたのは悪いと思っていますし、  
漣さまがせっかく決断した道に背くことをしてしまったのも承知し  
ています」

「まったくだ」

「神様に逆らったんですから、罰のひとつやふたつ覚悟はしていま  
す」

「礼を言いこそすれ」

「僕にできることなら頑張りますよ」

「うづむ」

確かに、一時よりかなり弱まったとはいえ一応は山を統べる者と  
して、あっさり許しては示しがつかない。しかし、自分を救ってく  
れた聖に対して罰など与えられるわけもない。漣はしばらく黙りこ  
んで『天罰』の内容を考えていたが、やがて晴れやかな表情で聖に  
告げた。

「そうじゃな。……たまに、社の掃除でもしに来てもらおうかのう」  
「それでしたらご心配なく、今日は道を作りながら登ってきました  
から。いつでもお会いできるように、ね。もう寂しい思いはさせま  
せんから」

「その……儂は別に、会いたいなどは思っておらぬぞ」

うっかり心にふたをするのを忘れていた漣はそっぽを向いて言い  
淀んだ。すっかり油断していたが、下手に何か考えようものなら聖  
は自分の考えを読んでしまうだろう。恐る恐る聖の様子を横目で見  
ると、彼は逆に漣の顔をのぞき込んできた。目を見張る漣に、指で  
両耳を差し示すと「もう耳栓をしていますから心を聞いたりしてま  
せんよ」と人懐こい笑顔を浮かべる。

「もしかして、そう思っていたらいい あいたっ」

祠の前に座ったままの二人の周りを風が吹き抜け、木々がざわめ  
く。突風に揺られて聖の頭に落ちてきたのは、大きな松ぼっくりだ  
った。声を殺して笑う漣の瞳に赤い光を見て、聖はそれが彼女のし  
わざと気付いた。

「馬鹿者、調子に乗るでない。……聞き耳が相手では、やりにくくて敵わん」

笑いを堪えながら、今度は溇が聖の顔を窺う。手段は多少乱暴だけれど、溇は溇なりに聖に復調を知らせてくれたのだろう。聖が足下に落ちた松ぼっくりを拾い、ため息をつきながら苦笑していると、溇が不意に真顔で切り出した。

「なぜ、儂のような 昨日初めて会った化け物などにそう思い入れたのだ？」

「さあ。……どうしてでしょう」

不思議そうに問う溇に、「ごまかすように聖はにっこりと笑いかけた。

「もう少し回復したら、一緒に村を見に行きましょうね。いろいろ変わってて、きっと驚かれますよ」

人の気持ちを聞くことはできるけれど、自分の気持ちを聞かせることにはまだ慣れていない。よりによって鹿とはやっかいな相手。しかし、いつか一目惚れ、正確には「耳」惚れだと言えるときがくるだろうか。

聖は右の小指を溇に差し出す。頷きながらそれに絡む白い小指は、もう昨日のように透けたりはしなかった。

「溇さまが願う限り、ずっとここに來ます」

## 音なき歌 前編

「お、蝉がくつついてるぞ」

とてもじゃないが彼の生徒たちには見せられない格好　Ｔシャツにトランクス、手にはうちわ、真つ昼間だというのに窓枠の上には缶ビール。聖が、網戸越しに外を覗き込んでいる従兄弟に「何ゼミ？」と尋ねると、彼は自信たっぷりと言った。

「知らん」

「頼りない先生だなあ。理科も教えてるんでしょ？」

「正直、そんな細かいことまでは教えないからな。ほら、ここ見てみる」

嘉章が網戸を指さしているので、聖もじりじりと窓際まで移動する。窓の向こう、アパートの裏はすぐ川が流れ、その向こうに広がる雑木林から蝉の声が聞こえる。きつと、そちらから飛んできたのだらう。

その音を背景に蝉が一頭、しつかりと網戸にしがみついていた。

しかし、素人の二人には腹側から見たところで蝉の種類など分かるはずもない。聖は頼りにならない小学校教師を無視して、小学生のころに図鑑で仕入れた知識を必死に思いだそうとした。いちばんよく見かける蝉は、確かもつと黒っぽくて大きかったはずだ。

「ほんとだ。アブラゼミ……じゃないことは分かるけど」

「じゃあ何て蝉だ？」

「ちよつとは自分でも調べてよ」

聖の抗議が聞こえていない振りをして、嘉章は窓を閉めたり網戸を開けたり、蝉を部屋に引き入れようと躍起になっている。こういうとき妙に子供っぽくはしゃぐ従兄弟を見るのは割と好きだったので、聖は文句を言いながらもパソコンの前に座って検索を始めた。すぐに、子供向け昆虫図鑑が引っかかる。

「ヨシ兄、大きさとれく」

「おっし、捕まえた！ 入れ物！ 台所あたりに何かないか」  
やはり聞いちゃいない。

聖が振り向くと、嘉章が虫がご代わりにした両手を得意げに差し出していた。間近で羽音が聞こえるということは、その手の中には蝉がいるのだろう。慌てて台所に走るとインスタントコーヒーの空き瓶が洗って乾かしてあったので、それを取って戻る。

こうして見る蝉はただの小さな虫でしかなく、瓶の中で羽ばたく様子はやや頼りなげ。少し期待はずれにも思えて嘉章を見ると、彼は捕らえたことを責められたと考えたのか「何だよ。あとで逃がしてくるよ」とやや不機嫌そうに呟いた。

「違う違う、思ったより小さかったからびっくりしただけ。……これはヒグラシ、かな？」

夏、朝や夕方になると物悲しげな声で歌う小さめの蝉。その美しい鳴き声は耳に優しく、聞いていると暑さが和らぐような気がして聖は好きだったが、こんな姿をしているとは全く気に留めたことがなかった。

「ふうん。ヒグラシって日が落ちてくると鳴くんだよ。この辺、特に裏の林にはたくさんいるぜ」

「そうなんだ。実は僕、捕まえたの初めてだよ」

「この都会育ちめ。……あ、そうだ。ひー、お前蝉の声聞こえないのか？」

嘉章は瓶を傾けながら聖を見つめ、ニヤリと笑った。

この従兄弟は『聞き耳』の数少ない理解者で、小さい頃から時には気遣い、時には励ましてくれながら、聖の言い分を笑わずに聞いてくれた。都会で暮らせなくなった自分の保護者代わりを引き受け、この集落の中学校を勧めてくれたのも嘉章。たまにちゃんぽらんな言動もするが、聖にとっては父親的存在にも近い兄貴分だ。

「もちろん、無理には言わない。お前の身体の許す範囲でいいから」

「いいよ、今なら周りに誰もいないし」

聖が恐れているのは、人の悪意や悲しさを聞き取ってしまうことだ。人や、溼のような人外のモノがない今なら、多少耳を使っても自分を悩ます音は入ってこないだろう。

近頃は不完全ながら、力をコントロールする感覚が掴めてきていた。これくらい近い場所の様子を聞くのなら、耳栓は外さなくても大丈夫。聖が目を閉じて耳を澄ますと、外の音がゆっくり、じんわりと頭の中に染み渡ってゆく。

いちばん強く聞こえるのは、裏の川のせせらぎや水しぶきの音。

蝉の声はするが、カナカナカナというヒグラシ特有の物悲しい鳴き声は聞き取れない。他には虫や蛙の鳴き声、林の木々のこすれ合う音、そして羽ばたき。その中には瓶の中の蝉と同じ羽音もあった。

「虫の羽音はするよ。たぶん、この蝉と同じ種類の」

「さすが聞き耳様。……部屋にいても蒸し暑いだけだし、こいつを仲間のところに戻すついでに林の方を偵察してくるか」

要は自分が外で涼みたいだけなのだろうが、聖は彼の提案に乗ることにした。裏の林の中はこういう機会でもないとなかなか奥まで行けないのだ。少々頼りない気もするが、一応先生が一緒なら大っぴらに探検できる。嘉章は瓶を指で弾くと、「じゃ、着替えてくるからこれ見ててくれ」と言っただけで自分の部屋に消えた。

「蝉のシーズンなんですよね」

次の日、聖が溼にそう報告すると、「しいずんとは何じゃ?」と怪訝そうに聞き返された。

積極的に覚えようとしているらしく、溼は聖が口に出した外来語をその都度尋ねてくる。熱心さが裏目に出てそのたびに会話が止まってしまうのだが、現代のことを知ろうという溼なりの努力を無駄にしないよう、聖はなるべく丁寧に意味を説明するように心がけていた。

「しず？ ずん？」

そんなことを考えている間にも隣の溼は首を傾げてブツブツ呟いていたので、聖は慌ててフォローを入れる。

「あ、ごめんなさい。シーズンっていうのは、季節っていう意味です。……蝉の音が楽しめる時期になりましたよねって言いたかったんです」

「うむ、季節、な。……夏も盛りじゃからのう。この辺りは蝉も多かるう？」

「恥ずかしながら、昨日、生まれて初めて手に持ったんですよ。ヒグラシっていうんですか？ 家の中に入ってきて」

実際は嘉章が部屋に招き入れたような気もするが、細かいところは考えないことにした。林の中まで連れて行ってあげたのだし、ヒグラシさんにはそれで何とかチャラにしてもらいたい。

あの後、嘉章と聖は林へと出かけた。実際行ってみると二人の部屋の近くには蝉の音がそう多くなく、聖の耳を頼りに少し奥へと分け入ってからヒグラシを放した。割と長い時間をかけて歩いてきたから、この辺りからとなると結構な距離を飛んできたことになる。

「もう俺らの部屋なんかに来るなよ。お前の仲間はここだぞ」

嘉章が瓶のふたを開けると、小さな蝉はその声を聞き届けたかのようにぶるぶると羽を震わせて飛び立った。まっすぐに側の木の幹へと向かい、見事に木肌に飛びつく。開放感に溢れた飛びっぷりだった。自然のものは自然の中にいるのが一番いい。さようなら、と聖は蝉に向かって軽く手を振った。

『頑張れよ』

隣から、ヨシ兄の心の声 柄でもない励ましが聞こえる。特に意識してその声を聞こうとしたわけではなかったのだが、蝉の鳴き声を探そうとしていたからか、聖の耳は周りの音に敏感になりすぎているようだった。

『……どうもありがとう。ご恩は忘れません』

ちょうどその時、女性の憂いを帯びた小さな声が聞こえたような

気がして、聖は辺りを見回す。今、ここにいるのは自分と嘉章だけ。となると、声の主はどう考えても先ほどのヒグラシだろう。

「雌、だったんだ」

つい口に出して呟いてしまい、聖が嘉章の突っ込みを覚悟して横目で見ると、彼は今逃がしてやった蝉に向けて優しい眼差しを送っていた。意外といいところあるじゃない、とからかうつもりだった聖だが、心を盗み聞きしたようで気後れしたのと、嘉章の表情があまりに穏やかで驚いたのとで、結局言わずじまいになってしまった。

「すごく綺麗でしたよ、お礼を言った声が」

一言しか聞いていないにも関わらず、張りつめたような透明感があって、それでいて弾むような丸い印象の声色は、聖の耳に強烈に残っている。ヒグラシの鳴き声を人間のものに置き換えたような美しい声だ。

それでも聖の中では溇の声には及ばないのだが、溇本人にはまだ面と向かって伝えたことがない。

「綺麗、か」

一方の溇は、聖の無邪気な笑顔を前にして迷っていた。具体的には二択。目の輝きを曇らせてでも過酷な自然の掟を教えた方がいいのか、それとも笑顔でいられるようにこの話題を流すのか。

聖は聞き耳であるがゆえに、今後、本人が望まなくてもさまざまな出来事に巻き込まれていくことだろう。現に今、溇が復帰して山に力が満ちつつあるためか、この辺りの森は異形の住人たちが徐々にざわつき始めている。溇のような『あちら側』のモノたちがじわじわと動き出してきているのだった。

そんなモノに出遭ったとき、使える知識は少しでも多い方がいい。溇は気が進まないながらも、前者を選ぼうと腹を決めた。

「生を必死で全うしようとしておるから美しいのだと、心して見るがよかるう。……蝉の寿命は二十日程度。土の中で何年も何年も過ごし、地上にいられるのはたったそれだけじゃ」

蝉の成虫は短命だとは知っていたものの、聖は澪の話に衝撃を受けた。昨日、ネットで調べたときはそんなことまで気にしなかったが、空での生活は予想していたよりも遙かに短い。

「他にも、例えば お主、雌の蝉が鳴かぬ理由を知っておるか」「いえ、知らないです。そういうえば、昨日の蝉も雌みたいでしたけど」

確かに昨日の蝉は鳴かなかった。聖が素直に首を横に振ると、澪はやや沈んだ声で答えを教えてくださいました。

「雄はな、雌を呼ぶ声が大きく響くよう腹が空になっておる。……雌の腹は卵が詰まっておる。だから声が出せぬ」

聖は、蝉を探すかのように背を預けた杉の梢を見上げた。今日もこの山のあちこちで、雄は相手を求めて声を囁らし、雌は誰かの声を待っている。決められた時の中で命懸けで恋をし、生き抜こうとしているのだ。

澪は聖の顔色をうかがいながらも、さらに話を続ける。

「儂さと一途さが、人の心を動かすのであろうな。……これ、そんな顔をするでない。良かれと思って話をしたのじゃが、余計な世話であつたかもしれぬ」

「いえ。……綺麗だとか可愛いとかしか感じなかったのが、恥ずかしくて」

「きつと、お主はそれで良いのだ」

「ありがとうございます。……でも、世の中の陰の部分とか、悲しい現実とか、僕はきつと他の人よりたくさん聞いちゃうと思います。そもそも僕がここに引越してきたのは、周りの人の話をたくさん聞き過ぎて考え過ぎて潰れそうになったからなんです。人口が少ないこつちなら、うまくやれるんじゃないかって。せつかく覚悟して来たんですから、少しずつ慣れる努力をしていかないと。だから、僕の知らないこと、どんどん教えてください」

澪ははっとして聖を見つめた。聖には重苦しい話や暗い顔は似合わない、早まったと後悔していた澪だったが、彼の横顔に固い決意



のかけらを読み取って考えを改める。

「のう、聖。お主のような優しい者には、その耳は辛いのではないか」

「辛いときもありますけど、聞こえないふりはできません」

「損な性格よのう。……損だが、立派なものじゃ。頑張るがよい」  
澁が励ますと、彼は照れくさそうに鼻をこすった。

「ええ。これ、澁さまのおかげでついた決心なんですよ」

「何？」

二度は言いません、といたずらっぽく笑う顔はすっかりいつもの聖に戻っている。

聖が大人になるのは、澁にとってはごく近い未来でも彼にとって  
はもっともっと先のことなのだろうとばかり思っていたが、どうも  
そうでもないらしい。聖もまた、人間という美しくて一途な生き物  
の一つなのだ。長い時を生きる変化のないモノ、成長を止めたモノ  
はこの世に自分くらいなのかもしれない、と澁は少し寂しく彼を眺  
めていた。

それからしばらく経ったある日。

自宅で夕食を取っていると、嘉章が神妙な表情で「最近、女の子  
と良く会っただ」と言い出した。意味が分からないまま、聖は答え  
る。

「ヨシ兄、ストーカーでもしてるの？」

「あの子がストーカーだろう、この場合。……ええと、半月くらい  
前から」

小学校、つまりは職場への行き帰りや仕事の合間にふと外に目を  
やると、女性がこちらを見て立っているのだという。

「いや、あんな可愛いストーカーなら歓迎だけ。ただ、さすがに  
毎日見かけるとき、気になってくるだろ？ で、今日はその子と初

めて接触してきた」

「ストーリー呼ばわりされたのが気に入らないのか、嘉章はむつとした表情のまま今日の出来事を説明し始めた。

「今日はさ、プール開放の見張りで学校に行ってたんだ。そしたら、プールの外のフェンスに寄りかかるように彼女がずつと立っててな。最初はプールに泳ぎに来た子の父兄だと思って話しかけたんだ。誰かのお姉さんですか、って。付き添いならプールサイドの方に来ませんかって誘ってみた」

彼女は驚いたのか目を丸くしていたが、やがて笑顔で首を横に振った。一旦は引き下がった嘉章だったが、夕方になり、プールを閉める時間が来ても彼女が同じ場所に立ったままなのを見かけ、再度話しかけたそうだ。

「『プール終わっちゃいましたけど、誰かを待っているんですか』ってさ。そしたらあの子、また首振ってそこに立ってるんだ。……変だなとは思ったけど、彼女に見送られつつプールから引き上げてきたよ」

ざつと話を聞いてみて、この従兄弟に限ってそれはあり得ないとは思いつつも、聖にはやはり重度の嘉章ファンとしか思えなかった。ただし、嘉章の仕事ぶりを遠くから眺めたい女性が果たして存在するのかどうかは怪しいが。

聖の前でこそ多少軽めでいい加減そうな印象であるものの、実際の嘉章はしっかり芯の通った好青年という評判で、生徒たちからも慕われている。聖だって、引受人が嘉章でなかったら恐らくこの村には来られなかっただろう。

長い話に一区切り付けて再び箸を動かし始めた嘉章に、聖は疑問をぶつけてみた。

「何だろうね、それ。ヨシ兄の追っかけの人？」

「未だかつてファンがついたことはないな」

「学生？ おばさん？」

「年はお前よりはちょっと上くらいに見えたから学生かな。夏休み

だから帰省してきたのかもしれない。黒っぽい服を着て、長い髪をこつ、後ろに三つ編みでまとめてて」

言いながら、嘉章は髪を束ねる仕草をした。

「……ま、そうは言ってもあの子が誰だかは分からないんだけどな。中学校とかその周りじゃ、そういう子を見かけたり噂を聞いたりしなかったか？」

嘉章に尋ねられて、聖は一応は記憶の中からそれらしい少女を検索していたが心当たりはない。仕方なく謝ると、嘉章は苦笑いで頭を掻いた。

「だろうな。いや、いいんだ。職場の同僚とかプールに来た親御さんとかにも聞いたけど収穫なかったし、最近引っ越してきた人なんだろう、多分」

「何か分かるといいね。……そんなに気になるってことは、ヨシ兄その人のこと好きなの？」

それまでは顔色を変えずにしらっと答えていた嘉章が、聖の言葉に明らかに動揺し始めた。飲みかけのビールの缶を両手でもてあそび、瞬きを繰り返したり唇を舐めたりしながら次の言葉を探している。

「好きって、お前よく恥ずかしくなく正面から聞くよな。いや、何だ、ええと　その……可愛いのはもちろんそうなんだけどな。俺は一目惚れとか赤い糸とかそんなもの信じないタチだが、どうしてもあの子から目が離せないんだ。こんなこと今までなかったのにな。……よく分かんねえ。俺、ちよつとおかしいよ」

軽い気持ちで聞いた聖自身もどきまぎする嘉章につられてか、赤面していた。恐らく、澀の声に一発でノックアウトされた自分を棚に上げて冷やかしたことも一因　自爆だ。うちは元来、惚れっばい家系なのだろうが。

「……でもこればかりはどうにもならない」

嘉章はビールを一気に飲み干すと、深いため息と共にごく小さな声で呟いた。もちろん特別仕様の聖の耳にはしっかりと届いていた

が、その声色があまりに深刻そうだったので口出しはしないでおい  
た。静まりかえった部屋に響くのは、扇風機の音と蝉の声だけ。

「あ」

聖はそこで、逃がしてやった蝉は雌だったなと思いついた。蝉が  
人間の姿を取って嘉章に会いに来るなんてことがあるだろうか。も  
し本当にそうだとしたら、いったい何のために？

そんなことを知るよしもない嘉章は、思わず声を上げてしまった  
聖をじろじろと見つめながら、「何だよ、難しい顔して」と訝しげ  
に言い返してきた。

「ね、僕もその人見てみたいな」

「何でだよ」

「……えっと」

言葉を探し、聖は固まった。

昔、社会になじめず辛い思いをしてきた経験が、今でも聖を臆病  
にするときがある。嘉章がいくら聖の力に理解があるとはいえ、『  
その人、蝉なんじゃない？』と尋ねるのは怖かった。たとえ好意的  
な反応が返ってくるとしても、答えを待つ間を想像しただけで息が  
詰まりそうだ。

「僕が直接会ってみれば、誰か分かるかもしれないと思って」

言わなければという気持ちと受け入れられなかったらという不安  
から、蝉うんぬんという言葉は聖の喉の奥に留まる。しかし、あれ  
からすでに二週間は経っている。溼によると蝉の成虫の寿命は二十  
日だから、万一聖の予想通りだとすると、彼女が嘉章の前に現れる  
理由を確かめられるのは差し引き七日程度の短い間しか残っていな  
い。それは、嘉章が彼女に思いを打ち明けられるタイムリミットで  
もある。

嘉章はといえば聖の語調の変化を敏感に聞き取っていて、聖が耳  
をおおうかと暗に提案しているのに気づくとやんわりと断った。

「お前な。……まあそんなに心配するな。今度会ったら俺が自分で  
聞くから」

力を使うことが少なからず聖の心の負担になると理解しているからこそ、不安にさせないようにと、嘉章は微笑んだ。人の心が聞こえてしまうために、人が少ないこの村に転校してきた従兄弟。聖は優しいから、自分の耳があれば解決することを放ってはおけないだろう。しかし、人の腹の中は決してきれいな事だけではできない。

冷や汗すらかき始めている聖の緊張を吹き飛ばすように、嘉章は冗談めかして彼の頭をばしばしと叩いた。

「ちよつと、やめてよ。背が縮むじゃない」

「おお、悪い悪い。……男としてはそれくらいはしないとな。残念ながら、今回はお前が出る幕はないの」

「そっか。それもそうだよな。じゃあ僕、応援だけは勝手にさせてもらっていい？」

「勝手になら、いくらでもどうぞ。……ありがとな。さ、メシの続きだ」

嘉章が箸を取ったのを見て、聖も食事を再開する。この話はこれで終わりのはずだった、のだが。

## 音なき歌 後編

「聖んちの裏の林、まだセミがいるらしいよ」

そんな話をクラスメート、雲本誠太郎から聞かされたのは、二期が始まってしばらくしたころだった。

耳栓を補聴器と偽って装着している手前、学校では『大音聖は聴力が弱い』という設定になっているのだった。彼、誠太郎は普段からそんな聖に気を使って、少し大きめの声で話してくれる。嘘をつけていることを申し訳なく思いながらも、彼の優しさは聖にとつて癒しでもあった。

「……つと。あー、ごめん。お前、耳が悪いから聞こえないかな」「ううん、気にしなくていいよ。こんなに寒いのにセミがいるの？」

この辺りに秋が来るのは早く、九月に入るとセミの声はマツムシやツユムシ、コオロギといった秋の虫たちに取って代わられる。少なくとも、通常モード、つまりは耳栓をした状態の聖の耳には、セミの声など届いてきてはいない。

「俺がじゃなくて、うちの爺ちゃんが。……山菜採りにあそこの林に入ったら、奥の方でセミ見たって言ってた。いつもならとつくにいなくなってるのにな」

「そだね。確かにもう時期じゃないよね」

「地球温暖化の影響だったりして」

笑いながら地球レベルの話振って、誠太郎は「不思議だよな」と首を傾げた。聖も一緒に笑おうとして、ふと『蝉』という単語が心に留まった。

急に黙り込んだ聖に「どうかした？」と、誠太郎が不思議そうに呼びかける。

「ねえセータ、そのセミ鳴いてた？」

「え？ ええと、爺ちゃんは羽音で気付いたって言ってたかな。ってことは、鳴いてないんじゃない？」

鳴かない蝉は雌だ。

唐突に、夏休み中の出来事が頭を駆け巡った。嘉章を見つめる物言わぬ少女の話と、雌の蝉は鳴けないと言った溲の声、誠太郎との会話がすべて繋がるとしたら？ 彼女が現れたのはいつ頃だった？ 嘉章はまだ彼女を見かけているのだろうか？ もし、万が一その蝉が彼女だとしたら？

そういえばここ数日、嘉章から黒服の少女の話を聞いていない。「それってどの辺の話？ 見に行ってみたいから、だいたいの場所教えてよ。お願い！」

ヨシ兄と夏休みに話した時、なんで言えなかったんだろう。後悔にさいなまれつつ、聖は誠太郎の肩を揺さぶりながら舌を噛みそうな勢いでまくし立てる。その勢いに押されながらも、誠太郎は快くルーズリーフに略図を書いてくれた。

上の空で残りの授業を受けた聖は、放課後、隣の敷地にある小学校 嘉章の職場 を訪れた。校門の辺りで生徒たちに帰りの挨拶をしている嘉章を見つけて駆け寄ると、彼は「おう、お疲れさんと片手を上げた。

「中学も今日は早かったんだな」

「うん。……ねえ、ヨシ兄さ、最近好きな人に会った？ プール開放の時に会ったっていう女の人」

「どうした、藪から棒に」

「いいから答えてよ」

嘉章はちよつと前の誠太郎のように、聖の勢いに多少驚きながらも「……ここ五日ほど見かけてないな」と寂しげに呟く。聖は焦りとともに、思わず嘉章の腕を取って引いていた。

「今ちよつと抜けられない？ 一緒に来て欲しいところがあるんだ」「今すぐ？」

必死の形相で何度もうなづく聖を見て、嘉章は真面目な顔で「何

かあったのか」と尋ねる。とにかく急用と言い張る聖に根負けして嘉章は一旦校内へと戻ると、他の先生に後を頼んできた、と再び現れた。

「僕についてきて。なるべく急いで」

言っが早いのか、聖はくるりと向きを変えて駆けだした。どちらかという遠慮がちでおっとりしている聖がこれほど強引に行動したことは、嘉章の記憶には後にも先にも今、この時だけだった。嘉章は訳も分からずに聖の後に従いながら、先を行く従兄弟に尋ねる。

「そんなに焦って、どこに」

「アパートの裏の森」

「何で」

「ヨシ兄の好きな人に会えるかもしれない」

「好きな、人？」

聖と違つて現役学生ではなく、むしろ運動不足気味の嘉章には距離を離されないようにすることだけで精一杯だった。質問するのもしも絶え絶えといった苦しさの中、ほとんど単語のみしか口にできない。

「……セータに聞いた。うちの裏に、まだ蝉がいるって」

「蝉と、彼女と、いつたいどういう」

「雌の蝉は鳴かないんだって、僕の友だちが言ってた。ヨシ兄がその女の人に会うようになったの、蝉を逃がしてからすぐじゃない？ その人、もしかして無口なんじゃなくて声が出せないんじゃないの？」

「お前まさか、あの子が、蝉だって」

聖はその返事に、初めて立ち止まると嘉章を振り返って待った。もう、気味悪がられるなんて言っている余裕はない。あの時勇気を出せていたら、もっと違った流れが作れていたかもしれない。自分の不甲斐なさのせいで、嘉章に辛い思いをさせることになるかもしれない。ならばせめて今、従兄弟のためにできることをしたかった。追いついた嘉章は上半身を折るようにしてせえせえと荒い呼吸を



繰り返していたが、聖を直視する目はまるで射るような鋭さだった。気圧されそうなほど強い視線に、しかし聖も負けずに答える。

「僕には、証拠はないんだ。でも、可能性はあるでしょ？」

「そんな」

「その人が蝉じゃないって確率の方が大きいけど、万一そうだとしたら、今行かないと一生逢えなくなるかもしれない。どうする、ヨシ兄」

選択を迫る聖を、嘉章は穴が開くほどに見つめていた。

蝉が人の姿に化けて会いに来る。そんな荒唐無稽な話があるのだろうか。

聖の耳が特別製だということも彼が自分には聞こえない世界を知っていることも、嘉章は理解しているつもりでいた。しかし面と向かって、しかも自分に深く関わることについて言及されたのは初めてだ。

「急に言われても、俺には分からないよ」

「僕も、本当はどうしたらいいのか分からないんだ。……でももしもの時には、僕の耳がきつと役に立つ」

「ひー。お前、耳を使っつて本気で言ってるのか」

「うん。都会にいた頃のことを思い出しちゃうと怖いけど、ヨシ兄のためならできる。だから、行ってみるだけ行ってみようと思ったんだ。……一緒に、来てくれない？」

嘉章は思い出していた。聖の懸命な表情は、何ヶ月か前に泥まみれで家に帰って来るなり『草刈り鎌、ある？』と尋ねられたときに似ている。

あれから、彼が少しずつだが確実に変わってきたことに、嘉章もおぼろげながら気付いていた。人の感情を受け止めすぎて壊れそうだった聖に、田舎で一緒に住まないかと声を掛けたのは去年。たとえ過去の記憶と闘いながらのやせ我慢だったとしても、震える息づかいを必死で封じ込め、聖は正面を向いて進むことを選んだのだらう。

「彼女が何であつたとしても俺は会いたい。たとえ万が一でもチャンスは逃せないな」

「ありがとう、ヨシ兄」

「さ、連れてつてくれ。……信じるよ、お前の勘と耳を」

「じゃあ、また走るからね！」

俺も、選ばなければ。笑顔で再び駆けだした聖の頼もしい背中を、嘉章はひたすら追いかけて走った。

「この辺だと思つ」

「黒くて長いワンピースの、三つ編みの子なんだ」

誠太郎の地図に従つてたどり着いたのは、どうやら夏休み中に嘉章とともに蝉を放しに来た場所のようだった。秋になり、木々の見た目が変わりと変わったので確かではないが、なんとなく見覚えがある。聖は足元の藪に足を取られながら辺りを見回したが、人影はない。

目で分からなければ耳を使う。聖が耳栓を外そうとしたところで、嘉章は声を上げた。

「待て！ ……誰か、いる。倒れてる」

やはり足をもたつかせながらも嘉章はとある木の方へと走り出す。

「ひー、あの子だ！」

その声で、聖もようやく彼女に気付いた。草むらの中にうずくまる、蒼白と言つていいほどの白い肌、黒髪、黒服、黒髪の高校生くらいの少女。嘉章が一步、また一步と踏み出して呼びかける。一瞬、彼女を通り越して向こう側、つまり地面が見えたような気がして聖は慌てて目を擦ったが、取り越し苦労だったらしい。特になんの変わりもなく少女はそこに居続けたいた。

「ここ最近、姿が見えなかったから心配してた。……こんなところにいたんだな」

『……………』

少女は聖たちを認めると辛そうに身体を起こし、一生懸命口を動かす。しかし、嘉章にはもちろん、聖にさえも彼女の声が聞こえることはなかった。

「ごめん。何て言ってるのか俺には分からないんだ」

『こんなにもお慕い申しているのに伝えることすらできないなんて』  
聖が慌てて耳栓を外すと、とたんに美しい声が耳に飛びこんでくる。苦しうに胸の内を叫ぶ声は、忘れもしないいつかの蝉のものだった。しかし、今はその可憐な声もただ悲痛に叫ぶだけで、こんなに近い距離で見つめ合っている二人なのに思いを伝え合うこともできない。好きだとただ一言を訴えたいだけなのに、嘉章には届かないのだ。

「何で聞こえないんだろうな。こんなに近いのに、何で！」

嘉章が彼女の隣で、指が白くなるほどに拳をぐっと握りしめている。聖にはまだ経験のない感情　想う人を前にしても何もできない自分に対しての怒りが、嘉章を見たことのないほど険しい表情へと変えていた。

その声に背中を押されて、聖も彼女の方に踏み出す。今、両方の言葉を聞いて二人の心を繋ぐことができるのは聖だけだ。少女を安心させようと無理矢理に笑顔を作ると、「僕、あなたが言ってること分かります」と聖は語りかけた。

「二人に幸せになって欲しいから、できることなら何でもします。

僕は彼の従兄弟で聖っていいいます」

『ほんとうに？ どうしてあなたには聞こえるのか分かりませんが、甘えさせていただいてもいいのでしょうか？』

「任せてください。……あなたは、蝉なんですよね？」

聖がうなづくのを見ると少女は目を見開いて、『ありがとう』と安心したようにぱつと微笑んだ。ほつれた三つ編みを軽く整え、藪の中できっちり正座をして、彼女は聖と嘉章の方に向き直ると一礼する。

『私は、かなでと申します。お分かりのようですが、あなたとあの

方に林まで連れて行っていただいたひぐらしです』

やっぱりそうだったんだと、彼女を無事に嘉章に引き合わせられた安心感で聖の身体からやや力が抜けた。しかし、自分が必要になるのはこれからだ、と慌てて気を引き締める。

「ヨシ兄。今からこの人の言うこと僕が代わりに伝えるから、しっかり聞いてて」

「……お前、聞こえるんだな。彼女の声が！」

聖がうなずくと嘉章は心底嬉しそうに目を細めた。

その笑顔に、聖の胸はずきんと痛む。蝉の成虫の寿命は約三週間、嘉章と聖の部屋に蝉が迷い込んできたのは一月ほど前。だとすると彼女にはとつくにお迎えが来てもいいはずだ。嘉章だってかなでることが好きなのに、二人が一緒にいられるのはこの瞬間だけなんてあまりに残酷ではないだろうか。

嘉章は聖とかなでを交互に見ると、すぐに悲しそうな顔で自分の耳を指さした。

「でも、お前」

「僕の心配はいいんだよ！」

嘉章が大声にびくりと震えたのが分かった。聖自身も、自分の声で引き起こされた耳鳴りに思わず頭を抱える。目を見張る嘉章に、聖はかなでを振り返り早口で諭すかのように訴えた。

「怒鳴ってごめん。でも、ヨシ兄がいま一番気にしなきゃいけないのはこの人のことでしょ？ 僕は大丈夫だから、ちゃんと聞いて欲しいんだ」

「ああ。……そうだな。お願いだ。彼女は俺に何が言いたいんだ、『聞き耳』」

何かを決意したように、嘉章が大きくうなずく。そこでやっと憂いの表情がはげ落ち、彼はいつもの飄々とした風情を取り戻して聖と向き合った。

人間から『聞き耳』と、冗談めかしてではなく真剣に呼ばれたのは初めてのことだった。例えつかの間の幸せだって、自分がしっか

りしないと彼らからそれさえも取り上げてしまいかねない。聖は襟を正し、手短に彼女があの時、蝉の化身であること、話がしたくても声が出ないことを嘉章に伝える。

「名前は、かなでさん」

自己紹介が嘉章に伝わると、かなでが問いかけた。

『聖さん、あの方のお名前は何とおっしゃるの？』

「ヨシアキです。里中、嘉章」

『嬉しい。やっとお名前が分かりました、嘉章さま』

味わうように何度か嘉章さま、と繰り返しながら、かなではゆったりとした動作で少しだけ嘉章に近づき、彼の目の前でにつこりと笑った。

『迷い込んだ私を助けて下さったときからずっと、お慕いしておりました。あなたに焦がれるうち、気付けば浅ましくもあなたと同じ、人の姿になっていました。……見ているだけでも幸せだったけれど、私にはもう飛ぶ力さえも無く、ここしばらくはそれさえ叶いませんでした。まさか会いに来てくださるなんて、嬉しくて言葉もありません』

聖はその隣に座り、かなでの言葉を一言一句間違えないようになぞって嘉章に伝える。かなでの、恐らく最期になる声は、彼の心にしっかりと届いているのだろうか。そつと表情を窺うと、嘉章は淡く微笑んだまま聖の声を聞き、かなでを優しく見つめていた。一緒に暮らしている聖の記憶にもないほどに、男らしい嘉章の顔だった。『いつぞやは話しかけていただき、本当に幸せでした。あの時は何も伝えられずにお別れしましたが、こうして話ができ良かったです。しかしながら、流れる時の早さが違いすぎました。私は虫、あなたは人』

「あなたは人。……私は、もう」

そこで言葉を切り、聖は息を呑んでかなでを見る。それだけは、嘉章に伝えたくなかった。

「どうした、ひー」

しかし、かなでの口が動くのをもどかしく見入っていた彼はすくにしびれを切らし、鋭い口調で聖に催促する。口籠もる聖に、かなでは『辛い役をお願いして、ごめんなさい』と申し訳なさそうに深々と頭を下げた。

『でも、嘘は吐きたくないの。私には、もう時間が』  
「待つてください。ちゃんと言いますから」

聖は大きな深呼吸ののち、かなでと同じように嘉章を見つめる。泣くことは後回しにできる。この時が訪れるのは、メッセンジャー役に全力を尽くすことに決めた際に分かっていたはずだ。眉を寄せ不安げに言葉を待つ嘉章に、聖は残酷な事実を告げなくてはならなかった。

「もう、こちらにいられません。嘉章さまに想いを伝えたいという未練だけでこの世に繋ぎ止められていましたが、それも叶った今、どうやら、さよならのようです」

『聖さん、あなたにはいくら感謝しても足りません。ありがとうございます』  
伝え終わると同時に、聖にだけ聞こえていた彼女の声はどんどん遠くなっていく。

はっとして隣のかなでを見ると、ちょうど初めて会ったときの消えかけていた溼と同じように、彼女の身体は透け始めていた。みるみるうちに黄泉からの手に絡め取られるかなで。それは、溼とは比べものにならないほど急激に進んでいた。命の火が消えるときが来たのだと、聖、そして嘉章までもが直感的にそれを理解した刹那、嘉章の腕が奪い取るように彼女を抱きしめる。

『よ、嘉章さま！』  
「ずいぶん、軽いんだ。……今の、俺の名前かな？」

嘉章はかすかに動く彼女の口を食い入るように見つめると、やがてすぐに先ほどまでのように優しく微笑んだ。目を見開いたかなでは溢れる涙を拭おうともせず、何度もうなずいて嘉章の名を呼んだ。

『嘉章さま。嘉章さま』

「君の本当の声、聞いてあげられなくてごめん。でもなんとなく、名前呼んでくれてるのは分かるよ。……俺だっていつも見てた。俺だって好きだ、かなでさん」

かなではその言葉を聞くと満足げに破顔して、聖の耳だけに届く小さな小さな声で呟いた。

「何？ おい、もう少し待ってくれ！ 俺も」  
「行かないで！」

叫んだ嘉章の腕も、かなでの手を掴もうとした聖の手もむなしく空を切る。二人が勢い余って草むらに倒れ込んだときには、もうどこにもかなでの姿はなかった。

せめて『聞き耳』ができる最後の役目を努め上げようと、聖はため息を飲み込んで嘉章に伝える。

「……ありがとう、だって。最期の言葉」

「自分の言いたいことだけ、言いやがって。俺はまだ言い足りないのに。……俺も、好きになってくれてありがとうって、伝えたかった」

嘉章は魂が抜けたような声で呟き、頭を抱えてしゃがみ込む。聖は動くことができずに彼の背中をぼんやりと眺めていたが、小刻みに震える肩をなるべく見ないようにとすぐに俯いた。

長い長い間があつて聖が物音に顔を上げると、嘉章が足下に転がっていた何かをそつとつまみ上げ、手のひらに乗せる。ゆらりと立ち上がった彼が聖に示したものは、蝉のなきがらだった。思いを告げるためだけに無理していたのが一目で分かるボロボロの翅が、聖には誇らしげで眩しかった。

「本当に、もう動かないんだな。もう逢えないのかな。あんなに可愛かったのに。……俺、今日の話は絶対忘れない。こんなこと言うとお前は怒るかもしれないけど、俺もかなでさんの本当の声を聞いてみたかったよ。いい声なんだろう？」

蝉を手に乗せたまま、嘉章が呟く。耳を介して二人とすっかり同調していた聖はその気持ち痛いほど分かって、声を詰まらせなが

ら答えた。

「怒らないよ。本当に、きれいな声だった。……ねえ、ヨシ兄。どこかに埋めてあげよう。休ませてあげないと」

「……ああ」

こうして、たった五分の対面は終わった。ぽたり、と涙がこぼれ落ちる音がすぐ隣から聞こえる。蝉がいなくなった森を吹き抜ける風の音がうるさくて、聖は静かに耳栓を着け直した。

かなでとの別れから数日経って、ようやく気持ちの整理が付いた聖は澪に一部始終を打ち明けた。澪は黙って膝を抱え、聖と同じように広場の杉の木に背を預けて話を聞いていたが、やがてしんみりと呟いた。

「夢いものじゃな、好いた男の腕の中で罷るか。その娘、それで幸せだったのかの」

「きつと、そうだと思いますよ。ほんとに、最期の最期まで笑っていましたから。……それにしても、聞こえるだけじゃ駄目ですね」  
「本当に、損な性分じゃな。儂は聞き耳でも何でもないが、お主の思っておることは聞くまでもなく分かるわ。どう頑張ったって、お主には『聞こえる』だけじゃぞ。それ以上のことを陰気にくよくよ考えるのはお主には似合わんと、先だつても言ったであろう。まあ、聞こえないふりができない心根、いくら止めても無駄であろうが」  
半ば呆れたような澪の言葉に、聖は苦笑いをして俯いた。澪には、彼が何を考えているのか手に取るように分かる。伝える以外に何もできなかつたと自分を責め、悔いているのだ。

澪からすれば、聖がたまたま『聞こえるように』生まれてしまったことにいつたい何の責任が生じるのかとさえ思うのだ。たかが十年と少し生きた程度の聖、心意気はわからなくもないができることなど限られている。しかし、聞こえてしまった以上放っておけない



のが聖の聖たる所以であり魅力でもあるのだった。

「聞こえるだけ、ですか」

「違うのか？」

「……いいえ」

「お主やお主の従兄弟が会いに行ったとて、かなでとやらの命が延びたわけではない。しかし、お主のおかげで笑顔で逝くことができただと思うぞ。胸を張るがよい」

飾り気のない漣の優しさが、聖のひび割れた心を覆っていく。ここ数日ですっかり疲弊していた聖にとっては、その直球が心地よかつた。

「聞こえることを受け止める器も作らねばならん。急ぐのはよいが、急ぎすぎると潰れかねん。都会で暮らせず移り住んできたのだから、恐らくそのような理由であろう？ ……せつかく出会った聞き耳を潰しては、儂も夢見が悪いからな。助力は惜しまぬ。困りごとは儂の耳に入れよ」

漣に聞いてもらうと、嘘のように心が軽くなる。見た目は同い年くらいでも実際は大先輩だということをごういうときに思い知らされる。ぶすつとした顔で返事を待っている漣を見て、聖は多少しよげながらも、同時に言いようのない安心感にも包まれていた。

漣の言う器とは、つまり聖の心の余裕のことだろう。今回も、聖自身の他に嘉章、そしてかなでの心までも感じ取り、胸一杯に溜め込んだ思いの波が引くまでに数日を要した。聞いて伝えることすら精一杯なのに、処理しきれない過剰な情報で消化不良を起こしている状態が今の自分だ。

「ありがとうございます。確かに僕はまだまだ修行の余地があるみたいですが、漣さまが手伝ってくださるなら頑張れるかもしれません」

「よく言っわ」

「本当ですよ。……頼りにしてもいいんですか」

「お主に救われた魂、お主のために使うのは当然のことぞ。……お

う、それで思い出した」

まるで慈愛溢れる母のような笑みを湛えた澪は、やがて年寄り臭くぼんと膝を打った。

「忘れるところであった。……お主、まだあやかしというものを理解していないようじゃな。儂を見る。命が尽き肉体が朽ちている身で、こうして存在できておる。これも、お主のおかげじゃ」

「僕のおかげ？」

突然話題が変わり、聖は置いてけぼりをくらった。なぜ今その話なのか、聖がまさしく鳩が豆鉄砲を食ったような顔で首を傾げていると、澪に「もう忘れたか？」とジロリと睨まれた。

「よいか、誰かに求められることが儂らのようなあやかしの存在する意義であり条件。つまり嘉章とやらの思いがまことであれば、その娘もいつかは戻ってくるのではないかの」

「あ、そうか！」

聖が、消えかけた澪の名を思いを込めて呼び続けたことで彼女はこちら側に戻ってくる事ができたのだった。聖の思いが澪を生かしているとするならば、嘉章の思いがかなでの魂を呼び戻すかもしれない。澪は、その可能性に賭けると言いたいのだ。

嘉章はしばらくは浮かない顔をしていたものの、ここところは普段の明るさを取り戻していたように見えた。嘉章にとってかなりシヨクなできごとだったのは確かだろうが、彼は元来悲しみをそう引きずらない。実際後を引いていないかどうかは別として、外へ漏れ出さないようにするのが上手い人間だ。だから、そのうちにいつも通りの楽しい先生の顔に戻っているはずだとばかり思っていた。

しかし、それは違った。唐突に、聖の耳の覆いを突き破るように嘉章の叫び声が飛び込んでくるときがあるのだ。

『……かなで！　かなで。かなでに　会いたいな』

嘉章の心の中の、聖が思っていたよりもずっと深いところに、か

なでの思い出はしつかりと食い込んでいる。その傷は今もなお疼いてやまない。

もたらされた朗報に、聖の胸は止めようもないほど高鳴った。居ても立つてもいられなくなり、跳ね起きるように立つと思わず溲の両手を取る。手を引かれて立ち上がった溲に、聖は上気した顔で「ありがとうございます！」と礼を述べた。

「何、構わぬ。それがお主の憂いを」

「ヨシ兄なら絶対かなでさんを取り戻せるはずです。僕、今すぐ帰ってそのことをヨシ兄に伝えてきます！」

溲がああ、と答える前に、聖は背を向けて駆け出していた。木の根を、溜まった落ち葉を軽やかに飛び越えて走る。と、小さくなった影が立ち止まって振り向いた。溲に向かって大きく手を振り、何か叫んでいる。

「あ、溲さま！」

「なんじゃ」

「この耳、もしかしたら好きになれるかもしれません。……それじゃあ、また明日！」

「……せわしない」

下り坂を転がるように去っていく聖の背中を、溲は羨ましく見送った。なんて一途で、めまぐるしく動く生き物だろう。

柄にもなく聖の従兄弟とかなでの幸せを祈っている自分に、溲は微笑していた。人とあやかしは相容れないものだと思ってきたが、嘉章とかなでのように心を通わせられる者たちもいる。蝉も人間も溲から見れば短い一生だ。その中で好いた相手と互いに思い合いい、必要とし合いながら、少しでも長く一緒に過ごしたいのだろう。「好いた相手、ねえ」

自分はこの先、そのように在ることが出来るだろうか。消えた後  
る姿を追いながら遷はため息をつく。聖に握られた両手だけが、か  
つと熱を持っていた。

## かのご舞い 前編

朝晩の冷え込みが増してくると村はほんのり色づき始め、収穫の季節を知らせる。やがて紅葉した山から赤みが抜け、葉が落ちて柿の実が目につくようになる。とすぐ冬が来るのだと澗が教えてくれた。澗のいる山を訪れるとき、『あつ』という間に日が落ちるから早めに帰れ』という彼女の言葉を特に実感する。真夏と同じ時間で動くとする、夕間暮れには足下がよく見えない。いつそ雪でも降れば照り返して明るくなるのにも思いながら下り坂を歩くのが、最近の聖だ。

授業が終わって聖が鞆に教科書をしまっていると、手元にふつと陰が差した。顔を上げると、ショートボブの女子がやたら愛想のいい笑顔で立っている。

「大音くん、だよな？」

「はい、そうですけど」

誰だったっけ、と聖は脳内のデータベースから情報を引っ張り出す。名札に走るラインは緑色だから、聖の一つ上の三年生だ。知り合いではないが、その顔には見覚えがある。

「はじめまして。三年のコセガワチグサです」

「小瀬川って、あつ、会長！」

「ただの『小瀬川』でいいよ。もう引退したから」

今は新生徒会の役員選挙も終わり、二年生が主体になっている。

元・生徒会長、小瀬川ちぐさはそう言って気さくそうに笑った。

そういえば春に転校してきてすぐ行われた生徒総会で、女子の生徒会長なんてかっこいいな、と思ったものだった。しかし聖が一方的に知っているだけで、彼女と言葉を交わすのは初めてのことだ。どうして声を掛けられたのかはさっぱり分からない。

よほど変な顔をしていたのか、ちぐさはすぐに本題を切り出した。

「そうそう、用事があつて。突然だけど、大音くん、郷土芸能とか興味あるかな」

「郷土芸能？」

「この辺の男は大抵みんなやるんだけど、今度の秋祭り、神社で収穫祈願の踊りをするんだ。大音くんもよければやってみないかなと思つて」

「はあ。でもどうして小瀬川先輩が人集めを？」

ちぐさは眉を八の字にすると「実はうちのおじいちゃん、踊りの保存会の会長なの」ときまり悪そうに言った。

「最近、踊りやりたいつて子が少なくて困つてるみたい。男の子の転校生がいるつて言つたら、連れてこいつて指令を受けちゃつて。練習の見学だけでも、どうかな？」

小学校も中学校も各学年一クラス。ただでさえ過疎が進み人口が減つている上に、練習が面倒だとか古臭くて嫌いだとか、後継者として育てたい年頃の若者たちはマイナス面ばかりを見て参加をやめるといふ。なるほど、踊りについては写真でしか見たことがない聖でさえもこの地域では貴重な担い手だろう。

生まれ持ったカリスマ性　彼女がそれに気付いているのかいないのかはさておき　をいかになく發揮して、ちぐさは手を合わせ「お願い！」と頼み込む。この人のお願いを断れる生徒が、全校に何人いるだろう。聖の心はあつけなくぐらつと傾いた。

と、そこで唐突に男子生徒の声が聖の名を呼んだ。

「聖、よく考えた方がいいよ」

突然の横槍に、ちぐさは目を吊り上げて声の方向を見る。そこにいたのは聖のクラスメイト、セータこと雲本誠太郎だった。彼は不審そうにちぐさと聖を見比べると、明らかに反対の立場にシフトした口調で続けた。

「週に何度も、しかも夜遅くまで拘束されることになるよ。保存会のオヤジたちは怖いし、練習きついし、獅子頭は重くて臭いし」

「ちよつと、誠太郎。人が誘つてるのにそんなこと言わないでよね」

にらみ合う二人に挟まれて、聖は居心地の悪さに逃げ出したくなつた。ご近所はみな家族といった雰囲気のある地域だから、学年が違つても友人同士という生徒たちは多い。遠慮のない物言いから、彼らが幼なじみなのだろうということは聞くまでもなかった。しかも、どうやら腐れ縁の。

聖を無視して、会話は続行している。

「しかもわざと嫌そうに言ったでしょ、今」

「ちぐさがそういう大事なことを隠してるからだよ」

「後からちゃんと話すつもりだったのに、あんたが邪魔したんでしょ」

「経験者の意見も聞かせてやろうと思つただけだなあ」

「え、セータも踊りやってるの？」

これ幸い、渡りに船とばかり食いついた聖に、誠太郎はげんなりした表情でうめくように言った。

「いやいや、だけど。毎年こいつのじいちゃんに強制参加させられてるんだ」

「嫌ならやらなきゃいいじゃない。結局毎年出てるんだから、後からグチグチ文句言うのやめて」

「落ち着いてよ二人とも」

結果的には聖が口を挟まなかった方が平和だったかもしれない。

しかたなく、気が進まないながらも仲裁に入る。

「セータの言うことも確かに分かるけど、やってみたいです。前の学校じゃ出来なかったことだと思うから。せつかくの機会だし、よろしく願います」

ちらりと自分の耳のことが頭をかすめた。知らない人がたくさん集まる場所に出向くと、余計なことを聞いてしまうのではないか。少しでも抵抗はあったものの、とある下心が生まれ、聖はちぐさのお願いを聞くことにした。

「ほんと？ 良かった、助かる。ありがとね」

ちぐさは満面の笑みでぺこりと頭を下げた。あまり有り難がられ

ると、『下心』のおかげで参加を決めた身としてはちょっと恐縮してしまふ。

ちぐさはあとで連絡先と練習日程を知らせると言っていて去って行った。別れ際に、誠太郎に向けて舌を出しながら。

「あ、漣さま。ご覧になってたんですか？」

聖が振り返ると、微笑を浮かべた漣が立っていた。

「草を踏む音と、それに聖の匂いがしたのでな。いつもなら儂が出て行くまで黙って杉の下に腰掛けているはずなのに、今日は少々勝手が違うようじゃと、起きてきた次第。……恐らく、それは鹿踊り（ししおどり）じゃな？」

「分かります？」

「うむ、まあ、なんとかな」

顔をしかめてうなずくと、漣は持って回った言い方で肯定した。

「大昔に見たことがあってな。記憶を呼び戻すのに時間がかかったが、覚えておるぞ」

「まだまだ下手なので、恥ずかしいんですけど」

練習に出始めて二週間もすると、おおよその振り付けは覚えつつあった。ただ、覚えたのと踊れるのは違う。頭で記憶するよりは身体で覚えた方がいいとアドバイスを受けたので、こうして復習をしているところだ。この山なら人が来ることはほとんどないし、こっそり練習するにはもってこいだった。

練習は一時中断して、聖はいつものように大杉の幹にもたれて座った。春には枯れていたかに見えたこの杉も、今では他の木と比べても遜色がないほどの緑で覆われている。それもきつと、隣に腰を下ろした山の神のご利益なのだろう。

「学校の友達に誘われて、祭に出ることになったんです」

「秘密の訓練というわけか」



「はい。まわりは何年も踊ってきた人ばかりなので、僕だけ遅れをとるわけにはいかないと思って」

「確かに、あまり得意ではなさそうじゃのう」

遠慮がちにぼつりと呟いた漣のせりふ。歯切れ悪さの中にほんのーかけらだけこめられていた憐れみの色に気づき、少なからず自覚があつた聖は顔を赤らめた。

聖は決して運動が苦手なわけではないのだが、正直言ってダンスや体操に関しては全くと言っていいほどセンスがない。漣もコメントに困つたのだらうと同情すら覚えるほどに、だ。

しかし経験者に囲まれていると、初めてだから、苦手だからという言い訳は飲み込まざるを得なかった。特に誠太郎は群を抜いて上手い。その上、部活があるにも関わらず毎回時間通りに練習場所の公民館に現れ、真面目に舞っているので大人からも子供からも信頼が篤かつた。ちぐさとあれだけ派手にやり合っていたのだから、てつきりやる気がないのだとばかり思っていただけに、聖には意外だった。

「お主は、生真面目じゃのう」

「特訓でもしないとついていけないだけですよ。……僕の友だちがすごいんです。同じ歳なのに保存会のエースで。ただ」

「えーす、とは何じゃ？」

「あ、ええと。主力というか、いちばん上手というか、そんな感じですね」

「ふうん」

漣は満足そうににやりと頬を緩めた。出会ってから、聖はかなりの数のカタカナ言葉を漣に教えたが、近頃は新しい単語を覚えるたびにこうして含み笑いをするのが癖になっている。そんなに楽しいのなら今度は国語辞典でも持ってこようか、でも彼女は字が読めるんだつたつけ、などと聖が思案していると、漣の声がした。

「ただ、何じゃ？」

聖の話を遮つたのを申し訳なく思ったのか、続きを催促する。考

え事をしていて何のことだったかすっかり忘れてしまっていた聖だったが、そういえば誠太郎のことだったとやっと思い出した。

「そうでした。僕の友だちが上手いんです。ただ、踊りを教えてくれている方のお孫さんともめるのが日課みたいで。彼女もすごくいい人なのに、なんであんなに仲が悪いのか不思議です」

ため息をつきながら、聖は肩を落とす。

練習が終わってからはメンバー全員で夕食を取るのが決まりだった。差し入れ担当は踊り手の奥さんや娘さんたちで、当然ちぐさも毎回顔を出している。そのつど誠太郎との口げんかが始まり、聖はいつも間に入っていた。周りのみんなは毎年のことなので慣れているのか、笑いをこらえながらことの成り行きを見守っている。むしろ、仲裁役を務める聖も含め、トリオで名物になっている感があるほどだ。

「痴話げんかは鹿も食わぬと人間はよく言うのではないか。放っておけ」

目を丸くした聖に、「儂がこんなことを言うのは、おかしいか」と膨れっ面で言う。びっくりしたのは、鹿うんぬんという溲の珍しい冗談にだけではない。聖には誠太郎とちぐさの言い合いが痴話げんかだという発想自体がなかったので、溲のせりふに完全に意表を突かれた形になったのだ。

「いえ、冗談に驚いたんじゃないです。あの二人が実は『ケンカするほど仲がいい』ってというのが想像できなくて」

「お主はそれで良い」

前にも同じことを言われたような気がする。子供扱いに抗議しようと思つて隣を見ると、やけに大人びた表情の溲の視線に出会った。正確なところは聞いたことがないが溲が年上なものには違いない。今だって、わざわざ聖の年齢に合わせて化けてくれているのだろう。ただ、中身が何であれ目の前の少女に物憂げな顔をされると何も言えなくなってしまう。

聖が黙っていると、溲が静かに口を開いた。

「踊りの腕はともかく、改めて見るとなかなかいいものじゃの」

「昔はお嫌いだったんですか？」

「獅子頭を見ると、どうも嫌なことばかりを思い出してな。なるべくなら考えないようにしていた頃もあったのう」

一瞬沈んだ表情を見せたものの、いったいどうしてと聖が聞き返す前に、澪は大昔の話だとさらりと流してしまった。そして、「お主の踊り、ぜひ見たいものじゃな」と半眼になってこちらを見る。その顔から察するに、どうやら楽しみ半分、冷やかし半分といったところらしい。

「上手くなったら発表会しますね」

「おう、楽しみにしておるぞ」

そう言うのと、澪は再びにやりと笑った。完全にかかわれている。そもそも聖は、『神に奉納する踊りならぜひ澪の前で舞いたい』という思いで踊り手に志願したのだ。さすがに少し悔しくなつて、聖は絶対に上手くなつて驚かせてやろうと心に決めた。

祭まで半月を切り、いよいよ本番どおりに衣装を付けての練習が始まった。

その初日、いつもなら練習終了後に来るはずのちぐさもなぜか開始時間に合わせて現れていた。彼女は聖を見つけると、大きな風呂敷包みを抱えて近寄ってきた。

「大音くん、調子どう？」

「ぼちぼちですね」

俯いて苦笑すると、ちぐさは聖の耳元で囁いた。

「オヤジたちに怒られても負けないでね。本番までに何とかなればいいんだから。……もし嫌な思いしてたり、やめたくなったりしたら私に言って」

「大丈夫ですよ。下手ですけどやる気はありますから」

自分が誘った手前というよりは、心から聖の心配をしているといった様子だった。心遣いが嬉しくて聖が笑顔で答えると、彼女は「それなら、誘って良かったな」と言って荷物を床に置いた。ガサッと、大きさのわりには軽そうな音がする。

「今日はこれを配りに来たの。衣装と頭は数がないから交代で着るんだけど、足下だけは履き慣れたものを使うようにって。私は子供の分担当。……はいはい、みんな並んで！」

言いながら解かれた包みの中身は、ビニール袋に入ったままの新しい足袋とわらじだった。足袋は市販品だが、わらじは恐らく手作りだ。足のサイズを告げるのと引き替えに手渡され、今日からこれを使い込んでいくんだと考えるとちょっとわくわくする。

「もらった人は、あっちに行つてね。おじさんたちがわらじの履き方教えてくれて、衣装着せてくれるから」

指さされた方向では、保存会長、つまりちぐさの祖父が手招きをして待っている。

元生徒会長らしい見事な仕切りに従って移動した先には獅子頭と衣装、小道具が並べられていた。

初めて踊り装束を目の当たりにした聖は思わず顔を背けた。鹿を模した衣装だと前もって知っていたのに、そんな簡単なことにも気が付かなかつたなんて。

もう一度、視線を戻す。

背中からまっすぐに天へと伸びるであろう、御幣にも似た二本の真っ白いササラがまず目を引いた。異形の頭は獅子、あるいは麒麟のようにしか見えないが、一対の見事な枝角が取り付けられているので鹿に似せたものと分かる。何よりも聖の心に突き刺さったのはその角だった。

「小瀬川さん。これって本物の角ではないですよね？」

「これは木を削って作ったやつだよ。昔は、鹿から取った角を使ってたもんだ。一説には、狩った鹿を供養する踊りとも言われとるからなあ。ありがたく舞わんとねえ」

ちぐさの祖父はそう言つて獅子頭に向かつて手を合わせた。彼も若い頃は獵銃と罾を担いで山を歩いていたという話を、聖は小耳に挟んでいた。獵師時代のことを思い出したのかもしれない。

澗が鹿踊を好まなかつた理由は、おそらくこれだろう。いくら人間が鹿の祟りを鎮め、畏敬の念を表すためとはいえ、命を落とした仲間たちの変わり果てた姿を見せつけられなければならないのだから。しかし、澗はそれでも自分の踊りを見たいと言つてくれたのだ。嬉しさももちろんあるが、それよりも何が何でも上手に踊らなくてはという熱意が湧いてくる。

聖も、ちぐさの祖父にならつて静かに手を合わせながら公演の成功を誓う。しかしその黙祷は長くは続かず、ちぐさの声で破られることになった。

「また来たのか、つてどうということなの」

「ほんとのことじゃないか」

「だつて私、用事があつて来てるんだよ」

「間違つてないだろ？ 正直に言つただけ」

それに答えるのは誠太郎だ。いつものケンカがまた始まつたのだ、と聖が頭を抱えながら仲裁に入ろうとすると、ちぐさの祖父は「やめとけやめとけ。巻き込まれる」と齒が何本か抜けた口を開けて笑つた。

「でも」

「誠太郎とちぐさは生まれたときからああなんだよ。でも、口をきかなくなるほどのめ事にはなつたことはねえな。みんなそれを知つてるから止めねえんだ」

彼はそう言うが、二人の様子がどうもおかしい。喧噪の中、ときれとぎれに聞こえる彼らの語気が、いつもと違って荒いのだ。

「そんな言い方、しなくてもいいじゃない」

「俺はせいせいするよ」

「もついいー！」

言い捨てる、ちぐさは半ば駆け足になりながら部屋から出て行

った。

『……なんで、こうなっちゃうんだろう』

ひどく悲しげで、こちらまで気分が沈みそうな声だった。見回したが、誰も反応していないということは聖だけが拾った咳きだったのだろうか。

いったい何があったのかと視線を部屋の中へとやると、誠太郎と目が合った。彼は聖に気付くと慌てたように向きを変え、わらじと足袋を抱えて練習へと戻っていった。

それ以来ちぐさは練習に顔を出さなくなり、『口をきかなくなるほどのめ事』が起こったらしいと、聖もようやく察した。彼女と聖とは学校では何度か顔を合わせたし、普通に会話もしたが、隣にいた誠太郎のことはわざと無視をしているように見えた。誠太郎も誠太郎で、ちぐさを見かけても避けて通るわけでもなく、かといって以前のようにケンカをするわけでもなく、まるで、前から知り合いいではなかったかのように無言ですれ違っていた。

聖が出て行って口げんかを止めていたのはほんの数日前だったはずなのに、今はそのころが懐かしい。漣の言うように、ケンカしているうちが華だったのだろうか。もう、二人の仲は修復不可能にまで悪化しているのだろうか。

その日、聖は思い切って部活へと急ぐ誠太郎を呼び止めた。

「セータ、先輩と何かあったの？」

「何もないよ」

「先輩、練習の差し入れにも来なくなっただし、最近あまり元気なさそうだから」

「あんなやつのことなんか、知らない」

素っ気ない顔で、誠太郎はしらっと答えた。

そういって誠太郎も、ちぐさが出て行った日を境に練習量が目に見

えて減っていた。練習を休むこと自体はほとんどなかったが、ほぼ毎回遅れてくる。それでも相変わらず踊りは上手く、聖も細かい振り付けを教えてもらうことは多かった。

「でも、セータとケンカしてからでしょ。先輩が来なくなったのは「別に。……あんまり踊りのこととか祭のこととかうるさく言うから、いなくなるくせに、って言っただけ」

「どういうこと？」

「あいつ、今年受験だろ？ トップ校狙える成績なんだ。だからある程度成績がいい生徒は近くの高校ではなく、街の進学校に行くためにここを出て行く。それはよくあることで、ちぐさも当然そうだろうと校内では噂になっていた。だからといって、誠太郎の言いくさは仲が良くないとはいえ幼なじみに対してあんまりなものだ。それは、ちよつとひどいよ」

さんざん迷って、聖は友人に意見することにした。

「僕、引越してきたから幼なじみがいないんだ。二人がうらやましくてずっと見てたから、仲直りして欲しいなと思って」

「もともと腐れ縁なんだ。仲直りするほどの仲もないんだよ。それが切れるだけ。どうせ春には切れるんだから、早まったただだよ」

「でも」

「そう言ってくれる聖には悪いけど、さ」

誠太郎は聖の言葉を遮って答えると、教室を出て行った。

生まれたときから一緒だったという二人の片方が欠けても、誠太郎は平気だと言った。しかし、あまりにも長く一緒にいすぎると感覚が麻痺することもあるのではないだろうか。現に、本人は気付いていないだろうが、あの日ちぐさの背中を見ていた誠太郎は気が気でないといった表情だったのだ。

聖はちぐさの寂しげな呟きを聞いている。当たり前のことが当たり前ではなくなるのを誰よりも早く感じ取っていたのは彼女かもしれないと、聖は思った。

## かのご舞い 後編

当日は良く晴れて、秋らしい水色の空が高く広がった。

聖は準備のために神社の社務所へと向かっていた。どうやら秋祭りにはなかなか知名度があるようで、観光客は少なくなく、公演会場である境内は人波と活気に溢れていた。とはいえ、さすがに控え室になっっている社務所の裏口までも見に来る人はいない。人気のない中、出店から漂ういい香りと、現在催されている演目のお囃子だけが届いてくる。

連日の練習による疲れなのか、緊張しているためか、今日はなんだか身体が硬くて重い。そして不意に、足がさらに重くなった。転びそうになってたたらを踏みながら、何とかこらえる。

何事かと足下を見てみると、わらじの右足の縄がすり切れてしまっていた。

「……壊れちゃったんだ」

下手な分だけ他のメンバーよりもたくさん練習したのだが、その影響が今になって表れたらしい。本番はすぐなのにと困り果てて立ちつくしていると、遠くから誠太郎の声が聞こえてきた。

「おい、聖！」

学校での聖は『耳が悪いので常時補聴器を付けている』という触れ込み。誠太郎がわざわざ大きく手を振っているのは、視覚に訴えようということだろう。聖も手を振り返す。

「セータ！」

「どうかしたのか」

こちらに向かってきた誠太郎に、聖はふざけて蹴りを入れるように右足を上げる。すると彼は、突然歩むスピードをアップして近寄るとその足をキャッチした。片足でふらふらとバランスを取りながら、聖は叫んだ。

「やめてよ、転んじゃうって」



「ああ、ここが切れたのか。これだと、すぐには直せないな」  
やや目を開いて、ぼそりと呟く。どうやら、わらじの壊れた箇所を発見したらしい。

誠太郎が手を離れたので、聖は反動で尻もちをついて転がった。聖が身体に付いた砂を払いながら「せつかくコケずに持ちこたえたのに」と抗議すると、さすがに悪いと思ったようで、彼は笑いながら右手を顔の前に立てて軽く頭を下げた。

「ごめんごめん。……お詫びに、俺のわらじで良かったら貸してやるよ。サイズ合うだろ？」

「ほんと？ 助かるよ」

「ただ、踊り終わったら返してくれな。俺はまだ出番あるから。ほら、履かせてやるから座って」

「うん」

何回かの公演をグループごとに交代して踊るのだが、幸いにも聖の出番は誠太郎のいる斑よりも早い。ここはありがたく彼の申し出を受けることにしようと、聖は袴の裾を気にしながら社務所の壁に寄りかかるように腰を落とした。

誠太郎は手際よく自分のわらじを脱ぎ、聖に履かせると縄を結ぶ。こうして彼の作業を見ているといかにも簡単そうなのだが、聖が自分で結ぶとなぜか踊っているうちに緩んできてしまうのだ。慣れた人にしか分からないコツがあるのかもしれない。

「これでよし」

「ありがとう」

「どういたしました。聖、頑張ってたからさ。わらじのせいで失敗したってことにもなったら悔しいだろ。……俺はたぶん出店で何か食べてるから、終わったらよろしく。じゃ、また後で」

聖を残し、誠太郎は軽く手を上げると境内の方へと立ち去った。

ちよつと話したおかげか、顔の強ばりはほぐれて、身体もさつきより軽く感じる。本番を前にして、自分では気付かなかったがだいぶ緊張していたらしい。もしかすると、誠太郎はそれが心配で聖の

ところに来てくれたのだろうか。

保存会のホープの足を借りるのだから、まずい演技をするわけにはいかない。聖は確かめるように力を込めて地面を踏みしめ、立ち上がった。

無事に本番が終わり、聖は社務所の外でクールダウンを兼ねて休んでいた。

衣装を脱がせてもらうための順番待ち。座ってしまつと獅子頭の重さに負けて立ち上がれなくなりそうだったので、格好は悪いが仁王立ちだ。

汗をかいた身に秋の風は冷たい。寒さに身震いしたところに不意に後ろから肩に触れられて、聖はぎょつとしてさらに身体を震わせた。

獅子頭はしつかりした造りで、聖の目から外はほとんど見えない。しかしわずかな隙間から覗くと、狭い視界の中に自分を優しく包む誰かの細い両腕が見える。普段なら足音で気付いただろうが、疲れがピークに差し掛かっていた聖には耳に回すだけの心の余裕はなかった。

『やっと見つけた、誠太郎。ずいぶん、探しちゃった』

誰ですか　そう尋ねようとして口を開きかけた聖は、思わず息を止めた。

穏やかながら強い意志を秘めた声の持ち主は、小瀬川ちぐさ。『聞き耳』だけが聞き取れる、あふれ出した心だ。

その言葉は、聖にはなく誠太郎に向けられたものだった。皆お揃いの踊り装束では中身が誰なのか分からないはずなのに、なぜか彼女は聖を誠太郎だと確信している。

困ったことに、ちぐさは胸の中でそう考えているだけで実際はまったくの無言で聖に抱きついているのだった。下手に人違いだと言

つてしまうと『聞き耳』について勘ぐられるかもしれない。その恐れと、首元を感じる柔らかい手の感触、背中越しの鼓動が、聖の動きの一切を止めていた。

だからといって人違いされたままではいけない。とにかく一度彼女を引き離そうとした瞬間、ちぐさの腕に力が入る。

『ほんととは私、ちっちゃいころからずっと誠太郎が大好きだった。

この祭が終わったら言おうとずっと前から思ってたんだ』

今度こそすっかり固まった聖をよそに、彼女の告白が入り込んできた。

『好かれてるとは思ってたないし、これ以上嫌われたくないから黙ってるけど、今だけはこうさせてね。誠太郎にとっては、言うだけ言っていないなくなっちゃう私は迷惑なだけって分かった。でも、私はどこへ行っても誠太郎のこと忘れないよ。最後までケンカばかりでごめんね。……じゃあ、バイバイ』

背中が涼しくなった、と思ったときにはすでに足音が遠ざかっていった。

「待って、先輩！」

呼びかけてみたが、衣装の中からのくぐもった声はちぐさには届かず、彼女が駆けていったとおぼしき方向からすすり泣くような息づかいだけが響いてくる。追いかけるにも、十キロを超える装束をまとったままでは到底無理だ。それなら獅子頭を取って叫べばいいと思ったが、渾身の力で引張って外そうとしてもびくともしない。頭は特にしっかりと固定するため、一人で衣装を着替えたことがない聖がいくら頑張ってもそう簡単に脱げるわけもなかった。

仕方なく獅子頭の隙間から目を凝らす。見回してもすでに誰もいないことを確認して、脱力した聖はその場に座り込んだ。「次の人の中に入っておいで」と控え室の戸が開いたのは、ちょうどその時だった。

被り物の中の暗さに目が慣れていたので、衣装を脱がせてもらっ

てしばらくは外の光の眩しさで何も見えなかった。ようやくまともに機能するようになった聖の目に最初に入ってきたのは、自分の足下だった。

「……こういうことか」

さつき借りた誠太郎のわらじ。よく見ると、右の踵に赤く染められた藁が編み込まれていた。

好きな人に渡すものだけにこっそり印を付ける。衣装はみんなお揃いだし、持ち回りで着るから個人の見分けは付かないと思っていたが、仕掛けに気付いてしまえば簡単なことだ。そういえば、わらじはちぐさが配っていた。彼女はあの日、つまり二人の大げんかがあった日にはすでに誠太郎に思いを伝える決心をしていたということになる。

あんなケンカがなければ、さつきは声に出して告白するつもりだったはずだ。

澗の話である程度は予想していたものの、よりによってこんなタイミングで切り出されるとは間が悪いにもほどがある。

彼女は『バイバイ』と言った。今日を逃すと、誠太郎とちぐさとの仲は確実に今よりも隔たってしまうだろう。そうなる前に、誠太郎を探さなくては。

わらじを握りしめ、聖は社務所を後にして駆け出した。

誠太郎は宣言通り、境内で炊き出しの鍋をすすりながら舞台を見ていた。聖が息を切らしながら「セータ！」と呼ぶと、満面の笑みを浮かべて箸を振る。彼は駆け寄った聖に、箸とお椀を持った両手をかざすように上げた。聖も、それにハイタッチで応える。

「ちゃんと踊れてた。頑張ったな」

「ありがとう。……あのさ、話があるんだけど」

ちぐさを探してくれと頼むと、誠太郎は打って変わってあからさまに不機嫌そうな顔つきで呟いた。お椀の中身をかき込んで、聖に

聞こえるように愚痴をこぼす。

「わらじを返しに来てくれただけだと思ったのに。……何で、俺がそんなことしなきゃならないわけ」

しかし、気のない表情が演技であることは聖の耳だけが知っていた。

『きつと外の高校に行ったら田舎の幼なじみのことなんかどうでもよくなる。だから俺はもう引くんだ。そうしたほうが、いいんだ』

耳栓を突き抜けて聖に漏れ聞こえてきた言葉に、目を見開いて誠太郎を見る。

いつも裏表なく人に接する彼がちぐさの前だけでは妙に攻撃的になるのはなぜだろうと、聖はずっと疑問に思ってきた。特に踊りの練習が始まってからは、はたから見ていて止めたくなくなるほどに辛く当たっていた。誠太郎はちぐさにわざと突っかかって、自ら距離を置こうとしていたのだ。

あまり考え込むと、顔に出てしまう。何も聞かなかったふりをし、聖は尋ねた。

「僕がこんなこと言うのもどうかと思うんだけど、先輩、セータのこと好きなんじゃない？ セータだって、本当は」

「違うさ」

「違う。セータが真面目に練習来てたのは先輩に会えるからだって、気付いてないでも思ってる？」

ぴくりと、彼の眉が少しだけ上がった。彼がじわじわと、しかしながら確実に平静さを失い始めているのが分かる。

誠太郎がちぐさと会いたくないのなら、彼女が来なくなっただけからこそ熱心に練習するはずだ。しかし、そうはならなかった。彼はちぐさがいなくなったとたん、練習に姿を見せる回数が極端に減ったのだ。それが何を意味していたのか、やっと理由が分かった。まったく、自分の鈍さには嫌気が差してしまう。

先ほどよりもいくぶん語気を強めて、誠太郎は再び否定した。

「違う」

「先輩にとっては中学生生活最後の、特別なお祭りなんだ。高校に行っちゃうとなかなかこっちに帰って来られないから、セータの思い出作るうとしてるんだって。……いや、僕が勝手に考えてるだけ、なんだけど」

「だいいち、追い掛けるって言ったってちぐさはどこいったんだよ」  
「俺、そんなこと言ってもらったことないし。それに、あいつにひどいこと言ったから今さら許してもらえないわけない。きっと俺の顔も見たくないはずだから。……どうして俺はあいつと同じ歳に生まれなかつたんだろう」

続きは飲み込んだ誠太郎だったが、聖の耳は拗ねたような声を拾っていた。

二人とも相手のことをいちばんに考えて、その結果、皮肉なことに自分から距離を離していこうとしている。

秘密を秘密にしておかなければならないのは、何とももどかしい。もしも誠太郎本人が先ほどのような告白に遭っていたら、変な意地を張らずに仲直りできたはずだ。ちぐさが誠太郎を想って泣いているのだと言えたら。彼女は一足先に素直になって誠太郎を待っていると伝えられたら、どんなに簡単だろう。そして、目の前の友人が心に正直に動いてくれたらどんなに楽だろう。

今すぐにちぐさを引き止めないと、そのまま二度と交わらないかもしれないのに。

「この意地っ張り！ 僕、さっき先輩を見かけたんだ。必死にセータを探してた。泣いてたよ。……他の人じゃなくて、先輩はセータを待ってるんだ」

半ば怒ったような聖の様子に、今度は誠太郎が目を見張っている。聖の耳をもつてすれば、ちぐさがしゃくりあげる声など苦もなく聞こえるはずだ。しかし、誠太郎自らが彼女を探しに行かないと意味がない。ちぐさが今いちばんそばにいて欲しい人は誠太郎だし、彼自身がいちばん会いたい人は彼女なのだから。

「セータも先輩に会いたいと思ってるんなら、どこにいるかなんて

自分で探してよ。好きな人の行きそうな所くらい分かるでしょ？  
……なんでそんなに簡単に諦めるの？ 必死に呼び続けて抱きしめたら振り向いてくれるって、どうして考えないの？ 出て行っちゃうのが嫌だっというなら、引き留めなよ。自分のこと忘れないうでねって言えばいいじゃない」

誠太郎は目を丸くしたまま聖の声に耳を傾けていたが、一言「ああ」と呟いた。聖の剣幕に押されて嫌々返事をしたのかと思ったが、きりつと結ばれた口元からは決意が見て取れる。

『しばらくは俺の踊りをちぐさが見ることもないのか。そんなのは嫌だ。……俺はいつだって会いたいのに。今も、ちぐさに会いたいのに』

小さくうなずくと、誠太郎は聖の手からわらじを受け取った。きつと、自分の胸の内の言葉を反芻しているのだろう。やがて彼は、包み隠せない熱さをにじませた瞳で聖を見つめた。

「……俺、ちぐさを探しに行ってくる。世話焼かせてごめん」

「こつちこそ、キツイこと言ってごめん」

「いや、おかげで目が覚めた気分だから。ありがとう」

「ほら、出番、まだあるんでしょ？ 早く迎えに行つて、見てもらいなよ」

今度は大きくうなずくと、誠太郎はわらじを手にしたままいずこかへと駆け去って行った。一人でくさっているなんて彼らしくない。はつらつと踊っていてこそ、誠太郎だ。聖は、背中が人混みに紛れて見えなくなってもなお、彼の向かった方を見守り続けていた。

「結局、晴れて両思いになりました」

あの後、観客に紛れて踊りを見物していた聖のもとに、ちぐさは少しだけ赤い目をして現れた。誠太郎の出番になり、見事な舞いを堪能した聖が『すごかったですね』と言おうと隣を見ると彼女は姿

を消していた。すでに、誠太郎をねぎらいに社務所へと向かった後だったのだ。

心配かけてごめんという話は二人それぞれからあったので、無事に仲直りしたということだけは分かったが、詳しいことは誠太郎もちぐさも口に出す気はないようだった。きつと二人だけの秘密なのだろう。

「先輩は卒業後、やっぱり街に出て行くことに決めたいみたいです。どうも誠太郎も同じ高校に進む気みたいで、お祭の日以来、仲良く勉強しているのを見かけます。だから、ケンカの仲裁には入らなくてよくなりましたが、今は別な意味で気まずくて」

そんな話を漣にしてみると、彼女は少しだけ自慢げに「僕の言ったとおりであるう」と胸を張った。

「鹿も何とかって話ですよね」

「うむ。結局は、らぶらぶな二人であつたということじゃな」

「ラブラブ、ですか？ 記念すべき初カチカチなのに。……ぷっ」  
二人の今後を少しうらやましく考えていた聖は、不意を突かれて笑いを必死に噛み殺す。まさか漣の口からそんな言葉が出ようとは考えてもみなかったのだ。時代がかった言い回しはそのままに、妙なところから現代に適応しつつあるようではある。

「なんじゃ。間違つておつたか？」

気を抜くと笑いが爆発しそうになるのを何とか押さえ込んで、聖は漣にOKを出す。

「いえ、正解です。正解ですけど、漣さまの口から聞くとびっくりしますね」

「……僕はまだお主の踊りを見ておらぬのじゃが。披露するというあれは、空耳だったかのう」

当の本人は笑われたことに少なからず腹が立つたらしく、わざと痛いところを突いてきた。顎に人差し指を軽く当て、ジトツとした視線を送る。こういうところは人間よりも人間くさい。

「笑いませんか？」



「約束はできぬ」

澪は意地悪そうな口調で、容赦なく言い放った。

獅子頭に黙祷を捧げてから、聖はかなりの訓練を重ねてきた。自分の踊りを見たいと言ってくれた澪のため、聖は二度目の本番のつもりで臨む気構えだ。まさか彼女は、聖がそこまで入れ込んでいるとは思わないだろう。

澪の前に立つと、彼女と目が合った。

「では、始めます。そのまましつかりと見ていてください」

踊りながら、聖は思う。

獅子頭を見て以来、聖はこれまで忘れがちだったこと。つまり澪が本当は鹿であり、山神やまがみであるという事実。をどうしても意識してしまっていた。そもそも、澪は人ではない。彼女とは重ねてきた年月も立場も、あまりにも違いすぎる。

祭の日に誠太郎に放った言葉は、今さらながら聖自身に返ってきていた。

聖は、誠太郎に他でもない自分自身の姿を重ねていた。つい感情的に彼を怒鳴りつけてしまったのも、自分に喝を入れたかったからかもしれない。誠太郎やちぐさが距離や年齢、目の前の壁を壊すところを見たかったのだろう。

澪と共に生きる自信を与えて欲しい。自分にもできると思わせて欲しい。願望を他人に託すのは決して良くないとは思っけれど、そんな本音を否定することはできなかった。

「ずいぶんと上手くなったのう」

踊り終えて澪に感想を求めると、そう言って力いっぱい手を叩いてくれた。無人の山に拍手の音がこだまする。

「獅子頭こもがらに輩の角が使われておったのでな。昔はまともに見られなんだが、お主の舞ならば見ているも辛くはない。……それどころか、力が湧いてくるようじゃ」

「ここしばらくの苦勞が報われた気がして、聖は胸をなで下ろした。やはり澪にとつてあの角は心痛の種だったらしい。それでも自分の踊りを見て誉めてくれた澪の優しさに感謝しながら、聖はしみじみと喜びを噛み締めた。」

「そう言つてもらえると、良かった。僕、どうにかして澪さまのお役に立ちたかったから」

「……嬉しいことを言つてくれる」

照れくさいのか、顔を伏せてしまった澪の頬にさつと赤みが差す。『これも、お主の力なのか？ 聖といると胸の奥が熱くなって温まる。それが、今の儂の日々の糧じゃ』

「澪さま」

続けて聞こえた声に聖はうろたえ、つい彼女の名を口にした。普段、澪は一切の心の声を閉じこめ、聖には聞こえないようにしている。彼女らしくもなく、どうやらうっかり漏れ出してしまった胸の内らしい。

顔を上げた澪は、やはり面映ゆげに上目遣いで聖を見つめる。

「何じゃ」

「あ、いえ、何でも」

怪訝そうに首をかしげる澪に、愛想笑いでごまかす。どうやら、聖のうっかりは勘づかれてはいないようだった。

「ご要望があれば何度でも踊りますから、おっしゃってください」「お主の身が持たぬではないか」

澪はそう言つて吹き出した。

聞き耳には、澪の思つような力はない。しかし、澪がそう感じてくれているのなら聖の胸の奥も温まる。諦めずに呼び続けていれば、もっともつと彼女に近づく時がきつとやって来ると信じたい。その日まで彼女の微笑みを絶やさぬように、澪と共にいるために、自分にできることは何でもしていこう。

もつすぐ山には冬が訪れる。寒さに澪の心が冷えてしまわないように、まずは足繁く通うことから続けようと決めて、聖もにっこり

と笑って答える。

「漫さまが見てくれるなら、頑張れますから」

## もう一人の王 前編

いつもの朝。

嘉章はすでに家を出た後だった。聖が鍵を閉め、靴のつま先を地面に打ち付けながら見回すと、周囲の水田や草むらにはうつつすらと雪が積もっていた。日陰の水たまりには厚い氷が張り、足の下では氷漬けになった落ち葉が歩きたびにぎゅっと悲鳴を上げる。暖冬とは言われているものの、寒さは日々確実に深まっているようだ。

もう何日か登校すれば二学期も終わり。溼に『クリスマス』を教えるのが、今の聖が企んでいる密かな楽しみだ。

今年はここで年越しをしよう決めていた。両親も、来年は受験があるから、今くらいはゆっくりと寝正月を満喫しろと言ってくれた。幸い、実家が遠い嘉章もこちらに残るようなので、年末年始もいつもの通り、男二人でむさ苦しく過ごすことになるだろう。

冷たい風に立ち止まってマフラーを巻き直し、前を向いたところで、聖は人影に気付いた。

田舎に似合わぬ、ずいぶんと都会の香りがする女性が聖の進路を塞ぐように立っている。大学生くらいだろうか、この辺りでは見たことのない顔で、ロングブーツを格好良く履きこなす長身の目線は聖よりも上にあった。

彼女は目を細めて聖を見つめると、出し抜けに「あなた、聞き耳の子？」と尋ねてきた。問いに答えはせず、聖は聞き返す。

「どなたですか」

「そう怖がらないで。……はじめまして。見前みるまえ環たまきっていいいます」

耳栓をしたまま咄嗟に耳を澄ましてみても、聖には何も聞こえなかった。聞き耳に声が届いてこないということは、妖あやしの類ではなく見た目通りヒトであることは間違いないのだろう。聖としては『聞き耳』と聞けば警戒しないわけにはいかないし、名乗られたって環が正体不明なことには変わらない。名前よりも、何のために現れた

のかが重要なのだ。

「あなたと同じく、力を持つ者よ。噂を頼りにここまで来たの、聞き耳に会いに」

「おっしやる意味が」

「とぼけるつもり？ あなたの力、化け物たちから知ってね。ここまで追ってきたのよ」

分かりません、とごまかそうとした聖を遮って環はそう言うと艶やかに笑った。緩いパーマのかけられた明るいブラウンの髪が、ふわふわと揺れる。女性らしい柔らかい印象の外見とは対照的な、勝ち気な物言いが何だかアンバランスだ。

この村に来るまで、そしてここに来てから、聖は漣をはじめとしているいろいろな妖と関わってきた。環はその人外の者たちに会って話を聞き、聖を訪ねてきたというのだろうか。

「そうね。私のことを分かってもらうためにも、ちよつと『見て』あげる。口を割らなくても、私にはわかるんだから」

そう言うのと、環の大きな瞳が聖を捉え、心の奥まで見透かしそうな視線が降り注ぐ。まるで体中を観察されているような感覚に襲われて、聖は思わず顎を引いて身構えた。彼女はしばらく探るように聖を凝視していたが、やがて腕を組むと口を開いた。

「聖くんっていつの？」

さも自慢げに、自信たっぷりに笑う環を、聖はできるだけ平静を装って見返した。

「中学二年。てことは、私よりも五つも下なのね。それに、お兄さんかしら、男の人と二人暮らしで、今日はあなたの方が後から家を出た。今日の朝ご飯は、トーストとベーコンエッグ、チーズとトマトのサラダ、それにコーヒー。インスタントじゃなくて、マグカップに乗せて一杯ずつドリップするタイプのね。その耳栓が力のスイッチになっているの？ 耳栓を取ったとたんに耳を両手で覆うあなたの姿が『見える』わ」

すべて、彼女の言うとおりであった。聞き耳だとか、嘉章のことだ

とかを言い当てられただけならば信じなかったかもしれない。そんなことは、少し詳しく調べれば分かることだ。が、朝食の献立までもお見通しとはただごとではない。

「どう？ 信用してもらえたかしら、私の目。相手の心が読める力、あなたと似ているでしょう」

この人は、本物なのだ。

人の記憶や心が『見える』目を持った人間。聖自身が持つ耳のことを考えれば、そういった異能者が他にも存在したっておかしくない。

隠し事ができないのなら、覚悟を決めよう。とりあえずは、聖も名乗っておくことにした。

「あなたの力はよく分かりました。僕は確かに、あなたの言うとおりに聞き耳です。大音聖、中学二年。……それで、何のご用ですか」

「私と一緒に、街に出て来る気はない？」

「え？」

「能力者どうし仲良くやらないかしらってこと。『力』を持つ仲間、欲しいと思わない？」

額にかかる前髪を直しながら、環は言った。

仲間はいらないかと言われれば、いた方がいいに決まっている。

しかし突然現れて、初対面でいきなりそんな提案をされても困る。

ここには漣がいるし、嘉章も誠太郎もいる。やっと見つけた自分の居場所を捨ててまで環についていく気は、聖にはない。

それに、常に相手を見下すような環の振る舞いは聖とは合いそうになかった。挑発的な態度や強引さから、環と自分とは持つ力は似ていても、何かが決定的に違うのが分かった。力のせいで用心深く人を見る目を磨かざるを得なかった聖だ。出会って数分しか経っていないとはいえ、それくらいは感じ取れる。

「すみませんが、僕はここでの暮らしが気に入っているのですお断りします」

「それは、その和服の女の子がいるから？ ずいぶんとご執心のよ

うんだけど。その子に『行かないで』とか、何か言われたんでしょ？」

澗のことまでも見抜かれているのかときよっとして見上げると、やはり彼女はしたり顔で腕を組んでいる。相手の心が読めることが何故そんなに嬉しいのか、聖には理解できない。

「彼女は関係ありません！」

「凶星かしら。……あら、ずいぶん怒ってるわね。あなたに見える景色が白く曇ったから、分かる」

鼻で笑って、環はうなずいた。怒っていること自体ではなくて、聖が腹を立てている理由の方を分かってもらいたいのだが、環にはそんな気はなさそうだった。

力に頼りすぎていると、相手が本当に考えていることや言いたいことが逆に見えなくなる。目の前の情報にばかり気を取られて、自分がどう思われているのか考えようとしなくなるからだ。そういう聖も、環が目の前にぶら下げた餌に食いつきすぎている。

自覚すると、血が上った頭が少し冷えてくれた。自分としては大限の努力で環をにらみつけ、聖は冷静に尋ねた。

「言い方は悪いですけど、僕が出会った人たちからも、そうやって聞き耳の 僕に関する記憶を盗み見てきたんですか」

「否定はしないわ」

「とにかく、あなたと一緒にには行けません。……学校があるのでこれで失礼します」

「私、諦めないからね」

聖は環の言葉を聞かなかったふりをして、その横をすり抜け、学校への道を急いだ。相変わらず背中を感じる『目』を振り切るように、早足にその場を立ち去る。聖がやっと安心できたのは、校門の前で登校する生徒たちの集団に紛れられたころだった。

冬の山を登ってくる人間など聖以外にはいないと思っていたが、どうも先刻からヒトの気配がする。この時間であれば聖は学校にいるはずだ。彼以外の誰かが、山頂を目指して道を辿って来たとしても

いつのか。

澪がそつと様子をうかがうと、聖がいつも腰掛ける大杉の下に娘が一人立っていた。彼女は姿を消しているはずの澪の方へとまっすぐに歩み寄り、「この山でよかったようね」と呟く。視線がかち合つて、澪はこの娘がただ者ではないのだと悟つた。しかも、彼女の目的はどうやら自分らしい。

彼女の目を見た瞬間、嫌な感じ　言い表せない不安が澪の胸にわき上がった。鹿のように弱い獣は、本能的に危険を嗅ぎ取るすべを身につけている。聖に現代風に言わせるならば、危険信号とでも表現するだろうか。

姿を現した澪は、今度は自分から声をかける。

「儂が見えておるな？　お主、何者じゃ」

「あなた、ずいぶん可愛く化けてるけどヒトじゃなくて鹿ね。銀に近い白い毛皮が見える。これが本性？」

かみ合わない。娘は人外のモノの扱いに慣れているのか物怖じもせずに逆に尋ねてきた。確かに澪の正体はその通りだ。相手の中まで見通す力が生まれつき備わっている人間は、何と云つたらうか。

「もしや、浄天眼か？」

「さすがにご存じなのね。おっしゃるとおり『浄天眼』、見前環よ」  
西方の守護者、広目天こうもくてんが持つという千里眼の別名。妖たちの間では、聖を聞き耳と呼ぶのと同様、生き物の心や過去を見抜く特殊な目の持ち主をそう呼んでいた。存在自体は知っていたが、実際に会うのは澪も初めてだ。

「聖くんの知り合いの山神やまがみさまはあなた？」

「なぜ、お主が聖を知っておる」

「さつき、ご挨拶してきたわ。同じ力の持ち主どうし、仲良くしましよつてね」

自分の力が他人に知れることを恐れている聖が、初めて会った人間からそれを指摘されたのだ。きっと聖は嫌がっただろうと、澪は



内心苦々しく思った。しかし、環が聖に何か害をなしたとか、そういうわけではないらしい。

「聖から、儂のを見たのじゃな。して、いったい儂に何用かの」  
飲み込みが早くて助かる、という意味のことを小声で言い、環はうなずく。

「私、聖くんが気に入ったんだけど、連れて帰るにはあなたが邪魔なのよね。だから、交渉しに来たのよ。彼はしっかりしてるように見えるけど、まだまだ弱いところがあるみたい。その要素の一つがあなた。そこが綻びれば、私にもチャンスがあると思う。……要するに、彼を引き止めるのはやめて、私に譲ってってことよ」

「……何じゃと？」

聖を自分の手元に置くために、直談判しに来た。

突拍子もない話に、澪は二の句が継げず沈黙した。いや、そもそも環の話すことはどうも自分本位で、相手に分かり易く説明するという部分が欠如しているために、内容を理解するのに若干の時間が必要だったこともある。

『ちゃんす』とは知らない言葉だが、澪は、自分が聖の弱みの一つであるという意味に解釈した。澪がいなくなれば、聖は環のことを聞くはずだと言いたいのだろう。

恐らく、聖がいなくなればまだ力が戻りきっていない自分はいずれ消える。他の誰でもない聖がそれを望むならば、澪は受け入れるつもりでいた。しかし、澪が邪魔だということからすれば、聖自身が環を拒み、この村にいることを選んだはずだ。聖のその意志がある限り、澪には環に従う理由はない。

「環とやら。儂はそのような話に耳を貸すつもりはないぞ。日があ  
るうちに疾く帰れ」

「帰らない。耳を貸すつもりはなくても聞いてもらうわ。……はつきり言うけど、私、あなたを排除しに来たの。あなたがいなくなれば、聖くんはきつとここから出て行く。たとえ存在自体を消せなくても、使い物にならなくすることならできるわ。私には見えるのよ、

あなたの中が」

焦点を合わせるように目を細め、環は歯を見せて笑った。

一方の漣はそれを他人事のように聞いていた。北風が林に吹き込む音が妙に気になる。聖がいるときなら、淋しい風もそれほど気にならないのだが。

「鹿だったころの画があるわ。猟師に後足を撃たれたのね。せつかくの白い毛並みが台無し。左の後足の毛皮が血に染まってるわ。痛かったでしょう。足を庇いながらやっとここまで来たけれど、歩けなくなつて飢えて死んだ」

看破した、という顔の環。

「いったいどんな気持ちだった？ 絶望？ 安堵？ 聞かせて欲しいものね」

鹿だったころ、今も一応鹿であることには変わりはないが、その当時のことはすでに遠くなっていた。鉄砲の音も傷の痛みも、死への恐怖も確かにあつたろうが、思い出すのは命を落としたという事実だけ。あとは、ここに神として祀られてからの出来事ばかりが鮮明だ。漣にとってはそちらの時間が長くなっているから、当然といえば当然ではある。

彼女はなおも読み取った記憶を並べ続けたが、漣がちつとも堪えていないことに気付くと腹立たしそうに「やり方を変えるわ」と咳いた。舌打ちでもせんばかりの表情で風に広がる髪の毛を耳に掛け、前にもまして鋭く漣へと目を注ぐ。

やがて、ニヤリともニタリとも表現しにくい嫌な笑いを顔に貼り付かせながら、環は言い放った。

「うまく隠してるけど、本当は聖くんに名前を呼ばれるたび嬉しくて仕方がないのよね」

しまった、と思ったときには遅かった。わずかながら目を見開いてしまい、漣はとつさに自分の足下を見た。心を落ち着かせてから改めて顔を上げると、高笑いでもしそうな勢いでこちらを見下ろす環の姿がある。

「分かり易すぎるのよ。あなたが女の子の顔をするのは、聖くんの前でだけだもの。手が触れたときにどのくらい顔が熱くなるのか、抱きしめられたときにどんなに泣いて喜んだか。……今、立場が違うことにどれくらい苦しんでるのかも、ね。私、代わりに言っただけでもいい？ 聖くんに教えてあげようかしら」

環は鬼の首でも取ったかのように蕩々とまくし立てる。完全に彼女の術中にあると知りながら、漣はやり過ぎそうと小声で呟いた。

「やめよ」

「あら。神様ともあるうお方が、さつきと比べてすごい動揺ね。死んだときの記憶をのぞかれるよりも嫌なのかしら。うまく見えなくなるから、もう少し落ち着いてくれない？」

「黙らぬか」

「……さつさと諦めなさいよ！」

突如、環は漣を高圧的に怒鳴りつけた。

「だいたい、化け物と人間が一緒に生きるなんて無理だと思わない？ 聡明なあなたならお分かりでしょうけど、いくら外見だけ聖くんと同じ年頃に化けたって、鹿は鹿なんだから！ 私はあなたと違ってヒトだから、彼と同じ時間で生きられる。能力者同士だから聞き耳の力についても分かってあげられる。きつと、彼を幸せにしてあげられるわ。……わかった？ あなたより私の方が聖くにふさわしいの。だから、さつさと消えて」

そんなことは、漣だって人に指摘されるまでもなく分かっている。分かった上で、どうすれば聖と共にいられるのかを探して足掻いているというのに。

いや。

そもそも、あの日、漣は消えるべきさだめだったのだ。人の営みには手を出さず、馴れ合わずに神として傍観するべきなのかもしれない。自分は、聖のそばにはいてはいけないのかもしれない。

「彼を、私にちょうだい」

自分を見失いかけていた漣は、環の言葉にはっとして顔を上げた。

長年の孤独で、多少心が弱くなっている。これでは駄目だ、気高い白鹿はくろくの誇りはどこにいったのだと、澪は自身を叱咤した。聖に依存している魂だから、彼の動向にいちいち気が揉めるのは仕方がないにしろ、仮にも一山を統べる神がたかが娘一人に屈せるわけがない。澪は環の瞳と再び向かい合った。

消えるはずの自分は、聖に出会って生まれ直した。澪の心に刻まれたその事實は澪自身がいちばん良く知っているものであって、環が見ているのは記憶という名の抜け殻だ。

もう千里眼の恐ろしさは感じず、環の目にはただ高慢な光があるだけだった。『使い物にならなくする』 相手の心を盗み見て弱みを並べ立て、ねちねちと攻めて崩していく。これが彼女のやり方いや、生き方だ。今まで、いったいどれほどの人間を壊してきたのだろうか。

「お車の口車には乗らん。……お主は一つ、勘違いしておるようじや。聖は僕の所有物ではない。聖がお主と共に行かぬことは聖自身が決めたのよ」

「でも、聖くんの頭にはあなたの」  
「青いな、浄天眼よ。言葉で人をどうにかしようと思うなら、推測でものを述べてはならぬぞ」

「……その余裕、気に入らないわ」  
苛立ちを隠せないらしく、環は皮の靴の尖ったつま先で強く地面を蹴る。凍りかけの土が鈍い音をたててえぐれた。

「力があるくせに使わないやつが、私は大嫌いな。聖くんはまだ若いから、これからどうにでもできる。でも、あなたみたいな偽善ぶったのは、ほんとうに大嫌い。……愛してる男をさらっていく人間から奪い返すくらいのことをしてみせたらどうなの。本当は、私なんか捻り潰せるくらいの神通力があるんでしょう？」

「奪い返すとは物騒じゃの。愛だの恋だの、そんなことではなく、恩人をそのような面倒に巻き込むのが分かかっていて僕の力は使えぬわ。……のう、環よ。お主は力を忌んだことはないのか。並外れた

異能を、嫌だと思ったことはないのか」

「ないわけじゃないわ。でも、この目のことを隠していたって自慢したって、周りから変な目で見られることには変わりないのよ。だったら、せつかく持って生まれたものを自分のために使うのは当然でしょう」

「ならば、聖はお主にはなびかぬよ。あやつは争いごとを好まぬし、聞き耳をこれ見よがしに使うことを、何より嫌っておる。お主のように他人を傷つけるための力は持つておらん」

「私、自分が思うようにしたいだけ。人を傷つけようとなんかしてないわ。勝手に被害者ぶつてればいいじゃない」

環は軽蔑と言つてもいいほどの眼差しで澪を睨め付ける。

ここにきてようやく、澪は環から感じ取った危険が何だったのか理解できた。彼女からは肉食獣の匂いがするのだ。自分が生き抜くためなら周りを傷つけることを厭わない、獣の匂い。血が香るといふわけではないが、澪にまだ残るわずかな野生の嗅覚は確かにかぎ当てていた。

聖は聞き耳の力からは逃れられないことを知り、重荷に感じながらも、受け入れて優しく生きようとするところだ。彼自身は多くを語りたがらないが、この土地へ落ち着くまでは力を外や内、他人や自分に向けたこともあったという。先ほどの言いぶりからすると環も悩んだ時期があったようだが、結論は聖と逆の形になったのだろう。誰も彼女を責められはしない。

だが、澪は同情し、黙つて害されるほどおとなしくもない。

「あなたのことを話に出された一瞬だけ、彼は感情をむき出しにしてた。なのに、大事にされるのが当然みたいな顔して、それも気に入らない。……何と言おうと、あなたがいるから聖くんはここを離れないのよ。それなら、未練も残らないほど完全にあなたを潰してしまうまで。もっと深いところまで『見て』ね」

「そう簡単にはいかぬよ」

澪がそう言うが早いか、風が強まり、ざわざわと木々が鳴り始め

る。山神の怒りに森が共鳴し始めているのだった。環の言うとおり、本調子ではない澗でも彼女を吹き飛ばすくらいは容易にできるが、恐らくそれでは解決にはならない。不本意ではあるが、多少はこらしめて山を追い返すか。

澗の赤く光る瞳に環が眉をひそめたその時、三人目の声が響いた。

「学校をサボってきました」

## もう一人の王 後編

「聖！」

「聖くん？」

「山が騒がしいですよ、漣さま。まだ回復が不十分なんでしょう？  
むやみに力を使わないでください」

広場に現れた聖は、不自然に硬い笑顔で漣と環を交互に見比べた。  
「お主、聞いていたのか」

「途中から、ですが」

うなずきながら何気なく上着の物入れを探った聖を見て、漣は耳に戒めがないことに気付いた。滅多なことでは耳栓を取らない彼が、今日はすでに『聞き耳』の力を開放している。だが、いったい何のために？

「……環さん。漣さまに何をするつもりだったんですか」

「別に？ ただ、あなたについて少し話してただけよ。……友好的にね」

彼の口元は左右に引かれており、笑みを浮かべたようには見えない。しかし、漣はいつもの聖らしくない冷やかな眼差しに違和感を覚えた。優しい聖が、いったいどうしたというのだろう。

「僕には、そうは見えなかつたんですが。ことによっては容赦はしません」

聖は明らかにけんか腰で、詰め寄るように土を踏んで環に近寄る。環も聖の様子がおかしいことを認めたのか、気圧されるように一歩退くと「な、何？ 朝とは別の人みたいじゃないのよ」と目を細めた。『浄天眼』を使う気だ。漣がそう思った刹那、聖は低い声で言い放った。

「環さんの心も、聞いてあげましょうか」

「何ですって」

「僕にだってあなたと同じことができる。……力を持つ人間なら、

わかるだろ」

澪が耳慣れない口調に聖を見ると、目を閉じて神経を集中させているところだった。

環の何かが、聖の逆鱗に触れたのだ。悪い予感がする。静かな怒りは、暴発したときに怖い。聖が怒っているところなど澪はこれまで見たことがなかった。彼は穏やかで怒りとは無縁だと、勝手に漠然と思い込んでいたのかもしれない。負の感情を持たない人間なんて、いるわけがないのに。

「優れた力を分かつともしないで怖がるなんて、みんななんてバカなのかしら。力を使って何が悪いの。私だって好きで見えてるわけじゃない！ 人に嫌われる前に、自分が嫌ってしまえばいいんだわ」

環の『声』。聖が、環の心を聞き取って彼女に叩き付けていた。

澪が聖を止める言葉を選んでいるうちに、彼はすでに走り出してしまっていた。

「それは、私の」

『目』で聖の中ばかりを見ようとしていた環は、彼が語り出した内容に気付くのが遅れた。

少し間をおいて環の顔色は目に見えて白くなり、余裕さえあつた表情が驚愕へと塗り替えられる。聖はその変化を感じているのかいないのか、なおも瞳を閉じたまま聞こえた声をそのまま音にしていく。

「力で手に入らないものがあるなんて認めたくない。本当に欲しいのは、胸の内を打ち明けられる友だちだけなのに。同じ力を持った聖くんと話したかっただけなのに」

「やめてよ！」

耳を両手で押さえ、頭を抱えるようにうずくまった環に向けて、聖は何かに取り憑かれたように言葉を浴びせていった。心を引きずり出された恰好の環。あれだけ高かった鼻は聖の反撃でへし折られて見る影もなく、地面に向けられた口からは悲鳴のような声が漏れ



る。いくら特別な力があつたとしても彼女も人間なのだ、脆いものだ、漣は憐れみすら感じていた。

脆さは、聖も同様だった。彼にとつてその耳は諸刃の剣になり得る。環は自分の中に信じる論理があり、それに納得した上で攻撃的に生きているが、聖は違う。人を傷つけた分、きつと後から自身に反動が返ってくるはずだ。

「苦勞もしないで仲間を得た山神はずるい、許せない。……誰か、私のそばにも来て！ どうしてみんな、私から離れていくの？」

「聖、やめよ！」

「……漣、さま」

漣の叱責で、聖はようやく我に返つたようだった。

「もう充分じゃろう。耳を塞げ」

聖はゆるゆると物入れに手をつ突っ込むと、いつもの耳栓を取り出して力を封じた。そして、そのまま立ちつくしている。

今度は環の方だ。しゃがみ込んで身動きすらない環に、漣は手を貸す。漣の手を伝つてやっと立ち上がった環の上着の裾は、砂まみれになってしまっていた。埃を払つてやりながら「まったく。お主も、しっかりせぬか」と喝を入れると、環は呻いた。

「ただの坊やだと思つて、油断した」

「力を持つ者のことは、お主がいちばん良く知っておるうに」

「ええ。……ええ、そうかもね」

すっかり勢いが削がれ、自嘲じみた弱々しい笑みで環は答える。気性の激しさは感じられず、他人を侮つたような様子も見えない。

「……この『目』で、私を変人扱ひした奴らに仕返ししたわ、今みたいに。やり返したただけじゃない。どこが悪かったの？」

環は漣に寄りかかるのをやめて、真顔で聖に尋ねた。一方の聖は突っ立つたままで、無表情に切り出す。

「ますます、居場所がなくなつてしまふ。……仕返ししたつて、僕らのような人間が住みよくなるわけじゃない。力を認めてもらえるのがいちばん嬉しいけど、今の僕は人に紛れて暮らすことができる

だけでいい。きれいごとに聞こえるでしょうが、実際そうなんだ。  
一人、二人分かってくれる人がいれば　今はまだそれだけでいい」  
「でも、私とあなたは違う。環境に恵まれてるから、そんなことが  
言えるんだわ」

「僕はただ待っているだけで居場所を手に入れてしまったから、その点では環さんにずるいといわれても仕方がないかもしれない。でも、同じですよ。僕も人の役に立ちたいとか理由をつけて、結局は他人の心を盗み聞きしてる。環さんと同じことをしてます。環さんと別れた後にそれに気付いて、どうしても話がしたいと思ってここに来たんです」

皆が聖に手を差し伸べるのは、彼の中に何かしら惹かれるものを見出すからで、聖はただ指をくわえて助けを待っていただけではないと、澪は内心思ったが黙っていた。話しているうちに言葉も徐々に穏やかさと優しさを増し、ようやく本来の聖らしさが戻ってきた。それにしても、聞こえてしまうことを『盗み聞き』と表現するのは良くない傾向だった。こんなとき、聖は自分を必要以上に否定している。

「やりすぎてしまいましたね。本当にごめんなさい」

終わりに、聖は環に向かって深々と頭を下げた。環は大きく息を吐き出し、視線を聖からずらす。

「お互い様よ。でも、私は謝れない。自分のしてることがよく分かってなくなっけきちゃったから。そういうこと、もっと話してみたかったわ」

「僕もです」

「もうそんな気もなかるうが、儂らを力づくでどうにかするといふのでない限り、話し相手にはなるぞ。……春が良いかもしれぬ、桜が綺麗じゃ。また来るがよい」

「呆れたお人好しね。聖くんも、澪さま……も」

毒気を抜かれたのか、環は目を丸くしてそれきり黙り込み、しばし何ごとかを考えていた。やがて二人に背を向けると、環は肩越し

にひらひらと手を振った。

「今日は帰るわ。……諦めたわけじゃない。あなたたちのことは口外しないから安心して。まわりにバレたら、いつかまた聖くんを迎えに来るときに面倒なものね」

環は負け惜しみか捨て台詞とも取れる言葉を残して、山を下っていった。

彼女の姿が見えなくなると、聖はふらふらと大杉に近寄り、無言でその根に腰を下ろした。澪もそれに倣って隣に腰掛けたが、聖はふつとこちらに笑いかけたきり何も口にせず、膝を抱いて小さくなつた。

ずいぶん経ち、聖の身体が冷え切るのを心配し始めた澪が久々に聞いたのは、「僕、最低ですね」の一言だった。澪は、苦笑いでそれに答える。

「そう、責めることもなかるう。あの状況なら、お主がせんでも僕がどうかしていたはずじゃ」

「……ありがとうございます」

視線は宙を漂い、澪の方を見ようとしめない。組んだ両腕に顔をうずめているので表情も分からない。そのまま、聖はくぐもつた声で訥々と語り出した。

「澪さまが『環さんが勘違いしてる』っておっしゃったあたりから聞いていたんです。様子を見ていたら、澪さまがひどい目に合いそうだったので、ついカツとして慣れないことを。……環さんに向かって叫びながら、昔の僕を思い出していました。あの人の心の中は、少し前の僕に限りなく近かった。僕はそれが分かってもやめなかつたんです。怒っていて見境がつかなかったとは言っても、聞き耳をあんな風に使うなんて、最低です」

まるで世界の終わりが来たかのような形相の聖に、澪は「そのよくな顔をするな」とこぼした。

「僕はありがたく思っておるから、反省はそれくらいしておくがよい」

聖に深く考え込ませると、どんどん過去に立ち戻って余計に消耗するだけだ。彼には、『考えずに歩く』ことも今は大切かもしれない。

彼の思考を止めるには、どうしたらいいだろうか。ちよつと頭を捻ったのち、澗は静かに立ち上がると聖の目の前に正座した。驚いてわずかに眉を上げた聖の顔を、ためらいがちに両手で挟む。思った通り冷たい頬だったが、きっと彼の心はさらに寒々しく底冷えしているだろう。

「澗さま？」

「こんなに、冷えて」

不思議そうに首を傾げ、大きいまばたきを二、三度繰り返すと、聖の目がやつと澗を捉えた。

いつだったか、人間どうしは触れ合うと安らぐのだと聞いたような気がする。それは動物も同じだ。人間がこついつときどうするのか、詳しいやり方はよく分からないので自己流だが、多少なりとも効果が上がればそれでいい。

澗は両手をそのままに、やはり冷え切った聖の額と自分の額とをそつと合わせる。触れた場所から熱がどんどん奪われていくのが分かった。

「お主は、心休まる地を求めて、この村へ来たのであるう？」

「……ええ、そうです」

「それにしても働き過ぎじゃ。……年越しは切り替えるいいきっかけになるうよ。儂が許すから、あとわずかじゃが、今年のうちはもう休め。来年から励むがよい」

聖の波立った胸の内をできるだけ和らげようと、ゆっくりと噛んで含めるように言い聞かせる。何かと気ぜわしい年末年始、時の流れに乗せられてしまえば嫌でも前へと進まなくてはならないのだ。これで歩みを前向きに修正する気になつてくれればいいのだがと、澗は言い終えて聖を見つめた。

やがて、聖はしっかりと抱え込んでいた膝を解放すると、両足を

そろそろと伸ばした。澪は両手と額を離し、元のように聖の隣へと戻る。聖は、今度は自分の両手を頬に当て、「だいぶ温まりました」と微笑んだ。照れたように何度も頬をこする。

「今度あの人に会うときには、笑って話せるようにしたいです。もっと、優しく」

「うむ。次から、な。次から、精一杯気をつければよからう」

「はい、次から。……これで、反省終了です」

区切るように強く言つと、聖は頬を軽く叩いて手を下ろした。どうやら、心の整理がついたらしい。次に聖が澪へと向き直ったとき、彼は嬉しそうに別の話題を語り出していた。

「そうそう、もうすぐ西洋のお祭りがあるんですよ。『クリスマス』っていうんです。その日の夜は、枕元に靴下を置いて」

『くりすます』とやらについて熱弁を振るい始めた聖を、澪は晴れやかな気持ちで見守る。風の音は、もう聞こえなくなっていた。

## 年の賜物

一月一日、朝。

寝ぼけまなこでカーテンを開けると、窓から見えるアパートの裏手の林は真っ白に染まっていた。もともといくらか積雪はあったものの、年末、しばらくは暖かい陽射しが降り注ぐ日が続いて灰色がかった根雪に変わりつつあった。その上から、粉砂糖を振りかけた、なんて言い回しでは物足りないくらい　例えるなら、二十五メートルプールいっぱい粉砂糖をぶちまけたような　それでも足りないくらいの量の雪が、新たに降っていた。

聖は自分の想像に奥歯をきませながら部屋を出ると、台所を見回す。男二人の住処に豪勢なおせち料理があるわけがない。幸いにも昨日食べ損ねた年越しそばが残っていたので、あまりにひどい組み合わせだとは思いつつも餅を焼いてそばにトッピングし、朝食にした。もはや、メインがそばなのか餅なのか分からない。

嘉章は年末恒例の格闘技中継を見終わった時点で力尽き、元日は寝過ごすとあらかじめ宣言していた。ご飯のお供にとテレビを付けると、全国の新年の風景が生中継されている。初詣客が波のように神社を訪れる様子に、聖は急いでそばをかき込むと、前々から準備していたディパックを背負って家を出た。

粉雪の上は予想以上に踏ん張りがきかない。ふわふわの雪を掻き分けながら山道を進むのにも疲れてきたころ、ようやく溲のいる祠が見えた。息を弾ませながら、最後の一頑張りど勢いをつけて坂道を登り切ると、それに合わせたように溲が姿を現す。もしかしたら自分を待っていてくれたのかもしれない。

溲が雪を寄せたのか、祠と大杉の周りは道が確保されて歩きやす

い。聖は澗の元へと駆け寄り、「あけましておめでとうございます！」と一気に言い切った。

「おう、聖」

澗は頷くと「年始回りとは律儀じゃのう」と言い、からからと笑った。相変わらずの白い着物姿が、今日は雪からの光でさらに白く輝いて見える。眩しさに目を細めつつ、聖は背負ったデイパックからビニール袋を取り出して澗に示した。嘉章が買い求めたのだが、購入以来袋に入れっぱなしで放っておかれていたので、無断でこっそり借りてきたのだった。

「少しはお正月っぽく飾るのもいいんじゃないかと思って、鏡餅と小さい門松を持ってきたんです。あとは熱いお茶とおやつ、ミカンをいくつか差し入れに」

「飾りか。僕はこだわらぬが、確かに気分は出るな。……うむ。面白い者に会えるかもしれぬ。ほれ、この辺にでも置いてくれるか」

澗が指さしたのは、自分の寢床である祠ではなく、その隣に立つ大杉の根本だった。念のため、祠に供えなくていいのか、と聖が尋ねると、澗は手でひさしを作りながら杉の梢を見上げた。

「高いところが好きじゃからのう。きつとここから来る」

どうも、餅と門松は澗自身ではなく他の誰かへのお供えものらしい。腑に落ちないながらも、聖は言われたとおりの場所に雪山を造り始めた。積もった雪の一番上は降ったばかりの粉雪だが、その下は湿った締めまり雪で山をこしらえるにはもってこいの状態だ。小山の中をくり抜いて穴を開けると、澗が少しだけはいだ様子で歩み寄ってきた。

「かまくらじゃな。ずいぶん可愛らしいのう」

「小さいころ、冬になるとよく作っていたんですよ」

昔は冬休みには祖父の家に行き、やはり正月に合わせて訪れる従兄弟たちと雪遊びをしたものだった。その中にはもちろん嘉章もいて、彼がリーダーとなって作る大きなかまくらは聖の楽しみの一つになっていた。そう言えば最近、祖父母や親戚たちにはあまり会っ

ていない。年始のドタバタが終わったなら、嘉章を誘って行ってみようか。

「今は、やらぬのか？」

心なしが弾んだ声。この神様はこう見えて意外と子供っぽいところがあるから、もしかしたら自分もかまくらを作りたいか、中に入りたいたいのかもしれない。澗がどうにか自分で雪を除けるとしても、これだけ降るのなら聖も雪かきの道具は持って来ないと登山道を見失うことになりそうだ。それなら、そのついでに人が入れるサイズのものを作ればいいだろう。

「そうですね、じゃああとで大きいのを作りましょうか」

聖はそんなことを言いながら、かまくらの入り口に門松、中に餅を置く。お供えに関わる礼儀はさっぱり知らないのだが、門松は『家』の外に飾るものだろうと勝手に考えた末、小さな『家』を作ってみたのだった。

「中に火でも灯せば綺麗じゃろうな」

無邪気なものだ。澗はそう言うと、髪の毛が雪の上に広がるのにも構わずに、地面に頬を擦るようにかまくらをのぞき込む。

今日は新雪が比較対象なので、いつもは白く見える澗の肌ですら紅く色づいて見える。その着物も、まさに雪のように白。澗の本来の姿は、白というよりは銀に光る、美しい毛色の鹿だった。ヒトに化けるのがどういうメカニズムで行われているのかは分からないが、澗の白い着物は、鹿の姿のときの毛皮の色からきているのだと思う。彼女自身はおそらく寒さを感じていないのだろうが、真冬に薄手の着物のみという格好は寒々しい。

そのうち袖が短くなってしまった綿入れでも持ってこようかと聖が思索していると、澗はようやくやく飽きたのか顔を上げる。

「では、菓子でもいただきながら気長に待つとしよう」

あまりにぶしつけな催促に、聖は苦笑いする。結局は誰を待つのか分からないままだが、澗とのんびり元日を楽しむのもいいだろう。聖は持ってきた耐水シートを雪の上に敷くと、魔法瓶と差し入れの



袋を取り出して腰掛ける。漣は当然のように隣に座り、目を輝かせながら聖の一挙手一投足を見守っていた。

「冷たっ」

漣に二杯目のお茶を注ごうとしたとき、二人がもたれていた杉の幹が突然揺れ出した。枝に積もった雪がはらはらと落ちてくる。それはすぐに、大きな音を立てながら雪の滝のごとく降り注いできた。聖は慌てて魔法瓶にフタをするとその場に置き、とっさに立ち上がった。その目の前に雪の塊とともに何かがひらりと飛び降りてくる。地面からもうもうと巻き上がる雪煙の中で、何か大きいモノが動いていた。

『お！ 久しいな、鹿の！』

姿を確認するよりも早く、威勢のいい男の声が聖の耳に響き渡った。聖が目丸くしながら声の主を確認すると、大杉から飛び降りてきたのはごく普通の青年だった。いや、いくら見た目が人間でも木の上から登場するなんて明らかに普通ではないし、聖の『聞き耳』が声を捉えたということは人の姿をした『人外の何か』なのだろうが。

詳しくは分からないが、旅装という印象。梅鼠つめねずの動きやすそうな和装に脚絆きゃはん、手甲、それに足袋と草履という出で立ちの青年はぴよんぴよんと軽い足取りで漣の前まで来ると、がははは、と豪快に笑った。

『おうおう、無事だったのかい。どうしてんだか、ちっと心配してたんだぜ』

「しばらくじゃな、八雲どの。……無沙汰をしておったが、こうして元気である」

『とんと見ないと思っていれば、今年は飾りも餅もあるからよ。立ち寄ってみたら、男連れたあな』

「からかうでない」

やくもと呼ばれた青年は親しげに漣と言葉を交わし続ける。漣が

呼び出そうとしていたのは、彼で間違いないだろう。手持ちぶさたになった聖が居心地の悪さを感じていると、気付いた漣が聖を話の輪に呼んだ。

「聖、紹介するぞ。僕の古い知り合い、八雲どのだ」

八雲は太い眉毛をぴくりと上げて、人懐っこい笑顔で聖のほうを向いた。まるで墨のように見事な黒さの髪は肩で切りそろえられていて、彼の動きに合わせて揺れる。それが、彼の陽気さによく似合っていた。

『そうそう。……気になってたんだ。この坊主はいつたい？』

「人間です」

『人間です、とは面白い』

何かに気付いたのか、八雲はポンと手を打った。

『ああ！ そういや、おいらはうつかり姿を消さずに来ちまったが、白鹿もそうだったてこたあ、あんちゃんも只のヒトじゃあねえってことかい。白鹿とはどういう繋がりだ？』

「名前は聖といます。……僕は『聞き耳』です。漣さまとは昨年の春からの知り合いになります」

『ほう、聞き耳』

それを聞いた途端、八雲の目がきらきらし出した。八雲からは、好奇心旺盛な少年のようなしなやかさを感じる。漣をはじめとして、聖が出会ってきた神様という見た目目は若いのに老成している。悪く言えば年寄り臭い印象であることが多かったが、八雲ははつらつとした青年に見えた。

神にもいろいろあるものだと思えば、向こうもこちらの様子をつかがっている。漣が『聞き耳』ではなくて良かったと、聖は曖昧に笑ってごまかした。

「この目で見るのは初めてだ！ 見たところ、なんの変哲もない可愛い小僧っ子だがなあ。耳がでかいとか、もっと分かり易いもんだと思ってたぜ」

そんな聞き耳は嫌だ。

「見た目は普通の人間と一緒にですよ。耳がいいだけです。ええつと、八雲さまは、いったいどういう」

気を取り直して、今度は聖から尋ねてみる。何者かは分からないが、漣と対等以上に口をきいているということは相応の格のあやかしだろう。そう思っただけ敬称を付けると、八雲は照れくさそうに鼻の下を擦った。

「八雲さま、なあ。……おいらはなあ、どう言ったらわかりやすいかねえ。まあ、なんだ、新年を告げる使いつ走りと思ってもらって構わんよ。みんなからは『年取りさん』って呼ばれてる」

聖に気を使ったのか、八雲の声はいつの間にか頭に直接流れ込んでくるような音から肉声へと切り替わっている。しかし、新年の神様とは、いったいどういうものなのだろう。ピンとこない聖が考え込んでいると、漣が助け船を出してくれた。

「八雲どのは年神としがみじゃよ。毎年正月になると密やかに家々を回っておられる」

「飾りのあるところなら、どこへでもな。家内安全無病息災、五穀豊穰豊作祈願。わりと何でもこなす働き者さ」

八雲はミニ門松を指して笑った。聖はその安っぽいお飾りをまじまじと見つめた。こんなチープなものでも門松さえあれば来てくれるとはまめな神様だ。

しかし逆に言えば、この程度の飾り付けすらしないような世の中になると、八雲の仕事は無くなってしまふのだろう。果たして正月を誰も祝わなくなるときが来るのかはさておき、事実、嘉章や聖だつて準備したはいいが飾ろうとはしなかった。漣のところを持って行こうと思わなかったら、お飾りが入った袋ごとゴミ箱行きだったに違いない。そう考えれば、いくら小さなものでも八雲にとってはありがたいのかもしれない。

「この頃はすす払いもしなくなってきたし、おいらたちや肩身が狭い世の中になっていくわなあ」

八雲も聖に近いことを考えているらしく、大げさに嘆いた。神や

あやかしにだつて悩み事はあるのだらう。明るく振る舞いながらも、言葉の端には彼には似合わない諦めのような匂いが漂う。たまらず、聖は八雲に声をかけた。

「僕は、八雲さまのことをずっと覚えていますよ。ご縁があつてお会いできたんだし、これでさよならなんて寂しいじゃないですか」「本当かい？」

「ええ。皆さんから聞いたことを忘れないのが『聞き耳』の役目かなど、最近思っているんです」

「……聖は、いいやつだなあ」

感無量といった面持ちで、八雲が聖の頭をぐしゃぐしゃとかき回した。それがおかしかったのか、こらえきれずに吹き出した溲は、やがて真顔で八雲に向かうと「肩身が狭い、とは言うが」と静かに切り出した。

「そうかもしれないが、そうでもないかもしれない。……せつかくここまで繋いできた魂。僕は、気付いてくれる者がいる限り足掻いてゆこうと思っておるよ。口では弱気なことを言っておつても、お主もそうであろう？」

どことなく誇らしげに、溲は決意を表した。

八雲は聖と溲を見比べて、穏やかに笑った。その顔は、先ほどまでに受けていた感じとは明らかに違う大人のもの。ああ、やはりこの青年は年経た神なのだと、聖は納得することができた。人知れず年輪を刻みながら確かに存在し、しっかりと息づいてきた年神。

が、大人びた眼差しはそのひとときだけだった。八雲はすぐに相好を崩すと、おどけたように溲を覗き込んだ。

「捨てられる神ありや、拾われる神もあるって？ 確かに、聖みたいなヒトが付いてりやあいいか。話し相手にやもってこいだ」

話に一区切り付いたところで、八雲が「さて、と」と、大きく伸びをした。足を曲げ伸ばししながら二人を見比べ、深呼吸する。

「そんじゃ、おいらはそろそろ次のところに行くわ。まだまだ、おいらを待ってくれてるヒトもいるみてえだしな」

「それでは、また来年じゃな」

「おうよ。……聖がちょっと面白かったから、特別にお年玉をやるう。その餅、雑煮にして食ってみな。おいらの魂、お裾分けだ。聞き耳も、もちろん白鹿も達者でな。焼け石に水かもしれないが、ちつたああなたの身になるかもな」

八雲は、ミニかまくらを親指で指差した。

「ありがたい。恩に着るぞ」

「なんのなんの。次も、お互い元気で会いてえし、おいらもそれくらいしないとな」

八雲は、じゃあな、と言い残すと、両足を揃えて飛び跳ねた。背中に羽があるかのように軽々と大杉の枝へと乗っかり、枝から枝へと飛び移りながらつぺんを目指す。またたく間に、その姿は高く澄んだ空へと溶けていった。

見上げたままその場に立ち尽くしていた聖は、澗の「そうじゃ、聖」という呼びかけで地上に戻ってきた。思い詰めたように、何かを迷っているように、眉を寄せた澗が神妙な顔つきでこちらを見つめている。何か、言いたいことがあるのだろうか。

「どうか、しましたか？」

「いや。……その 今年もよろしくな」

聖が首を傾げて尋ね返すと、照れ笑いを浮かべ、澗はぺこりと頭を下げた。考えてみれば、さっき八雲に言ったことの方が恥ずかしいような気もするけれど、それも澗らしいと思う。聖も心ばかりの挨拶でそれに答える。

「はい、もちろん。よろしくお願ひします、こちらこそ。……あ、あけましておめでとうは、ハッピーニューイヤーっていうんですよ」

去年はいろいろなことがあったが、澗との出会いはおそらくいちばん大きな出来事だったと、聖は振り返る。今年も彼女に助けられることがあるだろう。彼女を支えることも、もしかしたらあるのかもしれない。

澗は難しい顔で、唱えるように何度もカタカナ言葉に挑戦している。お茶会の続きをするべく、聖は再び魔法瓶を手に取った。

澗と共にお年玉を食べた聖が、今年の冬は風邪をこじらせなかったことに気付いたのは、春を迎えてからのことだった。

## 桜時の風 前編

「いよいよ来週から小・中学校旧校舎の解体工事が始まります。今日は、五時間目の最後を少し使ってみんなで旧校舎を見て回りますから、最後のお別れをしてください」

担任の言葉に、聖は窓から外を眺めた。解け残った雪の小山に埋まるかのように、木造二階建ての小さな建物がちんまりと建っている。老朽化のために取り壊されることになった旧校舎は、数年前まで小学校と中学校共用の校舎として使われていたそうだ。

残念ながら転校してきたときにはすでに立ち入り禁止にされていたために、聖は一度もそこで学ぶことはなかったが、レトロでひなびた雰囲気の外観は嫌いではなかった。雪が溶け出してからはトラックが出入りしたり、作業用の足場が運ばれてきたりしていたから、そろそろ工事が始まるんだとは思っていたけれど。

その日の昼休みは、なんとなくその話になった。実際にあの建物で小学校時代を過ごしたクラスメイトたちからは、壁に落書きしたけど見つからずに済んでいる、どこそこの教室のガラスを割って怒られた、腐りかけた床を踏み抜いた　そんな思い出が溢れるように湧き出してくる。

「もう、きつちりは覚えてないけどさ。旧校舎、七不思議があったんだ」

誠太郎が言い出したのは、聖の守備範囲のど真ん中の話だった。

「どんなの？」

「まず、ほら、ここから見える桜。ソメイヨシノらしいんだけどさ、『一番桜』って言われてて、毎年咲く時期がすごく早いんだ。……今年もそろそろ咲くんじゃないか？」

あとは何だったかな、と誠太郎は他の友達とやり取りしながら思いついて出そうとしている。

聖は外を見る。旧校舎の脇に一本だけ立っている大きな桜が、件

の木らしい。ここから見る限り枝は寂し気で、どう見ても花が咲き  
そんな気配はない。桜前線はまだ、南に上陸したばかりのはずだ。  
そもそもこの辺の春は遅く、去年の桜の見頃はゴールデンウィーク  
の時期だった。ソメイヨシノが今の時期に咲くのなら、確かに狂い  
咲きと言っていいくらいに早い。

誠太郎は指を折りながら、一つ一つ数えていった。

「四時四十四分に階段が一段増えるとか、廊下の大鏡に和服の女の  
子が映るとかさ。良くある話だけど、誰もいない音楽室のピアノが  
勝手に鳴り出すとか。あと三つは思い出せないなあ。……小学校の  
ときなんかには、いつか七つ全部検証しようっていう話もあったよ  
な？」

同意を求められた生徒たちが、楽しげに頷く。

聖のような転校生はこういふとき話に入れなくて、少し寂しい。  
そういうえば、転校前の学校にも七不思議があったな、と聖は思いを  
巡らせた。大部分は誰かが勝手に作り上げた他愛のない話だったけ  
れど、一つか二つは実際に人外のモノが絡んでいたっけ。

やがて、誠太郎はみんなの意見を代弁するように「それも、もう  
出来なくなっちゃうのか」としんみり言った。聖は自分のことしか  
考えていなかったが、友人達はみな、あの小さな校舎で遊んだり勉  
強したりした記憶がまだ新しいはずだ。申し訳なく感じ、聖は顔を  
赤らめながら言う。

「セータ達は、あそこに素敵な思い出がいっぱいあるんだもんね」

「まあな。……聖、さらつと言っちなあ」

なぜか誠太郎が照れくさそうに頭をかいて、周りのみんながどっ  
と笑った。

午後、全校生徒が旧校舎の見納めをする時間がやってきた。列に  
なってそろそろと新しい校舎から出たところで鳴き声に顔を上げる  
と、自分たちと同様に編隊を組んだ白鳥の群れが飛び去っていくと



ころだった。薄曇りの空にひらめくたくさんの白い翼が、星のようにまたたいて見える。

一番桜の横を通り、敷地内の外れにある旧校舎の昇降口へと向かう。聖が見たところでは、桜の蕾はやはりまだ綻ぶ様子もなく、茶色がかつた萌黄色。固そうな蕾に、本当に早咲きなのかと怪訝に思いつつ、聖は初めて旧校舎に足を踏み入れた。

当たり前だけれど、使われていない建物の中はひんやりとした空気が淀んでいる。ずいぶんと渋いたたずまいになった床板は、聖が一步踏み出すたびにきしんだ音を立てた。

廊下の突き当たりには、『年卒業生一同寄贈』と書かれた大きな鏡が取り付けられていた。これが、七不思議に出てきた大鏡だろうか。覗き込むと、自分の背後に伸びる長い廊下が映し出されて不気味といえば不気味だ。今はみんなもいるから平気だけれど、薄暗い夕暮れ時に一人で見たくはない雰囲気だ。

鏡の前でそんなことを考えていると、突然、聖の頭の中に声が響いた。

『いっぱい子供がいる！』

幼い女の子の、無邪気な声だった。聖がぎよつとして再び鏡を見ても、クラスの友人達以外は誰も映ってはいない。振り向いてみても、やはり同じ風景だ。

『誰か、気付いてくれるかな？』

なおも、声は聞こえる。

と、鏡の中の聖の後ろに、赤い小さな人影が現れた。驚きで叫びそうになったのを何とか飲み込んで、なるべく自然に鏡を眺めて様子をつかがうと、着物姿の少女が教室の一つから顔を出して首を傾げている。どうやらこれが、七不思議の一つの正体らしかった。

誰なんだろう、この子。

そう思っただけで鏡を見ると、女の子とばっちり目が合ってしまった。彼女はたちまちぱつと明るい笑顔になり、嬉しそうに聖の足下へと駆け寄ってくる。はつとして振り向くと、そこには正に、犬が

しつぽを振りながらすり寄ってくるような仕草で向かってくる女の子がいた。目が合ったから 聖が認めたから、実体を得たのか。聖の制服の裾を引っ張って、彼女は弾んだ声で呼びかけた。

『ねえねえ、もしかしたら、お兄ちゃんはあたしが分かるの?』

他の誰も少女に気付いてはおらず、聖にしか見えていないようだった。観念した聖は用心深く周りを見回してから、小声で答える。話すのを見つかるものなら、たちまち変な奴と認定されてしまうだろう。

「……声が、聞こえるよ」

『本当? じゃあ、一緒に遊ぼうよ』

「いや、今はね」

『ちよつとでいいから遊ぼう』

「お兄ちゃんは、今勉強の時間で」

「大音くーん。あなた、初めて見るだろうから珍しいのは分かるけど、もう出る時間ですよ」

説得に手間取る聖の背中に、担任の声が飛んできた。そろそろ、五時限目が終わる。終わったら、旧校舎は再び施錠されて中へ入れなくなるだろう。

「はい! 今行きます!」

『もう行っちゃおうの……?』

今にも泣き出しそうな細かい声に、聖は頭を抱えた。いくら人ではないものだと分かってはいても、見たところ四、五歳くらいの女の子。妹がいる聖は、小さな女の子にはめっぽう弱い。

結局、泣き落として屈した聖は白旗を上げた。

「今日、またあとで来るよ。お兄ちゃんは中には入れないけど、窓の外から話しかけるから待ってて」

自分で自分のことをお兄さんというのも、何とも間抜けなようなくすぐったいような気分だ。そういえば冬休み以来、しばらく妹とも会っていない。いったいどうしているだろう。後で、電話でもかけてみようか。

聖がそう言うと、彼女は花が咲くように明るく表情を変えた。やったあ、という声と共に、聖の周りをぴよんぴよんと飛びはねる。体中でひとしきり喜びを表すと、女の子は息を切らせて聖を見上げた。

『約束ね！ あたし、うるみっていうの。待ってるから来てね、お兄ちゃん』

お兄ちゃんという言葉にも弱い自分と、嬉しそうなうるみの声に聖は苦笑いする。どうにもならないこの性格を多少は呪いながらも、それでも聖は悪い気はしなかった。

立ち入り禁止の札がかけられ、ロープが張られている旧校舎。

放課後、先生に見つかつたら何を言われるか分らないので、聖はその裏手に回っていた。こちら側からなら現校舎から見えない。こっそりロープを跨ぎ、外から覗き込むと、さつき女の子と会話した廊下の鏡が窓越しに見えるが、彼女の姿はない。聖は耳栓を外し、ノックするように窓を軽く叩いた。

「うるみちゃん。さつきのお兄ちゃんが、来たよ」

『来てくれたんだあ』

窓ガラスが揺れる音がして、古くなった窓枠がぎしぎしと音を立てる。校舎の中では、うるみが背伸びをしてその窓枠に掴まっている。顔いっぱい笑みを浮かべている。その一生懸命な様子が可愛らしくて、立ち入り禁止をぶつちぎったり、校内で耳を使ったりと緊張気味だった聖の心も少し緩んだ。

「約束したもんね。……ねえ、君はいつたい何？」

『あたしは、うるみだよ？』

「ええと、名前じゃなくて」

物騒な話だけれど、実は彼女が昔自殺した生徒の自縛霊だとか、校舎の下に眠る誰かだとか、はたまた何かの精だとか　そういう

ことを聞いたかったのだが、うるみには通じなかった。どうも、他の神様や人外のモノのように若く化けているだけというのとは違い、彼女は見た目通りの精神年齢と知識しか持ち合わせていないらしい。

聖は、質問を変えることにした。

「うるみちゃん、ここに住んでるの？」

『うるみはね、ついてるの』

うるみはにつこりと笑って頷いた。のどかな口調で屈託無く言うてはいるが、可愛らしく見えても相手は七不思議だ。恐らく字面は『憑いてる』だろう。学校に憑く子供の神様、それが彼女なのだろうか。

『このごろ、誰も来てくれなくなっちゃって寂しかったんだあ。ねえ、どうしてみんななくなっちゃったんだろ？』

旧校舎が立ち入り禁止になっていることも、来週からは解体工事が入ることも、うるみは知らない。そのままで工事を迎え、建物が無くなってしまったら、ここに憑いている彼女はいったいどうなってしまうのか、聖は想像できなかった。旧校舎と運命を共にするしかないというなら話は別だが、もしも、うるみが外でも生きていけるモノであるならば、今ならまだ逃げ出せるのだ。言いづらけれど、間に合ううちに教えてあげた方がいい。

ひとりぼっちは悲しい、とうるみは瞳を伏せる。聖は、重い口を開いた。

「ここが学校だったっていうのは、うるみちゃんも知ってるよね？」

『うん』

「でも、今この校舎は使ってなくて、お兄ちゃんたちは向こうの建物で勉強してるんだ」

聖は、旧校舎の向こう、現校舎の方を指差した。何を言おうとしているのか分からないのか、うるみは聖の指を見上げて「ふうん」と頷いた。ためらうと告げられなくなってしまうそうで、聖はすぐに本題に切り込む。

「それでね、うるみちゃんの住んでるこの校舎は古くて危ないから

つて、壊すことになったんだ」

『うそ！』

「嘘じゃないよ」

『ここ、なくなっちゃうの？ そんなのやだ！』

やだやだ、と駄々をこねるようなうみの鼻声が聞こえる。正直言って、聖も伝えながら一緒に泣きたい気分だったけれど、心を鬼にして平静を保つ。真実を伝えて、彼女を救いたい。お兄ちゃんらしいところを見せなければ。

今日は金曜日。週末をはさんで、来週初めから工事が始まるはずだ。

「ちゃんと、聞いて。……残念だけど、本当なんだ。あと三日くらいしたら壊して、跡には何にも無くなっちゃうんだよ。だからお兄ちゃんは、もしできるなら早くここから逃げて欲しいと思って、うみちゃんに会いに来たんだ」

『やだ……』

「僕にできることなら手伝うから、ね？ ここを出よう。……見ていられないから」

子供たちと引き離されて、さらに投げどころまで無くし、その上、今となつてはその存在までも危うい。彼女がこれ以上悲しい目に遭うことなど、とうてい見過ごせるものではなかった。

黙り込んでしまったうみが気掛かりで聖がガラスをノックすると、彼女はゆっくりと顔を上げた。濡れた頬を着物の袖でこしこしと拭う。赤い着物に散らされているのは、薄桃色の花の図柄だった。長らくそうしていたが、やがて半べそで呟く。

『うるみ、ここにいて、ずっと幸せだったんだよ。友だちが笑う声聞いたり、泣くのを見てそーっとなぐさめたり、ときどき遊んでもらったり、すごく楽しかったんだ』

「僕、役に立てなくてごめん。でも」

『うっん。……本当は、分かったの。もう誰も来ないなんていやだから、待ってるふりをしてたの』

拙い言葉が、かえって聖の心に突き刺さった。

この校舎が使われなくなつてから、二年以上が経っているはずだ。その間、うるみは不安を押し込め、自分を騙しながら生徒たちが戻つてくるのをひたすら待ち続けていた。なのに、実際にここで授業を受けていたクラスメイトたちでさえ、七不思議をちゃんと思い出すことは出来なかった。生徒の記憶から消えつつあるだなんて、彼女が聞いたらどう思うだろう。

窓越しに聖のやるせない面持ちを眺め、うるみは励ますように言った。

『お兄ちゃんは悪くない。きっと、誰も悪くないよ。だから、悲しくならないで。……あのね、ちゃんと考えるから、うるみは大丈夫だよ』

うるみは、すっかりしょげてしまった聖に両手を伸ばす。もちろん、窓の向こうだからその手は聖に届かないが、彼女の気持ちはしつかりと受け取った。なりこそ幼いが、彼女は大人でも敵わぬくらいにしつかりと現実を受け止めて、腹をくくつたようだった。妹に慰められてしまつては、兄としての面子が丸つぶれだ。つとめて明るく、聖は尋ねる。

「考えるって？」

『うるみはどうしたいのか、考えるの』

校舎と運命をともしにするのか。建物に憑いているという彼女に可能かは分からないが、外に出るのか。それとも、他の選択肢があるのだろうか。聖がさらに詳しく聞こうと思つて口を開こうとすると、先にうるみが切り出した。

『ね、お兄ちゃん、明日も来てくれる？』

「ん？ ……うん。うるみちゃんのお願ひなら」

『じゃあ、うるみ、明日までに決める。ありがと、優しいお兄ちゃん』

彼女はやっと、声を出して笑つてくれた。聖はそこでようやく、彼女の名前は聞いたのに自分が名乗っていないことを思い出した。

遅ればせながら、自己紹介をする。

「僕は聖っていうんだ。ひ、じ、り」

『聖お兄ちゃん。……約束ね。また、明日ね!』

彼女はじゃあね、と言うが早いのか、着物の袖を揺らしながら元気に廊下を駆け去って行った。窓越しに赤い後ろ姿に手を振り、見送ってから、聖はそつと耳栓を着け直した。

## 桜時の風 後編

「建物に憑く子供の神様って、いったい何でしょう」

旧校舎をあとにした聖はその足で溇の元へと向かい、うるみのことを尋ねてみた。すると、溇は「座敷童じゃな」と即答した。

名前自体は聞いたことはあるし、子供の姿をしているというのも聖は知っていた。ただ、さっき『ざしきわらし』という言葉が出てこなかったのは、座敷童は男の子の姿をしているだろうとなんとなく思いこんでいたからだ。結局、聖はそれがいったいどういう妖なのか、詳しくは知らないのだった。

こんなとき、生き字引である溇は頼りになる。聖はうる覚えの知識を総動員して、再び聞いてみた。

「座敷童が来た家は栄えて、出て行くと急に没落するっていう、あれですよね」

「さよう、家に憑き、人に福をもたらすあやかしじゃ。近ごろはあやつらの住み良い古い家もずいぶん減ったのではないか。お主、どこで声を聞いた？」

目を丸くして、溇は隣に座る聖を物珍しそうに眺める。厳密に言うところ『今となつては少なくなった座敷童と会ってきた聖』が珍しいのだ。彼女の視線には穏やかさも湛えられていたが、妖たちの話を耳に入れるとき、溇の顔はいつもよりも優しい。恐らく、旧友に出会うのにも似た懐かしさがあるのだろう。

聖は、手短にうるみとの出会いを説明した。築数十年の空き校舎が数日後には取り壊されること。座敷童は今日までずっと子供達を待っていたが、聖の話聞き、明日には心を決めると言っていたこと。

「学校にも住んでるんですね。びっくりしました」

「聞く限り、古い建物のようじゃから居心地が良かったのであろうな。歴史あるものは、いいものじゃ」



澪はうるみの気持ちがかかるのか、うんうんと軽く頷く。古いものが落ち着くというのは、ゆったりとした時間で生きる澪たちにごか似ているからだろうと、聖は感じた。

しかし、悲しいけれど、時が経って古くなると、形があるものも形がないものも壊れて、なくなつて、やがて忘れてしまふ。聖だつて、自分だけは忘れないと自信を持って言い切れるわけではない。それでもなお、古いもの、忘れ去られつつあるものをできる限り大切にしたいというのは、時代遅れな考えだろうか。

「お主、また何か悩んでおるのか」

お見通しだと言わんばかりに、澪が聖の顔を覗き込む。その眉間には皺が寄つていて、外見に似合わない年より臭さを醸し出していた。そんな顔を長々と見るのも悪いような気がして、聖はあたふたと答えた。

「もし、憑いている家が無くなるとしたら、座敷童はどうなるんでしょう」

「家と共に消えることを選ぶのも、一つじゃな」

突き放すような澪の言葉に、聖は黙り込んだ。彼女の持論からすれば、それが妖の運命だと言いたいのだろう。聖としては、澪がもう少しこつちの世の中に執着を持ってくれることを願っているのだけれど、長年培われてきたものはなかなか変えられないのか。

澪は「まあ、最後まで聞け」と、思考に没入しようとした聖を止めた。

「もちろん住処を変えて生き延びるといふ手もある。……ただな、誰がなんと言おうと童は自分で決めるのじゃ。その決断に、手出しはできぬ」

「彼女のことは、彼女に任せるしかないんですね」

至極当たり前だが、その通りなのだろう。うるみ自身もちゃんと考える、と言っていた。

「さよう。……そう心配するな。儂などとは違い、人と近しく暮らす者達は新しさを受け入れる力に長けておるゆえ、きつといい方向

「なるう」

聖の真剣すぎる眼差しを受け止めながら、漣は明るい結論を導いて話を区切る。座っているのに飽きたのか一息入れたくなったのか、彼女は立ち上がると身体全部を使って大きく伸びをした。

自分を引き合いに出したほんの一瞬だけ、漣の声はわずかに乱れた。彼女本人が気付かなくても、聖の耳はしつかりと捉えていた。うるみと違って自分は古いのだと漣はさらりと流したが、皮肉っぽく言ったそれが彼女の本音なのかもしれない。

「まだ、不安か」

返事がないのに困惑し、漣は立つたまま聖を振り向くと首を傾げる。確かにうるみのことについては、充分解決した。と言うよりは応援するしかないという現状が明らかになったので、今はとりあえず、うるみがいい決断をしてくれるように精一杯祈ろうと心に決めた。

今、聖の心に淀んでいるのは、漣のことだ。彼女と出会ってもうすぐ一年になる。初めて会ったところは透けていた指先も、今はしっかりとそこにある。どこか投げやりにも見えた態度も影を潜めつつある。それでもさつき、うるみについて消えるのも一つだ、と言及したように、あっさりとこちらの世界を　そして、聖を切り離してしまいそうなところも漣にはまだ見え隠れする。

さんざん逡巡するうちに沈黙に耐えきれなくなり、聖はついに、思い切って漣に尋ねた。

「……漣さまは、いなくなったりはしません、よね」

悩んでいたうちにすっかり口の中が乾いてしまい、舌がもつれる。しかし、言ってしまったらさういぶん楽になった。一方の漣はきょとんとして聖を見つめていた。深みのある琥珀色の瞳が何度か瞬き、座り込んだままの聖を小さく映す。

「何じゃ。お主、それで曇っておったのか。儂はてつきり、座敷童の身を案じて沈んでおるのかと」

「それももちろんありますけど」

「

口ごもった聖自身、何を言いかけたのかよく分からなかった。それきり口を閉ざしてしまった聖の前に、漣はしゃがみこんだ。本当なら聖に当たるはずの早春の冷たい風を、彼女の小さな背がすべて受ける。長い髪が風に吹かれて、聖の顔を撫でた。

「……消えてやらぬよ」

予想外のせりふに聖は目を見張り、そして彼女に釘付けになった。漣はなびく髪の毛を押さえながら照れたように微笑んでいたが、穴の開くほどの聖の視線に気付くと困ったように俯く。

「そんなに見たとて、面白くはないだろうに」

「あ、ご、ごめんなさい」

聖は顔を真っ赤にしてそっぽを向きながらも、漣の柔らかな表情と、鈴を転がすような可憐な声とを何度も反芻していた。

可能な限り、記憶にくつきりと焼き付ける。忘れない。いや忘れてたまるか。

翌日は、土曜日だった。朝は相変わらず身が縮むような寒さで、身体を動かさずにはいられない。聖は家を出ると、白い息を吐きながら学校へと走った。

休日にもかかわらず、校門は幸いにも閉鎖されていなかった。聖は昨日と同じ旧校舎の裏手に回ろうとして　そこで、桜の木の下に小さな赤い人影を目に留め、立ち止まる。

「うるみちゃん！」

『聖お兄ちゃん』

驚いたことに、うるみは校舎の外、一番桜の幹にもたれて聖を待っていた。

「外に出ても平気なの？」

『うん。これから、お引越しなんだもん』

「じゃあ、この校舎は諦めるん……諦めちゃうんだね」

つい嬉しげに答えてしまい、聖は慌てて言い直した。うるみが引越す、つまり生き延びることを選んだのは、聖にとってはいいユースだけれど、彼女にしてみれば長年の住処を捨てるという辛い選択。安易に喜んではいけないと、気を引き締める。

「引越して、大変じゃないの？」

「初めてだからときどきするけど、平気だよ。渡り歩くのが、うるみのお仕事だから」

「仕事？」

聞き返すと、彼女は「いろんなものに、幸せを分けてあげるの」と笑った。うるみはまさしく座敷童なのだと、聖はようやく実感した。心を決めたからなのか彼女の顔からは陰りはすっかりなくなり、出会ったときの無邪気な様子に戻っていた。見ていると、聖にも自然に笑みがこぼれてくる。

「ほんとに良かった。僕、もしかしたらうるみちゃんはこの校舎と一緒に消えちゃうんじゃないかと思ってたから。心配してたんだよ」  
「いっぱい考えたよ。でも、この世に生まれたときから決めてたのを思い出したから。人といっしょに生きていくって。……うるみは、お兄ちゃんみたいに素敵な人たちともつと出会いたいから引越すの。誰もいないなら、ここにいたってしょうがないもん」

幼い声で、感慨深げにうるみは心の内を打ち明けた。見た目は昨日とまったく変わらないけれど、なんだかひと晩ですいぶん大人になったように見える。

「お兄ちゃんには、お礼があるの。……いちばん早い春を、見せてあげるね」

うるみはそう言うと、懐からその手に馴染む大きさの、小さな扇を取り出した。広げて持つと、どこで覚えたのか、まるで舞いを踊るように優雅に扇を動かして、一番桜をふわりとあおいだ。暖かさをはらんだ緩い風が、聖とうるみを包んで流れていく。

「……桜が！」

あるはずのない春の匂いに顔を上げた聖は、そう叫んだまま開い

た口がふさがらなくなった。

灰色がかつていた樹影は、うるみの送る風を浴びたところから清楚な石竹色へと姿を変えていった。固く結ばれ、緑色だった一番桜の蕾が一斉にふくらみ、爆ぜるように開いていく。古木とは思えない生命力を湛えて、桜はみるみるうちに満開になった。

「そうか。毎年、うるみちゃんが咲かせてくれてたんだね」

「そうなの。桜はみんな見てくれたよ。うるみね、みんなが桜を見て笑ってくれるのが好きなんだ」

舞いを終えて扇を畳んだうるみが、弾んだ声で答えた。まったく裏のない、心からの笑いを浮かべながら。

もちろん考えただけで実行に移すことはないと思うけれど、こんなにも健気に人間のことを好きでいてくれる妖と一緒に過ごせてみんなは幸せだったのだと、聖は友人たちに今すぐ教えて回りたい衝動に駆られた。例え彼女の存在を知らず、姿を見ることができないヒトでも、一番桜は毎年楽しみにしているだろう。どうにかして彼らにうるみのことを覚えていて欲しい。でも、どうすれば　その答えも、うるみはちゃんと知っていたのだ。

「すごい。……きれいだね」

聖は涙がこぼれ落ちそうになるのを、桜を見上げてこらえる。とてもじゃないけれど、『お兄ちゃん』は彼女の前ではかつこ悪くて泣けない。

とんとんと、うるみは畳んだままの扇で桜の幹を軽く叩いた。するとどういうわけか、特に花が見事な一降りの枝がしなつて垂れ下がる。

『それ、聖お兄ちゃんにあげる。うるみと遊んでくれたお礼なの。この桜が早く咲くのは今年で最後だから、大事にしてね』

言われるままに手を伸ばすと、枝は折るまでもなく、自ら木を離れるかのように聖の手の中に落ちてきた。見頃の薄桃色の花がこぼれんばかりに付いていて、甘い香りが漂う。これが夢ではなく現実の出来事なのだと、聖の五感にはしっかりと刻み込まれていた。

「こつちこそ。ありがたく、もらって帰るね」

『うるみ。……うるみ、そろそろ行かなくちゃ。お兄ちゃん、ありがと』

うるみは聖に深々と頭を下げた。結局のところ、聖が彼女に対してできたのは話し相手になったことくらいだったが、それでも役立てたのは嬉しい。

「でも、どこに引っ越しするつもりなの？」

『決まってるよ。……みんなが、いるところ』

聖の問いにうるみは悪戯っぽく微笑むと、手にしたままだった扇を上げて指し示す。その先には、聖たちが今学んでいる中学の校舎の隣 嘉章が教鞭を執っている小学校があった。

今度はペこり、と軽く会釈すると、うるみは新たなねぐらを目指して歩み出した。聖は桜の枝を優しく振りながら、どんどん小さくなっていくうるみの背中を見送る。小学校の校舎の中に消えるまで、彼女はついに一度も振り返らなかった。

うるみが新しい建物に慣れるのには、そう時間はかからないだろう。この桜が一足早く春の始まりを告げるのは今年で終わりでも、来年からは小学校の桜並木のどれかが新たな『一番桜』となって、人々の目を楽しませるはずだ。

「澪さまに見せに行こうかな」

家に帰って、枝を挿す瓶と水を取ってこよう。澪が驚く顔を思い浮かべながら、聖はうるみが分けてくれた幸せをしっかりと握りしめていた。

## 誓い 前編

田植えを待つ田には水が引かれ、青い空が映っている。少し耳を傾ければ蛙の声。吹く風にもなんとなく色や匂いが感じられるようになったし、何よりここ数日で冷たさがすっかり抜けた春風に変わった。

登下校に薄手のコートがいらなくなると、春。

聖が初めてそう思ったのは去年のことだ。おとし以前の自分はそんなことを感じる隙さえなかったのだろうと、心に余裕ができた今になって聖は振り返ることができる。

おとしといえば、聖が街の中学校に入学した年だ。『聞き耳』はある程度制御できるようになっていたとはいえ、学校は休みがちだったし、毎日が妙に事務的に過ぎていっていた。『事務的に』日々をこなすことでこの力を遠ざけ、見ないふりをして、何とか逃れようとしていた。

立ち止まって見つめた足下には、去年より一サイズ大きくなった靴。

それに比べたら、ここに来てから 澗と出会ってからの一年はなんて充実していたんだろう。振り返ってみると実にいろいろなことがあった。『聞き耳』の使い方、使いたくないときの心の持ち方も身につけつつある。少しずつの経験が自分を強くしてくれていると、聖は自身をちよつとだけ誇りに思う。

さて、それでは。

来年の今頃の自分は、どこでどうしているだろう。困ったことにそれがまったく頭に浮かばない。聖が過去へと逃避しているのは、未来について考えなくてはならない時期が来てしまったからだ。昨日の夜から いやもつと前から、頭の隅に引っかかる何かが気になって先に進めないのだ。

「そのジューケンセイ。……これはいつが締め切りなんだ？」

夕食の後片付けをしていたはずの嘉章が、何やらビラビラと妙な音を出しながら近づいてきた。わざと音が出るようにわら半紙をはためかせている。きまりが悪そうにしている聖の表情を見ると、嘉章は呆れ顔で付け足した。

「何だ、その『しまった見つけた』って目は」

「お、思っていないよ、そんなこと」

嘉章は凶星を指されて分かり易くうろたえてしまった聖を見て苦笑した。次いで立ち上がると、「嘘をつけ嘘を」と、勉強机の上に置きっぱなしだった書類を持ってくる。聖に示されたのは、『進学』の選択肢にチェックを入れただけであとは白紙の『進路希望調査票』だった。ここ数日、嫌になるほど見つめ続けた紙だから改めて言わなくても分かるのだけれど、どうやらまた見直さなければならぬいようだ。

鼻から一つ息を吐いて、聖は居間のテーブルで嘉章と向かい合った。

「……締め切りは、昨日だったんだけどさ」

「先生が困ってるだろうに。俺で良ければ相談には乗るぞ。……それともあれか、耳がまだダメか？」

教師である嘉章は、提出期限を破られた聖の担任に心底同情しつつも、聖の『聞き耳』を気に掛けてくれていたようだった。

そもそも、嘉章に相談しようかどうかどうしようか迷っているうちに何日も経ってしまったのだ。悩む前に嘉章に声を掛けてしまえばこうも引きずらずに済んだのかもしれない。願ってもない提案を歓迎しつつ、聖は言う。

「ダメかどうかは、やってみないと分からないけど。でも、一年前よりは何とかできそうな自信は出てきたかな」

「何とかするじゃなくて、『何とかできる』なのか。育ったもんだな。……ま、頭を冷やして考えようぜ」



につこりと笑い、嘉章は一度席を立つと、冷蔵庫から炭酸飲料を持ってきて注いでくれた。喉に流し込んでみると、「ひーの父さん母さんは何か言ってたのか」と尋ねられたので、聖は「『無理はするな』って」と返す。

春休みに家に帰ったとき、両親を交えて将来のことを話し合ってきた。親の言う『無理』は、聖の成績のことも、聞き耳に伴う精神的な重圧のことも含んでいるのだろう。自分のわがままを受け入れてくれる父と母の寛大さは、聖には本当にありがたかった。だからこそ早く彼らの元へ戻って、いろいろな面で楽をさせてあげたいという気持ちも大いにある。

「お前、成績はなかなかだから選択肢はたくさんあるな。上を狙うなら　心の方が大丈夫なら、街に戻るってのもいいだろ」

少しだけ眉を寄せ、嘉章は考えを促すかのように聖の顔を覗き込んだ。

街でもう一度やっていけるかどうかを見極めるのも、ここに残るという進路を選ぶのも、最後には自分。聖もそれは十分に承知している。しかし、この優しい場所に居続けることは、本当に自分にとっていいことなのか分からない。かと言って、街に耐えられるまでに大人になれているのかも分からない。

ただひとつ、はつきりしていることがあった。

聖が未来を思うとき、そこには必ず澪の姿が浮かぶ。自らを買いかぶっているわけではないけれど、もし自分がここを去ったら澪はどうなってしまうのだろう。

「彼女との近い未来を考えるなら、ここに残るのもありじゃないか」  
危うくサイダーを吹きそうになった聖は、嘉章こそ『聞き耳』ではないかと疑いたくなった。

いや、でもよくよく考えたら恐れ多すぎる。そもそも澪は聖の彼女でも何でもないわけだし、第一そんなことを言おうものなら澪に叱られてしまいそうだ。

「そういう幸せも、お前には似合ってるかもしれないと思ったんだ

よ。俺にはそれがお前の将来のためになるのか分からないけどな。

……自分のことを棚に上げて言わせてもらうなら、何となくだけど、ひーはいつまでもここに居続けてはいけないような気がするぞ」

棚に上げられたのは、姿を消した嘉章の思い人、かなでのことだろう。聖は、彼が時間を作っては、かなでとの思い出の森へとこっそり足を運んでいることを知っている。そう言う嘉章はきつと、彼女に再び会える日までこの土地を離れないつもりなのだ。

それはとりあえずいいとして、聖の心には最後の一言が妙に引っかかっていた。

「村の外に行った方がいいっていうこと？ 何で？」

「上手くは説明できないよ。なんとなく、だ。……外に出てったほうが、きつといいことある。お前にも、周りの人にも。ほら、なんだ、自慢のイトコだし」

軽く聞き返した聖に、嘉章は照れくさそうに言った。

澪は生身の身体でないため暑さ寒さにはいささか鈍いが、それさえここ数日での緩み方は急激だと感じられた。ついこの前までは朝晩の冷え込みが厳しかったはずなのに、今は日が昇ると暑いくらいに感じるときがある。

森が切れた向こうには、若葉色の景色が広がっている。かつて澪が獣の身だったころも今も、一番好きな季節。そして、澪が聖と出会った季節になっていた。

澪は、山の入り口で逡巡していた。

目の前には、常人には見えない境界線がある。あと二、三步踏み出せば、そこは澪の力の及ばない山の外だ。今は山に守られているから、こうして人間の姿を保つことができる。しかし外へ出れば、変化をし続けること、さらには指一本動かすことにさえ相当な力を必要とするだろう。果たして、これまでの一年で蓄えてきた力はどれほどのものなのか。自分の身体と心は、消耗に耐えられるまでの

強さにまで戻っているのだろうか。

少しでも迷うと、足が止まってしまふ。しかし、怖くても確かめなければならぬ。

今の漣は、聖がいるから命を繋いでいる。恐らく聖もそれをよく理解しているのだろう、ほとんど毎日のように自分に会いに来てくれる。できるだけ早く、彼に負担をかけなくて済む身体になりたかった。

「……うむ」

勇気が出たところで、そつと一步を踏み出す。さらに一步、また一步。

「くつ」

身体はなんとか山の外へと出たが、漣の歩みはそこで完全に止まった。

三步目より後はとてつもなく重く、まるで足が地面に縫い止められたように動かなかつた。身体全体にも強烈な負荷がかかっている。漣は、巨大ななにかに上からすり潰されるかのような感覚に襲われていた。事実、いつの間にか地面に引き寄せられた漣は、地を這うように低い姿勢で自身にかかる荷重になんとか耐えていた。

漣が堪えているのは体の重さだけではなかつた。自らの不甲斐なさに対する怒りと悔しさ。心もまたずしりと重い。弱りながらも一山の主が、独りで歩くこともままならないなんて情けないにもほどがある。

この日の高さなら、聖が来るまでにはまだ間があるはずだ。こんな姿を見られるわけにはいかない。どうにかして、山の中へと戻らなければ。

弱気になる自分を叱咤して、両腕で身体にかかる重みを支えようとする。しかし、上体は辛うじて持ち上がるものの、事態はそこから一向に好転してくれなかつた。やはり押しつぶされるように地面に倒れ込む。

途方もなく長い時間、そんなことを繰り返していたような気がし

た。

青草の香りが強すぎて、思わず息をひそめる。うつすらと目を開けば、ぼやけた視界にはヒトのものではない蹄が映る。いつの間にか溲の変化は解け、本性である鹿の姿を晒してしまっていた。ささやかな自慢である純白の毛皮は、おそらく土と泥にまみれてくすんでしまったことだろう。

そこで溲はふと、自分の上に落ちた影に気づいた。聖が来たのかとも思ったが、それにしても影が長い。しかし、聖でない誰かが自分のところにやってくるとも考えられない。昔なじみはたくさんいたのだが、皆はまだ生き残っているのだろうか。例え長らえていたとしても、今さら、力を失った自分のもとを訪れるだろうか。

「相変わらずきれいな白ですね、溲さん」

男の落ち着いた声が降ってくる。

溲は無条件に怯えていた。すうつと、全身の血の気が引くのが分かる。

「本来の姿まで見せて、そんなところでお休みなのですか？」

大分皮肉気な含みを持った響きだ。聞き覚えがある言い回しに、溲は疲労でいくぶん回転の鈍った頭をのろのろと上げた。上げたたたんに相手が誰であるかはつきりと思い出し、気圧されぬように強めの口調で言い返す。

「何でもないわ。散歩の途中じゃ」

「つれないですね。ただの散歩には見えませんよ。……もしや、しばらくお会いしないうちに私をお忘れですか？」

彼の本性には到底似合わない慇懃無礼な物言いに、溲は改めて恐怖を感じた。肌がみるみるうちに泡立ち、全身を悪寒が走る。しかし負けるわけにはいかないと、溲は普段の調子で答えた。

「よく覚えておる。久しいのう、高嶺殿」

高嶺たかねはいわゆる、数少ない『昔なじみ』のうちの一人だ。溲と同じく山の神と呼ばれる部類のあやかし、それも溲とは比べるべくもない大山を統べ、人間からの信仰も篤いおおかみ大神である。そんな古いも

ののけであるにも関わらず、彼は聖が時たま着ているような今風の洋装。そういえば、高嶺は新しい物が好きだったと思ひ返す。

「ええ、お久しぶりです。覚えていただいでいて光栄です」

言葉とは裏腹に、高嶺は鼻で笑って見せた。彼の本音と建前が明らかに異なるのは昔からだ、それは今でも変わりないらしい。その本心を見せない彼が声に出して笑うとは、地べたに押しつけられている姿がよほど可笑しいのだろう。と、漣も多少自虐的に苦笑した。もっとも今は鹿の姿だから、笑いは相手に伝わっていないだろうが。

「……ずいぶんと地面がお好きなようですが、私でよろしければ助けて差し上げますよ」

「遠慮する」

「でも、あなたは困っていらっしやるようです」

「笑いたければ笑うがいい」

純粋な心配よりは恩を売る機会を逃すまいという雰囲気、漣は感じ取っていた。長い首をもたげて見上げた高嶺は、キツと吊った目をやや細め、大きな口でにっこりと笑った。まるで統一性のない部品が収まった顔だが、人間的に言い表すならば野性的で精悍。その涼しげな瞳は漣を射竦め、ときにぎらりと金色に光るのだ。漣までもが圧倒されるような存在感で目の前にいるのは、まさしく一頭の肉食獣だった。

「やれやれ。心配しているのですが？ それとも、その綺麗な足にでも噛みついていたら言うことを聞いてくれるのでしょうか？」

高嶺がことさらに自らの牙を見せつける。その武器が自分に突き立てられるなどと考えただけでも、漣の体にはふるえが走った。噛まれる すなわち喰われるのは嫌だ。しかし、体は依然として動かない。

「では、勝手に助けますよ」

「やめ」

「やめません」

薄笑いを浮かべる高嶺の声で、漣の制止は当然のごとくかき消された。諦めでさらに曇る視界の端で、高嶺が高々と右手を挙げていた。

変化は、すぐに訪れた。

わずかに空気が揺れたかと思うと、漣にかかっていた重さは嘘のように消えて、体が自由に動かせるようになっていた。しかし、心の中の鈍い痛みは増している。

一時的にだが、ここが『高嶺の場』になったのだと分かった。強い力で、自身とは無関係な場所に縄張りを作りあげる。その『場』に存在を許されれば、その他の干渉からは解放される。

漣の山の外は、本来なら誰の支配下でもない真っ白な土地なのだ。それを、高嶺はただ片手を挙げ、力を込めるだけで自分の色に染めてしまった。逆に言えば、自分の山の外に出られない漣には、まだそこまでの力が戻ってはいないのだ。高嶺にかかれれば、漣などひとたまりもなく捻り潰されるのだろう。

「楽になったでしょう」

顔色一つ変えず、高嶺は空いている左手を漣に差し出した。さすがに払いのけるわけにもいかなかったが、気付けばいまだ鹿の姿。力の入らない四肢だが、それでも立ち上がるくらいはできるようだ。ふらつきながらであるが、漣はゆっくりと体を起こす。

「早いとこ、自分の城にお入りなさい。それでも紳士なのでね。あなたの山に入ったりはしませんよ」

高嶺に促されて、慌てて山の方へと踏み込んだ。それを見て、高嶺はようやく右手を下ろす。ともかく、これで聖に惨めな姿を晒さずに済んだわけで、その点は感謝せねばならなかった。

「……礼を言う」

「ずいぶんと殊勝ですね」

「誰かと違って素直なものでしょう」

「それは感心」

漣の皮肉も、高嶺には軽く受け流される。駄目だ。

彼には昔は何かと面倒を見て貰ったような気もするし、古い記憶の中の高嶺はもつと優しくなったように思う。とすれば、自分が何か彼の機嫌を損ねるようなことをしたのかもしれない。いずれにせよ、今の情けない自分では高嶺には敵わないのだ。

「棘がずいぶん柔らかくなったのでは。どうもしっくりしないんですよ。その素直さ、一体誰に教わったのかが気になりますね」

大神が、うなだれる漣に追い打ちをかける一言を放つ。

「そうだ、聖！」

そこで漣の頭に真っ先に浮かんだのはなぜか聖の顔で、背筋が凍る思いがした。日の傾きを見れば、いつもなら聖がやってくる頃合いになっていた。この場に居合わせてしまったなら、面倒ごと巻き込んでしまうのは火を見るより明らかだ。物事がそう都合良く進むとは思わないが、今日に限って遅れてきてくれるなどということはないだろうか。

恐らく、ない。

ならば、腹を括って隠し通し、できるだけ早めに帰ってもらえないのだ。

「……………自前じゃよ。お主の棘は相変わらずじゃな」

「私はあなたには優しいはずですよ。違和感を感じるほどには、漣さんを知っているつもりですしね。……………そうそう、今日は求婚のために伺ったのですよ」

「きゅ……………？」

「嫁に貰う、ということですよ」

漣が絶句していると、高嶺はまるで取り引きでもするかのようにしれっとした顔で続けた。

「どうやらお困りのようですが、私がついていればあなたは自由を外を歩ける。山を治めるのにも力を貸します。昔のように、もう少し見目よく化けることだってできるようになります。私はそちらの姿の方が気に入っていたのでね。……………悪い話ではないと思いますよ」

「と 唐突に何を言っておる」

「分かりませんか？ 恩を売りに来たのですよ」

焦る漣をさらに萎縮させるかのように、高嶺の威圧感が増した。姿形は何も変わってはいないが、瞳が金色に輝いている。

「高嶺殿ほどのお方が、どうして儂などに執着する？」

「言っただでしょうか？ ……昔の姿の方がいいと。今の漣さんがあの姿を維持できないほどに磨り減っていることが、私にとっては耐え難いのです」

獣の目が正面から獲物を捉えた。漣が最も苦手とする表情だ。そういえば、いつか聖が追い払った千里眼の少女もこんな目をしていたと思いつく。もつとも、高嶺と彼女ではその恐ろしさは比べるべくもない。

これはまさに取り引きなのだ、と漣は悟った。高嶺は綺麗な姿の自分を人形のように側に置きたいだけなのだろう。だから漣が力を無くした。まさしく人形にふさわしい。今になって、こうして力を見せつけに現れたのだ。

考えるまでもなく、闘ったところで高嶺に敵うはずもない。しかし、黙って白旗を揚げるわけにはいかない。彼の支配と引き替えに手に入れる自由などに、いったいどれほどの価値があるだろうか。

「ここの山は、細々とでも自らの手で守っていききたいのじゃ。高嶺殿の手を煩わせるまでもない些事」

「しかし、漣さん」

「今日は引き取ってはくれぬか。この通り、まともな話ができる状態でもない。……もしも儂を憎からず思っておるといふならば、意を汲んでくれぬものかの。いずれ、また後で」

何かを言いかけた高嶺の言葉の上から、漣は自らの震える声をかぶせた。今の漣には、哀れさをも武器にするしかなく術がない。

高嶺の鋭い目の光が少しだけ揺らいだ。首根っこを押さえたはずの餌食から逆に提案を受けたのだ、思わぬ申し出に面食らうのも当然といえば当然の反応だろう。

うまく同情を買ったことができたのか、高嶺は意外にもあっさりと



引いた。

「わかりましたよ。脅しと取られるのも不本意ですしね。その代わり、今度お会いする時にはじっくりと……ね。それまでに身の振り方を考えておいてくださいよ、漣さん」

意味ありげにやりと笑うと、どう聞いても脅迫のような台詞を置きみやげに高嶺は踵を返した。単に漣をいたぶることに飽きただけなのか、他に何か思惑があるのかは分からないが、とにかく嵐は去っていく。

その背中に何気なく目をやった漣の顔は、たちまち強ばった。

「漣さま　と、ええと」

高嶺と向かい合うかのように困惑しきった顔で佇んでいたのは、他でもない聖だった。

## 舊い 後編

昨日の嘉章との会話で何となく頭の中が整理されたつもりでいたが、結局は例の書類を出さずに帰ってきてしまった。落ち込みながら、聖はとぼとぼと溇の山へと足を向けていた。これという理由はないが、溇を話せば道が見えてくるのではないかという気がしたのだ。

山頂への道を登り始めてすぐに、聖の耳は話し声を捉えた。こんなところで人の声がすることなど、これまでなかった。ただでさえ人気がない山。人間にしろそうでないにしろ、来客があるとすれば年始めの八雲以来だ。もしも好意的な客であれば、溇もいい気晴らしになるだろう。そんなことを考えながら、さらに上へと向かう。

やがて聖の前に現れたのは、見慣れぬ鹿の姿の溇と、やはり見慣れぬ青年とが対峙している場面だった。

後ろ姿の青年は灰色の髪をとげとげしく立たせた鋭角的なヘアスタイル。すらりとした長身には黒いデニム、そしてジャケットを無造作に羽織っていて、それがはまっている。俳優やモデルのような格好よさだ。

ところでいったい、この人は誰だろう。

溇の知り合いだろう、と安易に考えてみる。溇と話をしているのなら悪いモノではないだろうけれど、あちらの世界のモノには警戒しておいた方がいい。聖がそう考えてやや構えたとき、会話のかげらが飛んできた。

『今日はキュウコンのために伺ったのですよ。……ヨメに貰う、ということですよ』

意味を理解しかねて、聖は立ちつくす。その間にも二人のやり取りは続いているが、まともに耳に入っていない。

キュウコン。ヨメ。キュウコン。ヨメ。 求婚、嫁！

気付いた瞬間、聖は叫びそうになって自らの口を押さえつけた。青年が溲にプロポーズしている。目の前で何が起こっているのかよく分からないが、どうやらそういうことのようにだった。

何で、どうして、いったい誰！

そう尋ねたかった。驚き、そしてなぜか少しずつの悲しみと怒りで胸の中がもやもやして、何だか嫌な気分だ。今すぐにもここから逃げ出したいと思ったけれど、足は動かなかった。

そして、青年が振り向く。

「溲さま と、ええと」

あなたはどなたですか、と尋ねようと思った。しかし彼と目が合った瞬間、聖の体は宙を舞っていた。

突き飛ばされたのか、それとも殴り飛ばされたのかは判断が付かないが、一呼吸遅れて腹に鈍い痛みを感じ、どうやら目の前の青年に危害を加えられたらしいということは理解した。頭はそう強く打たなかったが、それでも聖の意識はやや遠のく。仰向けに倒れた聖の喉元には青年の右手が添えられ、その爪が皮膚に食い込んでいる。

「何をする、高嶺殿！」

「何をとは愚問ですね。怪しい人間に姿を見られた。当然でしょう？」

「その童は特別じゃ！ 今すぐその手をどけよ！」

ぼつつと霞む視界とは裏腹に、溲の鋭い声、耳元の青年の穏やかだが冷酷な声が聖の耳に突き刺さった。そしてもう一つ、男の低い呟きが聖の耳栓を飛び越えて『聞き耳』に届く。

『特別？ この餓鬼ごときが？』

表情はあくまでも笑顔の青年だが、聖の首元にかかる手に少し力が加わった。

心の声 抑えきれない怒りと憎悪を孕んだ青年の呻きに、聖は愕然とした。聖の頭の中に響き渡る言葉と、耳に入ってくる声があ

まりにも違いすぎる。二つの人格が一つの身体に宿っているのだからかとも思っただけれど、どうもそうではないようだ。つまり、建前と本音に恐ろしくギャップがあるのだろう。

「……特別とはどういうことですか、澪さん。この人間、澪さんのお友達なのですか？」

『まさか、こいつが澪の棘を抜いちまったんじゃねえだろうな』

「僕は今、その者に拠って命を繋いでいる。……放してやってくれ」この青年が何者かは謎のままだが、澪でさえも太刀打ちできない存在なのだということ、事態が緊迫していることは、初めて見る彼女の態度から察しが付いた。それに、『聞き耳』への音を遮断しようとしても青年の声だけはお構いなしに入ってくる。それは彼が強大なモノである何よりの証拠であり、同時に聖が異能者であるということを青年が知らないという証拠でもあった。これだけのあやかしが、『聞き耳』を前に感情を垂れ流すなどとは思えない。

わずかに首を動かすと、身を縮めている澪の姿が目に入って、聖は唇を噛んだ。自分がもっと強くて、彼女の力になれていれば単に澪の命綱である以外、例えばこの青年の手を振り払う力があれば、彼女があんなに痛々しく訴えかける必要はない。しかし実際の自分は、組み伏せられて身動きもできない。尻ぬぐいを澪にさせてしまっていることが、どうしようもなく辛い。

澪が、鹿の姿のままこちらへ一歩近づく。

「頼む、高嶺殿。僕が消えれば、お主も困るのであるう？ その者がおらねば、僕は生き延びることができぬ」

「だから私が一肌脱ぎましようと言っていますのに」

『自分を盾にしやがる。必死だな、澪。……ふざけるなよ』

青年のあまりに強い口振りと光る眼に、聖は思わず目を閉じた。このまま首を切られるか、締められるか、そう思ったが、案に相違して喉に置かれていた手の感触が消える。慌てて跳ね起きると、青年は聖に向かい酷薄な笑みを浮かべていた。もちろん、澪には背を向けたままで。

『と、言いたいところだが。……漣の怯える顔、泣きそうな顔はたまらなく好きなんだな。どうやら、こいつがいりゃあ何度でも見られそうだし、今日は見逃してやる。まったく、あやかしならば喰って空腹の足しにでもしてやったところだ』

「すみませんね。まさか漣さんのお友達とは思わなかったものですから。傷つけたこと、本当に心からお詫びいたします」

「……い、いえ」

「どうか、これからも漣さんの力になってあげてください。漣さんも、お元気で」

「うむ」

青年に目を向けられた漣は、できる限り短く答える。漣の一言が好意的な返事ではないことは、話に追いつけていない聖にさえも明白だった。それを気に留めることもなく、青年は余裕たっぷりに呟き続ける。

『それにしても 畜生。こんなただの人間の餓鬼に、漣を持って行かれてたまるかよ。せつかくここまでいい顔をするように育ったつてのに、俺のモノを横からかつさらっていいこうなんざ』

青年は聖を牽制するように一度真顔で睨み付けると、一瞬のちに爽やかな笑顔を作った。心の声はそこで途切れ、彼は草を踏む音すら立てず、何ごともなかったように あくまでスマートに歩き去っていった。

後には唾然としている聖と、相変わらずの鹿の姿でへたり込む漣が残された。

青年が山を下りた後、漣はまず藪へと分け入ると野草を何本か採ってきた。

「待たせたな。……これを、摘んできた」

その白い手に握られていたのは、潰して塗ると怪我にいいという野草だった。聖の首の傷を案じてのことで、自ら手当てまでしてく

れた。本当はそう大した傷でもなかったのだけれど、それで澪の気が済むならと聖はおとなしく従う。

彼女は草むらに入る前は鹿の形をしていたものの、戻ってきたときにはいつもの澪、つまり人型をとっていて、聖はひとまず安心した。少なくとも、人間の振りができないほど弱っているわけではないようだ。しかし、高嶺という青年の二面性からすると、聖の到着前、澪が何ごとかのトラブルに遭わされているかもしれない。いずれにせよ、彼女が未だ本調子ではないのだということだけは明白だった。

一通り終わると澪は自らが祀られている祠の脇へと腰を下ろしたので、聖もそれに倣った。こちらから何か尋ねるのは憚られて、つい黙り込む。座った地面から身体に伝わる温度も、日暮れ時の緩い風にもまだ暖かさが充分残っていて、季節が変わったことを実感できる。

やがて、澪が低い声で訊いてきた。

「怖かったろう」

「ちょっとは。……結局、何ともなかったので大丈夫です」

「そうか。まったく、まずいところへ出くわしたものだのう。もう小半時もすれば、高嶺殿とは会わずに済んだであろうに。……儂もみっともないところを見せずに済んだのじゃが」

その言葉に、聖は疑問を抱く。もしかしたら澪さま、僕が話を聞いていたとは気付いていないんじゃないだろうか？

「聖が来る前にお引き取り願おうとは思ったが、間に合わなんだ」

澪は、聖の方をちらりと見ながら苦笑した。やはり、彼女の口からプロポーズに関する話は微塵も出てこない。

ここは、自分が聞いていなかったことにすればいいんだろうか。そう考えて思い返してみれば、『求婚』という言葉よりも後の彼らの会話の記憶は聖にはなかった。すっかり動揺してしまって、『聞き耳』に気をやっているどころではなくなっていたのだ。

澪はいつたい、どう返事をしたのだろうか。尋ねてみたい気持ちで

一杯なのに、聖には聞くことができない。仮に澪が高嶺の話を呑んでいたら、そう思うと胃が絞られるように痛んでしまって、声が出ない。それに、おそらく澪は、聖が立ち聞きしていたなどとは考えていないだろう。

ふと気付くと、聖が長く黙りすぎたためか、澪が不思議そうにこちらを見つめている。慌てて紡いだのは、当たり前障りのない言葉だった。

「……あの、澪さま。さっきの人はいったいどなただったんですか？」

「なんじゃ、それで黙っておったのか。紹介もせずにするなんだろう。……高嶺殿は儂と同じく山の神。しかし、もうずいぶん前からこの辺りに住まわれ、その分力も大きい。ゆえに人間からの信仰も篤くての、儂とは格が全く違う。相性も悪い。高嶺殿の性は、狼じゃ。あの方が本気になれば、儂なぞ一呑みに喰われてしまう」

澪はそこで肩をすくめてみせた。本来なら鹿を食らうはずの生き物、それならば、居丈高な高嶺の態度に澪があれほど怯えていたのも頷ける。

「もちろん、聖のことは一言も漏らしておらぬゆえ心配するな。当然のことじゃ。聖を巻き込んではいかぬからな」

聖が「すみません、気を使わせてしまって」と頭を下げると、澪は照れたように自身の頭を撫でた。本調子ではないらしい澪はガードが甘いようで、ふと流れ出てきた彼女の「声」が聖をくすぐる。「巻き込みたくないと思っていたはずが、聖の姿を見たら何故だか安堵したのもまた事実じゃがのう。……断ることができて、本当に良かった」

コトワツタ。

まず、彼女が高嶺のものにならなかったという安堵。そして、それを自分の口で尋ねられなかったこと、結局は澪に守られたことの情報なさ。聖の全身から、一気に力が抜けた。

「昔は、いつもいつもあのように乱暴というわけではなかったんじ

やが。思い当たる節もないではないが、儂の知らぬ間に変わってしまつたのかもしれないな」

「……そう、ですね」

漣はため息を吐いたが、それは違つと聖だけは知つている。『せつかくここまでいい顔をするように育つたつてのに』 獲物をじつくり時間をかけて自分好みに仕込み、自分のものにする。気の遠くなるような光源氏計画を実行できるのも、寿命がない彼らだからこそ待てるからだろう。高嶺ははじめからそういうつもりだつたのだ。

言つべきか言わざるべきか少しだけ悩んで、聖は黙ることを決めた。彼女の悲しげな顔に、まだ高嶺を信じたいという心がありありと浮かんでいたから。そして、それを見た自分の胸の内にほとんど経験のない思い ちょうど、高嶺の求婚に出くわしたときの感情に似たもの が渦巻きはじめていたから。

負の思いに囚われまいと、聖は話を変えてみることにした。もう一つ、今日気になっていたことだ。

「漣さま、もしかして高嶺さまに何かされたんですか。どうして鹿の姿を？」

「……なに、ちよつとな。今日は調子が悪くてのう。高嶺殿とは関わりはないから安心せい」

「関わりがあつてもなくても、心配なんですよ。……大事に至らないうちに休んでくださいね。僕にできることなら言つてください」  
「では遠慮なく言わせて貰うが、『あんみつ』を口に入れればたちどころに治りそうじゃぞ」

そう明るく切り返して笑うものの、彼女はやはり顔色が悪い。聖も一緒に笑おうとしたけれど、何故か首の傷の痛みを思い出してしまつて、うまく笑顔になれていたかは微妙なところだつた。

高嶺が再びやってきたらという不安はあつたが、あまり無理をさ



せるのも気が引けたので、その日は近々あんみつをおごると約束しただけで漣の元を去った。

帰り道で、聖は自分の『声』を噛み締めようと思考に没入する。いくら聞こうとしてもどうしても聞こえない唯一の声は、結局は自分自身で考えるしか捉える手だてがない。

『もう少し回復したら、一緒に村を見に行きましょうね』

絶対に自分で叶えたい、彼女とのいちばん最初の約束だった。けれど今日のように、漣は未だ、ほんの少しのきっかけで鹿の姿を取らざるを得ないらしい。どうしたら彼女にもっと力を与えられるのか。漣が、幸せだと思える未来を作るために、何か他に手段はあるのだろうか。祈りが足りないというのならいくらでも頭を垂れるのだけれど。

しかも漣は、例え本性を現すほど弱っていても『聖を巻き込まぬよう』と考えてくれた。では、聖自身はどうだろう。漣を生きながらえさせるためには確かに役に立てているのかもしれないけれど、蓋を開けてみれば高嶺にもされるがままで、醜状を晒しただけだったじゃないか。

ならば僕は、漣さまを守るためにもっと強くならなくては。『聞き耳』の使い方だけではなくてさらに根っこの部分、胸の中を鍛えなければ。

進路は決まらなかったけれど、あれこれ悩んだあげくに臆気ながら見えたことはあった。それはきつと、『頭の隅に引っかかる何か』のかけらだろうと聖は思うのだ。

## 雨間（あまあい）の光 前編

手紙の指示は、『校舎の屋上に出る階段の一番上に、ひとり来てください』。

屋上へと繋がる扉は閉鎖されていて、校舎の内側のノブには『立入禁止』と赤い文字の看板が下がっていた。梅雨真っ盛りで、扉の外からは屋上を打つ雨の音が響いている。薄ら寒い空気はだからなのか、と聖はひとり身を縮め、壁に寄り掛かった。

約束の時間ちょうどに、彼女は現れた。妙に強ばった面持ちの同級生が、ゆっくりと階段を登ってくる。後ろで一つにまとめた長い髪が、一歩ごとに揺れていた。

「……大音くん」

「あ、錦さん」

「ありがとう。待たせちゃって、それに時間とらせてごめんね」

聖が「気にしてないよ」と首を振ると、彼女、錦早奈にしきさなは、やはりぎこちない表情で微笑んだ。

手紙での呼び出し。二人きりという状況。彼女の思い詰めた顔。いくら鈍い聖でも、次に来ることをある程度予想できた。だからといって何ができるといっわけでもなく、聖は錦の言葉を待つしかなかった。

まとわりつくような冷たい空気の中で対峙は続き、錦の潤んだ瞳が聖を捕らえる。なぜだか目を逸らしてはいけけない気になって、聖は姿勢を正した。

やがて、沈黙は小さな声で破られた。

「大音くんに、話したいことがあって。……私、大音くんが好きなんです。誰にでも優しいところがすごく尊敬できるし、小瀬川先輩とセータクんのことを聞いて、友だち思いで素敵だな、って。だから、もし私でよかったら お付き合いしてくれませんか」

聖は、錦の視線を受け止めながら考える。

彼女はおとなしく物静かで、いつも友達と静かに笑っている、そんな印象の子だった。いわゆる『目立つ子』ではなく、授業中に先生に指されたくらいで顔を赤くしてうつむいてしまうような内気な少女だ。

錦の真つ直ぐなまなざしは怯むことなく聖に向かっていたが、その手は細かく震えていた。手紙を書くまでに、机に入れるまでに、あるいはここへ向かうまでに、どれくらいの勇気がいったらう。

しかし、聖には何よりも大切にしたい存在がある。

先日、高嶺との一件で気付いたことだ。どういふ種類の感情かはまだ整理が付いていないけれど、聖の心の奥底でそれは確かに息づいている。目の前の彼女を濁よりも大事に感じる事ができるだろうかと問われれば、錦には悪いけれど答えは決まっていた。

「あのね。僕には今、大事な人がいるんだ。その人をどうしても守りたいと、思ってるんだ。……錦さんの気持ちは嬉しいけど、錦さんをその人よりも好きになることって、きっと難しいと思う」

錦の手の震えが止まったが、それが何を意味するのかは聖には分からなかった。ただ、彼女の意にそぐわない中身だから辛いけれど、とにかく答えは伝えなければならない。

一息吐くと、聖は後を続けようとした。

「だから、本当に悪いんだけど、その話は」

「……分かりました」

錦が、遮るように口を開いた。戸惑う聖に、彼女は赤い目を細めて笑ってみせた。少し口角を引いただけの、薄っぺらい作り笑いだった。

「今日は、ありがとう。……諦められるか分からないけど、頑張ってみるから」

ぺこり、と頭を下げ、身を翻すと、錦は止める間もなく階段を駆け下りていく。

「錦さん！ 待って！」

言っただけはみたものの、自分は追える立場ではないような気がして、

聖はしばらくそこに立ちつくしていた。階下へと遠ざかる彼女の小さな足音は、すぐに聞こえなくなった。

ある日の昼休み、聖が今日二本目の牛乳を飲んでいると、誠太郎がこちらに近づいてきた。聖と目が合つて軽く手を挙げた誠太郎に、聖はストローを口に突っ込んだまま目で答える。誠太郎は聖の前の席に後ろ向きに座ると、こう切り出した。

「聖、錦を振つたの？」

唐突な質問に、聖は危うく飲んでいたものを嘔き出しそうになった。なんとか飲み下して誠太郎を見ると、彼は「当たり前？」とニヤニヤ笑っている。驚きを取り繕うことも忘れて、聖は反論した。

「で、でもなんでセータが知ってるのさ。……別に、僕は知られて困るってことはそんなないけど、言いふらされたら錦さんがかわいそうじゃないか」

誠太郎が、おや、という顔をした。

「その錦が言ってるみたいだぜ」

「え？」

聖は、自分の耳を疑った。慌てて見回したが、教室には錦の姿はなかった。錦はあの一件以後も、みんなの前では普段通りの彼女だった。それに彼女の性格を考えれば、誰それに振られた、などと冗談でだつて言いふらすようなことはない、聖は考えていた。

「セータは錦さんから聞いたの？」

「いや、俺は又聞き。でも俺に話した奴は錦から聞いたつて言つてたかな？ ……落ち込んでる？」

「……いや、そういうわけじゃ」

釈然としないものを感じた聖が黙り込んでいると、誠太郎はさすがに悪いと思つたのか慰めてくれた。

「向こうがあんまり気にしてないなら、聖が悩むこともないだろ」  
では、放課後の一件は錦にとって、数日で立ち直れるような軽い

傷だったのだと思っていいのだろうか。そうであれば、腑に落ちないながらも嬉しいのだけれど。

誠太郎は聖の机にほおづえを付きながら、小さな声で尋ねる。

「錦、いいと思うけどな。うるさくなくて真面目で勉強できて、ちぐさに見習わせたいくらいだ。……何がダメ？」

「ダメってわけじゃないよ」

「じゃ、どうして」

「言わなきゃいけないの？」

「いいや？ 聖の考えてることくらい分かるよ」

彼はさも当然、といった口振りで「どうせ片思いだもんな」と断言した。

聖だって他人の顔色を見ながら暮らしてきた時期があるから、鈍くはないと思いたい。しかし嘉章といい誠太郎といい、聖の身近にいる人々はどうしてこういう勘が人一倍鋭いのだろうか。

すでに牛乳を飲み終えていたことにほっとしながら、聖は自分のわかりやすさを呪う。きつと今も、恥ずかしさや驚きが顔に出ているのだろう。そのことに聖と おそらく濁だけが、気付かないのだ。

正解だろ、と自慢げに言う誠太郎に、聖は本音を漏らす。

「僕って鈍感かなあ」

「何をいまさら」

誠太郎のツッコミとともに、午後の予鈴が鳴った。

その日の放課後、聖が帰宅の途につくべく廊下を歩いていると、聞き覚えのある声に呼び止められた。振り返ると、気のない廊下の真ん中に錦が立っていた。

「なに、錦さん？」

屈託なく笑う彼女からは、あの日のような沈んだ雰囲気は少しも感じ取れない。それどころか、以前よりも数段可愛らしく見えた。明るい表情が、背に広がる長くて綺麗な黒髪によく似合う。聖が本

当に元気になってくれたのだと、聖はようやく安心できた。

錦は魅力的な笑みを浮かべたまま、聖に近づいてくる。息がかかるほどの距離まで来ると、聖の耳元で囁いた。

「この前の話、もう一回考えてみてくれないかな」

言うまでもなく告白のことだろうけれど、その意図が聖にはさっぱりわからなかった。ちゃんと断ったつもりでいたのは聖だけだったのか。

「あれは」

「……なんて言ったって、また断られるのは分かってるけどね」

さつと聖から離れると、茶化すように錦は言った。

明らかに、以前の彼女とは違っていた。そんな自虐的な言葉を軽々しく吐くような子ではなかったはずなのに　聖が深く考える間もなく、錦は話し続ける。

「……ねえ、大音くんの好きな人は、どれくらい大音くんのことが好き？」

「……それは分からないよ」

「なら、私にしておいたらいいんじゃない？　だって私の方が、きっと大音くんのこと　ま、いいや」

錦の台詞にわずかだが、『大音くんの好きな人』に向けられた憎悪のようなものを感じて、聖は信じられない思いがした。彼女は『私にしておいたら』なんて言う人だったわけ。前はもつとおどおどしてはいたけど、自分の恋に自信みたいなものを持っているような印象があった。だからこそ、頑張つて諦めるなんて言葉が出てきたのだろうし、聖の好きな人を貶めるような言い方だつてしなかったのだと思っていた。

まるで別人のような彼女に、聖は首をひねる。

「……錦さん、今日、何か変じゃない？」

「変じゃないよ。思ったこと、はっきり言うことにしただけ」

彼女は「じゃ、また明日ね」と言い残すと、黒髪をなびかせながら颯爽と去っていく。錦が去ってから、聖は彼女の髪型が校則違反

であることに気付いた。肩よりも長い髪は結わえなくてはいけないはずなのに、と。

「何かに憑かれたか、魅入られたかしたのではないかの」

梅雨の中休みか、ありがたいことに今日は朝からまだ一滴も降っていない。定位置である大きな杉の木の下、聖は乾き始めた地面に小さなレジャーシートを敷いて居座っていた。隣には、同様に溼も腰を下ろしている。ただし、決して会話が弾んでいるというわけではなく、二人とも何ともいえない苦い表情を浮かべていた。

最近、クラスメイトの様子がおかしいと相談を持ちかけたところだった。ただ、聖の気持ち上のこと、告白を受けたというところを端折ってしまったが。

溼の言うことを信じれば、錦に起きた変化にも納得はいく。しかし、化け物の類ならば、聖に見破れない いや、『聞き』破れないことはないのではないだろうか。

「少なくとも、変な声は聞こえなかったんです」

「そういう奴らはの、紛れ込む術に長けておる。ヒトの弱みにつけ込んで取り憑き、自分が主に成り代わる。気配をできるかぎり消し、中からじわじわと侵していく」

「入り込まれた側の人間はいつたくなるんですか」

「たとえば体の持ち主の意識が残っていたとしても、深くに押し込まれて表に出てはこれまいが、いずれ心を食い尽くされれば消える。その後は、憑いたモノがヒトに成りすますか、ヒトの抜け殻を残して新たな獲物へと移るかじやろう」

巧妙に隠れるものなんだな、と考えてぞっとした。誰も知らないうちに、友達の中身が入れ替わっていたら。いつの間にか、化け物が友人の皮を被り、何食わぬ顔で隣にいたらどうする？

「何か、見破る方法とかはないんでしょうか」

「次の獲物に乗 お主、まさか良からぬことを考えてはおらぬだらうな？」

澪は話を途中で打ち切ると、訝しげに聖の顔を覗き込んだ。

錦の心が何かに入り込まれる隙を見せていたとするならば、その原因の一端は聖にもあるかもしれない。少なくとも、彼女が変わってしまった理由が他にあるかどうかは、聖には分からなかった。

「……でも、このままじゃ」

「お主の気持ちも分からなくはないが、今回は分が悪いぞ。まあ、その娘を見てみぬことには判断できようもないことじゃが、儂は身動きが取れぬ」

いつもなら苦笑いをしながら聖をたしなめる澪だが、今日は珍しく深刻な面持ちでそう答える。

「山を下りられるほどは、力が戻らぬ。すまぬな」

澪は滲む悔しさを隠そうともせず、そう呟いた。その横顔は、ちよつと数日前に見た、錦の別れ際の笑顔によく似た脆さははらんでいた。

山にいる限りは、澪自身がこの件に関わることはできない。おそらく、彼女はそれを気にしているのだからと聖は思う。しかし、それは澪が詫びるべきことではないはずだ。

「澪さま、謝らないでください」

「ああ、すまぬ と」

さらに謝って、さすがにおかしかったのか澪は口元をやや緩めた。  
「……雨が来るな」

頬を撫でる風が重みを増したのは、この場の雰囲気のせいだけではないようだった。湿気を存分に含んだ冷たい空気が流れはじめている。木々の隙間から聖も空を見上げると、すでに黒い雲がたれ込めていた。

澪は立ち上がり、鼻をひくつかせる。雨の匂いでも嗅ぎ取っているのだろうか。

「この様子では、長雨にはならんじやろうが。……今日はもう帰れ。お主もそんな調子じゃと、憑かれてしまうぞ」

澪に続いて立ち上がるうとする聖に、彼女は真っ直ぐに手を差し



出した。聖も躊躇せず、その手をしっかりと取った。

## 雨間（あまあい）の光 後編

澗の言うとおり、雨は朝には上がっていた。

次の日の聖は、登校時からいつもの耳栓を着けてはいなかった。自分にあるのは特殊な耳だけだけれど、それを最大限に使えば、もしかしたら少しは錦の心を汲み取れるかもしれない。そう思ったのだ。

とはいえ、人の多い場所で『聞き耳』を解放するのは久々で、教室に近づくにつれて耳への負担は増してきた。低空飛行の飛行機の真下にいるかのような耳鳴りと、それに伴って引き起こされる頭痛や軽い吐き気。朝、教室に入った時点で、聖はすでに磨り減りつつあった。

「聖、おはよ」

何気ない誠太郎の声もとてつもない大音声だ。せめて自分の声だけでも響かないようにしようと、聖は小声で答えた。

「……はよ、セータ」

「どうした？ 具合でも悪いか？」

「……ちよつとだけね」

無理すんなよと聖の肩を叩き、誠太郎は自分の席へと戻る。

何の気なしに彼の背を目で追う聖の視界の端に、錦がいた。相変わらず長い髪を背に滑らせている。彼女は可愛らしく微笑むと、聖にしか分からないように小さく手を振った。しかし、聖がその姿に感じたのは、ちよつと錦に呼び出された日のような薄ら寒い空気だけだった。

一日じゅう神経を尖らせて耳を澄ましていたが、聖の修行が足りなかったのか、それとも錦の身には本当に何も起きていないのか、結局彼女の声はうまく聞けずじまいだった。

一対一になれば、違ったものが聞こえるかもしれない。そう考え

て錦に時間を取ってくれるよう頼むと、「この前の場所で待っていてくれる？」と弾んだ声で返事があった。それを信じ、聖は先ほどから屋上へと続く扉の前にいる。

扉の外から聞こえてくるのは、運動部のランニングのかけ声だった。今にも降り出しそうな天気の中、グラウンドでは部活動が行われている。聴力を封じていない聖には、走っている人数や、それがクラスの誰と誰なのかまで判別できた。他にも、教室に残っている生徒たちの会話や、職員室での教師どうしの愚痴のこぼし合いに至るまでが耳に届いてくる。

我ながら、ものすごい力だと思う。例えば錦が何かに取り憑かれているとして、普通の人間にとっては彼女と異能力者の自分とのどちらが怖いのだろうか。自虐でも何でもなく、純粹な疑問だった。

そんなことを考えたところで、足音　錦が近づいてきた。数日前に見たような光景だが、聖には何かが決定的に違うように思える。「待った？」

首を振った聖に、錦は媚びるように笑いかける。

「用って何？　もしかして、考え直してくれたの？」

「僕の考えは変わってないよ。……錦さんこそ、どうしたの。やっぱり変じゃない？　ここんとこ、何だか別の人みたい」

記憶と食い違うパーツは、やはり錦本人だった。

錦は、聖の遠回しな追求を笑いながら聞いている。錦に探りを入れる聖にとっては、反応がないのに等しかった。実際のところ、聖が懸命に得ようとしていたのは錦の『心の声』だったが、顔や仕草だけではなく、錦の中の声にも変化はない　何も聞こえない。さらに突っ込んでみるしかないだろうか。

「……まるで、中身が入れ替わったみたいで」

踏み込んだ問いにも、錦の笑みは崩れなかった。

「僕の場合は、諦めるんじゃないかったの」

「気が変わったの」

「どうして」

「……あんだ、旨そうだから」  
「なに？」

本能的に身の危険を感じて、聖は一步下がる。下がったところで、階段上の狭いスペースには限りがあり、すぐに背中が壁にぶつかった。後がない、聖がそう焦りを感じたところで聞き耳が小さな声を拾った。

『逃げて。……大音くんまで巻き込まないで』

聞こえた。

「そこにいるの、錦さん」

『大音くん！ 聞こえるの？』

苦しそうな声が、聖の耳に突き刺さる。目の前の錦とは同じ声だが、こちらが間違いなく聖の知るクラスメイト、おとなしく控えめな錦早奈だ。

これではつきりした。まさに洩の言うとおり、錦の中に別人が入り込んでいる。そして、本物の錦はまだこの体の中にいるのだ。

一方で、中学生らしからぬ艶めいた微笑みを浮かべる『偽物』の瞳から、その表情とは裏腹に涙が溢れ出していた。涙が『本物』の錦のものと、聖には一目で分かった。体をほぼ乗っ取られながらも、彼女は必死に自分の存在を知らせようとしていた。まだ、錦の意識は残っている。体の奥底で、助けを待っているのだ。

一方の『偽物』は頬に伝う涙を拭くと、小馬鹿にしたかのように鼻で笑った。

「はッ、鬱陶しいねえ。……でも、存外しぶとくて食べ甲斐があるじゃないのさ。そういうのは好きさ、獲物としてね」  
「うるさい」

聖は怒りを露わにして『偽物』を睨みつけた。いつの間にか追いつめられた体は壁から離れ、錦に詰め寄っていた。

「錦さんの姿をしたお前は、誰だ」

「好奇心は命取りだよ。まあ、どうせあんだもあたしに喰われるんだ。そうさねえ 呼びたきゃあ手鞠てまりとでも呼びな。……こいつの

味にも飽きたとこで、ちょうどよかったよ。こいつの記憶をたぐってあなたに目を付けてたら、都合良くそっちが呼び出してくれるとはさア。でなけりゃあ、こんなにベラベラ喋ると思うかい？」

両手を腰に当てて顎を出し、錦は聖の剣幕など意にも介さない様子で言い放った。すでに化けの皮は剥がれ、本性がむき出しになっていた。言われなくても、ここまでさらけ出すのは聖を無事には返さないということなのだろうと分かる。

錦のか弱い声が、『偽物』の声に混じった。

『ごめんね。私が、大音くんをまだ好きだったせいで、大音くんまで……逃げて、早く』

「悪いのは錦さんじゃないよ」

「何をブツブツと。うるさいねえ」

聖は慌てて口をつぐんだ。耐える聖に、彼女は自分の手柄を自慢するかのように、なおも語り続ける。

「この子は入りやすかったよ。あなたのせいで心に大きな綻びができたつてのに、それを繕おうともせず、そりやもう大事に大事に未練がましく取って置いてたからね。よほどあなたのことが気に入ってたんだね。どこがいいのか知らないけどさア」

『やめて!』

『本物』のかすれた叫び声がする。聞いている聖だって身を切られるような思いでいるのに、他人に心を裸にされていく錦本人はどんなに辛いだろう。憎々しげな表情に似合わない、赤く泣き腫らした目。この体の奥深くで、たった一人で泣き続けている錦の姿が、聖には見えるような気がした。

「もうやめろ。……好きな人のことを考えるのが、そんなにいけないことか」

「おや、いけないとは一言も言っていないよ？ 叶わないことに希望を持ち続けるのは、相当な力があるだろう。それがあたしの好物だからね。そんな無駄なことだって、考えたいならいくらでも考えりゃあいいじゃないの。食い物が増えて得するのはあたしだけだけど

さ

なぜか、漣の顔が浮かんだ。

外に出られず、聖の力になれないことを詫びる漣。そして彼女を助け、幸せにしたいのに、力が足りない自分。錦だけが特別なのではなくて、誰しも、ささやかな願いなら持っているはずなのだ。

「例え思いが叶わなくなつて、好きなものは好きなんだ。諦められないんだ。希望を　人の気持ちを食いものにするなんて、そんなの、許されない」

意外なことに、沸点を超えた怒りは聖を冷静にしつつあった。腹の中は煮えたぎるかのようだが、頭と耳は妙に冴えている。朝からの頭痛や疲労も、今はどこかへ吹き飛んでしまっていた。

聖の耳のことはまだ、手鞠には知れていないようだった。今はこの耳だけを頼りに、注意深く反撃の糸口を探して場を収め、錦と一緒に帰るしか道は残されていない。そして恐らく、錦を救うのは簡単な。しかし、その後は？　聖一人で手鞠を撃退できるのか？　誰かの助けを乞うのか？

闘う。

そう腹を括って、聖は耳を封じると改めて手鞠を見据えた。耳栓で『本物』の声は聞こえなくなり、手鞠の声だけが階段上の狭いスペースに反響する。

「許すの許さないのって誰がさ？　馬鹿だねえ、弱いモノは喰われるんだよ。……あんたの心も美味しそう。物好きに、自分が袖にしたこんな他人まで気にかけてね」

「他人のことまで　僕はこれまでそうやって生きてきたし、これからだってそれで構わないと思ってる。お前なんか、ヒトがどんなことを思いながら、どれだけ一生懸命がんばってるのか、分かるもんか」

「そんなの、あたしにやどうだっていいね。あたしにとって大事なものは、あんたが旨いかどうかだ」

「僕を乗っ取るのか」

「違うね。喰うんだ」

「やれよ。僕は絶対に、お前なんかには負けない。……さつさと錦さんから出る！」

誘い出せば、手鞠は錦からは出てくるはずだ。彼女は救うことができるだろう。あとは、自分自身の心がどれだけ持つか。それに賭けるしかない。

「……いい度胸じゃないか」

その言葉とともに、目の前の錦から感じるプレッシャーがふと引いて、錦の体はその場に崩れ落ちるように倒れた。

「錦さん！」

そう叫ぶと同時に意識が遠のきかけ、聖は齒を食いしばって何とか自分を保とうとする。それでもしなければ、得体の知れない何かに、どこかの奥深くへと沈められそうだった。心だけでなく、体も一瞬前までのようには動かせなくなっていた。手足がひたすらに重く感じる。

手鞠が聖を支配しようとしているのだろう。負けない。こんな卑劣な奴には、絶対に。

『さて坊や、いつまで頑張れるかねえ？』

そんな声が聖の内側から聞こえた。

「聖……か？」

ふと何物かの気配を感じて、澪は山の入り口の方へと歩みを進めていた。聖の匂いのようできて、聖ではない者のようでもある。そこで、昨日の彼との会話を思い出し、澪の顔からたちまち血の気が引いた。

まさか、聖が憑かれたなんてことはあるまいな！

そう思うと、居ても立ってもいられなかった。起こした風に乗り、一瞬で気配のもとへとたどり着くと、そこには果たして聖が倒れ込んでいた。

「聖！」

澪の呼びかけにも、聖は答えない。慌てて抱き起こそうとして、澪は彼の体から聖以外のモノの気配がするのに気付いた。危惧していたとおり、何か聖の中に入り込んでいるのは明らかだった。聖を苦しめる何者かへの怒りがわき上がったのを何とか抑え、うつ伏している体をそつと起こしてやると、聖はとぎれとぎれに澪の名を呼んだ。

「……澪さ、ま」

「聖！ 無事か！」

「……僕の耳を」

憑かれているのは確かだが、聖はぎりぎりのところで自分の意識を繋ぎ止めているようだった。状況は飲み込めないが、とにかく聖の言とおりに耳の詰め物を外してやる。その瞬間、『聖』が絶叫した。

「あんたはなんでこんな中で生きていられるんだああああ」

正確には、聖に入り込んだあやかしが、彼の口を借りているのだろう。

叫びを境に、澪の腕の中の聖の体がぐったりと力をなくす。聞き耳の運んでくる音に耐えられなくなった『何か』が出て来た。中にいた『偽物』が、聖の作戦通り外へと引きずり出され、気を失った『本物』の聖だけが澪の手に残ったのだ。

「……あんたは誰だ」

聖から抜け出た黒い影から女の声が出た。澪の姿を認め、実体を取ろうとしてうごめく。しかし、影が自らの姿を取るとはほんの刹那もなかった。

「聞く耳持たぬわ」

その言葉よりも早く、澪はその『何か』を殲滅していた。

「気がついたか。気分はどうじゃ？」

「澪さま……？」



聖がうつすらと目を開けると、なぜか真上に澗の顔があった。

目が慣れてきて、澗の背に木々の梢と厚い雲があるのを見、聖はようやく自分が空の方を向かされていることを理解した。それから自分の頭がずいぶん柔らかかなものに乗せられていることにも。

あ、膝枕。

恥ずかしさで頬が熱くなったが、澗は全く気にしてはいないようだった。それに、起きようにも体がうまく動かない。聖はありがとうその意に甘えることにした。

「すみません。……身動きできなくて」

「よい。楽にしておれ」

「手鞠は 僕に入っていたやつは」

「儂が片付けた」

聖は、はあ、とため息を漏らした。その聖を見て、澗までもが大きく息を吐く。

「わざと自分に憑かせたな。……お主の打たれ強さだけはよく分かった。あんなものを背負って、普通の人間ならば、とつくに喰われておるところじゃろうな」

「友達の体から追い出すために、自分が憑かれたところまでははつきりと覚えてます。あとはよく分かりません。ただ、相手に呑まれない、負けないっていうことしか考えてなくて。気付いたら、ここに足が向いて。……澗さまが気付いてくれてよかった」

笑ってごまかそうとした聖に、澗は刺すような視線を放つ。

「儂は誉めてはおらぬぞ。呆れかえっておるわ」

「……分かってます。でも最後に、他人の思いを嫌というほど聞かせてやれたので、僕は満足です」

成功したのは、運が良かったからに他ならない。聖は決して自惚れてはおらず、本気でそう思っていた。

どうにかして学校からこの山まで手鞠を連れ出すことができれば。そのためには聖自身が手鞠の『入れ物』になればいいとは考えていたが、手鞠が聖の聞き耳に気付いていなかったからこそできたこと

だった。

それに、山にたどり着いてからだってそうだ。聖が力の使い方を少しだが心得ており、聴力を最大限に解放したことで、結果的には手鞠をうまく追い払うことができた。しかし、それでも奴が聖の中に留まるという可能性もあっただろう。

澗は少しだけ眉を上げて表情を和らげ、「この大馬鹿者」と呟いた。

「僕はちつとも満足せん。こんなに酷い傷を作りおって」

そう言つと、彼女は指先でそつと聖の唇に触れる。なぞられて初めて、聖は痛みを感じた。

「いたっ」

「噛み切った痕じゃな。ここに来るのに、正気を保つたためにか？」

「よく覚えてませんが、多分」

「……まったく、無茶じゃのう」

澗は、このたわけめ、やれやれ、などと聞こえよがしに言つと、今日初めて微笑んだ。聖はその顔を見て、緊張感からようやく解放され、改めて自分の中には自分しかない。妙な表現だがそれがいちばんしつくり来る。ことにほつとする。

無事やりとげたのだと実感したら、あの場に置き去りにしてきた錦のことが気にかかつて仕方がなかった。彼女の心はまだ、手鞠に食い尽くされてはいなかったはずだ。ならば、聖と同じように自分を取り戻しているだろうか。

次の日の登校時、聖は件の錦に声をかけられた。

「大音くん」

聖が振り向くと、以前のように長い髪を一つにまとめた錦が立っていた。顔色も悪いということではなく、ちょっと前。おそらく、手鞠に憑かれる前の錦と何ら変わりなく見える。

「昨日、目が覚めたら屋上の扉のところまで倒れて。確か大音くんと話してたような気がするんだけど、大音くんが助けてくれた私の中にいた女の人、追いついてくれたんだよね？」

「うん、まあ、そうなるのかな」

「……実はここ何日かのことも、あまりよく思い出せないの」

錦はそう言って頭を抱えた。身体も心も手鞠に支配されていたのだから、当然だろう。それに、操られていた間のことは覚えていない方がいいようにも思う。

「ちよつと雰囲気が違うかなって感じはしたけど、別に何もなかったと思うよ」

「そう？ だったら、いいんだけど」

少しは不安が解消されたのだろうか、錦は多少表情を和らげた。かと思うと、あつと小さな声を漏らして頬を染める。

「一つだけはつきり覚えてることがあるんだ。……『例えば思いが叶わなかったって、好きなものは好きなんだ。諦められないんだ』って言葉」

それは昨日、聖が手鞠に向けて切った啖呵だった。今さらになつて恥ずかしくなり、聖は思わず赤面した。

錦は熱っぽく聖を見つめると、ゆつくりと語り出した。

「いい言葉だなんて思ったよ。……私も、大音くんがそうであるみたいに、片思いでもいいから気持ちを大事にしたいって思ったんだけど。だから 大音くんのこと、心の整理が付くまでは好きでいてもいいかな」

「……この前言ったとおり、僕には好きな人がいるけど、それでもいいのなら」

錦が微笑む。確かに以前の錦には違いなかったけれど、その顔からは数日前のおどおどした様子は消えていた。

「ありがとう」

彼女は屈託なく答え、聖の先に立って教室へと向かう。その背は、一回り大きくなったように見えた。

聖はこれまで、他人の心を聞いてしまうことを気に病んできた。覗かれたくないことや、隠しておきたいことも平気で聞き取ってしまふ耳を呪ってばかりだった。

ところが、力を受け入れられるようになって、考えが少し変わってきたのだ。聞こえてしまふのものは仕方がない、そう思えば、受け取った心の声で自分が成長すること、そして自分の思いも他の誰かを強くすることができるようなら 例えば錦のように この力を持って生まれてきた意味はあるだろう。

『あんたはなんでこんな中で生きていられるんだ』

聖が聞いた、手鞠の最期の台詞だ。今の聖なら、手鞠にこう答えるだろう。

「それはたぶん僕が、人々の思いにちよつとずつ強くしてもらっているからだ」

## 片葉が淵 前編

こここのところ残暑が厳しかったが、日が落ちるのも少しずつ早くなっているようだ。いつの間にか外は薄暗くなり、いくらか過ごしやすい時間帯にさしかかっていた。

嘉章は、無意識に息を殺し、耳を澄ましている自分を発見して、今日何度目か分からないため息を吐いた。もう、夕暮れ時になったって彼女の声など聞こえないのに。

打ちひしがれていても腹は減る。細胞はいつもの通りに活動しているのだ。食い扶持を稼ぐためには働かなければならない。そのためには、今日中に目の前の書類の空欄を全て埋めてしまわなくては。涼しいうちに片付けようと、嘉章はパソコンの前で背筋を伸ばした。聖が玄関のドアを乱暴に開け放したのは、ちょうどその時だった。

「た、ただいま、ヨシ兄！」

「どうした、ヒー。デートはどうだった？ ……そんなに荒れて、彼女とケンカでもしたのか」

聖らしくなく、靴も揃えずにどたどたと部屋に入ってくる。さっきまでの憂いを悟られないように、精一杯いつも通りの笑顔を作り、嘉章は聞き返した。

この、一回り以上も年の離れた従兄弟はちよつと特殊で、他人の負の感情に人一倍、いや何十倍も敏感だ。彼に余計な気苦労をかけるないように生活すると、気持ちをプラスに保ち続けることになり、結果的には前に歩いていける。それが、今の嘉章の救いにもなっていた。

息を弾ませながら、聖は「デートなんかじゃないよ！」と首を振った。帰宅部のはずの聖の帰りが妙に遅い人には、大分前から気づいていた。てつきり友達か彼女かと遊んでいるものだと思いきんていたが、違ったのだろうか。

からかわれたのに腹が立ったのか、眉間に皺を寄せながら聖は続ける。

「そんなことより！ ……あさ。かなでさんのことなんだけど」「彼女が、どうした」

聖の言葉に、作り笑いなど一瞬で吹っ飛んでしまった。今の自分などこんなものだと思えば嘉章は腹の底で自嘲する。取り繕うおうとしても、かなでの名を聞くだけでこれだ。

「もう一度会いたいと思うよね？」

「当たり前だろ」

「僕、今『会いたいよね』って簡単に言ってるけど、『いつかは会える』なんて、そもそも起きるか分からないようなことを信じて待つって、きつとすごく辛いと思う。それでも、その気持ちをずっと持ち続けるってできる？ かなでさんをいつまでも好きでいられる？」

聖は重ね重ねの問いかけの間も目をそらさずに、嘉章をじっと見つめていた。偽りの答えは許さない、強い瞳だった。

考えるまでもなく、嘉章の中に答えはイエスしかない。考えてみたところで、自分がどんなにかなでを愛しているのかを思い知らされるのみだ。彼女の何に、こんなにも惹かれるのかは未だに分からない。しかし、そんなことは再会できたときにじっくり悩めばいいのだ。

今はただ、もう一度会いたかった。

「当然」

すると、聖は硬かった表情をやっと崩し、大きく息を吐くとほっとしたように笑った。

「良かった。きっと、ヨシ兄ならそう言ってくれると思った」

それが、去年の秋の始まりの頃だったか。

去年は、この時期に君と出会って、別れたんだな。相変わらず俺は毎日よく眠って、腹減らして、稼いで、日々を暮らしてる。たつたひと月 いや、たった五分だけの思い出を大事に大事にしまいだんだまま、聖の言う『起きるかすら分らないこと』を待ちながら。

声にするのも空しいような気がして、嘉章は心の中でかなでへの言葉を呟く。

もう、あれから一年近くが経ち、気付けばお盆になっていた。

前の夏と同様にプール開放の監督の割り当てはあったが、さすがにこの時期はそれも休み。聖はあさってまで久しぶりに家族の元に戻っており、一人暮らしには広すぎる部屋には嘉章だけが残っていた。

パソコンに向かい、仕事の書類のファイルを開きつぱなしのまま、嘉章は窓を見る。それは、かなでが迷い、入り込んできた窓だった。その外、アパートの裏の林は目の覚めるような濃い緑色に覆われてあふれる命をこの部屋にまでも振りまこうとしている。

あの林の奥深くには、かなで 正確には、かなでだった蝉のなきがらが眠っているのだ。それを思ってもなお、嘉章は外を眺めずにはいられなかった。森には何度となく足を運んで、彼女の名を呼んでみたり、誰もいない空に向かって話しかけたりしている。しかし、一年待ったが何も起きなかった。

待っているだけでは、何もやってこないんだろうか。奇跡は、自ら起こすものなのだろうか。

とはいえ、『向こうの世界』、つまり聖の耳が聞いているような化け物たちの住む世界のことを、嘉章は全く知らなかった。ただ待っただけでは駄目だというなら、これ以上何をすれば彼女に会えるのか、見当もつかない。

考えに行き詰まって仕方なくディスプレイに視線を戻すと、デスクトップのとあるファイルがふと目に留まった。

ファイル名は『ご近所探険地図』、勤め先の小学校で行った校外学習の際、生徒が使った地図を取り込んだものだった。学区内をグルーブごとに歩き回り、見つけた石碑や自然などを地図に書き留めて、地域の良いところを探そうという試みだった。何気なくファイルを開いてみると、『わき水』『大きいさくらの木』『古い石ひ』などなど、子供の字で思い思いの書き込みが入られている。その中に『えんむすびの神さま』という項目を見つけ、そういえば子供たちに聞かれたな、と嘉章は唐突に思い出した。

『よつしー先生、えんむすびの神社ってどういう意味？』

『お祈りすると、好きな人と両思いになるってこと』

『先生はお祈りしないの？』

『先生はな、今、好きな人いないからいいんだよ』

好きな人はいる。しかし、この世にはいない。そう正直に言うわけにもいかず、はぐらかしたときの胸の痛みまでもが蘇ってくる。

「縁結びねえ……。ダメもとで、願掛けしてみるかな」

思い詰めていたって仕方がないのだ。自分は待っているなんてガラじゃない。ならば方法を探して、こちらから会いに行くのはどうだろう。一年も待ったのだから、いい加減攻めに回ってもいい頃じゃないのか。

ちようどお盆だし、かなでも帰って来やすいかもしれない。嘉章は地図を印刷すると、そんなことを考えながら外へと踏み出した。

地図と『えんむすびの神さま』という書き込みを頼りに嘉章がたどり着いたのは、山すそに立つ小ぶりなお社だった。山の登り口に控えめに設けられた鳥居から、林の中へと獣道が続いている。

道に沿って少し歩くと、小さな鳥居が何重にも並び立つ広場に出た。山の下にあったものは朱色のペンキで塗られていたが、こちら



は昔の風情を残した味わいのある　　はつきり言つと、ずいぶんと古ぼけた　　色合いだ。

「……なんだ？」

嘉章は顔をしかめ、思わず独りごちた。

古びた鳥居たちの奥に、やはり古ぼけた社が見える。その、鳥居の向こう側がやけに赤いのだ。

山水が出ているのか、地面はやけにぬかるんでいた。そういえば、山に入ったからか、湿った土のおかげか、それともこの神社の雰囲気こそうさせるのか、肌を感じる暑さは家を出たときよりも和らいでいた。

あいにくサンダルで出てきてしまっていた嘉章は、泥に足を取られながら鳥居の群れをくぐって行く。近づいてみると、鮮やかな赤は、社殿やその周りの木々に結びつけられた小さな布の色であることが分かった。それも、一枚ではなく何千何万という数。おまじないか何かなのだろうが、人気のない神社に真っ赤な布がなびく様子は神秘的ともいえるし、恐ろしさも感じる。

社の傍らにはさびの浮いた古い看板が設置されていた。赤茶色に変色し、ほとんど判読できなくなったそれを、嘉章は顔を寄せて読みにかかった。

「……境内の泉は、むかしは大きな淵でした。そこにわずか一本だけ生える片葉の葦に恋の願いを懸けると、不思議なことに想いが叶うと言われています」

嘉章の浅い知識に照らし合わせてみれば、普通、葦は葉が色々な方向に出るはずだ。片葉ということは、それが片側にしか出ないのか。どういふ突然変異かは知らないが、いかにも片恋に効きそうだ。

賽銭箱の横には小さな木箱が置かれ、中には細長い赤い端切れとサインペンが入っていた。ご自由にどうぞとの張り紙もある。社の横に張り出す枝を見れば、布にはそれぞれ違った筆跡で願い事が記

されていた。願いを書いて、木に結びつけるのだろう。なるほど、数え切れないほどの人間が願懸けした結果が、この無数の赤い布か。嘉章は、まるで木々や社が血を流しているかのような、そして叶わぬ思いが真つ赤に淀んでいるような眺めに、しばし圧倒されて立ちすくんでいた。この世には自分のような人間がこんなにもたくさんいるのだ。

しかし、ちょっと待て。

違和感に、嘉章は首を捻った。

願いを懸けるべきは、『片葉の葦』のはずだ。それが、なぜ木や社殿に？

そこで更に、嘉章は看板にある文章と目の前に広がる風景との齟齬に気付いた。

片葉の葦なんて、いったいどこにあるというのだ。第一、淵、いや泉そのものがないじゃないか！

はっとして振り返ったのは、先ほど通り抜けてきた、足が沈んだぬかるみのあたり。嘉章はそこまで引き返し、辺りを見回す。ちよろちよると流れてくる水の流れをたどっていくと、鳥居群の脇の草むらに湧泉があった。広さも深さもちょうど大きめのフライパン程度のサイズ、ちっぴけな水たまりの横には、小さな看板が藪に埋もれていた。社の横にあるのと同様に赤錆色に変色した立て札には、『葦淵の跡』とある。

あしぶち。とすると、ここが昔大きな淵だったところで、例の葦があるはずで。

「ないな。どう見ても、ない」

それでみんな、木に布を結んでいるのだ。

この池の周りには、赤い布は一枚も無い。目をこらしても、水たまりには片葉の葦どころか普通の葦すら見えない。

それどころかその水たまり自体も枯れゆくあるように、嘉章には見えた。湧き水で保たれていた淵だったのだろうか。今となっては足下を濡らす程度のこの流れも、かつては大きな池に注いでいたの

だろうか。

「……ま、せつかくだしな」

考えても仕方がない。嘉章は、失われてしまったものを取り戻す術は知らなかった。だからこそ、ここに来たのだ。

迷った末、布には『君の声を聞かせて欲しい。伝えたいことがあるから、こつちに戻ってこい』と書いた。

かなでの最期の声は本当に美しかったと、聖は涙混じりに言っていた。しかし、それは『聞き耳』の彼だけが捉えることができたもので、嘉章はついに彼女の声を聞けずじまいだった。そして、嘉章が最後に伝えたかった想いも、かなでは届けられていない。

本来なら葦に願掛けしたいところだが、ないのならせめてこの池の周りの藪に布を結んで、帰ろう。

願いたいことは数限りなくあるが、今はただどんな形でもいいから、もう一度彼女に会って声を聞きたかった。透けた身体で消えゆくかなでではなく、夏のプールで初めて出会ったときのように、はにかんで嘉章を見上げるかなでの姿を、もう一度。

しゃがみ込んでしっかりと布を縛りつけ、嘉章は目を閉じて手を合わせた。

ずいぶん長くそうしていたが、漂ってきた雨の匂いに嘉章はようやく顔を上げた。いつの間にか空には入道雲が立ちこめ、雨粒が地面を叩くバチバチという音がし始めていた。

「おめえ、何で、ここに結んでる？ みんな、あっちに結んでんぞ」  
誰もいないはずだった背後から地元訛りの太い声がして、嘉章はぎよつとして振り返った。未だ腰を落としている嘉章を、腕組みした男が見下ろしている。

「その看板に、淵に生えてる片葉の葦に願えって書いてあるんで。葦は見つからなかったけど、これ、淵の跡でしょう」

嘉章がそう言うと、男は細い目をさらに細くする。

「そりやまったく正しいなあ。……ほんとに残念ながらな、片葉の葦はもう大分前に枯れちまったようだよ」

色白な瓜実顔で、若いのか老けているのかよく分からない顔立ちをしている。背は高いが肩幅は広くない。そのひよろりとした印象が優男ぶりをさらに増幅させていた。

夕立は勢いを増し、目の前の景色を霞ませるほどの降りになっていた。嘉章が雨を避けようと神社の軒下へと移動すると、なぜか男もついてきた。嘉章の後ろから、声が追ってくる。

「しっかし、こんな寂れたとこまで来て、長々と頭下げて。そんなに苦しい恋路かよ？」

戸惑いながらも、「ええ、まあ」と答えをばかす。

しかし直後、男は嘉章の心臓が止まるかと思うほどの言葉を返してきた。

「聞くだけ野暮つてもんか。きついよなあ、ヒトじゃねえもんこの色恋は」

息を呑んで、嘉章は隣の男の顔を見る。

彼はやはりのんびりとした笑顔のまま、雨の落ちてくる空を眺

めていた。相変わらず飄々としている横顔が、ほんの一瞬透けて、向こうの景色を見せる。かなでと同じだった。

だとすると、彼も人ではない。しかも消えかけているということ。は、彼女同様死期が近いのか。

そう思い至つても、嘉章は驚きも怖さも全く感じなかった。男の緊張感のない表情がそう思わせるのか、それとも嘉章が知るあやかしが、かなでだけだからなのか。あるいは、そのどちらもなのかもしれない。この優男が人を傷つけたり、取って喰ったりするように、どうしても見えないのだった。

人外の者を前にしたとき、いつたいどう応じるのが最善か、嘉章には分からない。聖なら、どうするだろう。いつもの穏やかな顔で、あの特殊な耳で化け物の言葉をじっと待つだろうか。

聖ならきつとそうだろう。

そう考え、嘉章は男の表情を注意深く窺いながら耳を澄ます。聖と違って特別な音は何一つ入っては来ないが、少なくとも目の前の青年が自分に敵意を持っていないようだと感じることができた。

そのうちに、男は顎に手をやると、鼻をひくつかせてにやりと笑った。

「おめえ、ほんとに少しだがなあ、人じゃねえモンの匂いがすんだ。相手は、そいつだろ？」

「……あんたは、いつたい？」

「なんだと思うかい？」

「少なくとも、人ではないみたいですね」

「ウゲツつてんだ。有るに月でな。……おれあ、ここの又しさ」

有月がそう言っ指差したのは、例の水たまりだった。

「すると、縁結びの神様？」

「おう。本性は蛇だよ。今見せられる証拠はねえけど」

嬉しげにも見える顔で、有月は頷く。蛇の化身と言われて、彼の細長いシルエットにもなんとなく納得がいった。この青年が男女の仲を取り持ってくれるとは見えないが、駄目で元々、という心構え

で来たのだ。本当に神様がここにいるのなら嘉章の願うことは一つしかなかった。

嘉章は立ち上がって有月に向き直り、深々と腰を折った。

「お願いします、有月さま。俺は、好きな人にもう一度会いたいです。あなたの力で、助けていただけませんか。……どうか、お願いします。もしできるなら、彼女を呼び戻してください」

頭を下げたままの嘉章に、有月は初めて陰りの色を含んだ声で尋ねる。

「もう一度　って、おめえの相手は、今、どうしてんだ？」

「消えました。去年の、ちょうど今頃に。……今は、ここからすぐの山で、眠っていますよ」

「死んだ者を蘇らせようってのかい」

「ええ。いつかまた会えると願ってれば叶うと、信じてます」

「ふうん。……そう思いこんで、『会えねえ』って思い知るのを先送りして、自分で自分を騙してんじゃねえのか。消えちまったんだらう？　戻ってくるって保証はあるのかい？」

鋭い指摘ながらも意地の悪い言い方ではなく、どこか悲しげな有月に、嘉章は苦笑いで答えた。いつかまた、と純粹に思っただけの間は、彼女が消えたことを忘れていられるし、心が麻痺したまま生きていける。はじめのうちは、嘉章自身もそう考えていた節があった。

しかし時が過ぎ、自分は生きていけるのかなではこの世にはいないということを実感してもなお、彼女を求める気持ちは強くなるばかりで、麻痺などしなかった。例え世間の誰もが『かなでは戻らない』と言ったところで、やはり嘉章は再会を信じ続けるだろう。

有月にうまく伝わるかは分からなかったが、嘉章は正直に告げる。「会えないって結論は、俺にはないんですよ」

「ふうん。……おめえは、例えどんな形でもその娘に会いてえんだな」

「はい」

「おめえの女は、呼び戻されて果たして喜ぶのかい？ 迷惑がると考えはしねえかい。それによ、長く一緒にいれば、当然いいところだけ見つめるってわけにゃあいかなくなるぞ」

「それは」

嘉章は、言葉を切って考え込む。きれいな思い出だけを胸に、かなでは逝ってしまった。彼女はそれで満足だったのだろうか。再び会えたその時、自分の隣でもっと長く生きてみたいと思っただけではないだろうか。

「俺は、彼女の声を聞くことすらできなかった。喧嘩したことさえもない。それほど短い間しか、一緒にはいられなかったんです」  
有月に語る自分の声が熱を帯びていることに、嘉章は気付いていた。

気を揉ませたくなくて、かなでのことは聖にさえ話していない。彼女のことを独り言以外で口に出したのはほぼ一年ぶりだった。うじうじと思い倦んでいた日々の澱が、有月との数分の会話ですいぶん除かれている。

「いや目を見開いて、有月はまた「ふうん」と頷く。

「一途だね、おめえも。おれあ、馬鹿正直な奴は好きだぞ。……おや、もう雨が止むなあ」

有月は明るくなりつつある空を眩しそうに見上げた。低く厚かった雲は割れ、日の光が漏れ出始めている。木々や地面に打ち付ける雨の音は確かに、まばらになり始めていた。暑いのは得意じゃねえのよ、と、有月は自分の腰の辺りの埃をはたき、立ち上がった。

「今日はこれまでだ、帰らせて貰うよ。……もしおめえの考えが変わらないなら、次の夕立に、またここに来いな。こんな死に損ないでも、何か力になってやれるかもしれないねえよ」

そう言つと有月は、嘉章の返事も待たずに、軒下から出て淵の跡の方へすたすたと歩き出した。あまりにそれが唐突で、嘉章は慌てて疑問をぶつける。

「待つて！ どうして、俺なんかに声をかけたんですか！」

「おめえからあやかしの匂いを嗅いだんでな、もしやと思ってさあ」  
有月は振り向くと、顎を撫でながら寂しそうに微笑んだ。

「おれの想い人はヒトの娘だったんだ。おれがヒトじゃねえと知っても心変わりもせず、将来を誓い合ってくれたよ。その途端に、流行病で逝った。……なあ、なんか、似てんだろ？」

笑みを崩さずにそう言い残して、有月は再び歩を進めた。やがて先ほどの水たまりがあった辺りでその姿は地面に沈み込むように、まるで溶けるようにふっとかき消えた。どうやら、淵に帰ったらしかった。

ちようど雨は止んだところで、濡れた木の葉は緑も鮮やかにきらきらと光っている。葉先に滴る雫を眺めながら、嘉章は有月の言葉を思い返していた。『嘉章も一途だ』と彼は言ったが、言外には有月自身もそうだという含みがあったのだ。恐らく今もまだ、有月はその人間の娘を想っているのだろう。片翼を失ってから笑えるようになるまで、一体どれほどの時間を要したのか、嘉章には想像もつかなかった。

神となり、嘉章のように心に同じ痛みを抱える人々を励ましているが、有月本人は運命の相手と再び会いたいとは考えないのだろうか。やはり、それは自分勝手な願いだからと、自身を律しているのだろうか。

「……次の夕立、か」

また彼に会えるなら、今度は有月のことも聞いてみたいと、嘉章は思った。



## 片葉が淵 後編

「おう、やっぱ来たか」

雨の中、葦淵を尋ねた嘉章に片手を振り、有月は相変わらずの笑顔で答えた。

「覚悟は、できたかい？」

「はい。力になってもらえるというなら、機会は逃せません」

はつきりと約束したわけではなかったが、あの日以来の夕立に、嘉章はまっすぐにここを目指してきた。

いい心がけだ、と有月は嘉章の肩を叩く。ぬるい雨が落ちる蒸し暑い空気の中、有月の手だけがひんやりと冷たくて、嘉章は思わず身を縮めた。一方の有月はそんな嘉章の様子にはお構いなしに、やはり笑っている。

大事な人を失って、ひとりきりでずっと過ごして、どうしてこの人は笑っていられるのだろう。かなでを亡くした喪失感からいまだ立ち直れてはいなかった嘉章は、思い立って尋ねた。

「……有月さま。一つ訊いてもいいでしょうか」  
「ん？」

「有月さまは、お相手を呼び戻そうとは考えなかったんですか。独りになって、寂しくはないんですか」

「寂しいさあ」

彼は、きよとんととして嘉章を見つめると、当然、といった口調ですぐに切り返す。その姿に、嘉章はわずかながら苛立ちを覚えた。

「……でも、あなたは平気そうに笑ってる」

嘉章はついうっかり口に出してしまってから、有月の表情が凍り付いているのに愕然とした。次の瞬間、有月は初めて、波立った声で叫んだ。

「これはな、平気に見せてんだ！ おめえ、自分が同じ思いしてわかってるはずじゃねえのか？ 愛するやつがない世界なんて、つ

まんねえに決まってるだろう。……このあたりもどんどん住みにくくなつて、おれあ今じゃこんな小さな池に一人きりだ。それでもおれは生き延びて、やらなきゃなんねえことがあつたんだ。生きていく以上は、大切な人たちを心配させまいと考えるだろう？ おめえは、『いつでも明るい自分』を演じてたことはねえのかい？」

有月を覆っていた殻が割れるのが、嘉章には分かる。それはまるで苦しさのあまり無理やり喉から絞り出したような呻きでもあり、同時に獲物に飛びかかる獣の牙のように鋭い糾弾でもあつた。ほんの少しできた亀裂から、まるで泉のように彼の想いが噴き出してくる。

嘉章はその剣幕に押されながら、自分の浅慮を恥じていた。有月のやるべきことというのが何なのかは想像もつかないが、嘉章自身だつてかなでへの祈りのためにここ一年を過ごしてきた。表面上は楽しい先生、元気な従兄弟をひたすら演じ通してきたというのに、有月にはその苦勞を汲み取るうとはしなかった。

「それにな、おれの女は呼び戻すまでもなく側にいたよ。……あいつの宿つてたもんは、もう、とつくに枯れちまつたがねえ」

落ち着きを取り戻した有月は静かに語りかけ、黙り込む嘉章を意味ありげに見た。その瞳は、再び穏やかに凪いでいて、嘉章はほつとしながらも切り替えの早さに舌を巻く。年の功なのだろうか。

「枯れた？」

有月の言葉を反芻しながら、嘉章は記憶を辿る。

『ほんとに残念ながら、片葉の葦はもう大分前に枯れちまつたよ  
うだよ』

ごく最近聞いた覚えがあつたとは思つたが、ほぼ瞬時に、出会つた日の有月のせりふが痛いほど鮮やかに蘇つてきた。浮かんだ単語を、恐る恐る口にする。

「……片葉の、葦」

有月はやりと笑つたものの、そんなに嬉しくもなさそうに「ご明察」と答えた。その目は、どこか遠くの一点を見据えている。嘉

章が視線を辿ると、それはどうやら葦淵の跡　有月の住処　を指しているようだった。つられて嘉章もそちらを見ていると、有月はやがて一つため息を吐いて、淡々と自分の過去を話し出した。

「相手が淵の又シのおれだと知って、娘を不憫に思つた親たちがなきがらを沈めてくれたのさあ。そこから生えた葦は片葉でな、葉は常に淵の真ん中の、おれの寢床を指してたよ。おれは長年その葦を守り続けてきたんだが、結局水は涸れ始めて、水辺にあつたあいつの葦もなくなつちまつた。護るべきもんはもう無いわけだ。……いくら詣でるヒトが多いとはいえ、おれは淵に依存してるもののけだ。じきに淵が干上がれば、おれもいなくなる」

「いなくなるって」

「事実、もう消えかけてるのさ。……なら、最期に同じ境遇のやつを一人くらい助けたっていいんじゃないかねえかと思つたわけよ」

葦に姿を変えても有月を求めていた娘と、その傍らに居続け、黄泉へと見送つた有月。『やらなきやなんねえこと』が、嘉章にはやつと見えてきていた。娘の葦を見守るために彼は生き延びなくてはいけなかった。壮絶な悲しみがあつただろうに、それを押し隠して笑顔で彼女の隣にいたのだらう。葦が枯れた今ではその必要もなくなつてしまつたが、笑顔の仮面だけは今もなお残つている。

「俺、ずいぶん失礼なことを言いました。申し訳ない」

何を言つていいのか分からずに、嘉章は有月に向かい深々と頭を下げた。別れを二度も経験している有月だから、嘉章にいろいろ助言をし、世話を焼いてくれようとしていたのだ。自分の最期の力を使おうとしてまでも。

有月は空気を切り替えるように「気にしちやいねえよ」と明るく言つて頭を掻くと、そのまま腕を組み、地べたに胡座をかいて座り込む。

「おれは水の怪だ。弱つてる今じゃ、雨の落ちるときしか自由に動けねえから、時間はそんなにねえぞ。……ちよつと醜い姿になるが、怖がらねえでくれよ。近ごろ、淵が小さくなつたんでめつきり

力がなくなつちまつた。人になるのも結構疲れるのさ」

人の態なりは保つてはいたものの、目の前の有月には、みるみるうちにくすんだ光を放つ鱗が逆立ちはじめていた。ひよろりとした姿はたちまちに手足を失い、太い綱のように変化してゆく。呆気にとられていた嘉章が気付けば、人語を操る大蛇。本性を現した有月がそこにいた。優に嘉章の背丈を超えるサイズの蛇が、蛇らしくもなくぼやくのがなんだか可笑しい。

「さて。……おれの力をおめえの女にくれてやる。葦淵のヌシとしてじゃあなくて、この社の神として呼び戻すことになるから、淵が涸れても問題はねえ。ただし、詣でるヒトがいなくなったら消えるぞ。まあ、おめえはきつと死ぬまでここに通うだろうから、そこは心配しちやいないがね」

「はい」

「それともう一つ。今回はおれがついてるから呼んでやれるがな、一旦ここに収まつちまえば、よほどの力を得ない限りは未来永劫ここからは出られねえ。社の神は自分の縄張りの中だけが行動範囲だ。それでも構わねえな」

嘉章に、もう迷いはなかった。例え制限の付いた命であっても、一緒に暮らせなくても、そんなことは何の障害にもなりはしない。かなでが、どんな形でも自分を求め続けてくれていると信じる。そして自分自身も、かなでを守っていく決心ができている。

有月は、表情の読めない瞳を光らせながら嘉章を覗き込んでいる。今は見えないものの、大蛇の無機質な目の奥には優しげな青年の笑顔があるはずだ。それを思いながら、嘉章が力強く頷くと、蛇の有月も満足そうに頭を上下に振った。

「おめえみたいなのに想われる女は、幸せだろうなあ。……今はちようど盆だ。彼岸と此岸が近いからやりやすいかもしれねえ。おれも力を貸してやるから、ありったけの心で呼び寄せろよ」

「分かりました」

やり方など分からない。ただ一心に念じるしか嘉章にはできない

が、今求められているのは正にその力なのだろう。

嘉章は社の前で手を合わせ、頭を垂れた。雨は止む気配もなく、むしる降りには強くなってきていて、祈り始めた嘉章の身体を容赦なく濡らす。

背に固い鱗の感触がしたかと思うと、有月の冷たい身体が触れた。ひやりとした温度はあつという間にぐんと上がり、嘉章の背中が焼かれているように熱くなる。有月が自分に力を分けてくれているのだろう。

そんなことにはまるで構わず、嘉章は胸の中でひたすら呟き続けた。

お願いします。

かなでに会わせてください。彼女の本当の声を、俺に聞かせてください。そしてどうか一言、あのとき言えなかったことを伝えさせてください。

そのためになら、何でもするから。

もはや誰に何を頼んでいるのかすら分からなくなったところ、後ろの有月がかすれた声で「見てみな」と嘉章の背中を押した。そこにはすでに先ほどまでの熱はない。

嘉章がそつと頭を上げると、小さな社のちよつど雨が当たらない軒下に、目一杯の笑みを浮かべて、女性が腰掛けていた。

目に焼き付いている最期の表情と同じ、幸せそうな笑顔。透けるほど白い肌に、漆黒の髪が豊かに広がり、滑る。間違いなく、嘉章が一年間追い求めていた姿。

「かなで！」

それは、確かにかなでだった。

嘉章は足をもつれさせながらも駆け寄り、ほとんど飛びつくよう

にしてかなでをかき抱く。瞳を閉じ、彼女の頬を擦り寄せるようにしっかりと自分の頬へと押し当てると、息づかいが皮膚越しに聞こえてきた。そしてさらに伝わってくる、別の震え。

「……よ、し、あ、き、さま」

その声に、嘉章は思わずかなでの身体を自分から引き離し、彼女の口元を凝視した。

そう。それは声だった。嘉章の想像の範疇をはるかに超えた可憐な音が、声を持たないはずの彼女から。

「そりゃ、ほんのおまけだよ」

有月の、どこかとぼけたような声がする。礼を言う心の余裕もない嘉章に、かなでが畳み掛ける。

「嘉章さま。……お慕い申し上げております、嘉章さま！」

幻聴でも何でもなく、その声はかなでの喉から発せられたものだった。

驚愕のあまり動きを止めた嘉章の胸に、目を潤ませたかなでが飛び込んできた。その勢いの良さに、嘉章がたまらず夕立で濡れた地面に倒れ込むと、彼女も一緒に転げる。身体の下で、水しぶきが跳ねる音が聞こえた。

「私、声が出ます！」

「ああ」

「嘉章さま。聞いてくださっていますか、私の」

「ああ！」

かなでが　愛するひとが確かに目の前にいて、自分の名を呼んでいる。これは何だ。この幸せが奇跡じゃなくて何だというのだ。

嘉章はうまく気持ちを表せずに、とにかく呆れるほど何度も頷いて彼女に答えた。一度開いた口を閉じ、返事の代わりにかなでをきつく抱きしめる。何か言っていると泣けてしまいそうで、なかなか思うように言葉を紡ぐことができないのだ。

「……俺を好きになってくれて、ありがとう」

やっと押し出されたのは、去年の夏に伝えられなかった告白だった

た。かなでは嘉章の耳元で「こちらこそ」と囁くと、力を抜いて身を嘉章にゆだねる。すると、予想以上の重さと柔らかさが、しつかりとした存在感となつて嘉章の腕に返つてきた。

ずっとこのままでいたい。喜びで痺れる頭の片隅でぼんやりとそんなことを考えていると、有月が二人に声を掛けてきた。

「おれみてえな独りもんにやあ、目の毒だねえ」

有月はそう言いながらも特に目を逸らすでもなく、嘉章とかなでとを見守っている。相変わらずの蛇体だから表情は分からないが、からかうような声は至極機嫌が良さそうだ。

二人は有月の言葉にさつと赤面し、慌てて距離を取った。

「おや、もう終わりかい？」

いくら感謝してもしきれないほどの喜びを、有月からはもらった。嘉章が慌てて頭を下げ、礼を言つと、かなでもそれに従つ。

「本当に 本当に、ありがとうございます、有月さま」

「まさか、声まで。いただいたお力は、必ずこの社のために使います」

有月は長い尾を振るつと、「なあに、『さあびす』だ」といつもの調子で答えた。

「もつと見ていたいのはやまやまだけどな、もう時間がねえのよ。おれも、あいつのところに行つてやらねえとな。……雨が上がる前に空に昇る。辛気くさいのは嫌いでね。気を遣うのはやめてくれな」

雨の音すら聞こえないほどに浮ついていたことを、嘉章はそれで初めて気付いた。見上げると、雲の色は白っぽく変わり、蝉の声が戻りつつある。夕立のピークはとうに過ぎ、雨粒は小さく軽くなつていた。

昇るといふのは、あちらの世界に旅立つという意味だろう。思い出してみれば、夕立の日に出会った時から有月の身体はすでに力を無くしかけ、透けていた。嘉章とかなでの縁を結んだら、この世を去る。有月ははじめからその覚悟で自分に声を掛けたのだと、嘉章はもう分かっていた。

「有月さま」

「おう。……最期のお役目がおめえらで良かったよ。ありがとうな、ヨシアキにカナデ」

有月はそう言うと、天を指して鎌首をもたげた。尾で地面を蹴り、まるで龍のように空へと泳ぎ出す。その姿は空中を這うようにして進みながらぐんぐん小さくなり、やがて灰色の空の彼方へと消えていった。

有月がいなくなったというのに、見送った嘉章は不思議と寂しさや悲しさは感じなかった。なぜだか、確信があったからだ。彼岸と此岸が近い時期というなら、きつと彼も想う相手、葦の娘に会えることだろう、と。

「ヨシ兄、何なの？ ニヤニヤして。休み中、何かいいことでもあった？」

お盆の帰省から帰ってきた聖に何から告げようか、嘉章は逸る心を必死になだめながら切り出す。

「おう、聞いて驚けよ。実はさ」



## ふるさとの手

夏休みも中ほどとなり、蒸し暑さも本番。日は傾き始めたとはいえ、少し動いただけで体中の水分がじわじわと失われていく。

増して、今は山登りの最中。この調子では、溲の元に着く前に干からびてしまいそうだ。お盆を過ぎれば急に涼しくなって、この暑さが恋しくなるのだとは頭で分かってはいても、身体は敏感に反応するのだから仕方がない。

登り切ったところはちよつとした広場だ。

その真ん中、大きな杉の根に腰掛けていた溲は、聖とは対照的に涼しげな顔をしていた。身体の作りがヒトとは違うのだろうから、当たり前か。そもそも熱を感じているのかどうかすら怪しいものだ。溲は、聖をちらりと見ると首を傾げる。

「何じゃ、妙な顔をしておつて。暑さに当たったか？」

ばつさりと切り捨てられ、普段通りを装ったつもりだった聖は口を尖らせて否定した。

「そんなことないですよ。強いていえば、さつき珍しい人に会ったからかもしれません」

「珍しい？」

「はい。……ヒト、じゃないですね。水の生き物というか、水の化け物というか」

「ほう、それで」

退屈していたのか、溲は身を乗り出して話の続きをせがむ。予想通りの食いつきに、聖はしてやったりという気分になると同時に、胸を撫で下ろす。こうして溲に会い、確信したことが二つあったからだ。

それは少し時間を遡り、同じ日の真昼過ぎのこと。

聖が自転車を止めて逃げ込んでいたのは、田んぼの中を通る農道にぼつりと残された大きな木の下だった。真夏のごくごく短い木陰の中だとしても、日が照りつける周りよりもまだましだ。

聖は、ミネラルウォーター　先ほどスーパーで仕入れたペットボトルだ　を開けて一口飲んだ。水なのだから当たり前だけれど、透き通った味わいの冷たい液体が心地よく喉を潤していき、ようやく一息つく。普段、聖には水を買うなどという趣味はないが、今日は暑さと渴きに耐えられなかったのだ。

身体の内側だけが冷えて、別の生き物になったような気分。しかし、体の中がちょっと冷えたおかげで、かえって暑さが身に染みてきた。水分を取ったのが仇となったのか、ますます汗が噴き出してくる。

逆効果だったのかもしれないと後悔してももう遅く、聖は思わず呟いた。

「暑いなあ」

「暑い。……死ぬ」

予期せぬ返答があった。聖は心底驚いて周囲を見回したが、人影はない。ただ、声だけが相変わらず届いてくる。

「……死ぬ。死にそう。誰か助けて」

どうやら、聖の独り言に誰かが答えたというわけではなく、助けを求める声を聖の『聞き耳』がたまたまキャッチしたらしかった。

死にそうな人　無差別に声を拾うこの耳のことだ、声の出どころが人かどうかは分からないが　の存在を知りながら見過ごすことはできないだろう。木の陰から出て、自分が通ってきた農道に沿って声の主を捜していると、立ち上る陽炎の向こうから近づいてくる人影があった。

『水、水が欲しい』

目を凝らせば、それは聖と同年代くらいの少年だった。子供が少ない田舎のこと、もしかしたら知り合いではと一瞬思ったが、よく

考えれば顔見知りなら声で分かるはずだ。改めて見てみると、どこかの学校の制服らしき上下を身に着けているが、聖にはまったく見覚えのない顔だった。

こちらに向かつてよろよろと歩いてくる彼を、聖は恐る恐る呼び止めてみた。

「あの、すみません」

「……あ？」

少年は、かすれた声で答えると聖に顔を向けた。長めの前髪のでいで彼の表情は読めないが、心ここにあらず、といった様子だ。

思い切って話し掛けたのはいいが、まさか『心の声を聞いたんですが』とは言えない。

あたふたと言葉を探していた聖に、少年はぼんやりと虚ろな眼差しを向けるだけだった。前髪の下の目は、必死に焦点を合わせようとしている。声が聞こえるとか聞こえないとかの問題ではなく、見るからに辛そうなのだ。

これなら、というと不謹慎だが、彼がこんな状態なら『聞き耳』

のことを伏せても怪しまれないだろう。苦しげな少年には悪いとは思いながら、聖は『耳』に関する部分をぼかして答えることにした。

「いえ。何か困っているように見えたので、つい」

「……そう、見える？」

「ええ、どこか体の具合でも悪いとかですか？」

「具合っていうか、ちよつと渴いてて」

そこまで言いかけて、少年の言葉が途切れた。

いままで定まらなかった視線。それが刺さるのではないかと思えるほど集中しているのは、聖が手に持ったビニール袋だった。

それだけではなく、彼の『声』も聖にただ一つのことを訴え続けている。

『水、水、水水水水』

みず。

水を求めているだけにしては、ずいぶんと切羽詰っている。しか

し、不信に思いつつも放つてはおけなかった。

「喉渴いてるなら、水、ありますけど」

「水くれ、頼む」

あまりに露骨な少年の要求に押され、聖は苦笑いしながら「僕の飲みかけでいいなら」と断って、先ほどのペットボトルを差し出す。聖がそう言うが早いか、少年は聖の手からボトルを奪い取った。

「わっ、ちょ、ちよつと！」

次の瞬間、彼は全く予想外の行動に出ていた。

驚く聖の言葉など聞く耳持たず、彼はペットボトルの蓋を開けると、その中身を自分の頭の上へと注いだのだ。まだ十分に冷えている水が、勢いよく少年の髪、そして体全体を濡らしていく。当然、水を『飲む』のだろうと思いついていた聖は、啞然として彼を見つめた。何て豪快な涼み方だろう。

ほとんど減つていなくなつたミネラルウォーターは、あつという間に空になる。少年はそれでも頭の上でボトルを何度も上下させ、最後の一滴まで自らに振りかけようとしていたが、やがて諦めて蓋を元通りに閉め直した。

そして、一つ伸びをしてから本当に気持ちよさそうに叫ぶ。

「あーっ、生き返つたような気分！……助かつた！ ありがとう！」

未だ呆気にとられたままの聖に、少年がペットボトルを返してきた。それと引き替えに、聖は首に掛けていたスポーツタオルを少年に差し出す。

とりあえず欲求が満たされ、やっと恥ずかしさが湧いてきたのか、彼は照れくさそうに笑いながらそれを辞退した。

「……いや、さすがにそこまでしてもらっちゃ悪いよ。それより、水全部使っちゃってごめん。あんたのおかげで『皿』が」

「さらっ？」

少年は目を丸くして、「げ」と一言漏らすと、自らの口に手を当てた。急に横を向いて目を逸らし、拳動が一段と怪しくなった彼を見て、聖は耳を澄ます。何が起こったのかは、彼の更なる『心の声』

ですぐに明らかになった。

『皿って、正体ばれたらどうすんの俺』

「正体？」

そう、自分の素性を自ら明かしてしまいそうになったのだ。皿を持ち、水が必要な物の怪といえは 聖にも思い当たる名はあったが、その答えはすぐに彼自身が語ってしまった。

『俺、今、もしかしてカツパとかって言っちゃった？』

いいや口に出して言うてはいませんよ、と突っ込みを入れようとして、聖はついに堪えきれなくなり吹き出した。間髪を入れず、少年の鋭い声が飛んでくる。

「笑ってんじゃねえよ」

少年は真つ赤になつた頬を丸く膨らませながら、聖を睨んでいた。今にも聖の胸倉を掴んで噛み付いてやるうか、という勢いだ。

初対面の彼に対して、確かにからかい過ぎたところはあつたかもしれない。しかし、笑うなといわれたところで、この状況で他に取れる態度があつたら教えて欲しいと聖は思う。加えて、彼は人が差し出した水をすべて使ってしまったのだから、ちよつとは遠慮してくれてもいいのに。

そう考えるとなんだか少し腹が立つてきて、何かビシツといい返球を決めてやるうという気になつてきた。仕返しというわけではないが、聖はごく自然なふうを装いつつ、決定的な一言を放つ。

「すみませんねえ。……ところで河童さん、やっぱりキュウリは好物？」

少年の顔の色はたちまち赤から青へと変わり、次いで、膨れていた頬がみるみるうちにしぼんだ。今にも泣き出しそうになったかと思つと、不機嫌そうに口をひん曲げる。かわいそうなほど動揺しているのがありありと伝わってきた。

「キュウリ？ …… すぐえ好きだけど何か悪い？」

表情豊かな百面相は、そこで終わりだった。彼はすっかり諦めたのか、髪の毛から水を滴らせながらそう呟いた。

「なあお前、驚かねえの？　普通は引くだろ、『僕、実は河童なんです』なんて言われたら」

聖を追う少年が、後ろの方から呼びかけてくる。まるで友人に話し掛けるかのような砕けた口調には、多分に親しみが込められているようだった。聖のほうも感化されたのか、いつの間にかクラスメイトとお喋りをしているような感覚になりつつあった。

河童の少年を連れて、聖は自転車を止めた木陰を目指していた。『連れて』というのは正確ではなく、彼が勝手に付いて来たというのが本当のところだったが。

それにしても、河童とキュウリ。

妖怪の類とは付き合いが長い聖にとっては、『実は河童』という事実はそう驚きではなかった。むしろ、『キュウリすげえ好き』という告白のほうに、面白すぎて衝撃的だ。

などと正直に答えるとまた角が立つだろうと、聖は結局、模範的解答を選ぶ。

「あいにく、バケモノさんには昔から何かと縁があるから」  
「変なの」

聖がさらりと言うと、少年は毒気を抜かれたのかそれきり黙り込んだ。彼は、聖が予想以上に化け物に耐性があることに驚いている様子だった。『聞き耳』のことを知らなければ、面食らうのも当然ではある。

逆に、何でもかんでも警戒してしまう自分にも問題があるのだろうか　聖は、そう考え始めていた。彼からは、人間に対する敵意などの気になる心は全く感じないから、耳のことを話してしまっても構わないのかもしれない。

例の木陰に入ると、彼はすっかり立ち直ったのか、にやりと笑って「お察しのとおり」と切り出した。

「俺は河童。……名前は深泥フカドロ。お前は？」

「聖」

「変な名前」

「お互い様じゃない？」

「そっかもな」

深泥は、からからと声を上げて笑う。

あれだけ深泥を濡らしていた水も、すでにほとんど乾いてしまっていた。照りつける太陽のせいで乾燥したのか。あるいは頭にぶっかけていたから、うまく皿に収まっただけなのか。もしかしたら両生類さながら、皮膚から直接吸収しているのかもしれない。

聖は、改めて深泥を観察した。

彼はどこから見てもごく普通の人間の少年だった。皿はもちろん水かきや甲羅など、いわゆる『河童』には付きもののオプシオンは外見からは分からない。溼の本来の姿が鹿であるように、深泥にも原型が別にあるのだろうか、今は人型を取っているらしい。

ただ一つ、どちらかというとき長い部類に入る黒い髪が印象的だ。

真ん中から分けてはいるが、目や鼻の辺りまでもすっきり隠してしまふほどの長さは、真夏には向いていない。それに、そんな髪型の男子はこの辺の学生にはいないから、それだけが目立つといえれば目立つかもしれない。

どうでもいいことをあれこれ考えていた聖に、深泥は首を傾げて尋ねた。

「聖はこの人間じゃないな」

「引越してきたんだよ、去年」

「だろ？ 訛りがないもん」

「それはそっちもじゃないの？」

こちらに来て一年ちよつとの聖に訛りがないのは当然だが、それなら深泥はどうなのか。逆に質問すると、彼は口ごもりながら答えた。

「……俺は、しばらくここを離れてたからな」

途端にやんちゃな雰囲気はかき消え、活発そうだった少年の顔が、急に陰影を帯びた表情に変わる。思えば長寿の物の怪のこと、大人

の顔が年相応といえはそうなのだが、さっきまでの陽気さはどこへやら、だ。長く生きれば当然聞かれたくないことの一つや二つあるのだろうと、聖はこれ以上余計なことを言わぬよう口を閉ざした。「……で、聖はどこから来たんだ？」

しばらくして、もの思わしげな雰囲気のまま、深泥は再び尋ねてきた。

おや　と聖は思う。触れられたくない話のはずではないのか。それが、彼のほうから振ってくるなんて。

「山を降りてしばらくいった所の、海に近い辺り。わりと大きい街だよ」

「都会っ子なんだ。そのわりには優しいな、見ず知らずの俺に親切にしてくれて」

「都会育ちだつて、それくらいはするよ」

「いや、違う。聖はいいやつだ」

聖が「ありがとう」と言うと、深泥は目を伏せたまま微笑み、うつむいた顔に貼りつく髪を掻き上げる。

何気なく見ていた聖はぎょっとした後、心地よいショックで自然と笑顔になっていた。

彼の前髪の下の瞳は、とても綺麗な緑色だったのだ。化けた後の外見は日本人そのものだと思いついていたのだが、もしかしたらこの色を覆い隠すための長髪なのだろうか。もったいないような気がするが、人間の世界で暮らすためにはそれも仕方ないのか。

「綺麗だね」

「何が？」

「深泥の目の色」

「ああ、これ？」

小声で呟いて、深泥は目がよく見えるようにと、前髪を左右にしっかりと寄せてくれた。

間近で見る緑色は、まるで深い川の淵のようでもあり、長い年月をかけて育った苔のようでもあった。しっとりした印象で、やはり



美しい。

髪の毛はそのままに、深泥は丸くて大きなその目で聖を見つめながら話し出した。

「さつきは、あのまま放って置かれたら危うく死ぬところだったんだ。河童はさ、皿の中の水が 人間には見えないはずだけど、ここに皿があるんだよね。……それが乾ききつちまうと、死ぬしかねえからさ。あのタイミングで冷たい水を補給できたから助かったんだ」

深泥は自分の頭のとっぺんを指し示しながら、首を右、左とひねった。それに合わせ、恐らく聖の耳だからこそ聞こえる、わずかな水音。

「見えないけど、そこに水があるのは分かるよ」

突っ込まれるのを覚悟しての言葉だったが、深泥はそうか、と軽く流した。ちようどいいから耳のことを打ち明けようかとも思ったものの、何か言いたげに動く深泥の口元を見て、聖は聞き役に徹することに決める。やがて、深泥は舌を出して唇を湿らせると、拗ねたような声で続きを語る。

「この辺、俺が昔いたところは小川とか池がもつとたくさんあったはずで。水はそれを当てにしてただけで、全然見つからなくてさ。留守にしてた間に潰されたんだな、きつと」

「いない間に変わっちゃったってこと？」

「うん」

深泥が遠くに視線をやったので、聖もつられて周りを見回した。

指摘されてから初めて気づいたが、確かに池や川は見当たらない。長方形に区画された田んぼやコンクリート製の用水路にも、時期の問題なのだろう、水はすでになかった。聖が自然が豊かだとばかり思い込んでいたこの村も、深泥の目にはそうは映っていないかったのだ。

どこか遠くを見つめたまま、深泥は続けた。

「……実は俺、華やかさに憧れて人間の街に出たんだ。でもダメだった。河童が人間の社会に溶け込めるわけねえよ。おまけに、挫け

て戻ってくれば住み家はなくなってるし」

開き直ったような態度に、彼が無理に明るく振舞っているのが分かった。

聖が知るあやかしは、人に焦がれたかなでや、人によって生かされていく溇くらしいものだが、人でないモノがこの世の中を暮らすのにはきつと大変な苦労があるのだ。

聖も街に挫折してここへ来た一人だから、深泥が自分に対して手厚く礼を言った気持ちは分かる。どん底で差し伸べられる人の手ほど温かいものはないと、知っているから。

「それでも、ここが好きだから戻ってきたんでしょ？」

「ん、まあね。道すがらいろいろ考えたけど、俺の場所はここなんだよな。……例え、どんなに変わっても、ここ以外に帰る所ってのは考えつかねえし」

「じゃあ、これからはまた村に住むの？」

「そうだなあ。……今回で懲りたから、もっと山の奥まで入るかな。水に不自由しないとこに」

にやりと笑い、彼は聖の顔を下から覗き込む。

「ま、もしかして寂しくなったら聖に会いに来るかもよ？」

「いいよ。せつかく友達になっただしね。……そのときは、水、たくさん準備しておくから」

「うるせえな」

調子に乗って一言付け加えると、顔を赤くした深泥に軽く小突かれた。が、怪我の巧妙か、そのおかげで場が明るくなったようだ。深泥の張り詰めた心から、少しでも力が抜けるようであればいいのだが。

別れ際、深泥は真顔で聖を見つめ、言い聞かせるようにゆっくりと言った。

「聖もさ、帰る場所は大事にしるよ。無くなってから後悔したって、遅いんだからな」

「多分、僕の帰るところはここだよ。何かあって、もしかして深泥みたいに離れることがあったとしても、きつとまたここに帰ってくる気がする。ここや、大事な人たちを守るためなら、何でもできると思うよ」

口に出して言うてから、聖は自分自身に驚いていた。自分はここまでこの場所が 澗や、嘉章や誠太郎のいるこの村を大切に思っていたのだ。それは意外なようできて、心のどこかでは至極当然のことのようにも感じていた。

深泥は一瞬目を見開いたが、すぐに人懐こい笑みを浮かべた。

「言うもんだな。まったく頼もしいことで」

軽口を叩くと、深泥はひらひらと手を振って聖に背を向けた。言い忘れたことがあったのに気付いた聖は、慌てて彼を呼んだ。

「待って、深泥。……実は僕、ただのヒトじゃなくて」

「『聞き耳』だな」

「知ってたの？」

「ん、途中から分かった。でも実際、そんなの関係なかったろ？」  
「じゃあな、と言いつつ残すと、深泥は再び山へと続く道を歩き出した。

その後ろ姿を見送った後、聖は手にしたままだった空のペットボトルにふと目をやる。深泥との出会いのきつかけこそ『耳』で捉えたものだったが、心を通わせるのに『耳』はいらなかった。

それは聖にとって新たな発見であり、きつとこれからの支えになるはずの力だった。

土曜日の朝九時。朝食の匂いにつられて、嘉章がやっと起きてきた。

今日の食事当番は聖だ。朝食は焼き魚と味噌汁、サラダ。まだまだ料理は上手ではないが、少しずつまともなものも作れるようになってきた。

「ヨシ兄、起きてる？」

「……寝てる」

「じゃあ寝ながら食べてね」

不毛なやりとりをしつつ、嘉章の食事の支度を整えたところで、玄関の呼び鈴が鳴る。寝ぼけ眼の嘉章を一度振り返り、聖は扉の向こうへと呼びかけた。

「はい、どちらさまですか？」

「見前と申します」

朝も早いし、宅配便か何かだろう。そんな予想に反して、若い女性の声がある。いかにもこの場から浮いた雰囲気だ。

みるまえ？

どこかで聞いた名だと思いつつ、何の抵抗もなく、聖はドアを開けた。

そこに立っていたのは、聖よりも少し年上の女性。彼女は、「お久しぶりね」と艶っぽく微笑む。

「……環さん」

「突然ごめんね。元気にしてた？」

「ええ、まあ」

みるまえ。見前。環。

全く想定外の客に、聖は腰が抜けそうになった。彼女も聖と同じ、異能の持ち主。人の心を『見る』力を使う人間だ。

以前会ったときには、澁を苦しめた環。そしてその報復として、

聖も環にひどい仕打ちをしてしまったのだ。

「……この前はすみませんでした」

「何のこと？」

「あの、山で会ったときに」

ああ、あれね、と、環はまるで今思い出したように答えた。

「あたしの方が先に仕掛けたんだもの。仕方なかったんじゃない？」  
「でも」

環はまた笑った。

「そんな昔のこと、気にしてないわ。……実はね、今日はお礼を言いにきたの」

お礼とはいったいなんだろう。そう尋ねようとする、環は聖の表情を読んだのか、すぐに続けた。

「お礼って表現もおかしいかしらね。詳しく言うと、この『目』とうまく付き合いながら生きていこうっていう、気持ちの整理がついた。その報告」

以前の彼女は、持って生まれた力。人ならざる存在が見える目を持って余し、半ば自棄になっているようにも見えた。今日の環はあのと時とは違い、余裕に満ちている。

もっと良く話を聞きたい。そう思ったものの、部屋の中の嘉章がまだパジャマ姿であることを思い出した。

「環さん、少し待ってもらえますか。今、部屋を片づけるんで、上がって行って下さい」

環はスツと眼鏡を外し、目を細めた。伊達眼鏡を掛けていない状態が、彼女の本来の姿だ。すぐに、何かを「見た」らしい環が、笑いをこらえながら言った。

「お兄さん、今起きたのね」

「……そうです」

嘉章が目をこすつているところでものぞかれたのだろうか。今にも顔から火が出そうにしている聖に、環は手を振った。

「うっん、いいわよ。どうせ、この後は鹿神様にも会っていこうと

思ってるから、あまり長居はできないし」

「溼さまにもですか？」

「そう。……大丈夫、取って喰ったりはしないわ」

「少しだけ自嘲気味に、環は言った。」

「近頃ね、この『力』にできるだけ頼らずに生きることに、やっと慣れてきたの。これまでは、持っているものは使わなきゃと思って、身の丈に合わないこともいろいろやったわ。でも、あなたたちを見て、考えを変えたのよ。……あたし、『力』に使われてたのね」

環は肩をすくめた。

「試しに、できるだけ余計なものを見ずに暮らしてみたら、それも結構面白いものなのね。力がなくなたって、環は環、らしいわ」

「僕、お礼を言われるようなことはしてないですよ。僕は、まだそこまで悟れていません」

「そう？ そのヒントをくれたのは、あなたたちなのに」

環は、ごく自然な仕草で眼鏡を掛け直した。

自分はまだ力のない暮らしはできないと、聖は環を見つめる。

『聞き耳』を使わないということは、『あちら側』のものたちとの縁が切れてしまうということだ。溼の声が聞けなくなるのは、まだ耐えられそうにない。しかし、『力』とともに生きるか、それとも『力』に頼らず生きるかを、いつか決断しなくてはならないだろう。それも、近いうちに。

「さて、と。じゃあ、あたし行くわね」

「え、もうですか？」

「山登りは、日があるうちにしたいたいもの」

確かに、このごろはぐつと日が短くなった。溼に会うというのなら、暖かいうちに行った方がいい。

「僕も、ちよつと用足しを済ませたら溼さまのところに行くつもりです。午後になっちゃうかもしれないですけど」

「じゃあ、向こうでは会えないかもね。寒くなる前に帰りたいから、どうやら環は、寒いのがよほど苦手と見える。」

彼女は、「あ、それから」と軽い口調で話を続けた。

「そのワイルドなイケメンは何者？ ヒトではなさそうだけど。あなた、どうして首を絞められてるの？」

聖はぎくりとして環を見た。環が聖から『見た』のは、恐らく高嶺。気性の激しい、扱いにくい神がいるということは、環にも伝えておいてもいいかもしれない。

「高嶺と違って、澗さまを狙っているあやかしです。すごく強くてそうだ、澗さまの山にもたまに来ているみたいなので、環さんも気をつけて」

「そんなに危険？」

澗の苦しむ顔が好きだと言った狼。聖の首を何の躊躇もせず絞めた高嶺は、聖にはどうにも理解が及ばない種類のあやかしだ。こうして考えるだけでも身震いがする。

「自分のやりたいようにするためには、他人はどうなってもいいっていう考えの人です」

環は「昔のあたしみたいね」とぼつりと漏らした。

「分かった、注意するわ。……あ、それから、もう一つ重要なものを『見た』かもしれない」

「何です？」

「料理、前よりうまくなったんじゃない？」

そういえば、初対面の際には朝食のメニューを言い当てられたのだった。聖は、「さすがに毎朝じゃ慣れますよ」と答え、環を見送った。

澗は着物の裾をさばきつつ、藪を掻き分けて、ねぐらがあるいつもの広場に出た。

朝から我が庭 山を一回りして戻ってきたところだった。森は

思ったよりも荒れてはおらず、むしろ新たな息吹すら感じられるほどに回復しつつある。主の溼が戻ってきたことで、活気を取り戻しているのだ。

溼の力は山の力になり、それは還元されて再び溼の力となる。この調子なら、あと数年から十数年も経てば、溼にも以前のような神通力が戻るだろう。

もっとも、それにはいくつか前提となる条件がある。まず、聖がいてこそ 聖の思いで溼が存在できるという今の状況が続いていなくてはならないこと。さらに、何らかの別のできごとによって、溼自身が消えてしまわないこと。

そこまで考えて、溼は表情は変えずに天を仰いだ。いつの間にか、空がずいぶん高い。

神という身に生まれ直してからずいぶん経つが、人の祈りで命を繋いでいくことにはまだ慣れない。しかし、この一年半ほどの間に、人の思いがどれだけ心地よいものであるか、溼は知ってしまった。できるなら、平穏な日々がずっと続いて欲しい。居心地のいい場所を守りたいと、今の溼は心から切望していた。しかし、いわば病み上がりとも言える今の自分には、そのための力が足りない。

今すぐにも力をつける方法はあることはあるのだが、それは決して。

「……あのうつけには言えぬ」

つつい口に出してしまっただけから、舌を出す溼だった。

ちょうどその時、今漕いできたばかりの背後の草むらからがさりと乾いた音がした。とっさに苦手とする狼 今、いちばん会いたくない存在 を思い浮かべ、溼の足はたちまち竦んだ。

恐らく何者かの足音だとは思っただが、溼がいつも聞き慣れている重さとは違う。つまり、聖ではない。

音はがさ、がさ、と徐々に溼の方へと近づいて来ると、溼の目の前の草むらの中で止まった。

まさか、本当に高嶺殿では。



高嶺のことを思い出すと、澪の体は強ばる。彼が狼の化身であるということに加えて、この春に再会した際の高嶺は、澪が覚えていた昔の彼よりも攻撃的な色を増していた。

しかし。

こうして硬直していても仕方がない。例え高嶺が現れたとしても、澪自身ができることは何も変わらないのだ。ならば、誰が来ようとも澪は儼然しく、この山の又シらしくあらねばならん。そう自らを奮い立たせ、身構える。

「そこにいるのは、誰じゃ？」

直後、丈の高い草を割って現れた姿に、澪の口からは思わずため息が漏れる。

「……お主、は」

「こんにちは」

そこに立っていたのは、すらりと長身の女性だった。ふわふわと長い髪を揺らし、踵の高い履き物の底を鳴らして歩いてくる。

聖と似た力を持ち、澪を追いつめたこともある娘　環であった。

今日は、真っ赤な縁に彩られた眼鏡を掛けている。

「だって、桜の時期にもう一回来いって言ったじゃない」

「花などとうに散っておるぞ」

「そつみたいね」

彼女は、赤く色づき始めた森を見回した。

「あなたたちのことを思い出すが、ちよつと遅かったのよ」

飄々と言つてのける環の真意を測りかねて、澪は眉をひそめた。

澪は彼女に対し、余りいい思い出がない。聖と澪を引き離そうとしたことは、まだはつきりと覚えていた。

「……お主、本当の目的は何じゃ？」

「ずいぶん警戒されてるわねえ。何もしないわ」

環は苦笑いして「お礼参り」と答えた。

「聖くんにも会ってきたところ。ちよつとね、生き方を改めることにしたの。近況報告よ」

「話は分かった」

力を武器にするのはやめると、環は言いたいようだった。そういえば、昔会ったときの匂い　肉食獣の香りはもう感じない。これは信じてもいいのかもしれない、と澪は思った。

「では、その目はもう全く使わぬのか？」

「そういうわけでもないわ。自分のためだけに使うのにはもう飽きただけ」

環は眼鏡を取り、澪の瞳をじつと見つめる。何もかも見透かしてしまいそうな、不思議な力を持った視線だ。

「でも、ちよつとした忠告くらいはできるかもね」

澪が首を傾げると、環は口の端だけを上げた。

「お節介ながら言わせてもらうけど、その男はやめておきなさい。

……笑顔を作るのがやけに上手な、鋭い目の男のことよ」「  
思い当たる顔はあった。狼の化身、高嶺のことだ。

だが、笑顔を作るのが上手、とは初めて聞く評価だ。高嶺は確かに慇懃無礼なところはあるが、そう悪しざまに言われるほどでもない、澪は思っていたが。

「良く知っている御仁じゃが、どうかしたのか」

「私がさつき聖くんから『見た』顔と、あなたから『見た』顔は、全く逆だわ。そしてきつと、本当の顔は、あなたの知らない方じゃないかしら」

「まさか」

「その人が、聖くんの耳元で何か囁いたのを見たわ。とても恐ろしい形相で。あなたの前でそんな顔をしたこと、ある？」

「いいや」

高嶺には、澪の知らない闇の顔がある　そう言いたいのだろうか。高嶺が聖を傷つけた一件は、何かの弾みで起きた事故ではなかったのか。故意にやったことかというのか。

それが本当なら。

溲の腹の底に、熱い力が湧き上がってくる。

「……あい分かった。気に留めておこう」

「あら、ずいぶん素直ね」

「人の言うことは素直に聞くものじゃ」

溲の言葉に環は、あたしはそんなきキャラじゃないから分からないわ、と笑った。

きゃらとは何か知らないが、環の笑顔を見られたことは溲にとって収穫となった。彼女とは良き友になれるかもしれない。そんな予感が得られたからだ。

「うむ？」

環が去ってしばらくののち、溲は再び侵入者があることに気づいた。この気配は先ほどと同じ人間、つまり環だ。

はて。

何か忘れ物でもしたのだろうか。それとも、急な用事でもできたのか。そう考えて少し待ってみたが、環が溲の元へと近づいてくる様子はない。それをやや不信に思いながらも、溲は環の気配を追うことにした。

環がいるのは、山の登り口である獣道。ちょうど、溲の縄張りの一番外側に当たる場所だった。急行した溲は、土の上に倒れ込んでいる環の姿を認め、叫んだ。

「お主、一体何があった！」

それほどに、彼女の様子は尋常ではなかった。

環はやつこのことで体は起こしたものの、こちらを見ようとせず、冷たい地べたに座り込んだままだ。

「これ、娘！ 環！」

焦点の合わない目で、環は辺りの様子を窺う。そういえば、今の彼女には眼鏡がなかった。鮮やかな赤い縁の、彼女にお似合いの眼鏡。

両肩を掴み、揺さぶると、ようやく環が反応した。かすれた声で、澪を呼ぶ。

「やまがみ、さま？ いるの？」

「おう、ここにいるぞ」

何か起きて、目が利かなくなっているのだろうか。

気を使って澪が姿を現すと、環は「ああ」と頬を緩めた。

「……どうした。そんなに汚れて、お主らしくもない。よっぽどひどく転びでもしたか？」

眉間に皺を寄せて尋ねる澪に、環は力なく首を振った。

先ほどの颯爽とした出で立ちが、見る影もなかった。格好のいい

履き物 ブーツとやらは土にまみれているし、膝には血がにじんでいる。

同じく土の付いた手を綺麗にしてやろうと腕を取ると、服の隙間から赤く変色した手首が見えた。目を丸くした澪が環の腕を捲って確認すると、誰かに強く掴まれた跡があざになって残っていた。

手首をそつとさすってやり、澪は優しく尋ねる。

「……何があつた？」

と、環の瞳から大粒の涙がぼろぼろとこぼれ落ちた。

「さつき、話に出てた男に」

高嶺どのか 澪の顔から血の気が引く。

「『力』を喰われたわ。……澪さまの姿も見えなかった。今のあたしは、ただの人間なの」

澪は、絶句して山の外へと目をやった。高嶺の姿など見えるはずがないのは当然分かっていたが、それでも視線を向けずにはいられなかったのだ。

環は溇の山を出た後、最寄りのバス停を目指していた。

ここは、交通の便が余り良くない土地だ。便数の少ないバスで小さな駅へ向かい、そこからは、やはり便数の少ない電車に長い時間乗り続け、街へ戻らなくてはならない。訪ねてくるのには一日がかりだ。

平和で静かで、人の声が少ない村。それは多分、聖くんにはいい場所だろうけど、あたしには向いてない。そんなことを思いながら歩いていると、近づいてくる人影がある。

環の目が捉えたのは、天を向くように逆立てた髪。獣のように鋭い目の光には、見覚えがあった。

あの人、さっき『見た』！

聖が恐れるあやかし、そして、溇を欺いている男だ。とっさに目を逸らしたが、果たして気づかれなかっただろうか？

徐々に近づいてくる男を極力視界に入れないよう、環は歩き続けた。見えていない振りをする。意識してはだめだ。やり過ごすことのみを考えて、距離を縮める。

あと残り十メートル、五メートル、一メートル……。

無事にすれ違い、環がほっと胸をなで下ろした瞬間だった。

「おい」

背中からの低い声に、環は肝を潰した。

しまったと思ったところで、まさに後の祭りだった。ものすごいプレッシャーを纏った声が、否応なしに耳にねじ込まれてくる。

「あなた、今、俺を見ただろう。どうして、姿を消している俺が見える？」

圧倒的な威圧に押されたのか、環の腕にはいつの間にか鳥肌が立っていた。否定も肯定もできず、環はただ立ち尽くす。

「この辺じゃ見ない顔だな。田舎娘にしちゃ垢抜けすぎてる。……いい女じゃねえか。どこから来た？」

青年は、凍り付いたままの環の正面に回ると、値踏みをするかのように観察し始めた。

顎を掴まれ、至近距離で無理やり視線を合わせられて、環はついに観念した。それでも、聖と漣のことは隠し遠そうと心に決めていた。

「私は人間です。観光にきたんです。……生まれつき人でないものが少し見えるだけで 別に怪しい者じゃないわ」

「少し見えるくらいじゃ、気配を消した俺には気付かないはずなんだよ」

「でも見えたんだから、仕方ないじゃない」  
「強気だな」

彼は、口の端だけを上げて笑った。しかし、突き刺さるような視線は全く揺るがない。

これ以上足止めを食らっては危ないと、環は一步後ろに引いた。  
「……急いでいるので」

「待ちな」  
腕を掴まれ、引き留められる。  
「痛い！」

環は、思わず声を上げていた。手首を締め付けるように押さえつける強い力は、環の儂い抵抗などものともしなかった。力づくで体を引きつけられ、耳元に顔を寄せられる。首筋に温かい息がかかり、環は身震いした。

高嶺はまるで誘惑するかのように、環に囁いた。

「……魅力的だな。いったい、どれくらい見えるんだ？」  
「放して！」

「その力、逃がすのは惜しいんだよ。俺に、喰わせてくれないか？」  
「何を 嫌よ。絶対に、嫌」

自分の声が震えていることに、環は気付いた。今の自分は、昔、自らが打ちのめしてきた相手と同じ状況に陥っている。

たくさんの人を傷つけてきた報いだろうか。今更悔いたとこ

るで、遅かったのだろうか。

「……嫌。お願い、やめて！」

「そう怖がるな。命までは取らねえ。せめて、寝てる間に済ましてやるよ」

首の後ろに、強い衝撃があつた。頭ががくりと動き、弾みで伊達眼鏡がどこかへ飛ばされる。

痛い、と思つたときには、環は道の真ん中に倒れ込んでいた。

「すまぬ」

地面に擦るほど深々と、澪は環に向かって頭を下げた。謝つて済む問題ではないことは重々承知していたが、それでも、こつせざるを得なかつた。

「儂の不覚じゃ。儂がもつと気をつけてやれば、かような酷い目に遭わずに済んだものを」

「……目を、合わせちゃつたの。あたしのミスだわ」

泣きながら、環は弱々しく首を振つた。

可哀想にのう。

普段の彼女とはかけ離れたありさまに、澪は思わず環を抱きしめた。

力を遠ざけてきた聖とは違い、ここまで力を抛り所にして生きてきた環。『目』を使わない生活を始めたとはいえ、まだほんの一年程度だ。生まれたてにも等しいままの心で力を失い、放り出された格好になる。さぞかし心細いだろう。

環が異能の持ち主だと高嶺に知られさえしなければ、こんなことにはならなかつたはずなのだ。

儂が悪かつた。深い自責の念から、澪は環に尋ねた。

「儂に、何かできることはあるか」

「あいつ、やつつけて」

「高嶺どのを、か」

それは今の溼には『できないこと』だった。昔の 全盛期の溼  
なら互角にやり合えるだろうに。

頷くことができないまま、溼は重ねて訊く。

「あとは？」

環は涙を手の甲で拭くと、濡れた目で溼を見つめた。

「このこと、聖くんに言わないで。あの子を悩ませるの、あたしの  
趣味じゃない」

弱りきった彼女からは想像もつかぬような、はっきりとした言い  
ぶりだ。昔の環を思い起こさせるような、絶対的な言葉だった。

「……うむ」

それは、辛さに耐えさえすれば『できること』だ。

溼は、女王の命令に従うほかなかった。他の選択肢は、どう考え  
ても浮かんでこなかったからだ。



一面の緑だった山肌のあちこちから、オレンジ色が覗くようになってきていた。風景を目に焼き付けるように見回しながら、村の秋は山から来るものなんだ と、聖は初めて気付いた。

聖はといえば、いつものように人外のものに会いに行くため、獣道を進んでいる。環に言った『用足し』のためだ。

いつもと違うのは、その相手が溼ではないということ、そして同行者がいるということだった。立ち止まった聖に気付き、前を行く背中から声が飛んでくる。

「どうした、疲れたか」

「ううん、大丈夫。ちよつと景色見てた」

聖が登り慣れている溼の住みかはどこか人を寄せつけない厳しい印象があるのだが、今いるここは斜面もそうきつくないせいかな歩きやすく、穏やかな雰囲気がある。それは、この森に住まうあやかしの人柄のせいかもしれないと聖は思った。健気で儂い彼女の記憶が、そう思わせるのか、と。

「きよろきよろしてないで、足元に気をつけるよな」

嘉章は妙に保護者らしい口ぶりで言うと、再び聖を先導して歩く。朝のだらしなさが、まるで嘘のようだった。

聖は、嘉章の案内でかなでに会いに来ていた。遠慮してなかなか言い出せなかった聖の意をくんでくれたのだろう、『暑さも落ち着いたし、よかつたら会いに行かないか』と、嘉章の方から誘ってくれたのだ。

今朝はちよつど環にも会えた。そのおかげで、ある決心がついたということもある。いいタイミングだ。

昨年の夏に命を終えたはずのかなでは、この夏、こちらに戻ってきたという。夏休み、帰省先から戻った聖に、嘉章は笑顔を爆発さ

せて、かなでが帰ってきたんだと告げた。聖は嘉章とは対照的に、玄関先で号泣してしまったのだが。  
「あれだ」

嘉章が指した方に顔を上げると、林が開けたところに、古ぼけた鳥居、そしてそれと同じ時代を経ただろうと思われる社が見える。ぬかるむ足元に気をやりながら、聖は歩きなれた様子の嘉章に続き、鳥居をくぐった。

社の周囲は藪が刈り込まれ、定期的に人の手が入っていることを伺わせた。周囲の木々には願掛けのための赤い布が数え切れないほど結びつけられているし、嘉章以外にも掃除に来る人達が沢山いるのだらう。

溲の祠 『祠』と言えるかどうかも怪しいくらいの質素な、悪く言えば粗末なものを見慣れているから、聖には少しうらやましく見えた。

「見る。待つてる」  
嘉章が、心なしか嬉しそうに聖に呼びかけた。

社の前に、若い女性の姿があった。長い黒髪に白い肌、そして優しげなまなざし。何もかもが、夏に見た彼女と同じだった。

それは、蝸つぐみの化身、かなでだった。  
「かなでさん！」

駆け寄った聖に、彼女は「ご無沙汰しておりました」と微笑んだ。聖が初めて『聞き耳』の力を借りずに聞いた、彼女の声だった。

挨拶もひとしきり済んだところで、聖は姿勢を正してかなでに尋ねた。

「早速なんですけど、かなでさんに聞きたいことがあります」  
「何でしょう？」

首を傾げるかなでの隣で、嘉章が怪訝そうな表情を浮かべていた。できれば、勘のいい嘉章には聞かれたくない話だ。聖はそれ以上のことが言えず、口を閉ざす。

「女心について、でしょうか？」

何かを察したかなでが、いたずらっぽく笑った。

「それは、嘉章さまには聞かれたくないですよね？」

「どうやら、かなでは人払いに協力してくれるらしい。かなでに笑いかけられた嘉章は、不満げに「分かったよ」と言うと、渋々ながら鳥居の方へと去っていった。

かなでと二人きりになり、聖はようやく本題を切り出す。

「その、有月さまという方の力は、どういうやり方でいただいたんですか？」

「有月さまの？」

聞き返すかなでに、聖は大きく頷いた。

かなでは聖の目を見ると、表情をきりりと引き締めた。有月と聖とが、どう関わるのかと考えているのだろう。少し間があって、かなでは「お話は、それだけですか？」と再び尋ねる。

聖は首を振った。

かなでには今日、すべてを話してしまおうと考えていた。遷と自分のことを知ってもらった上で、相談に乗ってもらうつもりだった。

「僕のこの力は」

聖は、そつと手を耳に当てた。

「誰かに譲り渡すことができるんでしょうか。もし、力をあげてしまった場合、僕も有月さまのように」

聖はかなでの厳しい顔に気付いて、そこで言葉を切った。少し、先を急ぎすぎたかもしれない。

「まず、そちらのお話からお聞きしたいけれど、構いませんか？」

「ずいぶん込み入った事情とお見受けしましたから。……ただし、中身によってはお答えできませんよ」

「ヨシ兄に、内緒にしてくれるのなら」

「約束、守ります」

かなでは、先ほど会った当初のように優しく笑った。その穏やかな様子に、聖は改めて腹を決めた。彼女になら、きつと話しても大

丈夫だ。

「……僕には、とても大切な人がいます。その人は、人ではないモノ。そして、やっぱりかなでさんと同じく、消えかけているモノです」

そうして聖は、一つ一つ順を追ってかなでに話し出した。

去年の春、漣と出会ったところから始め、漣が聖一人によって繋ぎ止められていること、少しずつ力を取り戻してきてはいるが、力の強い他のあやかに狙われていること。

「僕は漣さまは守る技はないけれど、力は持っている。漣さまは身を守る術を持っているけど、力が足りない。……だったら、僕の力を漣さまにあげられたらいいんじゃないかって」

ここしばらく、聖が考え続けていたことだった。

かなでは他のあやかしの力を譲り受けた、そう嘉章から教えてもらったとき、聖は思った。あやかに同士で力のやりとりができるのなら、僕にだって、と。そして、さんざん悩んで、今話したこと高嶺から漣を守るための最善の策と思われたに、たどり着いたのだ。

もつとも、このアイデアが上手くいくのかは分からないし、聖にはまだ実行する勇気もないのだけれど。

「それで、私に」

かなでの言葉に、聖は頷く。

「確かに、有月さまと嘉章さまのおかげで、私はこちらに戻る事ができました。でも、そのときはあまり覚えていないのです。それに、教えた結果起こることに、私自身は責任が持てません。……『力』は、命のかけらにも等しいものです。それをもらうということは、相手の命を自分に取り込む、つまり相手を『喰らう』ことです。喰う側がさじ加減を間違ったり、喰われる側が初めから身を捧げる気であれば」

有月のことを言っているのだろうか。かなでは言葉を濁した。遠く、嘉章の方に目をやり、小声で呟いた。

「私は、有月さまのお力と、嘉章さまの祈りを喰らってここにいます」

『喰う』と言う言葉を、聖はこれまでも何度か聞いたことがあった。ヒトの心を蝕むあやかし、手鞠。あるいは、高嶺から。

力のやりとりは、駆け引きで成り立つ命のやりとり。

聖や有月のように、純粹に『誰かを救う』という目的だつてあるだろう。しかし使い方によっては、悪い方に傾くこともある。その場合、当人たち、特に喰われる方への影響は計り知れないということだ。かなでが言い淀むのも無理はない。

かなでは、小さなため息をつく。

「危険な賭けですから、できればお話したくない。……でも、私は聖さんの力になりたい。あなたから受けたご恩に少しでも報いることができるのなら、とも思っています。ですから、とても迷っているのです」

「お願いします。僕は、どうしても彼女と一緒に生きていきたいんです」

聖は、かなでに頭を下げていた。彼女にこんなことをしても仕方がないとわかつていたが、体が動いていた。

「おやめください！」

かなでが、あたふたと聖の肩に手をかけ、その上体を起こさせる。私などにもつたいない、とこぼす。

かなではすぐに、すべて見透かしたよう言った。

「きっと、私が何も話さなくても、自分一人でおやりになる気なのでしょう?」

はつきりと声に出しては答えなかったが、指摘されたとおりだったので、聖は思わず苦笑いした。

かなでは、「同じなのでしょうね」と、ひっそりと言った。

「私がない間、嘉章さまも、今の聖さまのように想ってくださいっ  
ていたのでしょうかね」

聖に話しかけたというよりは、独り言に近い呟きだった。そして、

彼女はひんやりとした両手で聖の手を包んだ。

「決して、無理はしないでくださいね。もしものがあれば、相手の方が悲しみますよ」

「……それじゃあ」

「お役に立てるかは分かりませんが、私の知っていることなら何でもお教えします。ただし、無理をなさらないという条件付きで」

聖の手を握るかなで。その手に、ぎゅっと力が込められた。聖が顔を上げると、かなでは凜々しい表情で聖を見つめていた。

「どうか、誰も不幸にならないやり方を考えてください。あなたを想っている人が沢山いるということも、忘れないで」

「僕のことを？」

「あなたに関わったモノは、きつとみんなそう思っていますよ。もちろん、私もその一人です。嘉章さまだって、聖さんのお相手だってそうなのです」

僕を想ってくれる人たちがいる。「力」によって疎まれてきた時期がある聖にとって、それは予想外の言葉だった。

しかし、もとより、万一の事態など考えていなかった。漣の隣にいたために、何としても自分はこちら側に残らなければならない。聖は、不安げなかなでに笑いかけた。

「心配しないでください。僕もみんなと一緒にいたいですから」

「本当ですね？」

頷く聖を見て、かなではふう、と息をついた。そして、大したことをお話できるわけではないですが、と前置きをして、語り始めた。

聖は、嘉章を残してかなでの山を下りた。

かなでとの話を終え、声をかけたときの彼の顔を思い出して、聖は思わずにやける。嘉章があんなにふて腐れたのを見たのは久しぶりだったからだ。これ以上二人の時間を邪魔するわけにはいかなかった。

さて、今度は澁さまに会いに行こう。

すでに一度山登りをしてきたわりに、足取りは軽かった。かなでのおかげで、自分と澁の未来に光が射したのだから。

澁のもとへと向かう途中、聖は、道の真ん中に光るものが落ちていることに気付いた。通りすがりに立ち止まると、それは見覚えのあるものだった。

これ、確か環さんの。

赤いフレームの眼鏡。しかし、なぜこんなところに？

環は澁にも会いに行くと言っていたから、この道は通るだろう。

伊達眼鏡だから無くなっても困ることはないだろうし、落とし物だとしてもおかしくはない。しかし、今日の環はずっと眼鏡をかけていたような気がする。

もしかしたら、澁さまのところで渡せるかもしれない。若干ひっかかりを覚えながらも、聖は眼鏡をハンカチにくるんで丁寧にリュックにしまい込み、先を急いだ。

「澁さま！」

「……聖か」

気落ちした声になってはいなかっただろうか。うっかり今の気分通りの返事をしてしまい、澁は内心慌てた。聖がいつも通りに耳栓を装着しているのを見て、胸を撫で下ろす。

今日は、用心しなければ。心の声が漏れ出さないように、気を引き締めなくてはならない。環との約束を守るためだ。

「環さん、ここに来ましたか？」

「来たが、もう帰ったぞ。聖のところにも行ったのであろう？」

「はい。澁さまにも会ってから帰るって聞いたので、まだいるかなと思ったんですが」

「電車とやらの時間だ、と言っておった」

環は、すでにだいぶ前に山を後にしていた。気が落ち着くまで休んでいけと勧めたが、聖に会わないよう、すぐに帰ると言って去っていった。

気丈すぎる気がして、漣の不安は募るばかりだった。もう涙は止まっただろうか。無事に、駅とやらには着いただろうか。

「そうですか。……実は、環さんのつばい眼鏡を拾ったので、渡せたらいいなあと。残念です」

綺麗な赤が印象的な眼鏡だ。そういえば、喰われて戻ってきた環は、眼鏡をかけていなかった。襲われたとさくさで落としたものを、聖が拾ったのか。

あれは、見えずぎる目を人並みに矯正するためのものだった。ならば、もう環には必要ない。恐らく、取りには来ないだろう。

「……探しに来ないということは、無くても困らぬということじゃろう。次に来たときに渡せばよからう」

「そうですね」

聖は、あっさりと引き下がった。果たして『次』があるのか、漣には分からなかった。

いつもの場所に腰掛けるが早いか、彼はまくし立てるように早口で喋り始めた。

「今日は、嬉しいことがあって。うちの従兄弟の好きな人は人じゃないんですけど　に、僕も会ってきたんです」　本当

「確か、蝉の娘であったな。黄泉から戻ってきた」

「はい。僕はかなでさんが戻ってきてから初めて会ったんですけど、二人ともほんとうに幸せそうで」

「……で、あるうな。お主を見ていれば分かる」

漣は、聖からにじみ出る嬉しげな空気を感じ取っていた。歓喜を抑えることもせず、年相応にはしゃぐ聖は珍しい。

昨年の夏に悲しい別れをした聖の従兄弟、そして蝉の化身の娘が、年を越えてやっと結ばれたのだ。別れの場には聖も立ち会っていて、



彼自身も辛い役目を果たした。それだけに、今回のことは喜びもひとしおなのだろう。

楽しそうに話す聖を見ながら、澪は複雑な思いを何とか整理しようと思死だった。

年寄りに無理をさせおつて、と澪は心の中で環に訴える。聖を悲しませないという、環の最後の意地。その判断は正しい。誰が、この笑顔を曇らせることができるというのか。

聖は、隣でなおも幸せそうに話し続けている。澪も聖とともに笑おうとしてみたが、上手くいくまでには少し時間がかかった。

聖を環と同じ目に遭わせはしない。いつか、自分が高嶺と対等に渡り合えるときまで、何があっても聖だけは守らなければ。

だが、どうやって？

それを思うと、澪の胸は締め付けられる。

昔の自分のような力を得るには、あとどれくらいの年月と、ヒトの想いが必要なのか。果たして、聖と一緒にいられるうちに、そんな日は訪れるのだろうか。

この、確かな声を 【1】（前書き）

「その、幽かな声を」の最終話です。

もしよろしければ、聖と漣を最後まで見守ってくださいね。

それでは、どうぞ。

## この、確かな声を 【1】

聖は、学校で配布されたプリントを机の上に広げ、唸っていた。

一人では少し広い部屋でぽつんと座り、聖は書類と静かに睨み合っていた。昨日からこの薄っぺらい紙切れが、聖の頭を悩ませている。例のごとく、『進路志望調査票』だ。

嘉章は、土曜だというのに仕事だといって出て行ってしまい、辺りが暗くなった今も戻っていなかった。教師というのは年末は忙しいらしく、このところは平日も帰りが遅いし、帰宅した後も持ち帰りでごごとか片付けている嘉章の姿をよく目にする。師走の師は僧侶のことだと言うけれど、どうも教師も走り回っているようだ。

おかげで、今回の調査票についてはまだ嘉章と話ができていない。冬の訪れと共に、周りの友人達は徐々に志望校を決めつつあった。願書の受付は年が明けてからだからまだ猶予はあるが、それでも何かが迫ってくるような、あるいは追われているような緊張感は、聖の中で確実に膨らんできている。

クラスメイトのほとんどが、この村から通うことができる距離の地元の高校を選択しているらしかったが、中には大きな街の高校を目標に定める者もいた。その場合、求められる学力は、地元校よりも少し高い。

例えば誠太郎は、幼なじみでもあり恋人でもあるちぐさが通う県随一の進学校を目指している。彼は、ちぐさと同じ高校に通うことを二年生の頃から一途に目指し、結果的にこの一年で恐ろしいほど成績を伸ばした。このままいけば、春からは望み通りの道へと進むことだろう。

聖はといえば、転校前も後もペーパーテストだけは良く、三年生になってからは常に学年で五指に入る程度の成績を維持し続けた。ただし、体育を除いてだけだ。

まあ、そんなわけで聖は担任教師にも、そして嘉章にも、ちぐさ

や誠太郎と同じ高校を勧められていた。

しかし、聖本人は未だ進路を決めかねていた。多分、成績は問題ない。どちらを選んだとしても、入試をクリアするのに必要な得点を取る自信はある。

ただ、街の高校に進むとなると。

澪さまと離れなきやいけない。

どきん、と胸が大きく鳴った。それは、痛みを伴う音だった。

この二年ほどで、『聞き耳』の使い方は大分身に付けた。耳栓をしていれば大抵のことはやり過ごせる。

たちの悪いのに絡まれても、対処法は澪からみっちり仕込まれたから、立ち回り方は心得ているつもりだった。それに、万一あやかしたちにちよっかいを出されても、澪が助け船を出してくれる。

ただし、それはこの村にいたら、という話だ。

聖がここに引越してきたのは、あやかし達のせいというよりは、むしろ人間との関わりに倦んだせいだ。この村の人たちはみんな優しいし裏表がないから、いくら『耳』が何か余計なことを捕らえても、それほど堪えることはなかった。しかし、街にはことは比べものにならないほど人が多い。都会へ戻ることはやはり怖かった。

同時に、自分の成長を試してみたい気持ちもないわけではなかった。引越してくる前に晒されたくらい悪意なら、今ならば耐えられる自信がある。立ち止まって怯えてばかりだった自分が、人混みの中でも前に進むことができるのか、やってみたい。むしろ、いつかはそうしななければいけないとまで、聖には思えるようになっていた。

それにしただって、気になるのは澪のことだった。自分がここから去ったとき、彼女はどうなってしまうのだろう。あの祠に通う者がいなくなったら、出会った頃の彼女のように消えゆくのだろうか。

考えても、答えは出なかった。

「午後は、山に行こうかな」

聖はそう言って、窓の外を見た。部屋の裏手の木々は、うっすら

と積もった雪で白く縁取られていた。

## この、確かな声を 【2】

凍てつく空気に、澗はつい鼻を擦った。

暑さや寒さは生身のときほどは感じていないはずだが、キンと冷えた日などは、やはり昔を思い出して身が縮む。寝床にしている祠の周りは、昨夜からの雪がまだらに積もっていた。水たまりは凍り付き、日の光を鈍くはね返している。

「冬じゃのう」

呟いてから辺りを見回す。澗以外に気配はないし、もちろん返答もない。

近ごろは聖が傍らにいるのが当たり前になってしまっているので、口数が増えた。聞いてくれる誰かがいないと独り言になってしまうのだ、と澗は気付いた。

昔は、冬は嫌いだった。

寒さを凌ぐには腹を膨らませねばならなかったが、一面白く覆われた山には食料などない。鹿であった頃は、木の皮を歯でこそげとって口へと運んだものだ。それでも満たされないうきには危険を承知で人里へ下り、畑を掘って撃たれそうになったこともある。

「食うものが少ないのは、今も同じか」

聖に頼って命を繋いでいる自分を思い出し、自嘲を込めてぼつりと漏らした。今度はちゃんと独り言を言った、と澗は苦笑する。

今や唯一といってもいいほどの澗の力の源　澗を必要とされる人間　それが、聖だ。聖一人に支えられている現状を、澗はそのまま受け入れていた。その昔、強大な力を持っていた頃の自分は、確かに今よりも無理ができたし、自由もあった。だが、今の暮らしも悪くない。慎ましく平穏に、聖とともに過ごす日々もなかなかいいものだ。

ちょうどその時、祠の脇の藪が動き、澗は飛び上がらんばかりに驚いた。

がさがさという乾いた音がしばらく続いたのち、枯れた下草を掻き分けて、件の聖が顔を出した。足下は丈夫そうな革靴、ブーツとやらを履いていたが、つま先から足首まで泥にまみれている。日陰は氷で滑り、日なたは陽射しでぬかるむ山道だったに違いないが、彼はそんなことはものともせず、詣でてくれたらしい。

聖は「溇さま」とにっこり笑う。

「お待たせして、すみません」

聖の何でもない一言に目元が熱くなるのを感じて、溇は自分のことながら驚いた。考え出すときりがなさそうだったので、とりあえず返事はしておく。

「ま、待ってなどおらぬ」

「そんなこと、言わないで下さいよ」

聖は溇の軽口を受け流すと、持参した敷物の上に膝を抱えて座った。準備のいいことに、鞆からさらに布団のようなものを出して自らを覆う。もこもことして、まるで冬毛に変わったかのようだ。

溇もその隣に腰を下ろし、鼻の頭を赤くした聖の横顔を見た。いつもは頬も耳も赤いのだが、詰めものが垣間見えるはずの耳は、今日は耳当てで覆われていた。やはり、聖も特別に寒かったとみえる。おや、と溇は思わず聖の顔を見返した。何かがいつもと違うな、と感じたのは、獣の本能のようなものだっただろうか。

「何ですか？」

聖が、目を丸くしている。溇の無遠慮な視線にたじろいでいるようにも見えた。

その眠そうな瞳の下にはくつきりとくまが浮き出ている。違和感の源はこれだろうか、もう一度聖の顔を覗き込むが、それ以上は何も見つからない。やはり、目だったのだろうか。

「その目はどうした？」

「これは」

「寝ておらぬのか」

「いいえ」

聖は両手で目を擦ると「大丈夫ですよ」と微笑んだ。強情な聖のこと、ここで溲がいくらか心配したところで、帰って寝る、とは言うまい。しかし、彼が大丈夫と言うときは、大抵がから元気だから問題なのだ。しかも、彼自身はそれに気付いていないことが多い。

またあやかし絡みのいざこざだろうと、溲は読んだ。それは溲が聖の力になれる、数少ない機会でもあった。悩む聖を見て心が躍るのは不謹慎だと自らを戒めながらも、溲は追及の手を緩めない。

「悩み事か？ ……また、何か起きたのではないのか？」  
「……いいえ」

聖は眉間に皺を寄せている。溲はその頬に手を伸ばしそうになり、思わず自分の手を押さえた。

それほどの苦渋の色が、彼に浮かんでいた。

口を開いては、閉じる。顔を上げては、俯く。そんな仕草を数回繰り返したのち、聖は小さな声を絞り出すように言った。

「……もし僕が今いなくなったら、溲さまはどうなるんですか？」  
「うん？」

一瞬、何を尋ねられたのか分からずに、溲は聞き返す。

聖は抱えた膝を強く引き寄せると、顔だけをこちらに向けた。眠そうだった目にしつかりと光が見える。

「溲さまの力は、戻ってきているんですか。僕がいないと消えてしまふ、なんてこと、ないですよね？」

聖がいなくなる、だと？

今度はしつかりと質問の中身を理解して、溲の顔から血の気が引いた。今、いちばん聞かれたくないことだった。

「……寝不足の原因は、それが」  
聖が無言で頷いた。今日ははじめからこのために来たのだと、聖のきゅつと結んだ口が伝えている。

彼との別れが来るとして、それは果たしていつなのか。それとも、具体的な予定など無くて、ただ純粹な疑問を口にしたただけなのか。それが分からない。



真つ直ぐ正面からぶつかって来た聖に、漣がやはり正面から答えるとするならば、『消える』だろう。

現状は、数日おきに顔を見せてくれる聖の想いだけが漣の糧である。それは命を繋ぐには十分でも、力の蓄えをするには少し足りない。だから、聖がここへ来なくなれば、漣はいずれ飢えていなくなるだろう。

聖はヒトだから、寿命がある。いつか聖がいなくなる日が来るそれは、漣も分かっていた。

そもそも漣は、聖が天命を全うするまでこの山に来てくれるとは考えていなかった。もちろん、そうであればどんなに嬉しいかとは思うが、それは身勝手というものだ。そうまでして生きながらえて、何の意味があるのか。聖に見限られたときが、漣の終わりとなるだろう。

生きるならば、聖の隣で。彼と共にいられるなら、何をも厭わない。

それだけが、漣の本心だった。

答えぬまま時間が経ちすぎてしまっただけ、聖に疑われるだろう。いや、例えすぐに答えたとしても、心に大きな迷いを生じさせてしまえば、心の『声』は聖の『力』に拾われてしまう。

まずは、この場を切り抜けるのだ。

「消えぬよ」

漣はそう言っただけ、聖の憂いを一笑に付した。納得したとは言えない顔で、聖は頷く。その目元はほんのりと朱く染まっていた。

「それじゃ、もう一つ。高嶺さまが今度来たら、その漣さまに勝ち目はあるんでしょうか」

高嶺が漣のもとを訪れるのは、漣を手元に置きたいからだ。そうであれば、漣自身に危害を加える可能性は低い。と、漣は思う。

それよりも、聖の聞き耳を高嶺に勘付かれるわけにはいかない。環の二の舞にならぬよう、気を付けておかねばなるまい。漣が聖と特別に親しいことも、高嶺には知られぬ方がいいだろう。あんな思

いは、もうごめんだ。

「正直、高嶺どのに勝てる気はせんな。そもそも、格が　力が違いすぎる。しかし、高嶺どのの僕と戦うためにここを訪れているわけではなからう。お主が何を心配しておるか知らんが、取り越し苦労というものじゃ。……ただ、お主の力のことは内密にな。正直言つと、高嶺どのの僕も読み切れぬゆえ」

「そう、ですか。分かりました」

聖はやはり複雑な表情で頷いた。何か腑に落ちないことがあるのかも知れないが、彼はそれ以上何も語らなかつた。

いくら心配するなといったところで、考えすぎる聖のことだからおそらくは聞かないだろう。今の漣の力でできることは、多くはないかもしれない。それでも、漣はこう言うしかなかった。

「心配するな。いざというときには、僕が何とかしてやる」

それだけを言つて、漣は笑つた。

### この、確かな声を 【3】

聖は今し方下りてきたばかりの山を振り返り、澗の姿がないのを確かめてから、道端にしゃがみ込んだ。立っていられなかった。頭がガンガンと痛むし、少し吐き気もする。

コートのポケットに手をつ突っ込んで取り出したのは、いつもの耳栓。のろのろと耳に詰めて、ようやく一息つくことができた。

今日は、『聞き耳』を開放して澗と話をしていた。それを隠すため、付け慣れないイヤーマフラーなどをしてきてしまったけれど、澗にはばれていなかったろうか。

そうまでしても、澗の本心が知りたかった。さっき、澗の『消えぬよ』という声を聞いて、そして澗の心を知って、聖はもう泣き出しそうになっていた。澗が自分のことを思ってくれるのは心底嬉しかったし、聖がいる限りは諦めないのだと決意してくれたのも頼もしかった。

しかし、澗の心の声を聞くという行為はすなわち、聖が彼女を信用していないことの裏返しだったのだと、聖は今になって気付いた。聖に気を使い、本当のことは言わないだろうと考えたからこそ、聞き耳を使ったのだ。

僕に嘘までついて大切にしていたそれらを、自分は勝手に引っ張り出してしまった。きつと、僕にだけは知られなくなかったはずなのに。

ごめんなさい、澗さま。僕はあなたを騙しました。

がっくりと肩を落とす、膝に額を擦りつける。こんな罪悪感に苛まれるくらいなら、やるんじゃないかった。結局、ここまでしたというのに、いちばん大事なことが言えていないのだ。『僕の力を、あなたにあげます』と。

どうして言えなかったのだろう。

澗がその申し出を断ると、聖自身が思いこんでいるからか。拒絶

されることが怖いのか。継ぐべき二の矢を持っていないからか。

それとも、『力』を失った後の世界が想像できないからか。十五年かかって、ようやく慣れてきた『異能者』としての暮らしを無くするのが不安だからだろうか。

そのどれもだ、と聖は自己嫌悪に沈む。

そこで、聖の思考はストップした。

座っていることすら辛い。

残念ながら、今日の聖にはそこから先を考える余裕などなかった。聖は、逃げるようにその場を後にした。

「おい、ひー」

いきなり何者かに布団をめくられて、聖は不本意ながら目を覚ました。何者かもなにも、この部屋に住んでいるのは聖と嘉章だけだ。コートを着たままの嘉章は、聖の顔色を窺うと、今さら申し訳なさそうに言った。

「……もしかして、具合でも悪かったか」

「まあね」

言いながら体を起こすと、それでもいくらか楽になっていた。横になったからか、頭痛薬が効いたのか。後悔だけは、まだ心の底にどんよりと沈んではいたけれど。

「うん、でももう大丈夫かも」

「それならいいけど。……起こしてごめん」

部屋の中は、真っ暗なうえに冷え切っていた。どうやら、かなり長い間寝ていたらしい。嘉章は部屋の灯りと暖房を付けると、再び布団の脇に戻ってきた。手に何か持っている。

「ところで、これ。またまた白紙だけど、どうすんだ？」

「あ」

進路の調査票だった。学校から配布されるたびに空欄のまま放っておかれ、嘉章が見つけては聖の目の前へと戻す。そんなことを、今年は何度も繰り返している。この従兄弟は、良い意味で逃げ場を

くれない。

嘉章は県下一の進学校と、地元の高校の名をそれぞれ挙げた。

「二択だろ。……まだ、街には戻りたくないのか？」

「そういうわけじゃないよ。今なら人が多いところに行っても、いけると思う。でも、ここを出たくないってのもある」

「煮え切らねえなあ。ま、じゃあもう少し悩めよ」

嘉章は笑って、聖の枕元に調査票を置いた。

席を離れるかと思っただが、嘉章は座ったままだ。聖が「まだ何かあるの？」と尋ねると、彼はコートを脱ぎ、膝を正した。そして、いつになく神妙な面持ちで切り出した。

「俺の進路は、もう決まったんだ。聞いてもらおうかな」

「何それ」

「辞めることにしたんだ。……三月で、先生辞める」

「ええっ」

聖の大声にも嘉章は動じることなく、さっぱりした顔で「そんなに驚くなよ」と答えた。これが驚かずにいられるか、と言いつ返しうとしたが、自分の声が頭に響いてつい尻込みした。今日はとことん不調だ。

嘉章は家でこそこんなだが、小学校に兄弟がいるクラスメイトに聞くと、ちゃんと仕事はしているし、子供や保護者からの人気もあるという。今日だって、休日返上でこんなに遅くまで頑張っているなぜ、辞める必要があるのか。

聖がしばし黙考していると、嘉章は小声で言った。

「次の春の異動では、恐らく転勤があるんだ。……となると、あいつの側にいらなくなるからな。幸い今のあいつには居場所があるし、離ればなれになってもすぐに何か起きるってわけじゃない。けど、もう亡くすのはごめんだ。少しでも近くにしようと思ってな」「じゃ、かなでさんのために？」

照れもせず頷く嘉章。

転勤を前に、彼は決めたのだ。ここに根を下ろし、自分の手でか

なでを守ることを。

嘉章が教師の仕事にどれほどの誇りと愛着を持っていたか、聖は知っている。かなでの存在が、その職を続けることよりも優先すると、嘉章は決断したのだろう。

「それ、かなでさんには言ったの？」

「ああ。ずいぶん恐縮されたけど、あれはたぶん　喜んでたんじやないかと思うな」

控えめに、しかしきらきらと目を輝かせるかなでの姿が容易に思ひ浮かぶ。

「実は、四月からの仕事ももう決まってる。そのあたりのことで、最近ちょっと遅くなってるんだ」

「帰りが遅かったのは、次の仕事の準備があつたからなの？」

「まあな。今のところは、変わらずここに住み続ける予定にしてる。

……だから、お前も残りたいなら残っていいんだぞ」

「僕のことなんか、気にしなくていいのに」

「家族だろ」

嘉章は真顔で言った。嘉章が自分のことをそんなふうと考えていたなんて、初耳だった。何気ない言葉だったが、聖の胸には込み上げるものがあつた。

「気にするとか気にしないじゃなくて、当たり前。もしそうならっただけだから、決まる前から遠慮すんな。ついでなんだから、いいんだよ」

嘉章は、聖にも選択肢を残してくれたのだ。

「ありがとう。……僕も、ヨシ兄がほんとの兄さんだと思ってる」

「俺もお前を弟だと思っではいるけど、どうせなら可愛くて尽くしてくれる妹がよかつたな」

照れ隠しなのか、嘉章は埒もないことを口走ってから頭を掻いた。

「ま、いちばん心配してるのは叔父さんと叔母さんだろうっからな。ぼちぼち決めておけよ。相談にはいつでも乗るから」

飯は作つとく、と言いつ残して、嘉章は居間へと出て行った。

今の自分が喉から手が出るほど欲しい行動力、そして未来を切り拓く力を、嘉章は持っていた。聖は、それだけで嬉しくなった。

かなでを亡くしてからよみがえるまでの年月を、嘉章は無駄にはしなかった。二度とそんな思いはしたくないという辛い経験が、彼を動かしたのだ。職は捨てなければならなかったけれど、幸せとひきかえにするのなら後悔はないだろう。

僕は、どうだろう。

子供だから、聞き耳だから諦めるしかなかった。そんな言い訳はしたくない。また逃げて、周りの人たち迷惑をかけたくはない。何より、澪を不幸にしたくない。

嘉章からもらった勇気が潰える前に、澪に会いに行こう。

浮上のきっかけを掴んだ聖は、手放さぬうちにと目を閉じた。

## この、確かな声を 【4】

「休めたのか？」

漣は聖の姿を認めると、開口一番そう言った。

嘉章と話した直後から今朝まで、ずいぶん深く眠っていたようだとは、嘉章の弁だ。眠ったという自覚はなく、気を失っていたのに近いように思う。頭を使いすぎたのか、よほど疲れていたらしい。

それでも昨日ほど眠いわけではなかったので、「まあまあですね」と答えると、漣は満足そうに頷いた。

「それは良かった。顔色もいいようだの」  
無邪気な漣の笑顔で、聖は決意を新たにし、腹を括った。

自分の提案は、きつとこの笑顔を曇らせる。でも、このひとが消えてしまうことに比べたら、曇らせるくらいは些細なことだ。

話を切り出すきっかけを窺う聖。その硬い表情を見とがめて、漣は眉を寄せたままこちらへ歩み寄ってきた。

「また何か考えておるか。ここ数日、ずっとそんな調子じゃない」  
漣は聖と向かい合っていると、存外軽い調子で言った。

この雰囲気は今なら、言えるかもしれない。聖は、嘉章とかなでの幸せそうな姿を心に描いた。自分と漣もそうなれたら、どんなに嬉しいだろう。

乾ききった唇を舐めて湿らすと、聖は口火を切った。

「僕、この春には中学校を出ます」

漣はきよとんとした顔で聞いている。これから何を話すかなんて、漣には想像も付かないだろう。無理もない、と聖は漣に少し同情した。

「その後どうするのか 上の学校に行くか、学校に行かずに仕事を探すか。学校に行くとしたら、どこの学校に通うのか。僕には今それを決める時期がきてるんです。例えば、次の学校に行くなら三



年かかる。遠いところに通うとしたら、少なくとも三年間はこの村にはいられなくなります」

「それで、昨日はあんなことを」

「そう、です。……実は、どうするかはまだ決めかねているんです。でも、僕がいなくなると、漣さまには悪い影響があるんですよ？　いつ、漣さまが消えてしまつか分からない状況だし、高嶺さまだつてあなたのことを狙ってる。どの道を選ぶにしても、弱ったままの漣さまをこのままにしておくなんて、僕にはもう我慢できない」

漣は顔色一つ変えない。あまりに無表情すぎて、取り繕ったものだとすぐに分かる。

「僕は消えぬと、言つたらうが」

真つ直ぐにこちらを見つめる漣の瞳に出会つて、聖は目を逸らす。それだけで、漣は勘付いたようだった。

「そういえばお主、昨日は耳を隠しておつたな。……聞いていた、か」

てつきり怒られるかと思つて身構えていた聖に、漣は頭を下げた。「聖がそこまでするととなると、よほどのことであろう？　気付いてやれなんだ。それほどに追い詰められていたとはこのう。……それで、いつたい何じゃ」

何から切り出そうか頭の中で考えてはいたが、そんなことは何の役にも立たなかった。

自分がこれから話すことを、漣はいつたいどう思うだろう。もし、嫌われてしまったらどうしよう。

不安で不安で仕方がないが、それでも言わなくてはならない。踏み出さないと、何も変わらない。しかし一歩踏み出せば、その分は前に進むのだ。

腹に息を入れると、自然に呼吸が深くなる。無理やりに気持ちを落ち着かせ、聖はついにその言葉を口にした。

「僕の力を、漣さまに貰つて欲しいんです」

「お主、正気で言つておるのか？」

「はい」

「お主を食うということじゃぞ」

「それがどういふことなのかは、かなでさんから聞きました」

漣は目を半眼に開いたまま、ううむ、と低く呟いた。

「聖の力は、儂ごときのために捨てていいものなどではない」

「捨てるんじゃないよ。……相手は漣さまだからお役に立ちたいんです。僕にとっては『儂ごとき』なんて、そんな軽いものじゃないんです！」

自分にとって漣がどんなに大切なのか、どうしたら分かっただけもらえるのだろう。

漣が聞き耳だったら良かったのに、と聖は思う。心をすべてさらけ出して、自分が漣のことしか考えていないのだと見せることができたらよかったのに。

いや、普通は口に出さなきゃ分からないんだ。

聖はこの村に来て、あやかしのみならず、人間との『普通』のコミュニケーションも身につけた。聞くだけでは心の距離は縮まらないということも、身を持って知った。異能などなくても自分は大丈夫だと漣に見てもらわなくては。自分を信じてもらわなくては。

それならば、今こそ暖めていた思いを晒そう。

「いつかちゃんと伝えようと思っていましたが」

「何じゃ」

不機嫌そうな漣の声。

無理もないか 聖は思わず出そうになったため息を途中で止めた。本当はもつとちゃんとした場面で言いたかったけれど、非常事態だ。

冷え切った唇が上手く動いてくれますように。そう祈りながら、聖は心の内を打ち明ける。

「こんな言葉を誰かに使うのは生まれて初めてだし、きつと最後まで。……僕は、漣さまのことをとても大切に思っています。自分のことよりも、あなたのことが大事です。だから、あなた

の命と引きかえにできるなら、力を無くしても構わない」

「そんなことを言うものではない」

「漣さま」

「聖の力は、素晴らしいものだ。僕らのような者の声を聞き届けて、慰め、救ってくれた。僕自身もほんとうに世話になった。しかし、もうこれ以上はいかん」

「分かってください、漣さま」

ほんの一瞬、漣の眉が寄った。

『聖と共に生きることができるようなら　聖の隣で過ごせるならば、どんなに素晴らしいことか！』

聖は咄嗟に耳を確かめたが、今日は『聞き耳』は封じてある。昨日のように、聖が力づくで聞いたわけではない『声』。心の中に留められているはずの音が、抑えきれなくなり、漣の中から溢れ出たのだ。それは、彼女には珍しいことだった。

それきり、何も聞こえなくなった。そつと漣を見ても、表情にそれ以上の変化はなかった。

やがて、長い長い沈黙のあと、漣は口を開いた。

「分かれ、じゃと？　……　聖が僕を憎からず思っておるなど　お主、僕が、そこまで気がきかぬと思つたか？　お主は、僕のためなら何もかも投げ出すだろうよ。そんなことは、百も承知じゃ」

やや震えた声で、漣は紡ぐ。

「そして僕は、お主の言うとおり、聞き耳を食らえば生き延びることができよう。じゃが、お主はどうなる？　お主が自らの力を飼い慣らすためにどれほど心を砕いたか、僕は知っておる。その苦労は何にも代え難い財産じゃ。できるなら、聞き耳を持ったままの聖でいさせてやりたい。お主、生まれてから十何年もかかって、耳がもたらす幸せをやつと今もぎ取ろうとしておるのじゃぞ？　……　僕にはできぬ。お主を食うことなど、できるはずがなかるうが」

話しているうちに、静かだが強い口調が戻ってきていた。漣は、聖の方をじつと見据えている。心の揺れなど全く外に出さず、誇り

を忘れない、いつもの澪だった。

何という頑固さ。何というわからずや！

やっぱり、僕は澪さまのことが好きだ。心でしか素直にもの言えない頑なさまで含めて、全部。

「その苦労とか幸せとかまでも澪さまと分け合いたいと言ったら、迷惑ですか？」

「お主も大概しつこいのう。……もう、帰れ。儂の前から失せろ」「え？」

信じられない言葉が澪の口から飛び出して、聖は自分の耳を疑った。澪は、手で聖を追い払うジェスチャーをしながら、重ねて言った。

「失せろ、と言った。お主は、もう二度とここには来るな」

「僕には、もう会いたくないっていうんですか。……本当に、そう思ってるんですか？」

「出て行かぬのなら、追い出すまで」

「待ってください！ そんな 澪さまも、きつと」

僕を好きでいてくれると思ったのに、と続けようとして、聖は息を飲んだ。

澪の目が赤く光っている。それは、彼女が妖力を使う前触れだった。澪が、命を削ってまで自分を山から追い出すつもりだと理解して、聖は愕然とした。

どうしてと尋ねようと思ったが、とてもまともに話ができそうな状況ではない。とにかく、無駄に力を使わせてはならない。それなら、ここは自分が引くのが最良の選択だろう。

「今日は帰ります。だから、そんなことで力を使うのはやめてください」

「今日は、ではないぞ。……金輪際、山には入るな」

聖はきつく唇を噛んだ。そんな条件に、返事などできるはずもない。澪の冷え切った声を背に、聖は叫びたいのをこらえ、山を後にした。

澪に拒絶されるのは予想していた事態だったが、それでも聖が受けたダメージは計り知れないほどだった。

澪さまは、本当は僕のことをどう思ってるんだろう。僕が澪さまを思うほどは、僕は想われていなかったのか。僕では澪さまの伴侶には成り得ないのだろうか？ それとも、僕を大事に思ってくれているからこそ、あんなことを言ったんだろうか。

「違う。……違う、違う！」

疑心暗鬼になりかけた聖は、すぐに否定する。澪は言った。聖の隣で過ごせたらいいと、心で叫んでいた。

澪と初めて出会った日もそうだった。彼女は消えゆくことを表面上受け入れながらも、心の底では泣いていた。誰にも助けを求めないからこそ、自分が救わなくてはと、聖はずっと考えてきた。

今さら怖じ気づく理由など、何もない。  
これで幕切れになんて、そんなことにはさせない。悲しく終わった告白を、自分自身の力で幸せに変えてみせる。それくらいできると示さなければ、澪だって首を縦には振らないだろう。

澪さま、僕はあなたに逆らいます。

いえ、あなたを信じます。あなたの言葉ではなく、あなたの心の声を。

それは、聖が澪と一緒に鍛えた『聞き耳』を、ひいては澪と共に過ごした日々を信じることに他ならなかった。

## この、確かな声を 【5】

漣は、何をすることもなくただ座っていた。

昨日、聖は来なかった。今日も訪ねてくる気配はない。

昨日今日といわず、恐らく彼はもう二度とこの山へ登ってはこないだろう。漣の願いを聞かない聖ではないはずだから。これで、聖を煩わせることもないし、彼から未来を奪わずに済む。

いくらそう思っても、欠けた胸の中は埋まらぬまま。

虚ろな理由などとうに明らかだったが、漣はあえて考えないようにはしていた。考え出すと、空っぽのはずの胸に、刃物がゆっくりと押し込まれるような痛みを覚える。心が音もなくどくりどくりと血を流し、止まらない。

化け物がヒトに心を寄せるなど、あってはならなかったのだろうか。

いや、あってはならないはずがない。聖がそう教えてくれたではないか。

目を閉じれば、瞼の裏に聖の顔が浮かぶ。聖が話していた、人間とあやかしたちの幸せそうな話が耳にこだまする。

住んでいる世界が違っていったって、幸せは掴むことができる。そんなことは分かっていた。自分の身を捧げてまで漣を生かしたいという、聖の覚悟だって本物だと知っていた。彼を食らう覚悟がなかったのは。

「……覚悟がなかったのは、儂の方が」

また独り言だ、と漣が投げやりに笑おうとすると、誰かが相槌を打った。

「何の覚悟ですか？」

予期せぬ声に、漣は跳ねるように顔を上げた。考え込んでいたせいか、何者かが縄張りを破っていたなんて全く気付かなかった。

そこに立っていたのは、きつい目の光を放つ長身の男 高嶺だ

った。

聖では、ない。

当たり前だ。聖にもう来るなど言ったのは、澗自身なのだから。

高嶺は澗の心中など知らず、相変わらざるわざとらしい丁寧さで挨拶する。

「ご無沙汰しておりました、澗さん」

「ふん」

「相変わらずつれない」

高嶺は喉の奥で、くくつ、と笑った。澗から言わせてもらえば彼の方こそつれないのだが、そもそも対等に話ができる相手でもない。聖とのあれこれでたださえ弱っているときに、高嶺の相手は辛い。だが、こちらに闘う用意がない以上、今日もやり過ごさなくてはならないだろう。

「ずかずかと人の縄張りに入ってきた高嶺に苛立ちを抑えつつ、ま

ずは様子見と、澗は軽く嫌味を呟く。

「ひとの山には入らないと言ったのは、どこのどちら様だったか」

「おや、ずいぶんとご機嫌斜めですね」

誰のせいだと思っている、と言う代わりに、澗は高嶺を半眼で見つめた。そんな視線などお構いなしに、彼は続けた。

「たまたまそばを通りかかったんですが、いつもの人間の臭いがあったものでね。今日なら、澗さんとじっくりお話ができるかと思っただけです。無断でここまで上がり込んだことは謝りますよ」

高嶺は、形だけの謝罪をしてみせる。

わざわざ聖がない日を狙ってきたということか。

先日高嶺が訪れたときも聖はいなかった。高嶺の性格を鑑みるに、聖に興味がないということは、すなわち高嶺が聖の能力に気付いてはいないということだ。もし気付いていたなら、きつと今頃聖は環と同じ運命にあっただろう。今のところ、高嶺は聖を邪魔な人間としか認識していないのだ。

それは、こちらにとっては好都合だ。

「謝るくらいなら、出て行ってはくれぬものかのう」

「それは無理ですね」

「では、用件をなるべく簡潔にお願いしたい。……少し、疲れておるのでな」

「私を早く帰らせたい、と」

「……そういうわけではないが」

「私とあの子供が鉢合わせするのを、どうにか回避しようと思っ  
ているのでしょうか？ そんなに、あの人間が愛しいのですか」

即答はできなかった。

儂に、聖への思いを口にする資格などない。いや、聖の身の安全を考えれば、高嶺にそう思わせてはならない。

だからこそ、澪は高嶺に本当のことを告げた。

「違う。……あやつはもうここには来ぬよ。先日、追い払ったばかりじゃ」

「嘘の臭いしかしねえんだよ」

何の前触れもなく、高嶺の口調ががらりと変わった。鋭い目が、先ほどまでとは別人のような凶暴さをまき散らす。

「正直に言えよ。あの餓鬼がお気に入りなんだろ？」

高嶺は澪の顎に指を掛けると、澪の抵抗など気にかげず、無理やり上を向かせた。

唇の端から覗く鋭い犬歯が、いやおうなく澪の目に飛び込んでくる。ヒトの態をするときにも、彼はこの牙を隠さない。刃のような歯が自らの首に付き立つ画を想像して、澪は身震いした。

これが、環が警告していた高嶺の本性なのか。澪は、合わない歯の根を隠すように唇を引き結ぶ。

「追っ払う理由なんかねえだろう」

「嘘はついておらぬ。あの人間との縁は切った。あやつと儂は、もう無関係よ。些細な喧嘩が元でのう。……もう、顔も、見たくない」

こころが痛かった。聖のことを口にするたび、胸の奥の傷が開く。澪は、自分で自分の傷口を抉っていった。



「白々しい」

高嶺はいきなり腕を伸ばしてきた。大きな手が溇の首を楽々と掴み、喉を潰すように力が込められた。溇は自らの首元に手をやってもがいたが、高嶺の力は緩まない。

「何を　する」

「てめえごときが俺に敵うかよ」

そのまま後ろに勢いよく押され、溇は地面に後頭部と背中をしたたかに打ち付けた。目が眩み、視界が真っ白になる。

「……う、うう」

ぶつけた頭が痛み、溇は思わず唸った。

遠のいた意識を取り戻したときには、仰向けで倒れた溇の腹の上に、高嶺が馬乗りになっていた。いつもの薄笑いではなく、こんな顔を隠していたのかと驚くほどに嗜虐的な表情で溇を見下ろしている。

「お下がりは好きじゃねえんでな。さつさと寝取ってやるよ」

「求婚だの手元に置きたいだのと散々甘い言葉を使っておいて、今度は寝取るじゃと？　素直に食うと言ったらどうじゃ」

「食って、力を取り上げて、俺の庇護なしでは生きられないようにしてやる。間違っちゃいねえだろう？」

「……この程度のおやかしなどほかにも沢山おるだろうに、何故儂なのだ」

「見た目が好みだと、前に言ったがな」

「嘘の臭いがするがのう」

溇が高嶺の言葉を借りてそう言うと、本人は鼻で笑った。

「そういうやせ我慢ができる度胸もいい。……それに免じて一つだけ言やあ　俺と同じだからだ」

「何？」

「さてね」

彼は溇に考える余裕など与えてはくれない。

「てめえは、自分の身よりあの餓鬼のことが心配なんだろう？　安

心しろ。人間には興味はねえよ。それに、あいつを生かしておけば  
てめえの命は繋がるんだろう？ その間、俺はお前で遊べるわけだ。  
まだ使えるおもちゃを捨てるほど阿呆じゃねえ。消えねえ程度に加  
減してやるよ」

高嶺に組み敷かれたまま、漣はにやりと笑った。

聖と添えず、高嶺に飼い殺されるくらいなら足掻いてみたい。死  
に急ぐのは趣味ではないが、最後の一蹴りを食らわして散るのも悪  
くない。環には謝らねばならないだろうが、『やつつける』のは無  
理でも、一撃加えるくらいはできるかもしれない。

「覚えておくがよい。僕の体と力がお主のものになっても、胸の中  
まではやらん。……他の誰にも、開かぬ」

言い終わるが早いのか、漣はあらん限りの力で念じた。

高嶺の背中で、風が捲く。それはやがて轟音となって森の木々を  
揺すった。解け残りの雪がまるで吹雪のように空を舞う。

風で飛ばされた枝や石が高嶺の体や顔を容赦なく打ち、その度に  
鈍い音を立てた。折れた枝が彼の頬を抉った。しかし、いくらもの  
が当たり傷ついても、高嶺は漣の腹の上に座ったまま表情を変えな  
い。

やがて、漣の目から赤い色が引いていった。もともと乏しかった  
力を使い過ぎ、精も根も尽きた。漣の一撃は、確かに高嶺に届いた。  
届いたのだが。

「終わりか？」

高嶺は頬を伝う自らの血をぺろりと舐めた。狼の性を剥き出しに  
している今の高嶺には、朱く染まった唇が妙に似合っている。それ  
が綺麗だと思ってしまった自分が悔しくて情けなく、漣は臍を噛ん  
だ。

「無駄に暴れちゃあ、俺の取り分が減るじゃねえか。並のあやかし  
なら相当に効いてただろうが、あいにくと打たれ強いんでね。……  
鹿は久しぶりだ。味わわせて貰うぜ」

漣は、はあはあという荒い呼吸でそれに答えるほかなかった。

もはや、これまで。儂は、高嶺殿のものになる。

動けなくなつた澪の体に高嶺が覆い被さつた。抵抗する力は、澪にはない。さつき見た鋭い牙が、澪の肩口に食い込もうとしている。たまらず、澪は静かに目を閉じた。

思つのは聖のことだつた。雫が一筋、目尻から伝つ。

儂の心は聖ひとりのもの。……さらば、聖。

ぶつりと皮膚が切れる音がして、鉄に似た臭いが澪の鼻に届く。同時に、すうつと気が遠くなつた。

耳元で、愉悦に浸る高嶺の声が聞こえる。

「旨いな」

首元を生温かい液体が流れてゆく。高嶺はその傷に直接口を付け、食つて いるらしかつた。『食われる』ことはどれだけ苦しいだろうかと思つていたが、思いのほか痛くはない。澪の中には、何の感情も生じなかつた。冷たさも温かさもない。ただ、思考が止まり、意識が薄れ、体が軽くなつていくような気がする。

「澪さま！」

よく知るヒトの声が、澪の耳を打つた。

そんなはずはない、と澪は自分の考えを打ち消した。ひどい言葉を投げつけて、一方的に背を向けたのだ。来てくれるはずが 助けに来てくれるはずがないではないか、と。助かりたいあまり、聞こえない声を聞いたに違いないと。

違う。儂が、聖の声を聞き違えるわけがない。たとえば吐息のひとつでさえも、聖のことならば分かる。覚えている。

しかし、それでも信じられぬまま、高嶺に押さえ込まれた体をできる限りよじる。視界の隅に少しだけ見えたのは、見覚えのある革靴だつた。

「またお前か。……邪魔だ！」

地鳴りのようにも聞こえる高嶺の怒号が、山に響き渡る。

普通の人間なら足がすくんでしまうほどの威圧を感じるであろうその声にも、彼は動じなかった。泥だらけの靴を履いた足が、迷い無くこちらへ駆けてくる。体と体がぶつかり合う音がして、視界を占めていた高嶺の姿が消えた。

代わりにこちらを覗き込んだのは、聖だった。

「溇さま」

溇が慌てて上半身を起こしたところで、聖が肩を貸してくれた。

溇は、もはやひとりで立つことすらできなかった。すでにかかなりの力を使い、また、高嶺に食われていたのだ。

聖が溇のふらつく体を支え、まだ体勢を立て直すことができていない高嶺から少し離れたところへと運ぶ。

「怖かったでしょう？」

温かい手が溇の涙を拭い、夢か幻と思えた聖の姿が現実だと、溇は知った。

この、確かな声を 【6】

「来るなど言つたらうが」

「そんなこと、聞いてません」

「この うつけ」

溲が弱々しく毒づく。

うっすらと雪化粧した獣道。日陰の斜面は凍り付いていてよく滑り、何度が転んだ。立ち止まったためか、みるみに自分のものではない足跡を見つけ、それが高嶺のものであると聖は直感した。そこから大急ぎで山を登ってきて、なんとか間に合った。

いや、間に合つてない。自分がもう少し早ければ結果は違つたかもしれないのに。

溲と高嶺との間にいったい何があつたのか、聖は分からない。ただ、高嶺に襲われている溲を見て、頭に血が上つた。助けなくては、と思つた。

聖は、息も絶え絶えな様子、溲をそつと横たえる。溲の真っ白な着物は胸元が大きく開かれて、その襟には何か赤いものが見える。どうも、怪我をして出血しているらしかった。いつもなら隠しているはずの、毛皮に覆われた耳や尾が露出していた。かろうじて人型を保っている、といったところだろうか。

「やりやがつたな。一張羅が台無しだ」

高嶺は泥を払い、起き上がった。底冷えのするような光を瞳に湛え、言葉とは裏腹に笑う。今日の高嶺はこの前会つたときとは違い、もう本音を隠してはいないようだった。頬はざっくりと切れ、そして口の周りは赤黒く色づいている。そのせい、いかにも狼のような、ざらりとした鋭さが強調されていた。

「食事の邪魔を」

「食事だつて？」

手の甲で口を拭き、さらにその手を舌で舐め取る高嶺。その赤が

溼の血だと気づき、聖は言葉を失う。本性を表した高嶺と、急激に弱りゆく溼。首には血が滲んでいる。それらが何を意味しているのか、聖は悟った。

高嶺を前にしているにも関わらず、聖の体は恐怖ではなく怒りで震えていた。全身の血が沸騰でもしたのではないかと思えるほど体が熱い。

「お前、溼さまを」

「まだ途中だったんだがな。無粋な輩が乱入してきたんでね」

溼を征服した昂揚感からか、上気した高嶺の顔。それが、聖には歪んで見えた。それほどまでに強く、聖は高嶺を睨み付けていた。

食ったんだ。こいつ、溼さまを。

体のどこかから、ぎりつ、という硬質な音がした。聖自身の歯ぎしりだった。

罵倒の言葉など、多くは知らなかった。言いたいことは数え切れないほどあったが、声にならない。

「この けだもの」

「間違っちゃいなえな。俺は昔からそうしてきた。強いものがより旨い肉を喰える、それが当たり前だろう？ 枯れかけの溼にはそんなに期待はしちやいなかったが、なかなかだ。あの娘 赤い眼鏡の千里眼よりも、数段いい」

「赤い、眼鏡？」

意外な単語に、聖は少しだけ冷静になった。

千里眼とは環のことだろう。先日、何故か道端に落ちていた彼女の伊達眼鏡は、聖の机の引き出しにしまつてある。

しかし、高嶺がなぜ環のことを知っているのか。そういえば近頃、環のことで何か引っかけることがあった気がしたが何だっただろう。少し考えて、すぐに思い当たった。おととい聖が溼の心を聞いたとき、なぜか環の名が出てきたのだ。

環は先日、聖のところにも顔を出してくれた。溼のところにも行くと言っていたけれど、その途中で高嶺ともめ事でもあったのかも

しれない。いかにも衝突しそうだ。

「環さんが、何だっというんだ」

「この餓鬼、何も知らねえのか？ 知り合いならば教えてやるのが親切つてもんじゃねえのか、漣」

「それは」

漣が不自然に口ごもる。

聖は漣を見た。漣は相変わらず横になったまま、何かを訴えるようにこちらを見つめ返している。とても悲しげな目をしていた。

「すまぬ、環。もはやこれまでじゃ。……環はただのヒトとなった。高嶺殿に」

漣の心を最後まで聞くことなく、聖は目を見開いて高嶺の方に向き直る。高嶺は何も答えず口元を緩めただけだったが、聖の耳は彼の声を捉えていた。

「たまき、なあ。そんな名だったのか。味は良かったが大した力じやなかったな。磨くのを怠ったヒトの力など、所詮あんなものか」

環さんを 漣さまだけではなく、環さんまで食っていたのか。

高嶺は、自分が手に掛けた者たちの名すら覚えていない。

きつと、環が名乗る間も与えずに食らったのだ。彼女がどんな思いで力を封じて生きる道を選んだのか、高嶺にはその長い一生を掛けたって分かるまい。それを、あんなものと片付けるのか。

「あんなものか、だと？ ……ふざけるなよ。あの人はこれから生き直すはずだった。それを踏みにじって、よくそんなことが言えるな！」

「それ以上はやめよ」

苦しい息の下から、漣が聖を鋭く制止する。次いで、聖だけに向けて声が飛んだ。

『早まるな。高嶺どのは、そこまで口にはしておらぬ』

しかし、すでに遅い。高嶺は顎に手をやって首を傾げていた。

「どうもおかしいとは思ってたんだよ。てめえは、消えかけた山奥

の鹿にどうして気付いた？ 今、俺の心をどうやって読んだ？」

聖を値踏みするように高嶺の目が光る。頭の奥まで見透かされそうな視線に、聖は体を硬くした。

「さてはてめえも異能だな。腹の足しになる力か？」

「それほどの強さがあっても、他人から盗らずにいられないのはなぜなんだ？」

聖は、それがずっと気にかかっていた。もちろん、聞き耳から話を逸らし、時間を稼ぐ目的もあった。しかし、それだけではどうしても高嶺の口から聞いてみたいと思っていたのだ。

「美しいものと強いものが好きなだけだ。…… 澪は俺好みに仕上がってたんだが、どこかの人間のせいで台無しだぜ」

『目の前の恐怖に耐える顔もなかなかそるもんだが、昔の澪は怯える表情がそれは美しかった。同じ恐れを知る者として、これでもいろいろと気に掛けてやったんだがな。…… いや、そんな昔のことなどとうに忘れた、か』

自らの言葉 実際は、声にならない声、というやつだが、すぐに打ち消す。挑発的な表情は崩さず、高嶺は聖の後ろにいる澪を見ていた。

同じ恐れ、と言っただろうか。これほど強靱な心と体を持つ神高嶺ともあるうものが忘れた記憶とは何だ。澪と同じ恐怖とは何だ。今、彼女が直面している恐れとは何だ。

それは、力が尽きて消滅すること。

聖の中で、何かが、すんと、と収まりのいいところに落ちたような気がした。もしま、高嶺も澪と『同じ』ように、消えかけたことがあるのではなからうか。

だとすれば、一度消えかけたことがある澪に執着するのも納得はいく。その孤独を共有する相手は、きつとそう多くない。その中で、いちばん身近にいて高嶺のお眼鏡にかなったのが澪だったのだらう。他人を食ってまで自分を高めたい心理も、それなら分からなくもない。そもそも高嶺は狼だから、弱いものを自らの血肉にすること



にためらいはないのだ。そうだとしても、澪や環にしたことはとても許せるものではないけれど。

「どうして、澪さまにこだわる」

「さてね」

案の定、高嶺は答えない。

「そろそろ、俺の質問にも答えて欲しいんだが」

「どうせそれを聞いた後で、僕も澪さまも食うんだろっ?」

「よく分かってるじゃねえか」

「だったら、嫌だ」

少しでも時間を稼ぎたい、と思った。

冷え切った澪の体に、包み込むように優しく触れる。高嶺の目から守るため、聖は彼女を抱きかかえた。

これで、高嶺には僕の背中しか見えないだろう。

聖は、澪にしか届かない小さな小さな声で囁いた。

「澪さま」

「……すまぬ」

「謝るのは変です。僕、初めて自分の力を自分の幸せのために使うとしてるんですから」

「僕は人間ではない。獣じゃ。鹿じゃぞ。それに、お主の何十倍も生きておる年増じゃ」

「知ってます。そんなの、どうでもいい。一目惚れなんです。この耳は、きつとあなたに出会うために授かったものだって、今は思ってる。僕、澪さまの声をずっと　できるなら死ぬまで、聞いてたい」

「この、大馬鹿。口ばかり上手くなりおって。……嬉しいことを言うなり、澪は聖の胸に顔を埋めた。

「み、澪さま?」

「もう少し、寄れるか?」

澪は口には出さずに、直接心で伝えてきた。聖は返事をせずに、頬が触れるほどの距離まで顔を近づけた。

『温かいな。聖の側にいると、儂も温かい。そんなことは、とうに知っておったのに。……先に詫びておくぞ。本当に、すまぬ』

閉じかけた瞼を細め、漣が微笑む。彼女が何を詫びたのか、聖にはすぐに分かった。

遠くで高嶺が何か言っている声、近づく足音が聞こえるような気がした。しかし聖は無視して、漣の声に集中するため、目を閉じる。『見ての通り、ちと、高嶺殿に食われてな。儂が不甲斐ないせいでこのざまじゃ。もう少し力があればこんなことにはならなかったろうに、口惜しくてならん』

落ち着いた口調のなかに滲む気迫のようなものが、漣の覚悟を示していた。これが、恐らく『聞き耳』が捉える最後の声になるだろう。聖はじつくりと味わいたくて耳を澄ます。

『なあ、聖。愚かだと笑うものもおろうが、儂は聖と同じものを見聞きしてみたい。……それゆえ、お主を　お主の力を、儂のものにする。よいか？』

次の瞬間、聖は漣を思い切り抱きしめた。巻き付けるかのように強い力を腕に込める。普段の聖からは似合わない、荒々しくぎこちない動作だった。

「それを、ずっと待ってたんですよ」

耳元で息を吐く音がして、漣が身を震わせた。漣の背中に回した手から彼女の低い体温が伝わってくる。

『また透けておる。いつかと一緒じゃの』

聖が薄く目を開くと、ちょうど漣の首が見えた。痛々しい傷跡と、さらによく見ると指の跡が赤黒く残っている。もともと透き通るように白かった肌が、今は完全に透けていた。

『聞き耳の力は聖にはかけらも残らず、すべて儂の命になる。その代わり儂は、お主から譲り受けた力でお主を守る。お主を看取るまで守り通してやろうぞ。約束じゃ』

聖は漣を抱きしめたまま頷いた。看取る　すなわち死ぬまで一緒だと告げられても、もとよりそのつもりだったから、聖は驚かな

かった。彼女の選んだ幸せの中に自分がある。自分の力と思いが、  
澪の中に生きる。それはなんて素晴らしいことなんだろう。

「澪さまと一緒に育てた聞き耳です。後悔なんかしませんよ。……  
僕の未来を奪ってしまっ、なんて思わないでくださいね。僕の力が  
ふたりの未来になるんです。いいですか？」

『あい分かった。遠慮はせん』

消えかけているのが嘘のように、澪は悪戯っぽく微笑んだ。幼い  
顔には不似合いな、妖艶な表情が浮かんでいる。

『……高嶺殿に見せつけてやるのもよいかもしれん』

そして、澪は何の躊躇もなく聖の首筋を舐めた。

「うわ……！」

初めての柔らかさに、聖がびくりと震える。目を丸くする聖に構  
わず、澪はさつき自分が高嶺にされた通り、顎に力を込めた。

澪の歯が聖の首に甘く食い込む。彼女と一つになるのだと思えば、  
その感触は聖にとっては涙が出るほど嬉しいものだった。

『泣くな』

「ごめんなさい」

『男がみつともないぞ。……儂の器を満たすには、ちょうど良い。  
まるで、あつらえたようだのう』

聖と長年共にあった何かが、徐々に体から抜けていく。ときには  
自分を苦しめ、あるときには喜びを運んできた『聞き耳』。形はな  
いけれど、確かに存在したはずのもの。それが、澪に食われている

澪の新たな力となるため、自分の中から出ていく。

代わりに、空になったところは幸せで満たされていく。心と心が  
直に触れ合い、混じり、また二つに別れて戻ってくる。

気が遠くなるくらいの幸福感。そして実際、聖の意識は徐々に白  
んでいく。

「いい加減にしるよ」

高嶺が二人のすぐ側まで迫る。聖に歯を立てたまま、その肩越し  
に澪は高嶺を睨み付けた。死にかけだった澪は、聖の力と心を得て、

此岸へと舞い戻っていた。瞳は燃えるように赤く、高嶺に食われる前よりも爛々と輝いている。

澪は、ぐったりとした聖を優しく横たえた。

高嶺を睨め付けて不敵な笑みを浮かべる澪は、先ほどまでのように透けてはいなかった。小さな体は生気と自信に溢れ、高嶺の前に立ちはだかつている。神をも恐れぬというのはこういうことかと、聖は朦朧とした中で思った。

「邪魔をするな、無粋な輩め。……儂は、聖と一つになっただぞ。もう遅れは取らぬ」

「……ぬかつたぜ」

高嶺が舌打ちをした。

「まさか、てめえらがその道を選ぶとは！」

この、確かな声を 【7】

聖は凍てつく土の上に寝転がっていた。さっきまでの澗とまるで同じ、動けない状態で、上半身だけを二人の方にねじる。対峙する澗と高嶺が見えた。

生まれたときから体の一部だった聞き耳は、全く機能していないいや、無くなっているようだった。いくら努力しても人間並みにしか聞こえない。澗が言ったとおり、聖の力はすべて彼女の中に取り込まれたのだろうか。

初めて人並みの聴力で聞く世界は途方もなく静かだった。静けさを望んでいた頃もあったが、いざそのときを迎えてみれば、心は落ち着いていた。

「澗ならば、それだけはやらねえとたかをくくっていたんだが」  
「追い詰めたのはお主であろう。……お主の十八番を盗ってすまぬのう」

皮肉混じりの反撃。

澗は凜とした威厳をまとい、高嶺と同じ目線でやり合っている。聖には、狼の喉元を蹴り上げる、鹿の力強い蹄が見えた。澗の小さな背中がかつてないほどに頼もしい。これが彼女の本来の姿。山の神としての力を湛えた、あるべき姿なのだ。

「お主に一つ教えてやろう。聖は聞き耳よ。よくよく練り上げた、偉大な力を持つ異能の子で、あった」

「聞き耳？ ……てめえにや、筒抜けだったってことか。澗にくれてやったのはもったいなかったな」

高嶺に睨まれ、聖は違うと言おうとしたが、腹に力が入らずに断念した。誰彼構わず心を読んでいくわけではない。聞き耳は、声の主が本当に強く思っていることだけを捉えるのだ、と。

「お主が食っても大して役には立たぬよ。お主、環を食らってどうであった？ あの娘の力だってなかなかのものであっただろうに、

お主の力はそう伸びてはおらぬだろう？」

高嶺が無言で澗を見る。

「人の中では優れた者は忌避される。たった十何年の間に聖がどれだけ涙を流したか、お主にはわかるまい？ 『聞き耳』には、聖の想いが山ほど詰まっておる。それを自らに取り込めねば、食っても無駄じゃ。儂にならそれができる。聖と通じた儂ならな」

澗は、まだ血の跡が残る自分の胸元を押さえた。

「聖を食った儂も、その力と心をここに受け継いだ。儂はこれを持って聖と共に生きるぞ」

「人に撃たれて死に、人に裏切られて死にかけたんだらう？ それなのに、てめえは人と生きるってのか？ その餓鬼だって、いつてめえの前から消えるか分かったもんじゃねえ。そうでなくても、人は死ぬんだ。一緒にはいらねえよ」

「儂は、それでも人が好きじゃ。……それにな、聖は心変わりなどせんよ。寿命があるのも承知」

澗の声を聞きながら、聖はこの村で暮らすようになってからのことを思い返していた。

澗が自分を信頼してくれているだけで、聖は満たされる。誰かと想い合うことがこんな力になるなんて、澗と出会うまでは知らなかった。

村に住むたくさんのあやかしたち。ある者は想いを貫いて結ばれ、またある者は叶わぬ願いに傷ついてもいた。けれど、人が好きで、人の側で生きたいと望む者ばかりだった。澗もその一人だし、異能の人間。環や、聖自身もそうだった。

「儂らあやかしには、長い長い時がある。その中のほんの少しの間だけでも、好いた者と共にありたいと願って何が悪い？ それが偶々ヒトで、偶々異能を持つ男であった、ただそれだけじゃ」

高嶺は答えなかった。ただ、高嶺の周りにあつた尖つた空気はいつの間にか消えていた。

今、高嶺は何を考えているのだらう。心の底では、孤独を知る者

どうしとして、漣と近づきたかったのではないのだろうか。それとも本当に、獲物としての漣しか見ていなかったのだろうか。

聞き耳があるうちに聞いておけばよかった、と聖は今さら思う。高嶺の本心は、もはや誰にも分からない。いくら耳を澄ましてみても、聖にはもう風の音しか聞こえなかった。

「馬鹿じゃねえのか。分かるかよ」

やがて口を開いた高嶺は、漣との対話を放棄した。これまで、漣や聖との会話さえも力づくでねじ伏せてきた高嶺が見せた、初めての逃げだった。

漣もたたみかけのように攻勢を強める。

「棘の折れたいばらでも、枝で打ち据えるくらいはできよう。今度はただでは食われんぞ。儂らの想いが乗った蹄、試してみるか？」

「今のお前は、一人じゃねえ。ふたりだな。……そんな漣は、いらねえ」

高嶺は「ふん」と息を吐き、漣に向かって笑う。どこにも毒心のない、まるで漣を祝福するかのような飾り気のない笑顔だった。

「惚気を聞くほど暇じゃねえし、お暇するぜ」

「いつか、お主にもこよう。一人では、なくなるときが」

漣と聖を見比べ、高嶺は小さく舌打ちしながら言った。

「だったらいいがな」

こちらにくるりと背を向けると、高嶺は山を下りていった。

この、確かな声を 【8】

『行ってこい』

澁から返ってきたのはその一言だけだった。

人に揉まれるため、心を鍛えるために、街の高校に行きます。ただの人間になった今、いったいどこまでやれるのか。まだ怖いけど、僕は澁さまに相応しい男になりたいから、自分を試したいんです。澁さまは、僕のこと待っていてくれますか。

尋ねられたら話したいことはたくさんあったけれど、澁はそうはしなかった。だから、聖も一言だけ。

『また、すぐに会いに来ます』

澁が頷く。別れの挨拶は、それだけだった。

それから二ヶ月。五月の連休に、聖は村を久々に訪れた。

今は嘉章が一人で住む部屋は何もかもそのまま懐かしかったが、自分がいない分だけ広く感じられた。押し入れには、三月まで聖が使っていた布団が残されていた。

聖が街へ戻るために村を出るとき、笑いながら「いつでも戻ってきていいぞ」と言った嘉章の目が潤んでいたのを思い出す。

そして今朝、聖は朝早く、嘉章のもとを後にした。

今日は、一月ぶりに澁に会うのだ。

街からはこの村へは、そう頻繁には通えない。一回ごとの機会を大切にしないで、と聖は気合いを入れて真顔の練習を繰り返す。そうでもしなくては、緩みきった顔で澁の前に出ることになってしまうからだ。どんなに頑張っても、澁に会ったとたん顔の筋肉が弛緩するのは目に見えているのだけだ。

小中学校の合同校舎前を通りかかると、一番桜はとうに散り、花の後からは爽やかな色の若葉が芽吹いていた。桜は桜でも、八重桜



や芝桜が見頃を迎える季節。

春というには遅いし、初夏というには少し早い、出歩くのにはちょうどいい時期だった。

澪さまにも、見せてあげたいな。

花の香りを嗅ぎながら、聖は思った。

まさか澪に携帯電話を持たせるわけにも行かず、今回の訪問は彼女にとっては完全に不意打ちだったはず。なのだが、約一ヶ月ぶりを見る澪は、平然とこちらへ歩いてきた。特に嬉しそうだが、弾んだ足取りなどという可愛らしさはない。

強いていえば、その歩みがいつもよりも早いような、と聖は思った。

「変わりはないか」

「はい。ご無沙汰していました」

「……む？」

聖を見上げた澪が、大きなまばたきを二、三度繰り返す。彼女は、まるで眩しいものでも見るように目を眇めていた。

「また、伸びたか？」

「そうみたいです」

「お主、何だかいい男になりそうじゃのう」

「……褒められてるんですか」

「他にどう聞こえる」

ここ最近で、聖の背はまるで枷が外れたかのように大きくなっていった。秋には澪より少し大きいくらいだったのが、ここ半年で頭一つ分くらいの差に広がっている。

単に、成長期、という言葉だけでは片付けることができない変化だった。

急成長の始まりは、力を失った時期とちょうど一致する。そのため、聞き耳を維持するために結構な体力を消費していたのかもしれないと、聖は勝手に納得していた。どうしてこんなに牛乳を飲んで

いるのに背が伸びないのだろうと、聖は不満に常々思っていたのだ。力がなくなつた今、その分が成長に使われているのではないだろうか。

一方の漣は、何やらぶつぶつと文句を言っている。

「しかしなあ。儂のこの姿では、もう仰がねば顔も見えぬではないか」

ザツと音がして、砂埃が舞う。漣は聖を見上げたまま、いじけた子供のような仕草で地面を蹴っていた。聖の顔はさらに緩む。

「僕はこのくらい伸びて、満足ですよ。ずっと、漣さまより大きくなりたいつて思っていたので」

「そうであったか？ ……そうか、ではまたの機会にしようかの」「何をです？」

「儂は変幻自在じゃぞ？」

漣は、ふふん、と妙な笑い声を漏らしたが、企みの中身までは教えてくれなかった。気にはなつたが、突っ込んで聞いたところでやはり漣は笑うだろう。

一呼吸おいて、聖は今日の本題を切り出した。

「よかつたら、一緒に山を降りてみませんか？ 今が盛りの花が結構あるので、お見せしたいんです」

聖の力を得て以来、漣はこの山の外にも出られるようになっていた。聖は、この休みの間、漣とできるだけ村を歩きたいと張り切って帰ってきたのだ。

漣は何かを考えるかのように空中を睨んでいたが、やにわに「おお！」と声を上げた。

「思い出した、思い出した。それは『でーと』じゃな」

「まあ、だいたいそうです」

「お主と並んで歩いたりするのだな」

「できれば」

恥ずかしいことをストレートに訊いてくる。漣に照れる様子が微塵もないところを見ると、聖が教えた単語だけを記憶していて、実

際のデートがどんなものかはよく知らないのだ。

「ふむ。……では、やはり、やる」

そう言うなり、澪は聖に背を向ける。一瞬、ひゅうと風が吹き抜けた。

訝しむ聖が眉をひそめるうちに、澪はくるりとターンして再びこちらに向く。瞳は赤い光を残していた。

「これではどうだ」

「……あれ？」

澪の視線は、聖と同じ位置にあった。背が伸びたはずの聖と、同じ高さに。

それに、すらりと伸びた手と足に、大人びた表情。さっきまで、上から覗き込むことができていたうなじの辺りは、見えなくなってしまうっていた。

澪もまた、少女から女性へと劇的に変貌を遂げていたのだ。それも、一瞬で。

にっと笑う大人の澪は、相変わらず清楚ながらどこか艶のある眼差しで聖を射抜く。いつか見た瞳だと思いついてみると、冬のあの日、聞き耳を澪に捧げたときの顔だった。

そう思い至った途端、聖の胸は大きく鳴った。あの時の幸福感は、いまも聖の心に満ちている。

「これではどうじゃ。お主と並んでも、見劣りせんか」

「ええと　とても、いいんじゃないかと思えます」

彼女が、外見すらも自由自在の山の神である、ということとは知っていた。人型と、鹿の姿は見たことがある。いつだったか、なぜ少女に化けているのかと尋ねると、澪は『聖の歳に合わせた姿じゃ』と答えた。

だとすると、澪が大きくなったのではない。自分が　聖自身が、それだけ大きくなったということであり、澪が聖の成長を認めてくれたということか。

澪は自らの耳を指差して、首を傾げた。

「ならばよい。この方が、声が聞きよいからのう。……儂は聞き耳ではないが、聖の声はなぜかこの耳によく届く。不思議なものじゃな」

「僕もですよ。澪さまの声はよく聞こえます」

やっぱり、僕は澪さまの声がたまらなく好きだ。

今はもう、澪の心の声を聞くことはかなわない。しかし澪は、ただの人間になった聖にこうして語りかけてくれる。その声は、鼓膜を、そして心を震わせる音色だ。澪の声は、聞き耳の力がなくなつた今でも聖には特別なのだ。澪にも自分の声がそのように届いていればいいのだけれど、と聖は微笑む。

さて、と。

少し大人になったのなら、少し背伸びをしても許してもらえらるうか。仮にも神さまを相手に不遜な物言いをしては、罰が当たるのではないだろうか。天罰を下すとすれば、もちろん澪なわけだが、と、ためらっていた言葉があつたのだが。

できる限り自然体を装って、聖は澪の耳元で囁いた。

「愛している人の声、ですからね」

「……あ 阿呆」

「そんな言い方しなくてもいいじゃないですか」

「うるさい。……察せ。ヒトのことはいろいろと学んだが、こういふことはどうも不得手じゃ。愛とか愛するとか、そんなことは初めて言われた。こんなに長く生きてきて、初めて。……嬉しゅうて、顔も上げられぬわ」

澪は俯いたまま呟いた。白い肌が耳まで桃色に染まっているのを見て、聖はなおさら彼女を愛おしく思う。

「これからたくさん一緒に歩くんですから、下を向いたままじゃダメですよ」

「目を閉じていても、こうしておれば道は違えぬ」

澪はごく自然に、聖の方へ手を差し出した。ぴんと立てられた澪の小指に、聖もそつと指を添える。

初めて会ったときに交わしたやり取りを思い出し、顔を見合わせ  
て笑った。

「いつまでも、繋いでおいてくれ」

「あなたが願う限り」

【「その、幽かな声を」 おわり】

この、確かな声を 【8】（後書き）

本編はこれで終わりです。

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

番外編がいくつかありますので、この後はそちらを投稿しようと思  
っています。

【番外1】聖と滯と甘いもの（前書き）

本編が完結しましたので、番外編をいくつか投稿します。  
どれも、軽い気持ちで読める短いお話です。  
よろしければお楽しみ下さい。

## 【番外1】聖と澪と甘いもの

久々に現れた聖は、見慣れない小箱を持って現れた。無断で連絡を絶った詫びもなく、いつものようににこにここと笑いながら「澪さま、お久しぶりです」と悪びれもせず言う。

「連休だったので、家族に会いに街まで行ってきたんです」

聖は言い訳のように付け加えた。

それなら、仕方がない。いや、そもそも何が仕方がないというのだろう。澪が自問自答しながら眉間にしわを寄せていると、何も知らない聖は不思議そうに尋ねた。

「怒ってますか？」

「いいや」

「それならいいんですけど。もしかして、心配してくれたりとか」

「な、なぜ僕がお主の身を案じなくてはならぬのじゃ」

図星。

澪はあからさまにうろたえて言葉を噛みながらも反論した。

聖は少しだけ困ったような表情を見せたが、ふと顔を上げて手持ちの箱を差し出した。

澪の目の前に突き出された箱は、白地に緑色で毛筆の文字が記されている。澪が首を傾げると、聖はやや誇らしげに「これ、お土産なんです」と微笑んで箱を開け始めた。出てきたのは、何かが入った透明なお椀と、同じく透明なへら。

「何じゃ、それは？」

「『あんみつ』です。……このスプーンで、混ぜながら食べるんですよ。おいしいですよ」

聖はあんみつのプラスチックカップのふたを開け、スプーンとともに澪に手渡した。

わりに有名な高級和菓子店の看板商品で、正直なところ財政的にはちょっと痛かった。しかし、澪の喜ぶ顔が見られるならそんなこ



とは気にならない。さすがに肉や動物性のものは無理だろうと考え、これなら溇も食べられるかもしれないと思って選んだものだった。

「……ふん。無駄にするのも後味が悪いな。いただく」

少しだけ意地を張ってはみたものの、花の蜜よりもさらに甘い香りがふんと漂い、溇の鋭い嗅覚を思い切り刺激する。何も口に入れなくても生きられる身ではあるが、おいしいと聞いて逃す手はない。聖が器用に食べるのを見よう見まねで溇もお椀の中身を口へと運ぶと、経験したことのない甘さがじわりと口の中に広がる。

隣で聖が、あんは小豆を煮詰めて砂糖で味を付けて、とか、この透明なのは寒天だっていつて などと解説をしてくれた。人間はこんな上等で手の込んだものを普段から食べているのだろうか。

一通り味わって、溇は「旨いもんじゃのう」とぼつりと漏らした。「あ、良かった！ お口に合わなかったらどうしようかと思ってたんですよ」

認めるのは少々悔しい気もするが、おいしいものはおいしい。旨いモノは心を素直にする効果があるらしい、と溇は独り笑いをした。真顔に戻ると、淀んだ思いを打ち明ける。

「聖……黙っていなくなるな。気にかからぬわけがないだろう？」

それに それに、また独りになったのかと

「あ……ごめんなさい」

聖は、怒ったような溇の横顔を見ながら自分の考えの浅さを呪った。

これまでの経験から、彼女の中ではこの山に取り残されることが消滅へと直結しているのだ。家族と楽しく過ごしている間だって溇のことを忘れたわけではなかったけれど、寂しい思いをさせてしまったのは曲げられない事実。溇が感じる孤独の深さを読み違えていた、自分のミスだ。

「まあいい。今回は、『あんみつ』で帳消しじゃ」

「もう、不安にさせるようなことはしませんから。長く留守にするときは、ちゃんとお知らせしますね」

澪の目の前に、聖の拳が差し出された。とまどう澪に、「こうするんですよ」と聖は自分の小指と澪の小指とを絡ませる。

「人間が約束するときのおまじないです。約束を破らないようにって。……どこに行っても必ずお土産買ってきますから、また二人で食べましょう?」

甘いものは、心を素直にする。それは、妖も人間も同じのようだった。

【番外2】化学解題（ばけがくかいだい）

「あの、漣さまはどうして女の子の姿なんです？」

聖は、隣の漣に尋ねてみた。

漣は呑気なことに、ちよつど大粒の苺をへたごと頬張っていたところで、突然の問いかけに目を白黒させる。やつこのことで飲み下すと、咳払いを一つして聖の方へと向き直った。

「い、一応、女というか、メスじゃからな」

「いえ、そういうことじゃなくて。もつと化けやすい外見ってないのかな、と思つたので」

何やら難しい顔をした後、漣は顎に手を当てながら首をひねった。「これが、いちばんしっくりくるからかのう」

「その格好に化けるのが、いちばん慣れてるからつてことですか」  
聖もまた、漣の答えに首をひねる。漣は、顔をしかめたままそっぽを向いた。

「いや、慣れておるわけではない。ただ、お主に見せた最初の姿はこれだつたらう。その、何だ、お主と話すには、この目の高さがちよつど良い」

あ、不機嫌そうだったのは照れていたのかと、聖は思わず微笑んだ。照れを隠すように、小さな口に苺を豪快に押し込む漣を横目で見ながら、聖はささやかな幸せを噛み締める。実際のところ、まだ力が戻っていないために他の姿をとることができないと思ひ込んでいた。そうではないと分かつて、一安心といったところだ。

それに、聖はこの姿の漣の声が好きだった。だから、できるならこのままできて欲しいというのも　むしろ、そちらが本音でもある。

「ありがとうございます。僕のため、だつたんですか」

「年寄りをからかうでない。……礼には及ばぬ。儂の勝手じゃ」

漣は、聖をちらりと見やると老獪な笑みを浮かべる。

「ふん、なんなら実の年に合わせて化けても良いのじゃぞ?」

「実の年ってことは、ものすごいおばあちゃんになっちゃうってことですか? ……それは、ちょっと」

【おまけ〜嘉章とかなでの場合】

「なあ、かなではどうしてその姿なんだ?」

嘉章は、隣のかなでに尋ねてみた。かなではにっこりと笑うと、よどみなく答える。

「だって私、人間年齢で数えると七歳なんですよ。それでもよいのでしたら」

「……そりゃ、まずい」

改めて、人ではないものと付き合っているのだと実感する嘉章だった。

【番外3】ライター（前書き）

サイトの方で、エイプリルフルに合わせて書いた掌編です。  
聖と澁のエイプリルフルの楽しみ方を覗いてみてください。

### 【番外3】ライター

「えーぷりるぷーる、か」

めいっばい眉間に皺を寄せていた漣は、やがて大きなため息をついた。

「人間はよくわからぬな。……嘘など、いちばん嫌われるものではないのか？ 皆で嘘をつきあつて、何が楽しいのだ？」

「それは、僕にもわかりません」

「お主はいつも、自分がわからぬものを他人に勧めるのか？」

聖の言葉で漣はますます混乱したらしく、両腕を組んで考え込んでしまった。

漣に『四月馬鹿』を理解してもらうまでの道のりは長かった。初めは『エイプリルフール』と説明していたのだが、漣は一向に飲み込んでくれる気配がなく、言い換えてからもなかなか納得しようとはしなかった。

考えてみれば、漣たち獣はずっと自然という現実の中だけで生きているのだ。敢えて嘘を言おう、人を出し抜こうなんて、そんな不健全な暮らしは考えもしないだろう。

そういう聖だって、実は四月一日のこのイベントを心から楽しめたことはまだなかった。

「お祭りみたいなものなんです。たぶん、一番楽しい嘘を考えた人が勝ちです。……でも、僕はそれが嘘だつてすぐ聞き分けてしまうから、騙されて嬉しかったとか、やられた　とか、思ったことがないんです」

だから、わからないんです。

最後まで言い切ると落ち込んでしまうのが分かっていたから、聖は黙る。

ふと隣に目をやると、漣は瞳を閉じ、いまだ熱心に何事かを思索していた。どうしたんですか、と声を掛けると、漣は半眼になって

ぼつりと呟く。

「嘘を考えておった。一つ思いついたぞ」

彼女が唸りながらやっとのことでひねり出した嘘が何なのか気になって、聖は首を傾げながら言葉を待つ。澪は妙に気負った様子で咳払いをすると、聖を真顔で見つめた。

「僕は、明日からヒトになる。……されば、お主の寂しい心も、もつとわかってやれよう」

思いがけない『楽しい嘘』に、聖は「ああ」と声を漏らした。

もちろんそれは嘘ではなくて、力に頼らずとも、聖には、それが彼女の本当の心に限りなく近いものだということがひしひしと伝わってきた。そう思ったらやけに感動してしまって、つい正直に胸の内をさらけ出してしまっていた。

「一生騙されたいです」

「初めてにしては上出来じゃろ」

二人は顔を見合わせ、同時に吹き出す。

「まずはこれで、ヒトへの第一歩じゃな」

澪は満足げに頷くと、わずかに聖の方へと体を寄せる。その頬には春の陽気のせいか、少しだけ赤みが差していた。

【番外4】混信 前書きに注意があります（前書き）

この話はサイトの8周年企画で書いたもので、「親しい間柄ですか？」という短編連作（<http://ncode.syosetu.com/n1291w/>）とリンクしています。

ですので、これだけを読むと分からないところもあるかもしれません。

（ちなみに、「親しい」は、ロボット少女「ファー」と、同級生の男子高校生「テス」との恋愛ものです）



【番外4】混信 前書きに注意があります

「うわあ……」

色とりどりのケーキが並ぶショーケースを前に、聖は声を上げていた。と言つても、ケーキを見て歓声を上げたわけではない。頭に響いてくる音が、これまで経験したことのない『何か』だったからそれに耐えかねて、つい漏れてしまった嘆息だ。

聖の耳に入ってきたのは、声にならない声。それは雨の音にも似ていたし、ラジオのノイズのような音にも、ため息のようにも聞こえた。聖の経験から判断するに、人間の声ではない。

（いつたい、誰だ。……いや、何だ）

ショーケースから離れて周囲を見回してみても、カップル、親子連れ、あるいは女性のグループ。みんな、ごく普通のヒトビトに見える。人間以外のものは、存在していないようだった。

（気のせい、かな）

週末を家族のいる街で過ごし、今は日曜の午後。駅前に人気の洋菓子店があると聞き、電車に乗る前に、澁と嘉章への土産を調達しに来たところだ。

静養先から久々に出てきたんだし、自分が思っているよりも耳が疲れているのかもしれないな。

妙な考えを振り払おうと、聖は再びケーキの群れに目をやる。秋ならではの彩り、栗、ぶどう、りんご。澁が好きなのは、どれだったっけ。

目移りしていると、耳栓を飛び越えて、再び頭の中に声が響く。

『喧嘩するほど仲がいい、を上書きします。実行可能の場合、実践し、モニタリングデータを蓄積します』

今度ははつきりとそう聞こえた。

（……何だそれ）

聖は、人間や人間以外の者たちの心を聞き取ってしまうほどの聴

力、『聞き耳』の持ち主だ。その耳に届くのは、喜び、悲痛な叫び、憎悪などの強い感情がほとんど。

一方、今の声は無表情で、訴えたい内容が何なのかを読みとることはできなかつた。呟きの中身も、意味がよく分からない。これでは、声の主を推測するのは難しい。

それらしい『何者か』を探そうと、聖はケーキの注文に並ぶ列から離れ、そつと振り向いてみる。しかし、あやかしの影、人に化けた何からしき者は、やはり見つからない。  
(空耳?)

これまで、聞き耳に空耳なんてことはなかつた。ただ、そうでも思わないと次の行動に移れないのが自分のそんなところだ、と聖は一人で苦笑いする。聞こえた声からすると、幸いなことに助けを呼んでいるわけでもないし、差し迫って周囲に危機が及ぶとも考えにくい。無視しても構わないだろう。

聖は、再び行列の後ろについた。  
程なく、先ほどと同じ『誰か』の声　今度は、心の声ではなく肉声だつた　が聖の耳に届く。

「　喧嘩をしましょうか」  
「え?」

落ち着いた声の女性は、聖が心の声を聞いた『誰か』。そして、その『誰か』の申し出に困惑している様子の、若い男の声。『誰か』の連れだろうか。

確かに、『誰か』は『喧嘩するほど仲がいい』を実践するとか言っていたような気がする。白昼に喧嘩しようと言われたのでは、話しかけられた方も戸惑うのも当然だ。

残念ながらというべきか、その後、喧嘩を始めた男女は聖の近くにはいなかつた。連れの青年は、突飛な提案には乗らなかつたらしい。賢明な判断だろう。

リンゴを丸ごと使ったアップルパイは、溲の分。和栗のモンブランは、嘉章の分。やっと目的を果たし、店の外に出たところで、聖はまた声を聞いた。

『君のそういうところ、充分にロボットらしくない　ううん、人間らしいと、僕は思うんだけど』

その声からすると、さっきの『誰か』の連れの青年に違いない。ロボットという、日常ではあまり使う機会のない単語が妙に心に引っかかる。急にSFの世界に投げ出されたようで、聖はつい足を止めてしまっていた。

ちょうど店の真ん前で、聖同様に立ち止まっている高校生カッパルがいる。彼は私服だが、彼女はブレザーの制服姿。そして、彼女の髪の毛は日の光を浴びて眩しい銀色　人工的にしかあり得ない色をしていた。逆に表現するならば、髪の毛以外は何らヒトと変わらない外見と言っている。

(ロボット？　まさか、本当に？)

混乱する聖にはまるで気づかない様子で、彼の方が彼女にっこりと笑いかけた。

「ところで、ファー。ケーキは食べれる？」

「多量では体内の計器にエラーが生じる可能性もありますが、少量なら。……人間の嗜好にも興味がありますし、一緒にします」

それは、まさしく『誰か』の声だった。彼女がロボットであるならば、最初に受け取ったラジオのノイズのような音も、上書き、計器、エラーという言葉もしっくりくる。常識を越えた結論だけれど、そう考えたほうが自然なら受け入れざるを得ない。それを言うなら自分の耳だって一般の常識の範疇には収まらないのだ。

どうやら、聞き耳は思考を持つ機械の声までもを拾うことができらしい。そして、世界は聖が想像するよりもまだまだ広いらしい。ケーキ以外にも溲への土産ができたことを密かに喜びながら、聖は洋菓子店を後にした。

【番外4】混信

前書きに注意があります（後書き）

【番外5】そぞろ歩きのその前に（前書き）

本編終了後の夏の聖と澗のお話です。

本編ではなかなか恋人らしいことはさせてあげられませんでした。が、せつかくの番外ということで糖分を多めにしてみました。よろしければどうぞ。

## 【番外5】そぞろ歩きのその前に

聖はいつもの山の麓にいた。

山道を覆う夏草の茂みをかき分けて、後ろから漣も顔を出す。二人並んだところで、聖は久々の風景をじっくり眺めようと、辺りを見回してみた。

夏の日差しは、暴力的とも思える圧力で襲ってくる。しかし、それを和らげるような風が川から渡り、頬を撫でてくれる。

見渡す限り広がる水田にはすでに水はほとんどなく、出たばかりの稲の穂が風に揺れていた。まるで、萌黄色の波。寄せて返すだけではなく、秋の豊かな実りを約束する波だ。

「どこか、行きたいところはありますか？」

「……お主の行きたいところに」

「ほかに、ご希望は」

「ない。……どこでもよい」

漣はにっと笑った。共に歩くとは大げさだが、要は散歩という名のデートだ。

どこか場所を指定してくれば、嘉章に尋ねるという手が使えたのにな、と聖は頭を掻いた。

かなでと共に生きるために教師の職を辞した嘉章は、この春から地元の観光に関わる仕事に就いている。やってくる客と接するのが思いのほか楽しいのだと、張り切っていた。面倒見の良さを存分に発揮できる、嘉章らしい仕事だ。

もっとも、張り切っているのは仕事だけではなく、かなでを守るという新たな目的のせいもあるだろうけれど。

彼に尋ねれば村の大抵のことは分かるわけなのだが、漣のこの様子では彼の出番はない。本当は嘉章と漣を引き合わせてもいいと思っていたのだが、それはまたの機会にした方がよさそうだ。

「じゃあ、適当に少し歩きましょうか」

頷く漣。

蝉のけたたましい声に、漣の草履と、聖のスニーカーの足音が乗っかって、不思議なリズムを奏でる。二年しか居なかった場所しかも、ここを離れてからほんの数ヶ月しか経っていない。『聞き耳』に苦しみながら人の中で藻掻いていた中学一年までの十数年間に比べたら、この村で過ごした時間は圧倒的に短い。それでも聖は、歩きながらただ一つのことを思った。

「帰ってきたなあ、って感じがします」

漣が、ふつと鼻で笑う。

「お主、街育ちであろうが。生まれ育ったのは、ここではなからう？」

「それでも、です」

聖は生まれ育った街へ戻り、高校へと通っている。今は街で暮らすことに特段の苦しさを感じてはいない。さまざま『声』に耐えられずに逃げ出した頃が、嘘のようだった。

それは『聞き耳』を失い、普通の人間として生活しているからだ、と片付けることもできたが、聖自身は、漣と出会ってから育んだ耐えて闘う力のおかげだと信じていた。そうして重ねていく時間が自らの糧になっていると感じる日々だ。

しかし、ここに来るたび、聖は懐かしさを抑えきれなくなる。

街には今のような心地のよい風は吹いてはいないし、緑の匂いもない。そして何より、漣がいない。今すぐにここで漣と暮らせたら、どんなにいいだろうと思う。

けれど、まだ山に戻るの早いと、聖は知っている。向こうでの暮らしは、いつか漣と並んで立つために必要な時間だ。帰ってくるのは、もっと大きくなってからでも遅くはない。漣はきっと、いつまでも待っていてくれるはずだから。

「懐かしいけど、しばらくはあつちで頑張ります」

「そうか」

嬉しそうでも、残念そうでもなく、漣は答えた。この話題に関し

ては、漣は必要以上に深入りはしない。聖の決意が揺らがぬように、気を遣ってくれているらしい。

「都会のことなんかここ二年ですっかり忘れてましたから、日々勉強ですね。普通の耳にも、ずいぶん慣れました」

「聞き耳がなくて、どう過ごしておる？」

「普通に　多分普通はこういうものなんだろうなって思いながら、学校に行ってます」

「当たり前だったことがそうではなくなって、不安ではないか」  
草履の足音は消えていた。

振り返ると、漣は眉を寄せて聖を見つめていた。何だかよそよそしい表情は、まるで拗ねているようにも取れる。聖の力を『食った』漣からしたら、その後の状況が気にならないわけがないのだが、彼女はこれまでその話に触れたことはなかった。

「不安がないって言うのと、嘘になります」

漣の眉間の皺はますますくつきりと、深くなる。

「……僕は」

「待つて。最後まで聞いてください」

「……しかし」

聖は、漣の唇に自分の人差し指を当てた。触れたことのある指先や額のように、この真夏の暑さの中、漣の唇もまた、ひんやりと心地よい温度だった。

ごく当たり前のように動いた自分の手に、聖自身も、そして漣も驚いていた。これではまるで、普通の恋人同士のようなのだ。それから、はたと思に至った。今、自分が漣に伝えたいのは、つまりそういうことなのだ。

名残惜しいけれど、聖はそっと指を離す。熱を奪われて、人差し指だけが少し冷たい。

漣は律儀に口を引き結んで、次の言葉を待っている。無言ながら、丸く見開かれた目がその驚きを語っていた。

その姿に、聖は微笑みながら口を開いた。



「どう過ごしているか、というと、この頃はよく耳を澄ますようになりまして。今までは聞かないようにしてたのに、おかしいんですけど。そうしてるうちに、分かったことがあって。……異能があっても無くても、毎日是不安との戦いなんですよ。僕のように、ちょっと前まで力を持っていたから不安っていうわけじゃなくて、周りのみんなもきつと同じ。僕は『普通』がよく分かりませんが、僕が今抱えているものは、どこにでもいる高校生たちと同じものじゃないかなと、思うんです」

普通の学生たちの中で普通に過ごす。もう、いくら頑張ったって聞こえない心の声を想像しながら、浅く深く、人と付き合う。それは聖にとって初めての経験だったが、聖以外の人間は皆そうして生きてきたのだ。

「それから、僕は力を無くしたんじゃないかと、あなたと分け合ったんです。共有してるんです。だから、悲しそうな顔はやめてください」

澪が聖の力を食った　それは単に力のやりとりだけではなく、もっと深いつながり　心と心が触れ合うような経験だったと、聖は思い出していた。

「僕とお主は　ひとつ、か？」

澪なら分かってくれるはず、と聖は頷いて続ける。

「そう。僕は全然悲しくないし、むしろ嬉しいです。……遠い街でもちゃんとやってるから、心配しないで　とは言いません。今の僕じゃそんなことは言えないから。でも、そのたびに『大丈夫』って笑えるようになることがとりあえずの目標です。そういう、かっこいい男になれるまで、頑張りますから」

「……心得た」

「それと」

つい勢い余って、とんでもないことが口から転がり出そうになり、聖は慌てて自らの口を押さえた。

「その、ええと　やっぱり、いいです」

ほぐれかかっていた澪の顔が、とたんに強ばる。栗色の睫が数度、揺れた。

どこまで近づいていいのか。

触れていいのか。

撫でてもいいのか。

抱き締めてもいいのか。

名を呼び捨てにしても、怒られないだろうか。

大きな声で呼んでもいいだろうか。

耳元で低く囁いても、許してくれるだろうか？

言いかけたのは、自分の欲ばかり。澪と離れて暮らすようになってからずっと、そんなことばかりを思っている。彼女に本音をどこまで打ち明けていいものか、聖はぐるぐると考えていた。我ながらどうにもやましくて、正直に告げるのがはばかられる。

それに澪は、『自分はそういうことは不得手』なのだと言っていた。聖が思っていることなど、澪は望んでいないかもしれない。ただ聖と二人、こうして静かにいられたら満足なのかもしれない。

澪がそうか、と小さく呟いた。背を丸くして、白い着物の袖口をぎゅっと握りしめている。

「ならば、よい」

その声があまりに寂しげで、聖は思わず耳を澄ました。もちろん、聖にはもう澪の心は聞こえない。でも、耳はある。さっきの澪の声は、強がった言葉でとは裏腹に震えていた。息の方が多いような、かすれた音だった。

澪さまも、不安なのだ。きつと、僕よりも。

心は、さらけ出さないと伝わらないのだ。言わないことで悲しませ、不安にさせるよりも、ぶつちやけて呆れられた方がましだ。

聖は澪の顔をのぞき込んで、「怒らないで聞いてくださいね」と前置きした。絶対に一度は怒るに違いない。問題はその後だな、と

聖は笑う。

「僕は、澪さまが神様だつていうのを気にせずに、『どこにでもいる恋人同士』のように、したいです。……澪さまにこれまで以上に近づいたり、触れたりしてもいいですか？」

澪の頬が、たちまち薄桃に色づいた。

「野暮な。……この阿呆。見目が多少よくなつても、男はやはりいつまでも餓鬼じやの」

聞こえよがしに、澪が呟いている。呆れているように聞こえるが、言っている本人の顔が赤いのみだから説得力はない。いつもの澪らしい様子に、やはり怒られた、と聖は嬉しくなった。

「それは、『エンレン』というのであろう」

「はい？」

「恋人が離れて住んでおつて、なかなか逢えぬ こと」

もじもじと揺れながら、澪は眉を寄せて聖を見つめた。

三秒ほどの後に聖は思いきり噴き出し、同時に肩がふつと軽くなつたのを感じた。聖にとって澪の一言は、それほどに明快だった。

こうしてたまに会うと嬉しい。別れ際は切ない。いつもの暮らしには誰かが足りない、どこか寂しい。そうか、自分と澪とは遠距離恋愛をしているのだと、妙に納得もした。

「笑うな」

今度はふて腐れている。

「つまり、そういうことじゃ。何を遠慮しているかは知らぬが、儂のことも『普通』に扱えば良からう。それとも、人間は想い合うものどうしても許しは必要なのか？ ならば、儂が許す。……好きにしる」

「いいんですか」

「二度は言わん。……儂も、そうする。どうすればよいのかは、多少勉強した」

勉強つて、と聖が聞き返す間もなく、澪は目を伏せて一歩、二歩と前に進み出た。白い着物からむき出しの腕が伸び、聖の首に回る。

聖の頬に、漣の頬が触れた。今日の漣は大人の姿に化けていて、聖の顔には彼女の柔らかい髪がかかり、何ともくすぐったい。いつもは冷たいくらいに体温が低い漣なのに、その手や頬　触れ合った部分は熱かった。その温度の意味するところは、鈍い聖にでも分かる。

いくら華奢だとはいえ、聖と同じ程度の背がある漣。受け止めるにも、それなりの力　体力と、精神力　がいる。

聖は意を決して腕を広げ、漣をその中に収めた。うまく加減ができなくて力が入る腕を、漣を潰さぬようにそっと緩める。すると、すぐに優しく抱き返す感触があった。

名前を呼んでもいいですか。

そう尋ねようとして、やめた。

「み、漣、さん」

「阿呆」

「漣」

今度は詰まらずに呼べた。怒られなかったぞ、と聖は胸をなで下ろす。

ただ彼女の名を呼んだだけなのに、胸の奥がじんわりと熱くなる。みお、というたった二文字が、どうしてこんなにも心を躍らせるのか、分からない。

漣は薄目でこちらを睨んでいる。睨まれて嬉しいとは、不思議なものだ。不思議で、分からないことだらけだけれど、ちょうど冬のあの日のように幸せで満たされる。

漣が口を尖らせた。

「呼んでみただけか？」

「……好きですよ」

「馬鹿」

「阿呆とか馬鹿とかばかりですね」

それが照れ隠しとは知っていたが、言わずにはいられなかった。ほかの言葉が出てこずに困ったのか、漣は聖の肩に額を押しつけて

黙す。初々しさが今日の漣の妖艶な見かけとは対照的で、聖は妙に心を惹かれた。

そして、漣は一言。

「嬉しい」

ああ、かわいい。もう散歩なんかどうでもいいから、今日はずっとこうしていたい。

「駄目じゃ、駄目じゃ！」

漣は突如大声で叫ぶと、聖から一步引いた。

「散歩はもういいや、と思ったであろうっ！」

「明察。」

見事に言い当てられて、聖は慌てる。

「違いますよ！」

「今、何か、やましいことを考えたな？」

「思っていない！」

「嘘じゃ」

「嘘じゃないよ！」

嘘だけど。

漣はそこでにやりと笑った。直前まで取り乱していたとは思えない余裕のある笑みだった。

「そっやって普通に喋ってくれと、嬉しい。……儂らに、敬語は必要なかろう？」

謀られたか、と聖は苦笑する。確かに、どたばたとしたやりとりのうち、いつの間にか年の近い人間と話すような雰囲気になっていた。言い出せないことがあったのは漣も同じだったのだ、と気付く。「やましいことも結構じゃが。……今日はお主とこうして『デート』に行くのを、楽しみにしておった」

漣は無邪気に顔をほころばせていた。聖は、その冷たい手をふわりと握る。

「……行こうか、遷」  
山の神との遠恋は、まだまだ先が長い。

【番外5】そぞろ歩きのその前に（後書き）

これで、再びですが完結済みとしておきます。

（番外のネタはありますが、いつ書けるか分からないので……）  
もし書き上がったときには、また投稿しに来ようと思います。

たくさんの人に読んでいただいて溍と聖を知ってもらえたこと、お  
気に入り登録や評価をいただいたことなど、とても幸せに思ってい  
ます。

最後までお付き合いいただいてありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5973u/>

---

その、幽かな声を

2011年10月2日00時02分発行